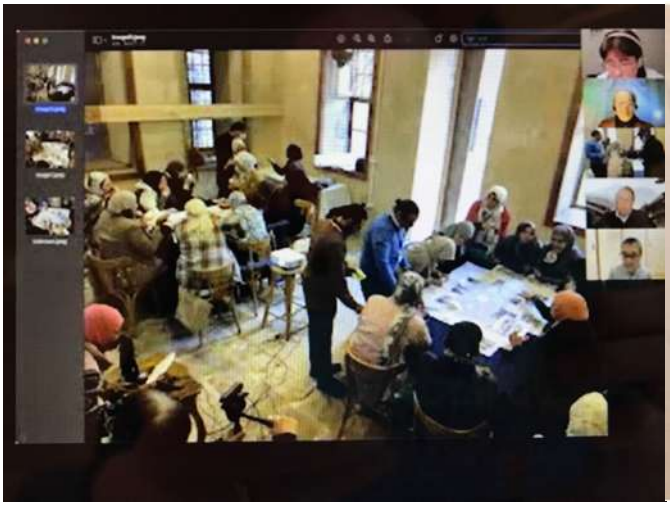
令和３年度　文化庁

令和３年度緊急的文化遺産保護国際貢献事業（専門家交流）

「カイロ旧市街の持続可能な保護策のための事業 / 住民参加のまちづくり」

報告書

令和 4（2022）年 3 月



JCAABE

一般社団法人日本建築まちづくり適正支援機構

〇はじめに

当報告書は、令和３年度緊急的文化遺産保護国際事業（専門家交流）「カイロ旧市街の持続可能な保護策のための事業／住民参加のまちづくり」をまとめたものである。

この事業は、日本学術振興会カイロ研究連絡センターの深見奈緒子センター長から声がかかり、文化庁から事業採択の上、一般社団法人日本建築まちづくり適正支援機構（以下 JCAABE）が受託実施した事業で、エジプトと日本との連携によって行われた。おりしもコロナ感染問題があり、現地訪問ができずオンラインでのワークショップや研修会となったが、オンラインでの新たな支援や連携方法についても掘り下げられた状況である。

保存まちづくりにおいて、住民がその地域の価値を理解し、自らの街は自らが作るという住民参加の視点が大切であるが、今回、カイロにおける以前からの活動を下地に、カイロ旧市街の建築物の詳細な現状調査と共に、JCAABE で推進している住民参加のワークショップや専門家のファシリテーション手法の実施、日本の事例紹介などの研修会が行なわれた。

当事業の特徴として、カイロ旧市街におけるエリア、すなわちスーク・シラーハ通りと６つの歴史的建築物について、①エジプト建築家（専門家）のファシリテーションによる住民ワークショップを行った上で、利用保存を含めた更新案が作成され、②日本側からエジプト行政 NOUH 関係者へのオンラインレクチャーを通して情報が共有され、③エジプト建築家から行政関係者や住民に対して更新案のプレゼンテーションを行い、住民とオンラインで繋がった日本側専門家と意見交換するというデザインレビューが実施できたことである。

建築やまちづくりにおいて、良質な、美しい、といった定性的な観点を取り入れるには、協議調整が大切とされているが、今回、住民ワークショップでの協議調整、オンラインレクチャーでの情報共有を経て、デザインレビュー（協議調整）が実施されたことは、現地における今後の住民参加の保存まちづくり活動への一助になると共に、日本においてもこの経験が役に立つと思われる。これからもフォローすると共に、何らかの形でサポートができればと願っている。（JCAABE 代表理事：連健夫）

※記名原稿以外の執筆担当は以下の通りである。
連健夫：■３．住民ワークショップ；②住民参加、日本の事例紹介
深見奈緒子：■１．事業概要（計画と実施内容）■２．検討（評価、建築基準、現状調査）■３．住民ワークショップ；①趣旨と全体の流れ　■４．エジプト行政（NOUH）関係者へのオンラインレクチャー；①趣旨と全体の流れ　■５．更新案意見交換会と街歩きワークショップ；①趣旨と全体の流れ、⑦街歩き
松村哲志：　■６．オンラインシステムについて
それぞれのアンケート結果については、松村が集計、整理を、■７．資料に関しては宍戸克実がレイアウトを行い、全体のまとめは連健夫が担当した。

目次

・まえがき 1
・目次 2

■１．事業概要（計画と実施内容） 4
①申請の経緯 4
(1) カイロ旧市街の価値 4
(2) カイロ旧市街保全と日本人関与プロジェクト 6
(3) 世界遺産「歴史都市カイロ」 7
(4) 最近の様相 8
②事業計画概要 9
(1) 事業内容 9
(2) 当初の実施スケジュール 9
(3) 事業参加者 10
(4) 事業エリア 11
③実際の事業推移 11
(1) 協力関係 11
(2) 現況調査 12
(3) 住民ワークショップ 13
(4) エジプト行政（NOUH）関係者へのオンラインレクチャー 13
(5) 更新案意見交換会と街歩きワークショップ 13
④文化遺産（歴史都市）を保全する 13

■２．検討（評価、建築基準、現況調査） 15
①スーク・シラーハと保存案対象建物 15
②コンサベーション建築基準（NOUH 手引書） 19
③カイロ歴史的市街地の現況調査と評価：ダブルアフマルに注目して 20

■３．住民ワークショップ 25
①趣旨と全体の流れ 25
・ワークショップの計画 29
・スーク・シラーハと 6 建物 30
・マップ、台紙準備の打合図 31
②住民参加、日本の事例紹介 32
③・更新案の思い（サラー・ザキー） 34
・更新案の思い（アラー・ハプシー） 37
④住民の意見 42
⑤アンケート結果 47
⑥日本側専門家のコメント(荒牧、磯野、岡田、柏木、宍戸、檜山、深見、布野、連) 50

■４．エジプト行政（NOUH）関係者へのオンラインレクチャー 60
①趣旨と全体の流れ 60
・プログラム 62
②日本側専門家からの事例・情報 63
１．中東都市における歴史地区とそこから学ぶこと/時間と空間の集積（深見奈緒子） 63
２．都市における活動のための公共空間；街路と伝統的な喫茶店（宍戸克実） 68
３．川越の歴史的建造物の保存に向けた取り組みについて/街並とその現代的活用（荒牧澄多） 75
４．カフェ、ブティックホテルなど、歴史的建造物の現代的な利用法（磯野哲郎） 85
５．住民参加のまちづくりの仕組と事例/建築の参加のデザイン事例（連健夫） 89
６．学生ワークから見るヒストリックカイロの可能性（2018 年作品）と NOUH へのアドバイス（布野修司） 96
③質疑応答・意見交換、 104
④コメント（岡田保良） 106
⑤アンケート結果 107

■５．更新案意見交換会と街歩きワークショップ 108
①趣旨と全体の流れ 108
・プログラム 112
②更新案プレゼンテーション：スーク・シラーハのデザインコンセプト（アラー・ハプシー） 113
③更新案プレゼンテーション：６つの歴史的建造物の公的再利用についてのデザイン（サラー・ザキー） 130
④カイロ歴史地区におけるユネスコ支援事業（高橋暁） 137
⑤ワールド・モニュメント・ファンドの現在のプロジェクト；イブラヒム・グルシーニャのタキエ（ジェフ・アレン） 141
⑥質疑応答・意見交換 147
⑦街歩き 149
⑧アンケート結果 151

■６．オンラインシステムについて 153

■　資料集
□目次と解説 157
□エジプト国立都市景観調和機構作成　建築基準　2011 年 157
□エジプト国立都市景観調和機構作成　スーク・シラーハの開発計画　2019 年 162
□サラー・ザキー氏、更新案図面 181
□本プロジェクトマムルーク朝関連人物像と歴史的建造物（中町信孝） 184
□本プロジェクト Survey Report　2022 年 197

□専門家プロフィール 218

■１．事業概要（計画と実施内容）

エジプト、カイロ旧市街は世界遺産に登録される歴史的価値を持つ地域であり、アラブ文明特有の細街路や袋小路を特徴とする都市組成をもつ。その一方で所有関係が重層し、正規の認可登録を伴わない建物も多い。このような状況において、旧市街の都市組成はインフォーマル街区とみなされ、住環境向上のために再開発により破却される可能性があることから、文化遺産の保全に関して、緊急度の高い危機的状況にあり、本事業に応募するに至った。

現状の問題点として、エジプト政府は世界遺産としてのカイロ旧市街に対するユネスコからの勧告を案じている。加えて、海外の諸プロジェクト間の情報交換は限られている。エジプト政府とこれらの海外諸機関をつないで調整を行う一方、国立都市景観調和機構を通してエジプト政府側の方針にそぐう形で、日本での歴史的街区保全に対する蓄積からの協力関係を築いた。

本事業では、地域の特徴を活かした持続的な建築都市遺産保全のために、日本に蓄積されたまちづくりの手法を援用し、まちづくりのシステム構築を試みた。その活動として、１）ダルブ・アフマル地区の現況調査、２）旧市街カイロに対するまちづくりの方向性や基準の調査、３）まちづくりにおける住民参加の仕組づくりのためのワークショップ開催、４）日本におけるまちづくりの蓄積をエジプト政府側と共有するオンラインレクチャーの開催、５）旧市街のダルブ・アフマル地区、スーク・シラーハ通りにおけるまちづくり更新案作成、６）住民による更新案の検討への海外諸機関の参加を実施した。日本でのまちづくりの経験からの知恵を適応することでカイロ旧市街の問題の解法を導くことが、本業務の役割であると考える。（なお、ここでいうまちづくりとは、既存の歴史的旧市街の都市組成を保存しながら、住宅地としての質を高め、住民が暮らしやすい街にしていく過程のことを指す。）これらの事業を通して、今後のカイロ旧市街の持続可能な保護策を模索し、具体的な展開に繋げることを切望する。

① 申請の経緯

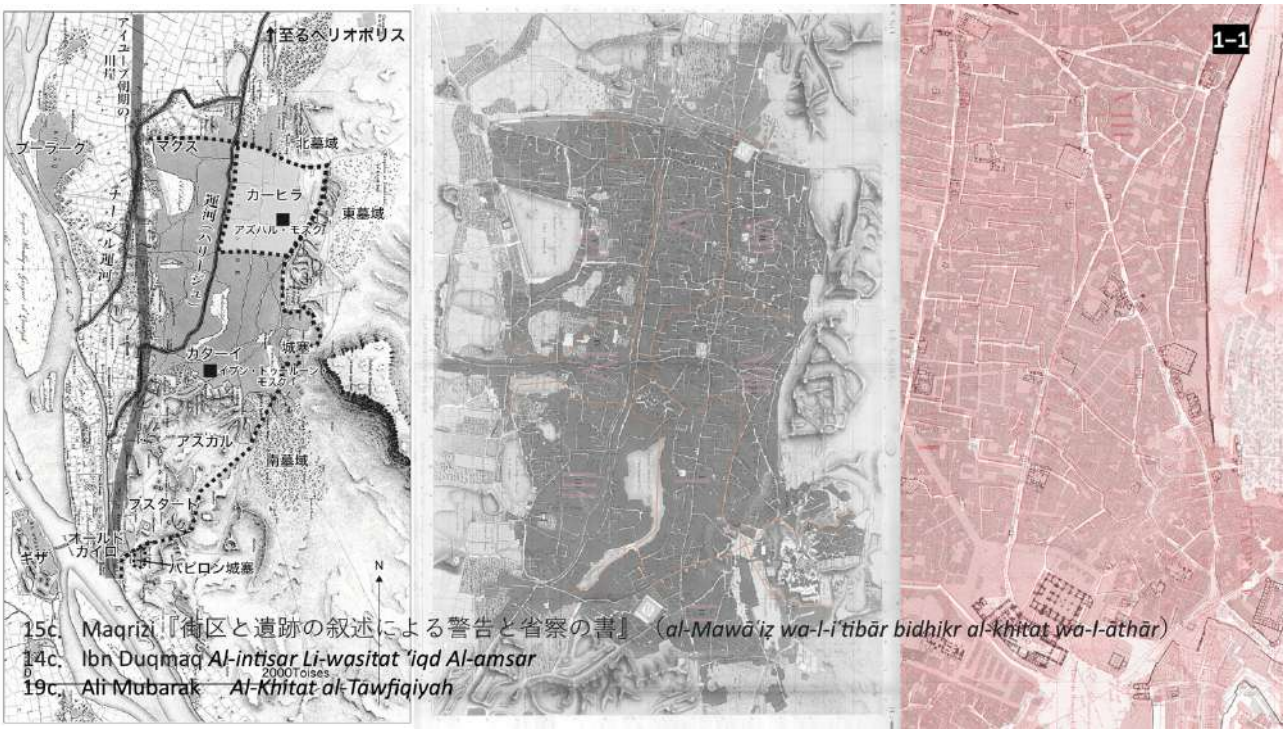
(1)カイロ旧市街の価値

その価値を見極めるためには、多少の歴史的地名や都市の成り立ちを知る必要がある。カイロは、ナイル川がデルタへ広がる扇の要の地点にあり、ナイル川を中心に北西と北東に向かって平地が広がり、そこを囲む形で、一段高い丘陵砂漠帯となる。古くはファラオ時代のヘリオポリス（太陽都市）があり、現在の大カイロに含まれる。著名な三大ピラミッドはナイル川の西岸にあたり、旧市街から直線距離で10 数キロの地点にあるが、ここもまた大カイロの中に飲み込まれてしまっている。ナイル川の東岸、世界遺産に登録される「歴史都市カイロ」（本報告書ではカイロ旧市街と呼ぶ）の範囲の前史を辿る。

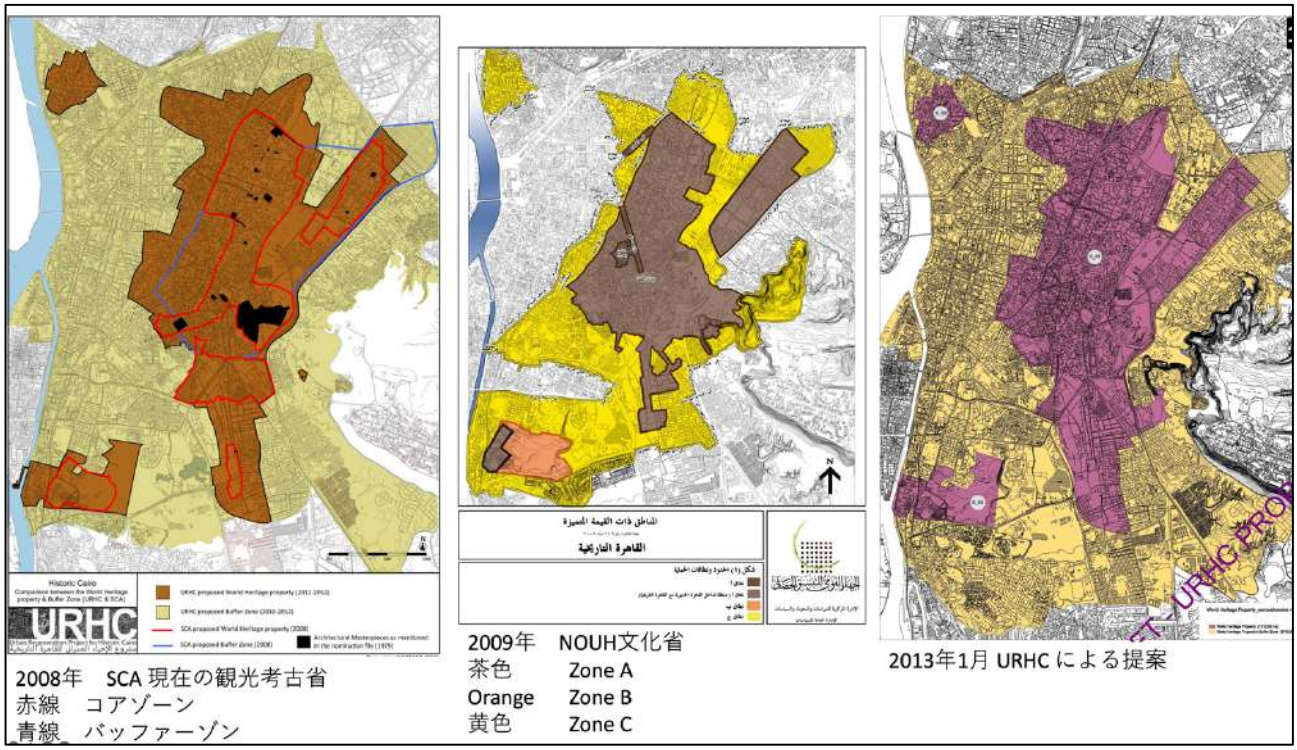
古代ローマ時代にナイル川東岸沿いの拠点であったバビロン（現在はオールドカイロと呼ばれ、教会堂やユダヤ教のシナゴーグが残る）へと 640 年にイスラームを奉ずるアラブ軍が侵入、その北側にフスタートという軍営都市を築く。次第に街は北へと伸びていき、9 世紀には、イブン・トゥールーン・モスク（イスラーム建築史上最も古いモスクの一つ）あたりまで達する。969 年には、さらに北側のナイル川から紅海へと通じる運河沿い東側にファーティマ朝が新首都としてカーヒラ（勝利の街を意味し、カイロの語源となる）という矩形都市が築かれたことから、北の宮殿都市（現在もその北壁と南北の門が残っている）と南の庶民の街という形となる。その後、サラディンが両者を包含する形で市壁を建設し、東の砂漠の丘陵に接して城塞を建設する。市壁外に広大な墓地が設けられ、カーヒラの北と東、および城塞の南の 3 つの墓地がある。

マムルーク時代（1250―1517 年）には、インド洋と地中海を繋ぐ海上交易を独占し、繁栄を極め市域や墓域に壮麗な建物が数多く建設される。しかしながら、14 世紀半ばの黒死病の流行により、南のフス

タートは次第にさびれ、矩形都市カーヒラから運河を超えて西へ、さらに南市壁を超えて城塞からイブン・トゥールーンに達する南の地域が市街地となっていく。この市街地の様相は、1798 年のナポレオンの侵攻によって編まれた『エジプト誌』掲載の地図に残る。19 世紀半ばになると、ヨーロッパ風の開発がナイル川と市街地の間の緑地から始まり、次第に西の低地へと伸びていく。



『エジプト誌』のカイロ全体図　　同カイロ詳細図　　ダルブ・アフマル(赤 19c. 黒 2005)



カイロ旧市街(歴史都市カイロ)という場合、なかなか定義は難しい。遺産最高評議会(Supreme Council of Antiquities) による 2008 年に世界遺産のコアゾーンとバッファーゾーン（左；赤線、青線)、国立都市調和機構（National Organization for Urban Harmony）による 2009 年の３ゾーン（中)、歴史都

市カイロ再生計画（Urban Regeneration Project for Historic Cairo）による世界遺産のコアゾーンとバッファーゾーンの 2013 年の再提案（右、および左のトーン）は、それぞれ微妙にずれている。

カイロ旧市街の価値を高めるものとして、歴史的建造物、歴史的道路網、数多くの歴史書の著述、歴史地図があげられる。

歴史的建造物としては、600 を超える物件がエジプトの観光考古省に登録されている。しかしながら、全てが網羅されているわけではなく、19 世紀以前にさかのぼると思われるものを指摘することもできるので、本プロジェクトではその精査を目指した。

道路網については、先に紹介した『エジプト誌』掲載の詳細地図に残る道路網の約 50%以上が今もなおそのままに残っている。無論その後に開発され、グリッド状の街路となった区域や、道路拡張が行われた地域もあるけれど、当時の建物の角などによる街路の歪みがそのままに残されている。

さらに、数多くの歴史書については、15 世紀初頭のマクリーズィーの『地誌』をはじめ、その地名の由来が説かれ、現在もなおその名前が使われている道路も多い。加えていくつかの歴史地図から、その歴史をひもとくことも可能である。

このように、カイロ旧市街には、歴史を語るモノ、情報、空間などが点在している。これを次世代に伝えることは、重要な課題であると考える。多くの多様な人々が現在も生き続けている街であることは、しばしば問題点を起こす側面ばかりが取り上げられるが、こうした歴史都市を使い続けながら、そして様々な問題を解決しながら、次世代に持続させることこそ、現代の私たちの課題と言えるのではないだろうか。

(2) カイロ旧市街保全と日本人関与プロジェクト

こうした遺産の価値は、近代へと都市が変容を始めようとした時代、ヨーロッパ人が関与する際に、すでに彼らによって認識されはじめていた。1881 年にフランス人協力のもとでアラブ美術記念碑保存委員会（Comité de Conservation des Monuments de l'Art Arabe）が結成され、数多くの歴史的建造物が登録され、保存修復が施された。現在のこる多くのモニュメントは、この時代に大規模な修復や改築を受け、当時の形とは随分と異なってしまったものも多い。彼ら保存行政指導者の目は、モニュメントへと向かって、その美術的価値を高めることを目指したのである。

一方で、歴史的都市組成に対する配慮には欠けていた。ムハンマド・アリー朝の副王イスマーイールの時代に城砦から北西に伸びる直線道路が引かれたことに始まり、運河は埋め立てられ、その西側には新宮殿が築かれ、新たな都市計画が施行される。現在ダウンタウンと呼ばれるヨーロッパ風の市街、そしてガーデンシティが 20 世紀初頭までに築かれた。こうした広域の開発に巻き込まれたなかったファーティマ朝の矩形都市、その西や南のいわゆる有機的な街路網が広がる市域においても、20 世紀前半において、アズハル通りが貫通、古い街区を取り去り、グリッドの市街地への開発がいくつかは確認できる。また、いくつかの袋小路は通り抜けできるよう切り裂かれた。

1953 年に王政が廃止され、ナーセル大統領のもと、さらにこの方向での変化は続く。それらは旧市街内にソビエト風の国営アパートが建設され、建物のセットバックが促されていたことに確認できる。一方で、サダト大統領の開放経済のもとで、ますます人口を増加させつつあったカイロにおいて、都市遺産を保全しなくてはいけないという機運が巻き起こりつつあった。1979 年、歴史都市カイロは 1979 年に世界遺産に登録された。ちなみに同条約はアスワンハイダム建設を機会に設定された。ユネスコ UNESCO、UNDP、USAID、EU、Bohra Mission など、相次いで都市保全、遺産修復のプロジェクトがあるが、1984 年から 2001 年に行われたアガ・ハーン・プロジェクトでは、建築遺産の補修や住民のための経済開発に加え、ファーティマ朝の東市壁沿いに広大なアズハル・パークが設置された。1998 年に歴史都市

カイロ復興プロジェクト（Historic Cairo Restoration Project)、2010 年から 2014 年に歴史都市カイロ都市再生事業（Urban Regeneration for Historic Cairo; URHC)は特記すべき事業で、後者の終了とともに カイロ市当局に歴史地区カイロを担当する部署が設置された。

エジプトでは、日本は古くはオペラハウス建設から現在進行中の大エジプト博物館をはじめ、さまざまな文化プロジェクトに関与している。ただし、カイロ旧市街の保全を対象としたものは、後発で、しかも限られている。筆者がトヨタ財団助成に応募し、2016 年 5 月から 2018 年 4 月 「歴史的カイロにおいて歴史的建造物と伝統的居住様式を軸として持続的コミュニティを考える」を行い、大林財団の助成により 2018 年 4 月から 2019 年 3 月「カイロ歴史地区の遺産保全と都市史再考」をダルブ・アフマル（カーヒラの南門より南側にある地域名、世界遺産のコアゾーンに当たる）にあるバイトヤカン（ヤカン邸、ヤカンはムハンマド・アリー朝の王族軍事官僚の名前）を核としてアラー・ハブシー教授とともに続けてきた。バイトヤカンでは 2019 年 2 月には国際交流基金による木工細工職人の招聘と現地ワークショップが開催され、2019 年 3 月には日本外務省草の根無償資金協力事業による木工職人訓練所設置が調印され、現在その工事が進んでいる。コロナにおける中断があったものの、2021 年 10 月からは本事業を開催することができた。

なお、こうした一連の保全事業に対して、1992 年 10 月 12 日に起こったカイロ大地震は、歴史的建造物にも大きな被害を与えた。旧市街には今なおその被害が残るものもあるが、旧市街にとって大きなダメージとなったのは、崩壊が目される疲弊した建造物は撤去せねばならないという取り決めがなされたことである。それによって、観光考古省に登録されていない崩壊に瀕した歴史的建造物を修復するためには、特別な許可を取得せねばならない状況に陥ったのである。煩雑な許可を取得した一事例として、アラー教授が修復を続けているバイトヤカンがある。

(3)世界遺産「歴史都市カイロ」

先に述べたような経緯で、世界遺産に登録されるに至った「歴史都市カイロ」（本報告書ではカイロ旧市街と記載）であるが、先述したようにその保全範囲に関しては、いまだに決着が付いていない。その理由の一つにエジプトにおける縦割り行政を指摘することができるのではないだろうか。

観光考古省（The Ministry of Tourism and Antiquities）は登録建造物だけに関与し、しかも修復後は建物の周りに鉄柵を回し、鍵をかけての活用を考えていない。モニュメントの周辺のクリアランスをのぞみ、都市組成の中に建物を位置付けないという傾向が強い。しかも登録建物は、20 世紀初頭に注目されたものだけという、登録の制限も彼らの問題点の一つである。

国立都市調和機構（National Organisation for Urban Harmony /NOUH)は、 文化省の下に置かれており、建物のファサードのみに焦点を当てている。都市を構成する建物を単体ではなく包括的に扱おうとする姿勢は評価できるが、建物にとっては空間自体も重要なので、その点を補完する必要がある。

カイロ市（The Cairo Governorate）の遺産保全部門は、先に述べたユネスコによる歴史都市カイロ都市再生事業（URHC)の中で設置された。カイロ市は日本の東京都に匹敵、あるいはそれ以上の大きな単位で、諸問題を扱う大きな母体の中の小さな部門で、専門性の低さが指摘されている。

ワクフ省（The Ministry of Religious Endowments/Awqaf)は、イスラーム教徒が優勢の国ならではの組織であるが、宗教寄進材としての歴史都市カイロの建造物およびその土地の管理を行う省庁である。歴史都市カイロにおいては、モスク等の宗教建築に加え寄進された商館や住宅等、旧市街の半分以上の土地の所有者となっている。しかしながら、保全や修復に対する積極的な動きは見られず、1992 年の地震の跡形をそのままにする建物や、荒廃に任せている土地が跡をたたない。

そのほかに、カイロ市を構成する諸地域（The Municipality）、国の計画部門（The General Organization for Physical Planning）、地方議会（The Local Popular Councils）なども複雑に絡み合っている。

ユネスコは、世界遺産「歴史都市カイロ」について、歴史都市カイロ都市再生事業(URHC)を通して、2,203,304 ドルの支援を行い、以前からいくつかの点の改良を求めてきた。それらは、地下水位の上昇、インフラの老朽化、メンテナンスの怠慢と不足、住宅過密な地域、無秩序な開発、総合的な都市保全計画の不在、都市と社会・文化をつなぐ統合的な社会経済活性化計画の不在、管理体制・管理計画の不在などである。2021 年 6 月の勧告では、モニュメントのメンテナンスの欠如、未登録建物の保護施作、新道路建設による悪影響、ゾーニングの未決定などを取り上げて、2022 年 1 月中の回答を求めた。これに関しては、すでにエジプト側はそれを提出しており、今後の動向が注目される。

ユネスコからの指摘に回答すべく、また従来の縦割り行政を補うべく、マトブーリー首相直属の、横断的な組織・都市開発基金（Urban Development Fund）が 2021 年に結成された。しかし、いまだに小さな組織であることに加え、旧市街内でもいくつかのプロジェクトが進行中ながら、十分に住民の同意をえずに、工事を進行させている節が見受けられる。

(4)最近の様相

カイロ旧市街保全という課題は、大都市カイロの抱える諸問題があまりにも大きく、旧市街の保全という状況までは漕ぎ着けていない感がある。とはいえ、世界遺産条約の経緯が語るように、エジプト政府としては世界遺産としての誇りを捨て去ることはできないというジレンマに陥っている。

昨今、エジプトでは軍主導による道路開発やインフォーマル住居の一掃と建て替えが、ものすごい勢いで進みつつある。国としては、大国エジプトをきちんと把握し、管理体制を明らかにし、未来へ向けて発展を目指していることは読み取れる。しかしながら、冒頭で述べたような今も生き続ける都市遺産という存在に対しては、深謀遠慮があるとは言い難い。新都市を作って、旧市街の住民の圧を低くすれば、調和の取れた旧市街が戻ってくるとは言い切れない。そこには、インフラを修復し、遺産を維持する資本投下が必要である。また、都市として経済的に自立するための産業基盤の整備も必須であろう。伝統産業、観光などの従来のアイテムに加え、21 世紀の新たなる可能性も付加する必要がある。

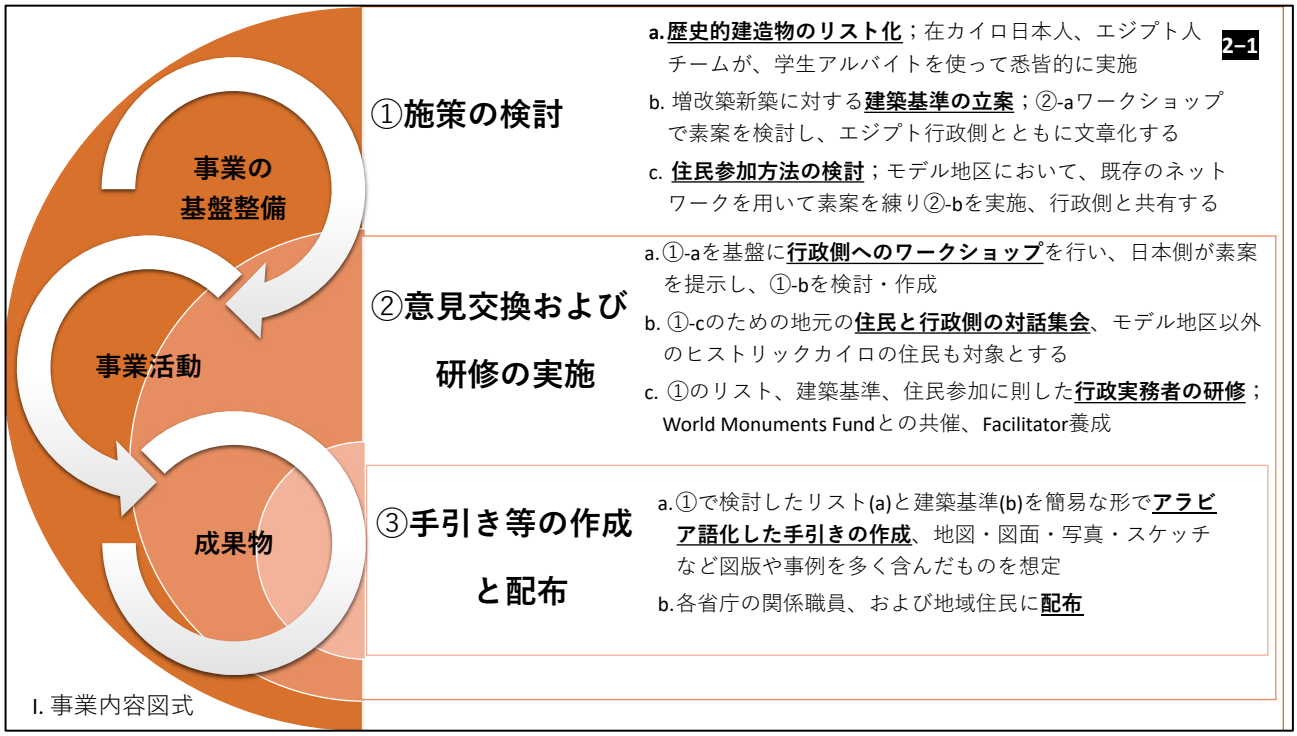
一方で、旧市街には、多様な人々が住んでおり、彼らの権利も守っていかねばならないと感じている。旧市街を調査していると街ゆく人々に「あなたたちは私たちの住居を壊しにきたの？」と尋ねられることが度重なった。住民の中には、自分たちの住まいが、いつ壊されるかもしれないという不安が広がっているのである。特に、広大な邸宅敷地等が荒廃しているところには、遺跡の中に一時的な住居が築かれ、貧しい人々が肩を寄せ合って住っている箇所などではなおさらである。実際に調査の終盤では、ダルブ・ラッバーナ地区が、モニュメントをのぞいて根こそぎ、道路も建物も取り壊されているという現状に遭遇した。モニュメントや都市組成を保全しながら、彼らを排除するのではなく、何らかの共住の可能性を模索せねばならない。

住民に関しては、自分の住まう場所としての愛着はあるものの、遺産や歴史に対する意識はいまだに低迷状況にあり、彼らの意識を高めていくことも遺産保全には欠かせない。その一つとして、先に紹介したトヨタ財団の事業を開催してきた。その結果、中東では顕著だと言われる地域コミュニティが、旧市街ではうまく機能しておらず、むしろバイトヤカンという半公的な役割が、新たな地域コミュニティを築くこととなった。リビングヘリテージとしての歴史都市を持続的に保全していくためには、住民自らが自分のアイデンティティとして、遺産や歴史を誇りと考えることが重要であると考える。

開発と旧市街の折り合いという点で、課題が山積みのカイロではあるが、住環境を向上させながら、カイロ独自の開発方法、歴史都市での共住の方法を考えることで、旧市街カイロが魅力的な歴史都市となっていくことが望まれる。

②事業計画概要

(1) 事業内容



I. 事業内容図式

このような、旧市街カイロでプロジェクトを進めるにあたり、事業の基盤整備、事業活動、成果物を計画した。第一の事業基盤整備は、施作の検討とも言えるもので、歴史的建造物のリスト化（在カイロ日本人、エジプト人チームが、学生アルバイトを使って悉皆的に実施）、増改築新築に対する建築基準の立案（ワークショップで素案を検討し、エジプト行政側とともに文章化する）、住民参加方法の検討（モデル地区において、既存のネットワークを用いて素案を練り対話集会を実施、行政側と共有する）ことを計画した。

2 番目の事業活動は、意見交換および研修の実施とし、行政側へのワークショップ（歴史的建造物のリスト化を基盤に、増改築新築に対する建築基準を検討・作成）、地元の住民と行政側の対話集会（住民参加のために、モデル地区以外のカイロ旧市街の住民も対象とする）、行政実務者の研修（リスト、建築基準、住民参加に則したものとする；ワールド・モニュメンツ・ファンド WMF と共催し、住民と行政を繋ぐファシリテーターFacilitator を養成する）ことを当初の計画とした。

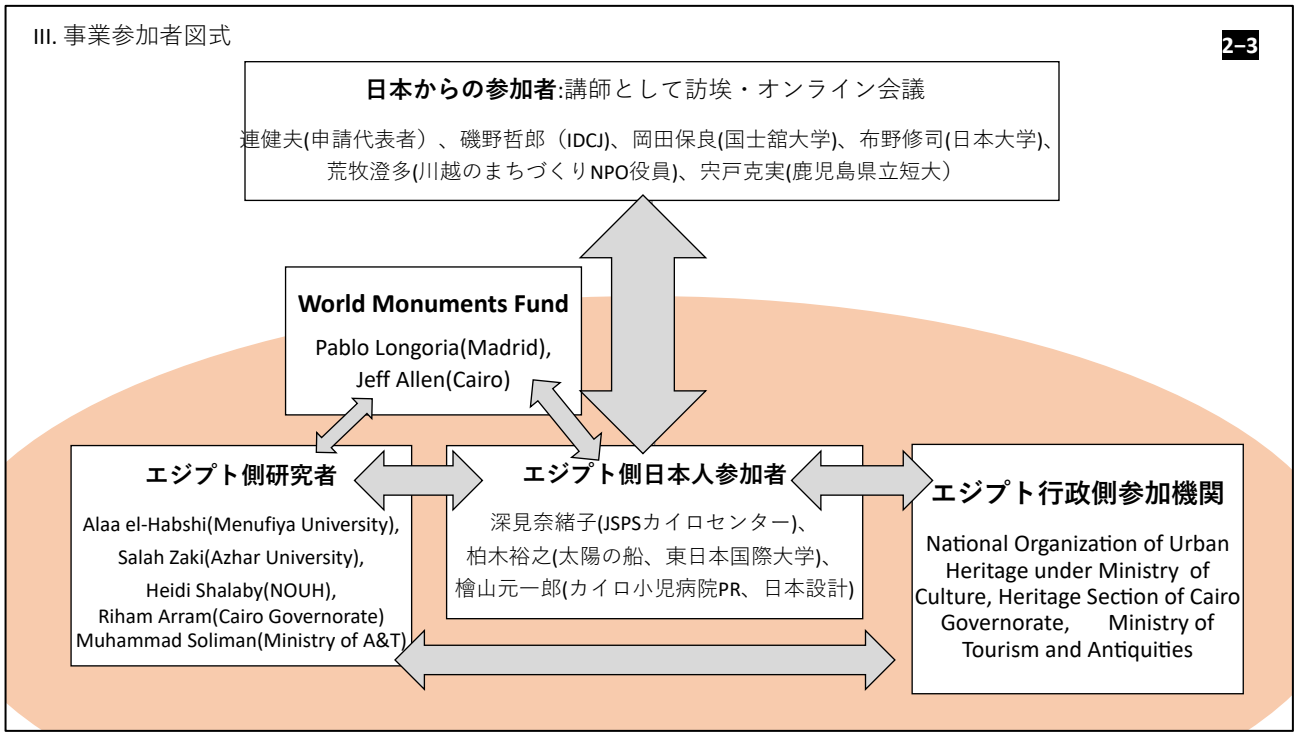
3 番目の成果物は、手引き等の作成と配布とし、建築基準を簡易な形でアラビア語化した手引きを作成、地図・図面・写真・スケッチなど図版や事例を多く含んだものを想定し、各省庁の関係職員、および地域住民に配布することとした。

(2) 当初の実施スケジュール

2021 年 11 月から基礎資料の作成を始め、12 月には行政側とのワークショップを開催して住民参加を検討し、1 月には行政と住民の対話集会を開催し、2 月には配布物の作成を行い、3 月にファシリテーター養成研修を行う予定を立てた。

日本に蓄積されたリビング・ヘリテージ保全とまちづくりの知恵を国際協力に用いて、行政と住民の間にたつファシリテーターとしての専門家を育てることによって、自分たちの遺産を守ろうという意識を高めることを目論んだものであった。

(3) 事業参加者

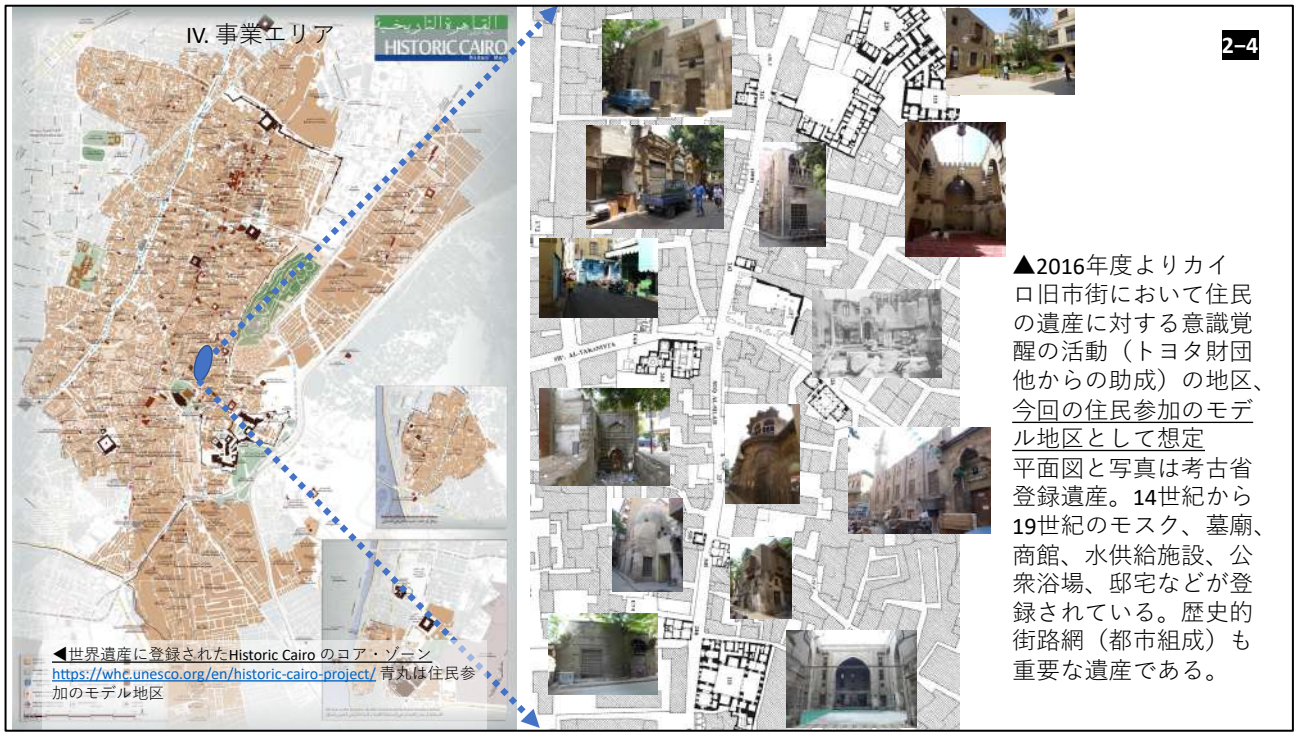


日本側からは申請代表者である連健夫（JCAABE 一般社団法人日本建築まちづくり適正支援機構）、布野修司（日本大学特任教授）、岡田保良（国士舘大学名誉教授）、磯野哲郎（IDCJ 国際開発センター）、荒牧澄多（川越のまちづくり NPO 役員）、宍戸克実（鹿児島県立短期大学准教授）、松村哲志（日本工学院専門学校講師）とし、カイロ側では日本人として柏木裕之（太陽の船、東日本国際大学教授）、檜山元

一郎（カイロ小児病院、日本設計所属建築家）、筆者深見奈緒子（日本学術振興会カイロ研究連絡センター・センター長）が、日本側とカイロ側を繋ぎ、カイロ側ではサラー・ザキー（アズハル大学教授）およびアラー・ハブシー（メヌーフィヤ大学教授）を相談役として、文化省の国立都市景観調和機構（NOUH）のムハンマド・アブー・サアダ機構長および同機構所属のハイジ・シャラビー博士と協力し、観光考古省、カイロ市とも関係性を図りながら、海外組織としてのワールド・モニュメント・ファンド、ドイツ考古学研究所、ユネスコ等と連絡をとりつつ進めることを立案した。

(4) 事業エリア

その範囲としては、世界遺産のコアゾーンに注目したが、特に筆者が 2016 年から事業を推進してきたダルブ・アフマル地区内のスーク・シラーハ（武器市場）通りを住民参加のパイロット地区として選定することを計画した。



③実際の事業推移

(1) 協力関係

2021 年 10 月 7 日に本事業の採択通知が届いた。事業開始が 10 月ということもあり、半ば諦めていた中での嬉しい通知となり、事業計画等を練り直し、実働の算段を続けた。サラー・ザキー教授の示唆により、最初はガマレイヤ地区（カーヒラ内部、アズハル通りの北側）の地区を、軍の建築家と協力関係を持ちながら進めることを試み、一方でユネスコやドイツ考古学研究所と情報交換をしながら、情報を収集した。

11 月に差し掛かる頃、軍との協力よりは、当初の計画通り文化省傘下の国立都市景観調和機構との協力のもとに事業を進めることに方向性を変えた。その理由には、軍と外国人研究者が直接協力関係を持つことは難しかった点が指摘できる。国立都市景観調和機構との話し合いの中で、事前に同機構が立案しているダルブ・アフマルのスーク・シラーハ通りに焦点を当てることを推奨され、筆者らの以前のプロジェクト開催地であることも後押しし、同地選択を決定した。

なお、エジプト外務省宛に協力プロジェクト認可の申請書を提出しているが、いまだにその回答をえ

ていない。エジプトでは、外国人関与の許可申請には、極度に時間がかかることが常であり、致し方ないことであるが、実際の建物修復等のプロジェクトは無理ながら、オンライン講座の催行、および研究者間の意見交換等には制限がないということで、プロジェクトを進行することができた。

国立都市景観調和機構との協力の元で、『2008 年法律第 119 号とその執行規則に従い「国家都市整備局」によって承認された歴史的なカイロ地域の境界と条件　2011』の存在が明らかになった。16 項目にわたって基準が述べられており、アラビア語から英語と日本語の翻訳を作成した。当初の計画にあった「増改築新築に対する建築基準の立案」については、彼らが作成した指針がありながら、これが使われていない状況を打開すべきであると判断し、もう少し多くの人にわかりやすくするために、写真や図を用いてグラフィックな情報を補足し、活用を図ることを試みることに路線を変更した。

3.10月からの経緯　**3-1**

10月7日　**審査の結果「採択」**
10月9日　Salahと相談、カイロにて柏木、檜山、深見
　　→**ガマレイヤ地区**を提案される、NOUHによるカイロ旧市街の建築規定を入手、翻訳、軍の建築家との協力
10月10日 プロジェクト・メンバーとのzoomミーティング（連、荒牧、磯野、宍戸、深見）
10月11日 ドイツ考古学研究所メンバーと文化庁プロジェクトに付いてミーティング（Mustafa,Eman,深見）
10月13日 ガマレイヤ地区を訪問（Salah、柏木、檜山、深見）動画撮影、Alaaとの相談
10月14日 連、磯野、深見でzoomミーティング
10月15日 **ユネスコ**の高橋氏と面談、ユネスコのカイロプロジェクトについて
10月18日 文化庁との打ち合わせ（文化庁の皆さま、連、深見）
10月19日 連、磯野、深見でzoomミーティング
10月20日 **ドイツ考古学研究所**を訪問してガマレイヤ地区の情報収集（Mustafa,Eman,深見）
10月25日 プロジェクト・メンバーとのzoomミーティング（連、荒牧、磯野、宍戸、深見）
10月27日 Salah、アズハル大学建築学科学生との旧市街に関するミーティング
11月3日　Salah、檜山、深見でユネスコ事務所を訪問、高橋氏とミーティング、エジプトとユネスコとのすれ違い
11月4日　Salah、檜山、深見でミーティング、**NOUHとの協力**
11月7日　Salah、連、檜山、宍戸、柏木、荒牧、岡田、深見でzoomミーティング
11月10日 Salah氏ガマレイヤプロジェクトの翻訳
11月17日 Salah、ユネスコ（高橋、アーリヤ）、檜山、深見で**NOUH事務所を訪問**、Abou Sa'ada氏と面談、**スーク・シラーハの提案**
11月18日 Salahと相談、NOUH協力要請レター、外務省許可レターの執筆、NOUHスーク・シラーハ・プロジェクトの翻訳
11月24日 プロジェクト・メンバーとのzoomミーティング（連、岡田、檜山、布野、松村、宍戸、深見）
11月25日 **文化庁と契約**、Alaaとzoomミーティング、Salah、檜山、深見でスーク・シラーハの訪問
11月29日 外務省宛レターの修正と提出
12月2日　檜山、深見でユネスコ事務所を訪問、無形文化遺産、高橋、サマー（ユネスコ）、リハーム
　　Salah、深見でスーク・シラーハの訪問
12月8日　プロジェクト・メンバーとのzoomミーティング（連、岡田、磯野、荒牧、布野、松村、宍戸、深見）、エジプト側対面
12月14日 イスラーム美術館118年展に柏木、檜山、深見参加、ユネスコ高橋さんとあう、その後にミーティング
12月17日 柏木、檜山、深見でスーク・シラーハの調査
12月20日 Salah氏、Alaa氏、深見のミーティング、**住民とのワークショップの日時決定**

(2) 現況調査

調査地の決定を受けて、現況調査を開始した。内容については「■2.検討　③カイロ歴史的市街地の悉皆調査とその評価；ダルブアフマルに注目して」において詳述する。現況調査の位置付けとしては、計画には「歴史的建造物のリスト化（在カイロ日本人、エジプト人チームが、学生アルバイトを使って悉皆的に実施）」と謳ったが、実際には「実務者の研修」を兼ね合わせた形で、ユナイテッド・コンサルタンツ所属の中堅建築家 2 名と若手建築家 2 名を依頼し、日本人柏木、檜山、深見が彼らとともに日本に蓄積された都市組成調査の方法で行い、ダルブ・アフマルの地域（南北約 1000m 東西約 250m）の地域のすべての建物の、機能、階数、躯体材料、推定建設年代をリストにチェックし、それぞれの外観写真を撮影した。

これらの情報をもとに、2 名の若手建築家と深見がそのまとめ作業を行い、『調査報告スーク・シラーハ 2022』の小冊子をまとめた（巻末資料集に和訳を収録）。それぞれの建物の敷地形状については、ニコラス・ワーナーが 1938 年測量の 500 分の一の地図をもとに作成した地図を基盤として、そこに修正を行う形で行い、最終的には一つの地図としてまとめた。また調査報告書をまとめるにあたり、時間の制限からスーク・シラーハ通り両側の地区を抽出し、その写真と要点を書き出した。

これら一連の作業をエジプト人建築家と行うことによって、彼らの都市遺産に関する意識を喚起した

ことは、次に述べる2つのワークショップに住民の意見を集約するファシリテーターとして参加する際の素養となったと確信する。すなわち、現況調査とワークショップ間での呼応関係を築くことができた。

(3) 住民ワークショップ

1月8日、9日に、バイトヤカンにおいて、女性、男性の住民ワークショップを開催した。内容については「■３．住民ワークショップ」において詳述する。

趣旨としては、住民に、現在の良いところ、問題点や気づいた点、などを話してもらい、6つの歴史的建造物の再利用案についての意見を聞き出すこととした。その際に、サラー教授、アラー教授および前述の4名の建築家をファシリテーターとして、住民の意見を地図に記入してもらった。なお、男女ともに2つのグループを作り、ワークショップの最後にそれぞれのグループの意見を発表する機会を設けた。エジプト人専門家が住民の合意形成を作るファシリテーションの手法実施の機会となった。

(4) エジプト行政(NOUH)関係者へのオンラインレクチャー

2月21日に国立都市景観調和機構と共催で、オンラインのレクチャーを開催した。内容については「■４．エジプト行政（NOUH）関係者へのオンラインレクチャー」において詳述する。

趣旨としては、エジプトの国の組織である文化庁傘下の国立都市景観調和機構との共催という点が、日本の文化庁のプロジェクトとして大きな意味をもった。同機構には技術者も数多く所属し、実際に歴史都市の今後のあり方を模索中であるため、次回はぜひエジプト側の事業紹介をという提案があった点は、一つの成果といえよう。

(5) 更新案意見交換会と街歩きワークショップ

3月4日にユネスコ、観光考古省、ワールド・モニュメンツ・ファンドおよび住民を集めて、未来のスーク・シラーハについてというワークショップを行った。内容については「■５．更新案意見交換会と街歩きワークショップ」において詳述する。

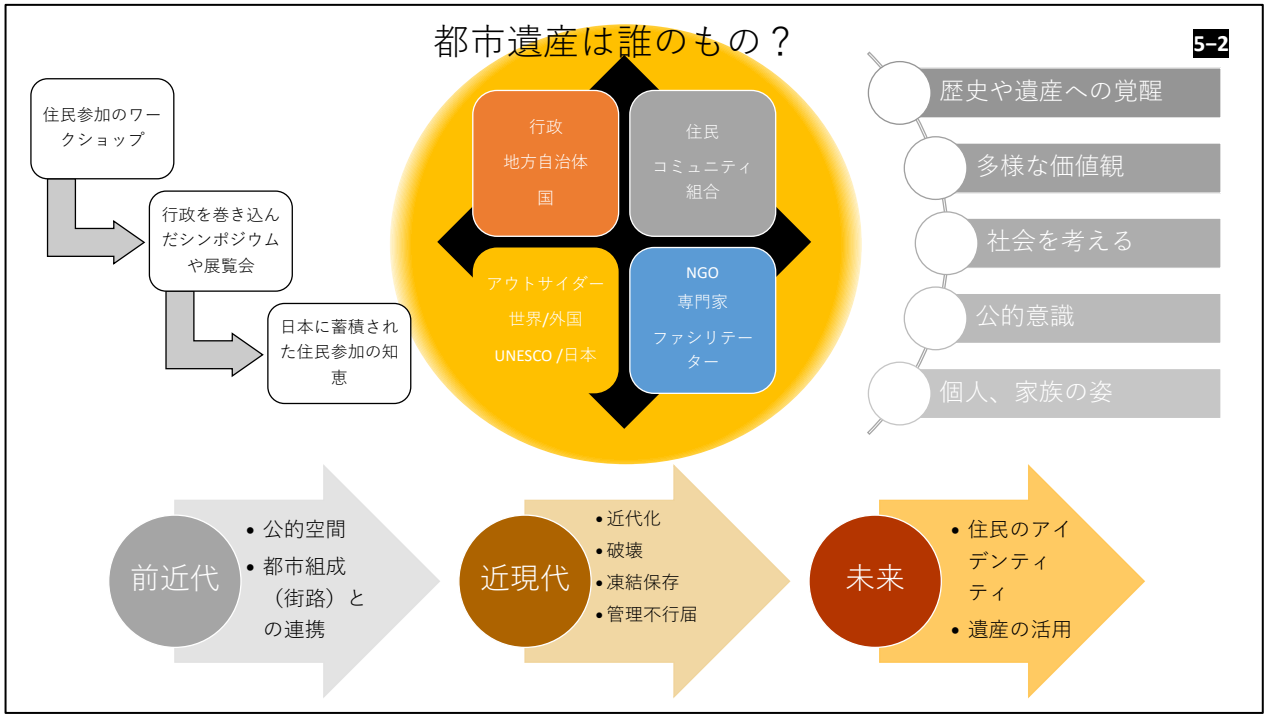
趣旨としては、1月8日、9日に行った住民参加のワークショップでまとめられた意見（特に6つの歴史的建造物の公的再利用）を入れ込んだ形で、アラー教授にスーク・シラーハ全体のデザイン計画を、サラー教授にそれぞれの建物の利用デザイン案を依頼しておいた。その成果を報告してもらい、参加者からの意見を集め、さらに実際にまちあるきをして、その実情を実体験するということを目指した。ここでも、現況調査、住民とのワークショップを経験したファシリテーターが活躍した。

④文化遺産（歴史都市）を保全する

今回のプロジェクトは、日本の文化庁からの助成により、令和３年度緊急的文化遺産保護国際貢献事業（専門家交流）「カイロ旧市街の持続可能な保護策のための事業／住民参加のまちづくり」と題したもので、その目的は、日本が有する文化遺産保存修復に関する高度な知識・技術・経験を活かし、人類共通の財産である文化遺産の保護・継承に貢献するとともに、日本の国際的地位の向上を図るためであり、そのために日本の文化庁はこの文化遺産国際協力事業を実施している。

まちづくりを考えるためには、その基本として都市遺産とは誰のものなのかを考える必要がある。先に住民のアイデンティティとしての都市遺産について触れた。住民からその遺産保全の意思を発信するためには、まず住民が歴史や遺産に対して覚醒し、住民自身が都市遺産には多様な価値観があることに目覚め、自分自身で遺産に対する価値を決定していくというプロセスが必要である。これによって社会を考えることができるようになり、公的意識が芽生え、自分たちの街を作っていこうという意識が生まれるのではないだろうか。一方で、個人や家族という私的部分も両立させる必要性がある。

しかし、住民側だけが保全を願っても、行政、専門家、アウトサイダーといった外部者が関わらないと、資金面でも技術面でも事業の成功は難しい。筆者たちが経験した事業では、住民参加のワークショップを中心とするとともに、行政を巻き込んだシンポジウムや展覧会を企画し、そこでの対話を重視し、日本に蓄積された住民参加の知恵を伝えた。こうした協力関係から、バイトヤカンでの事業の継続を結実できたと考える。



前近代という変化の振れ幅の少ない時代においては、公的空間と都市組成は、コミュニティを通して連携を図れていた、しかしながら近現代には、そのシステムがうまく機能しなくなっている。現在まで残る都市遺産を未来へとうまく活用し、都市という社会に役立つ機能を付加する事は、現在のまちづくりに必須な課題と考える。都市遺産が、その形態を維持しながら、新たな時代に適合した機能を付加しながら永らえていくことこそ、持続的な都市遺産保全と言えるのではないだろうか。

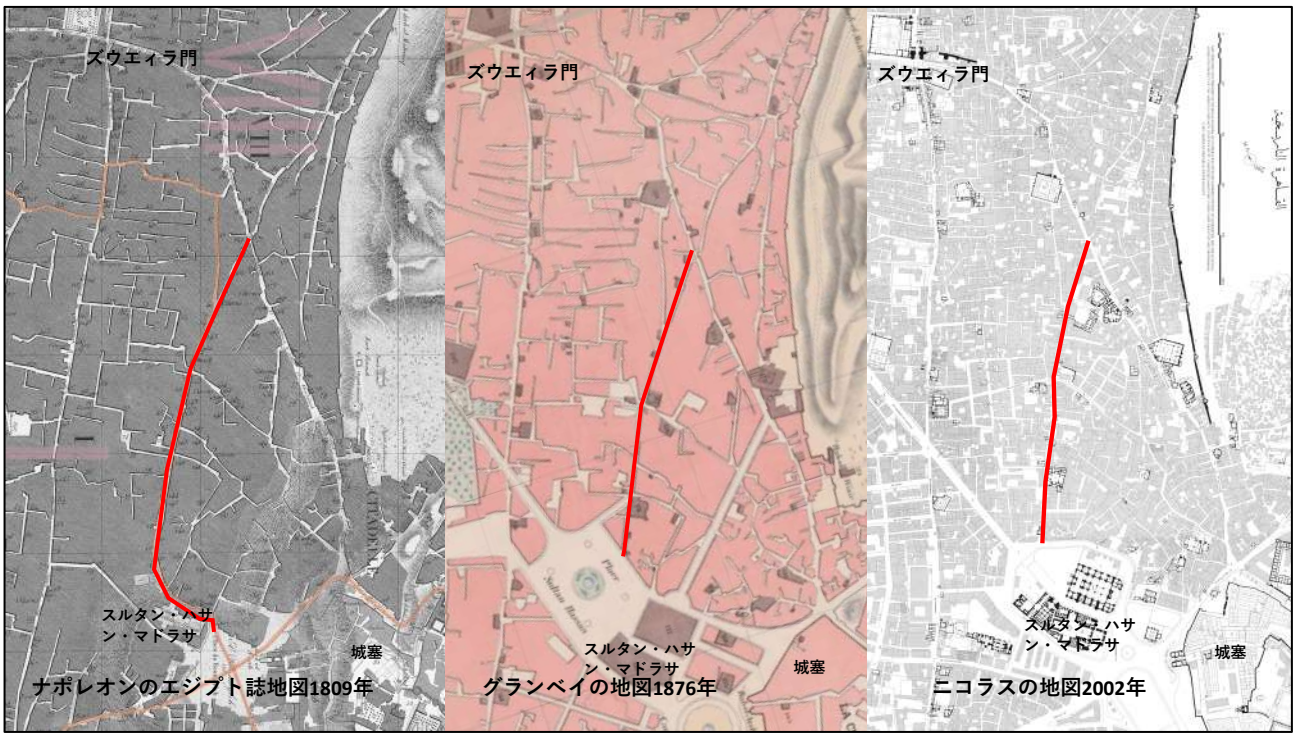
■２．検討（評価、建築基準、現況調査）

①スーク・シラーハと保存案対象建物

スーク・シラーハは、歴史的建造物の存在と、マクリーズィーの記述からも、14 世紀にさかのぼる通りである。本報告書で触れてきたように、筆者たちは 2016 年からそこにあるバイトヤカンにおいて住民の意識覚醒の活動を続けてきた。その一環として、2017 年には本プロジェクトに参加する布野教授の主導で、日本大学とカイロの大学で建築を学ぶ学生たちと、未来のスーク・シラーハを考える共同ワークショップを開催したことがある（その詳細は、■４．エジプト行政（NOUH）関係者へのオンラインレクチャーの布野資料に掲載）。これを踏まえて、今回のプロジェクトでも、現在活用されていない歴史的建造物を活用することによって、スーク・シラーハの発展を目指す可能性を模索することとした。その際、住民ワークショップを通して彼らの希望を聞き、それを踏まえた上でアラー教授のスーク・シラーハのデザインコンセプトと、サラー教授の実際の活用案のデザインを提出してもらうこととした。なお、二人にはワークショップでのファシリテーターを依頼し、住民の意識との乖離がないように務めた。

マクリーズィーはズウェイラ門（カーヒラの南門）南側、城塞を繋ぐこの道のことをスーク・シラーハ（武器市場通り）とは呼ばずに、スウェイカ・イッズィー（イッズィーの小市場）と呼ぶ。ズウェイラ門南側の地域は、ファーティマ朝期にはカーヒラ城外の墓域であった。マムルーク朝期には、ズウェイラ門と城塞、さらには南のイブン・トゥールーン・モスクを繋ぐ道にそって、アミールたちの邸宅や彼らの寄進公共建築が建設され、新興市街地として開発され小市場が開かれた。オスマン朝期になると、城塞との関係から、おそらく武器を売買する市場が作られるようになったことが推察される。

19 世紀初頭のナポレオン地図には、通りの南部にはスーク・シラーハ、通りの北部にはスーク・イッズィーの名称が記載されている。この地図から、本来は、城西下のルメイラ広場から、マムルーク朝の大建築スルタン・ハサン・マドラサ（学院）北側沿いに道が通り、現在のスーク・シラーハの入口とも言えるマンジャク邸の前へと繋がっていたことがわかる。また、ナポレオン地図にはこの地域にフランス軍半旅団が 2 つ駐屯していたことが明らかで、トルコ人、キリスト教徒なども住む地域で、軍事的にも重要な地であった。



歴史的建造物にはいくつかの種類がある。イルゲイ・ユーズフィーがマムルーク朝下 1373 年に建設した宗教建築は、中庭周りの礼拝室と教室、小中庭を囲む学生や教授の居室、サビールと呼ばれる公共の給水施設、その上階に設けられたクッターブと呼ばれるコーラン学校、創設者の墓廟などが一体化した複合建築である。しかしながら、現在では礼拝のためにモスクが使われているだけで、サビール・クッターブ、小中庭周りの居室部分、墓廟は普段は鍵がかけられ使われていない（下左平面図橙色部分）。スーク・シラーハの北部にあるクトゥルブガー・ダハビー・マドラサ（1347 年）は、礼拝室は狭く、そこには創立者の墓（セノタフ）も置かれているが、その隙間の空間は礼拝に用いられる。しかし、現政権になってからは日に 5 回の礼拝時以外は、不要不急の集会を防ぐ目的からモスクでさえも礼拝時間以外は閉ざされ、2020 年のコロナ禍によりその状況はさらに強まった。

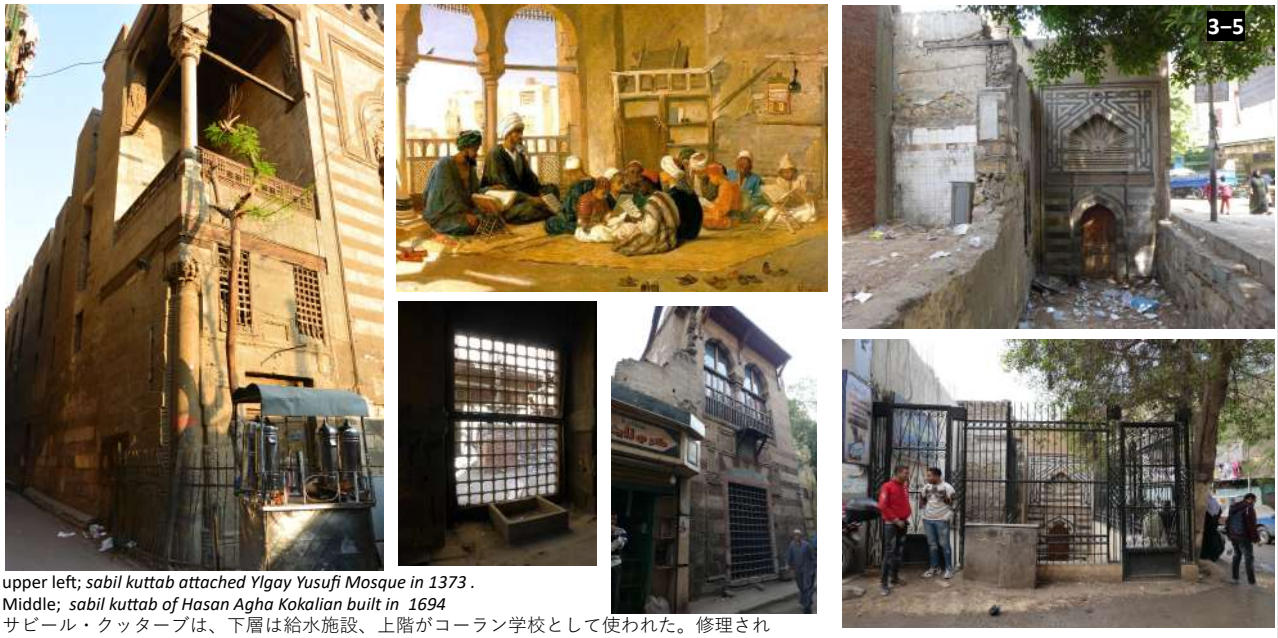
イルゲイ・ユーズフィー（青は無蓋、橙は未使用）　　クトゥルブガー・ダハビー

モスクではないが、聖者廟も宗教施設で、本来は信者や教団の人々を集めていた。特に聖者の生誕祭（マウリド）には祝祭が催される場で、共同体の靭帯として役立っていた。しかし、今はその役割を終えた例も多く、スーク・シラーハにあるリファーイー教団のアブー・スード廟もその一つである。宗教建築は、本来では他の建物への転用を停止する意味からワクフ（停止）とされるものの、通りの北部にある 2 つのザウィヤは、一つは壊され、もう一つの瀕死の状況にある。今回は、モスクや廟は再利用検討の対象としなかったものの、もう少し上手な活用法を考える余地はある。

ちなみにイスラームの歴史的都市施設運営のシステムとしてのワクフは、宗教建築と世俗建築を経済的につなぐものであった。モスクやマドラサ（学院）、サビール・クッターブ等の宗教的目的を持ちながら維持管理費が必要でお金を稼ぐことのない宗教施設に、公衆浴場や商館、あるいは店舗などお金を稼ぐことのできる世俗施設や農地などを寄進し、後者から上がる収入を前者が用いることで、両者が持続的に成立することを目指した。往時から管理者の独占など問題点も抱えるが、こうした施設間の関係性による持続的な運営は、今後の公共施設再利用に欠くことのできない視点であろう。

もう一つ、特色的な施設としてのサビール（給水所）・クッターブ（寺子屋）があり、この通りに 4 カ所を数える。本来のサビールは、地下貯水槽にナイル川から水を運んで貯水し、道ゆく人に水を供給し、上階に設置された開放的な部屋を、子供たちがコーランを学ぶ場所とする。マムルーク朝の 14 世紀からオスマン朝の 19 世紀中頃まで、カイロでは小規模ながら手の込んだ宗教寄進財として建設され、通りの顔となることが多かった。しかし、19 世紀末からの水道の普及によって、サビールがその役割を終えるとともに、ほとんどの場合、使われなくなってしまった。

また、中東の前近代の都市においては、普通の住宅に風呂を備えることはなく、共同の公衆浴場が機能していた。スーク・シラーハの 14 世紀創建のハンマーム・アミール・バシュターク（1341 年）は、カイロでも古いハンマーム（公衆浴場）の一つである。公衆浴場は水道や熱源としてのガスが普及してからもその役割を保っていたが、公衆衛生の観点から営業を差し止められる実例が多い。ここも、その一つで、2000 年代に閉鎖され、現在は極度の荒廃状況にある。ただし、従来燃料を貯蔵し、お湯を沸かしていたバックヤードを備え、かなりの面積を閉めている。



upper left; *sabil kuttab attached Ylgay Yusufi Mosque in 1373 .*
Middle; *sabil kuttab of Hasan Agha Kokalian built in 1694*
サビール・クッターブは、下層は給水施設、上階がコーラン学校として使われた。修理されたのちも施錠され、痛みが激しくなり、管理がゆきとどいていない。住民たちは、活用を望んでおり、女性の集まる場所、あるいは組合の事務所に使いたいという要望が聞き取れる
2020年から2021年にかけて再び修復、施錠。

Hammam Amir Bashtak, *1341* 2007年までは使用されていたが政府により、営業停止、ゴミが集まる
2020年に考古省が柵を設置

加えて、往時の邸宅は、持ち主がいなくなると鍵をかけられ、崩壊に任せられる。例えモニュメントとして登録されても放置され、あるいは分割された例が多い。その一つがマムルーク朝のマンジャク・シラフダール邸である。

なお、スーク・シラーハは、オスマン朝期に市場の通りとして栄えていたために、ウィカーラと呼ばれる中庭付きの商館と、その上にラブアと呼ばれる賃貸アパートを備えた商業施設がある。これらは、観光考古省のリストには登録されていないものの、重要な歴史的遺産である。現在では通りに面した下階はそのまま貸店舗として使用されているが、その背後にあった中庭は消失して住宅地となり、上階のラブアは崩壊してしまっている。

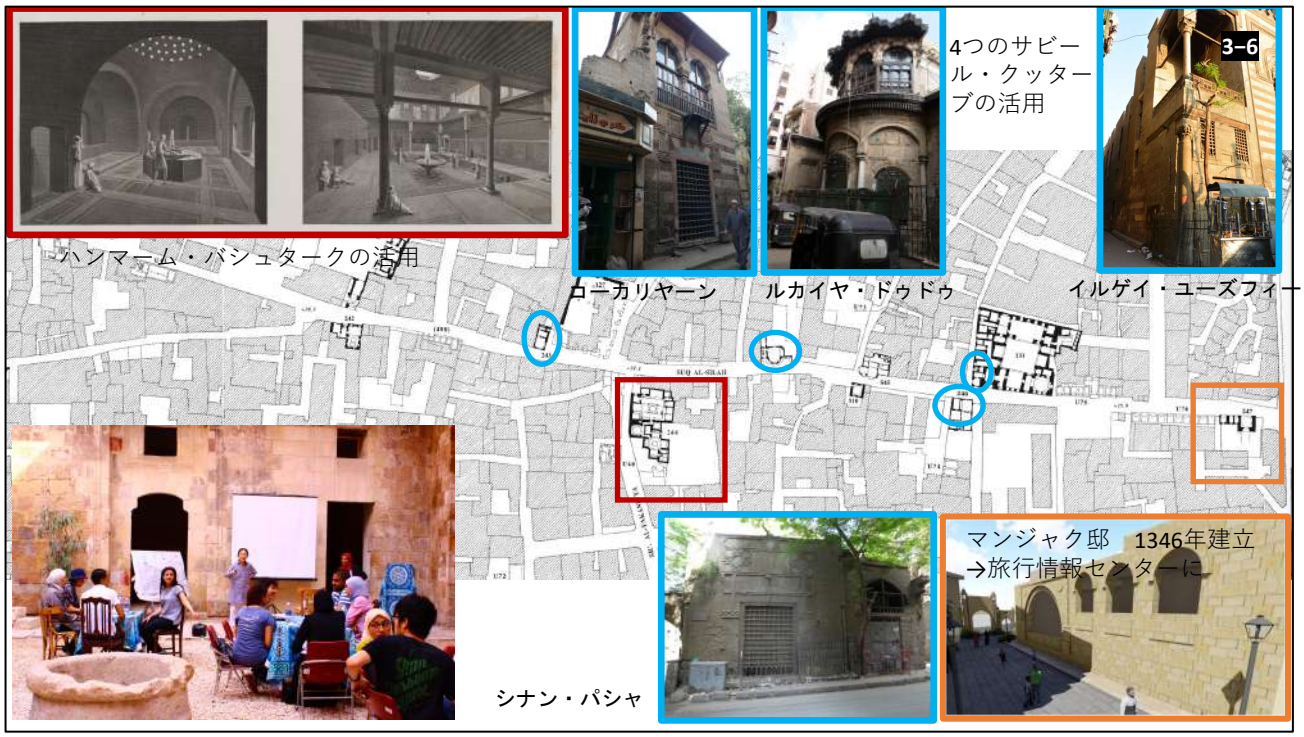
次に、今回のワークショップで注目した 6 つの歴史的建築の概要と選択の理由を説明する。

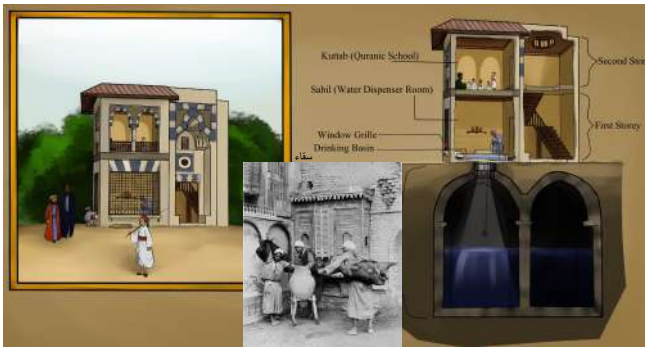
マンジャク・シラフダール

ハンマーム・バシュターク

まず、スーク・シラーハの入口にあたるマンジャク・シラフダール（太刀持ちのマンジャク、下図橙線囲い）邸の門は、この通りで最も古い建物の一つで、ファサードにはこの通りの象徴とも言える太刀（シラーフ）の紋章があることから、通りのメルクマールとなる建物と判断した。

通りの中央にあるハンマーム・バシュターク（下図赤線囲い）は 4 分の 1 ヘクタールあまりの敷地をしめ、元来の伝統的公衆浴場という機能から、スーク・シラーハ活性化の一翼を担うと判断した。



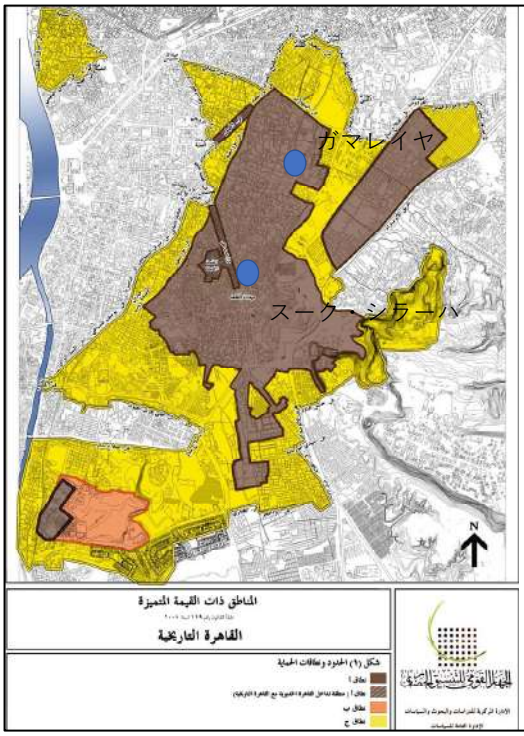


サビールの仕組み

ハンマーム・バシュターク

さらに 4 つのサビール・クッターブは、比較的小規模な建築で転用が容易であると判断した。先に紹介したイルゲイ・ユーズフィー・モスクに併設された例はその一つである。その対面にあるのはシナン・パシャのサビールで、本来はウィカーラ（商館）と同梱で建設され、今もその一部が残存し、昔日の街区門も残る。さらに北に進むとルカイヤ・ドゥドゥのサビール・クッターブがあり、半八角形の平面と波形の 2 階の軒が特徴的な美麗な建築である。この建築は、現在小学校となった大邸宅敷地に付属していたもので、将来は小学校をも含んだ転用が期待される。さらに北に進むと、コーカリヤーンのサビール・クッターブがある。ここは本来現在のバイトヤカンの前身の住宅と、スーク・シラーハに面するウィカーラ・ラブアが同時に建設されたものであると推察される。バイトヤカンの入口前を共有していることからも、公的な利用を推進する価値がある場所である。サビール・クッターブはいずれも瀟洒な建築が多く、通りをいく人々にアピールする建築である。

②コンサベーション建築基準（NOUH 手引書）（巻末資料に本文の全訳を掲載）



2008年法律第119号とその執行規則に従い「国家都市整備局」によって承認された歴史的なカイロ地域の境界と条件　2011　3-2

1.歴史的カイロの境界
2.一般的要件
3.都市組成
4.建物の解体と再建
5.建築上の特徴
6.新たな建築　高さ、仕上げ、突出部
7.2006年法律第144号に従って登録された既存建築　レベルA、B、C
8.既存未登録の建築
9.修復、改修、再建
10.用途と活用
11.店舗ファサード
12.植栽
13.歩道と道路
14.照明
15.歴史的カイロとヘディーブカイロの重複エリア
16.手続き上の要件

せっかくの指針が使われていない状況
全てが特例状況→
もう少しわかりやすく図示するようにして活用を図る

計画当初は建築基準の設定を目論んでいたが、国立都市景観機構ですでに 2011 年に保全地域の建築基準書とも言える条件を提出していた。この作業にはエジプト側の参加者であるサラー教授も携わっており、説明的な写真や解説の図面を補うことによって、十分に活用できることが明らかとなった。アラビア語でしか提出されていなかったために、英語と日本語に翻訳することを試みた。

上述の 16 の項目にわたって注意書きがなされ、それぞれの条項の要点は、以下の通りである。

1. 境界には 3 つの区域；ゾーン A（上図茶色）、ゾーン B（同黄色）、ゾーン C（同橙色）がある
2. 一般的要件；建設、変更の不許可。工事には許可取得が必須。屋上附設物の不可視。
3. 都市組成；都市構造の保存。分割の不許可。境界線上に建設（隣接建築との空隙の不許可）。建物面積は敷地面積の 70%以下。建築の連続性。
4. 解体と再建；解体作業の申請義務。再建の場合の都市組成遵守。解体前の建物ファサード記録義務。
5. 建築特徴；地域との調和。開口部形状、色、使用材料。設備の不可視。
6. 建物高さ；ゾーン A、B①道路幅 10m 未満 3 階最高 10m②道路幅 10m 以上 4 階最高 13m、ゾーン C+3m 表面仕上、突出の規定
7. 2006 年法律第 144 号登録既存建物；3 段階の規制、改変付加、内部改変、ファサード改変
8. 未登録建物；5 の建築特徴を遵守
9. 修復、改修、再建；建築要素の再建、通り名の遵守
10. 用途と活用；有害な仕様の不許可
11. 店舗ファサード；ファサードの遵守。広告規定。
12. 植栽；幅 12m 以上の箇所で植栽許可。芝生や土壌の不許可。
13. 歩道と道路；幅 6m 以下歩道必要なし、6-20m 道路幅の 10%、20m 以上同 20%、障害者用傾斜路設置
14. 照明；幅 12m 以上の道路で 30m ごと、幅の狭い通りは建物壁に照明を固定。
15. ヘディーブカイロとの重複エリアの規定
16. 手続き上の要件；国立都市景観調和機構の承認を得る義務。

③カイロ歴史的市街地の現況調査と評価：ダルブアフマルに注目して

いくつかの地図の存在を指摘したが、現在の詳細地図を手に入れることは難しい。Google Earth 等の衛星写真を用いたものは、建物が高いカイロ旧市街向けではなく、影によって実態を掴むことができない。ニコラスの地図は、1938 年地図を基盤に修正を加えたものだが、ここ 20 年の間の変化は大きい。また、2017 年に布野教授率いる日本大学の学生たちが、ニコラスの地図上に、その階数や用途を記入したものがあったが、調査期間が短かったため、不備な点も多い。このような事情からニコラスの地図をベースに、現状を記述することが必要と考えた。未登録の歴史的建造物の遺構の指摘も目的とした。調査は、柏木（太陽の船）、檜山（日本設計）、筆者深見（JSPS カイロ研究連絡センター）および、ユナイテッド・コンサルタンツ United Consultants 所属の建築家ファーリス、イマード、ハーガル、ファーティマによって、12 月 17 日から 2 月 25 日まで 8 回に渡って行い、日本の街並み調査で培われた技法をエジプト人建築家に伝えた。

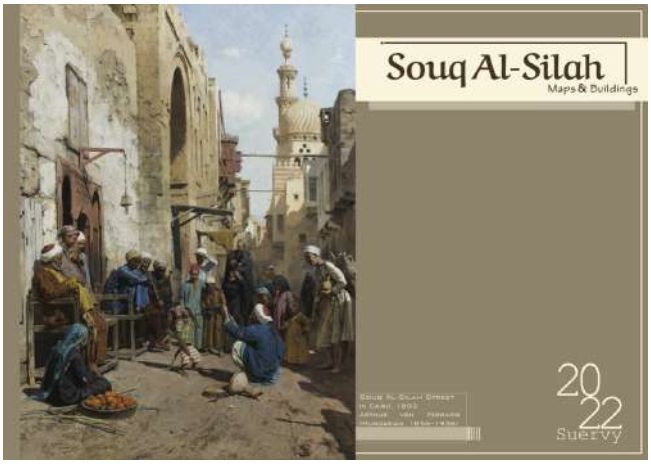
現地調査 4-6

柏木、檜山、深見担当　12月17日から開始、12月24日、25日にも開催予定 住民説明用のパンフレット

１）利用状況（建物の有無）２）建物状況（階数、入口）３）古建築のチェック（石積み、持ち送り等）

４）公共建築、店舗、駐車場等の場合には書き込む　５）1軒ごとにファサード写真撮影

その一つの成果として、小冊子をまとめるに至った。建築家ハーガル、ファーティマの協力のもとに、筆者がまとめた。エジプト人建築家と日本人研究者がともに参加し、写真撮影、地図の修正などを通して、現状を的確に捉えることが必要と考えたためである。また、若い建築家に旧市街保全の意識を喚起し、問題点を共有し、今後も彼ら自身で旧市街悉皆調査に取り組むことが望まれる。

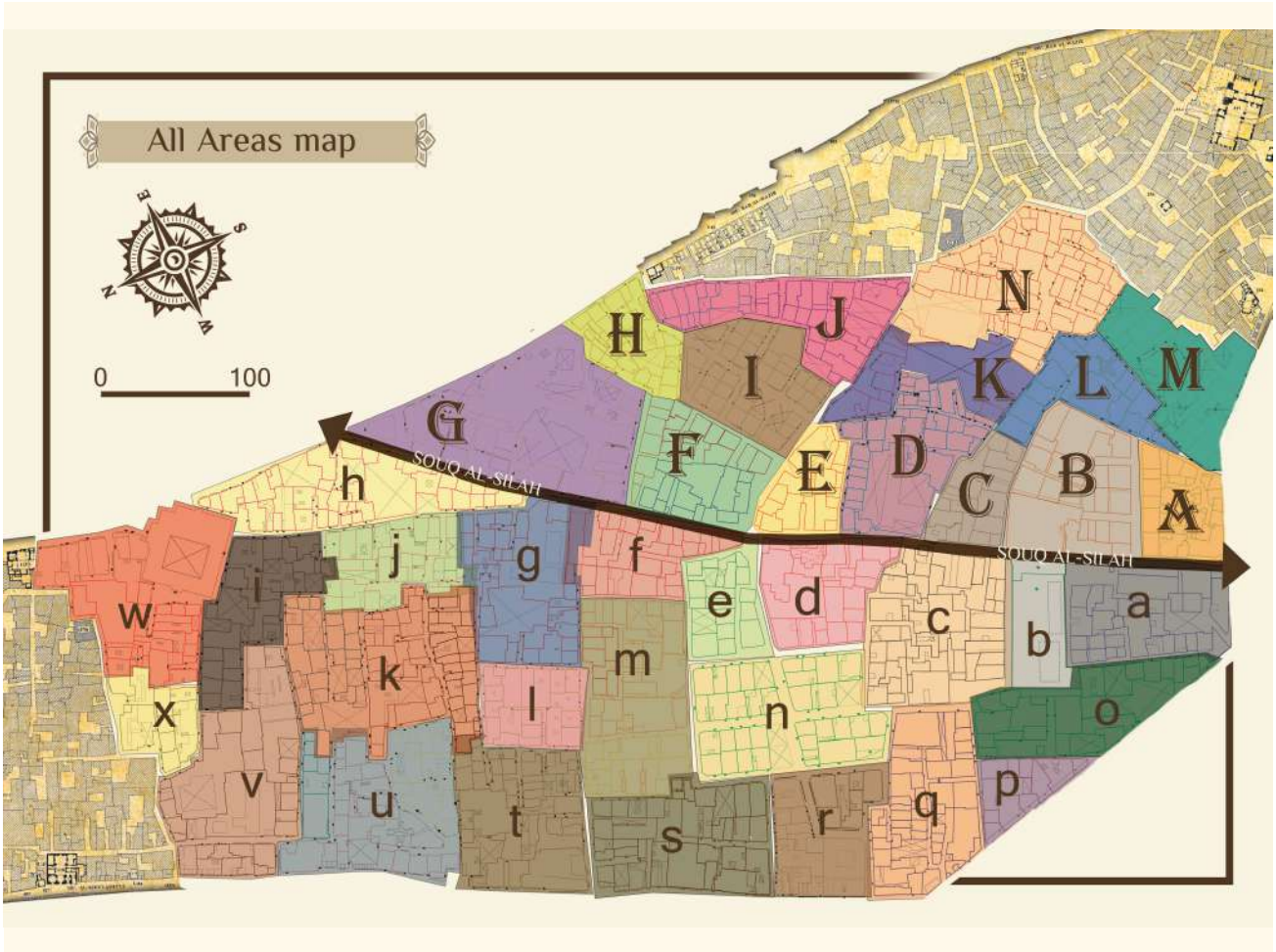


この調査によって、明らかになった課題も数多い。以下に、調査報告書の序の和訳を引用する。なお、他の部分については巻末資料集にその和訳と図版を収録した。

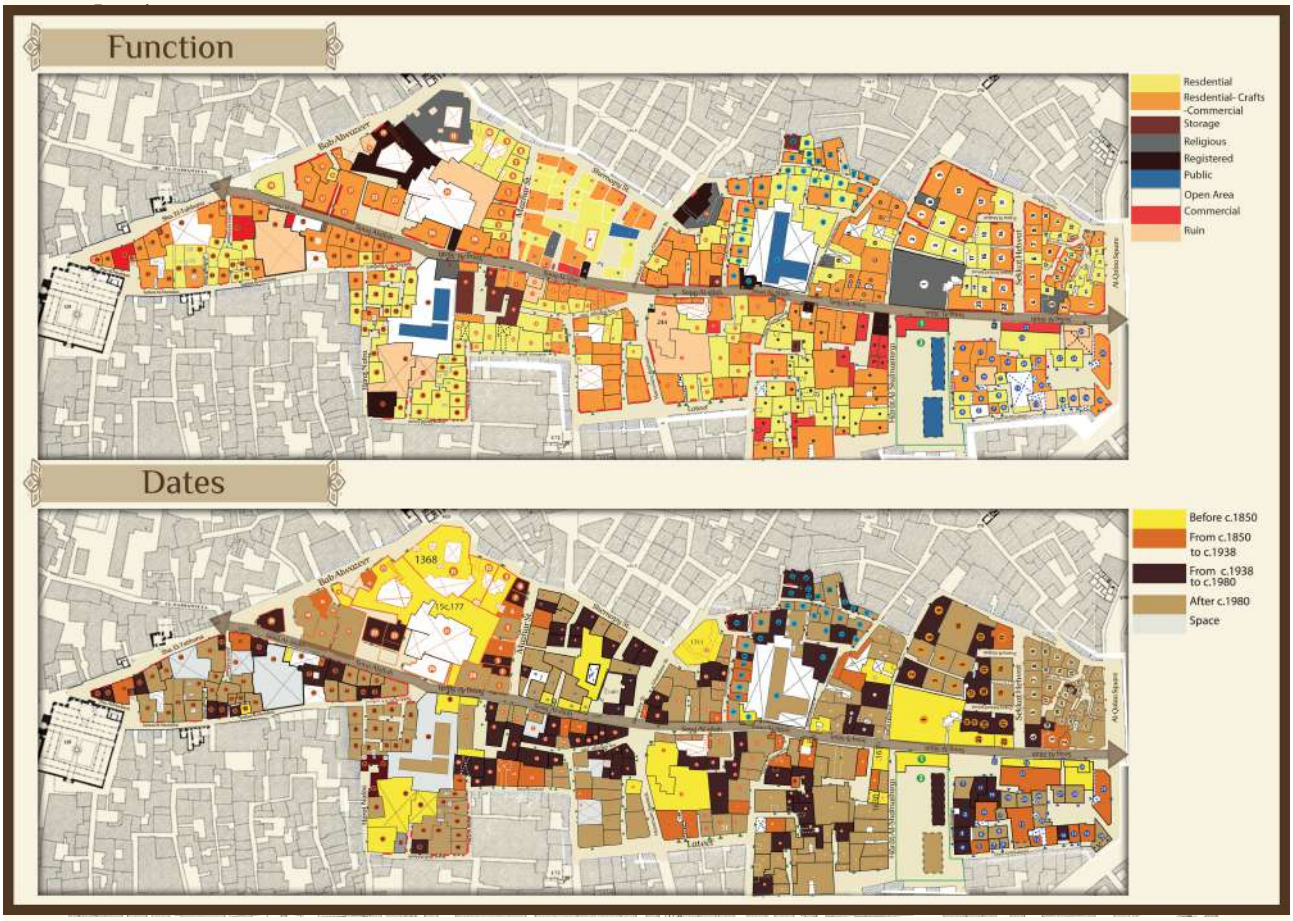
カイロ旧市街の地図については、ニコラス・ワーナーNicholas Warner 著『歴史都市カイロのモニュメント-地図と記録総覧』The Monuments of Historic Cairo; A Map and Descriptive Catalogue の地図を元に、現在空地になってしまっているところ、新たな建造物が開発されたところなどを、一軒一軒、写真撮影をしながら地図の補正を行なった。加えて、目視およびインタビューにより、建物機能、階数、年代判定、躯体材料などをチェックした。

まず、ダルブ・アフマル一帯にこの調査を試みるにあたって、区域区分が必要になったので、仮の区分を行なった。スーク・シラーハの西側に a から z、①から④計 30 エリア、スークシラーハの東側に A から W までの 23 地区を設定、ほぼ全ての地域を調査した。下図は、その中でも 3 月末までのレポートをまとめるにあたり、調査によって補正を行なうことのできた部分である。ちなみに、なるべく街路によって分けることができる建物の塊を基準に分けたが、ところどころでは建物の塊を分断したところもある。街区としての塊の検討は今後の課題である。

本小冊子では、この区分に従い、それぞれの地域ごとに、その成果をスーク・シラーハ沿いの地区に限って、地図のページと写真のページとしてまとめた。掲載の順序は、スーク・シラーハの西側南端の a からはじめ北端の h、スークシラーハ東側の G から南端の A までという順序である。地図のページについては、まず地域の現状を表す地図（それぞれの建物に番号をつけ、入口を記入したもの）、ニコラスが基盤とした 1938 年測量の地図を掲載し、それぞれ建物機能、建物高さ、建設年代、躯体材料の地図を掲載した。それぞれの判断基準については以下のとおりである。



建物機能については、建物が上階をアパートメントとし、１階に店舗や工房、あるいは倉庫としているものが大半を占める。なお、それら１階部分の用途判別は、閉まっている場合等は難しいため、１階にシャッターなどによって閉じられた空間がないものを居住 Residential、１階に何らかの外に向かって開く個別の空間のあるものを居住／工房／商業兼用 Residential-Crafts-Commercial とし、倉庫だけと判別可能なものを倉庫 Storage と判断した。上階にアパートメントを持たずに、店舗や工房だけの建築は、商業用 Commercial と表記した。モスクや墓、ザウィヤ（小モスク）などを宗教用 religious、学校や病院などを公共 Public とし、観光考古省に登録されている歴史建築を特記 registered として色分けした。なお、駐車場など全くの空地になっているものは空地 open area、遺構が荒廃した状況で残っているもの荒廃 ruin と類別した。ただし後者の場合、その中に仮設の住居や工房などが入り込み、使われている場合もある。

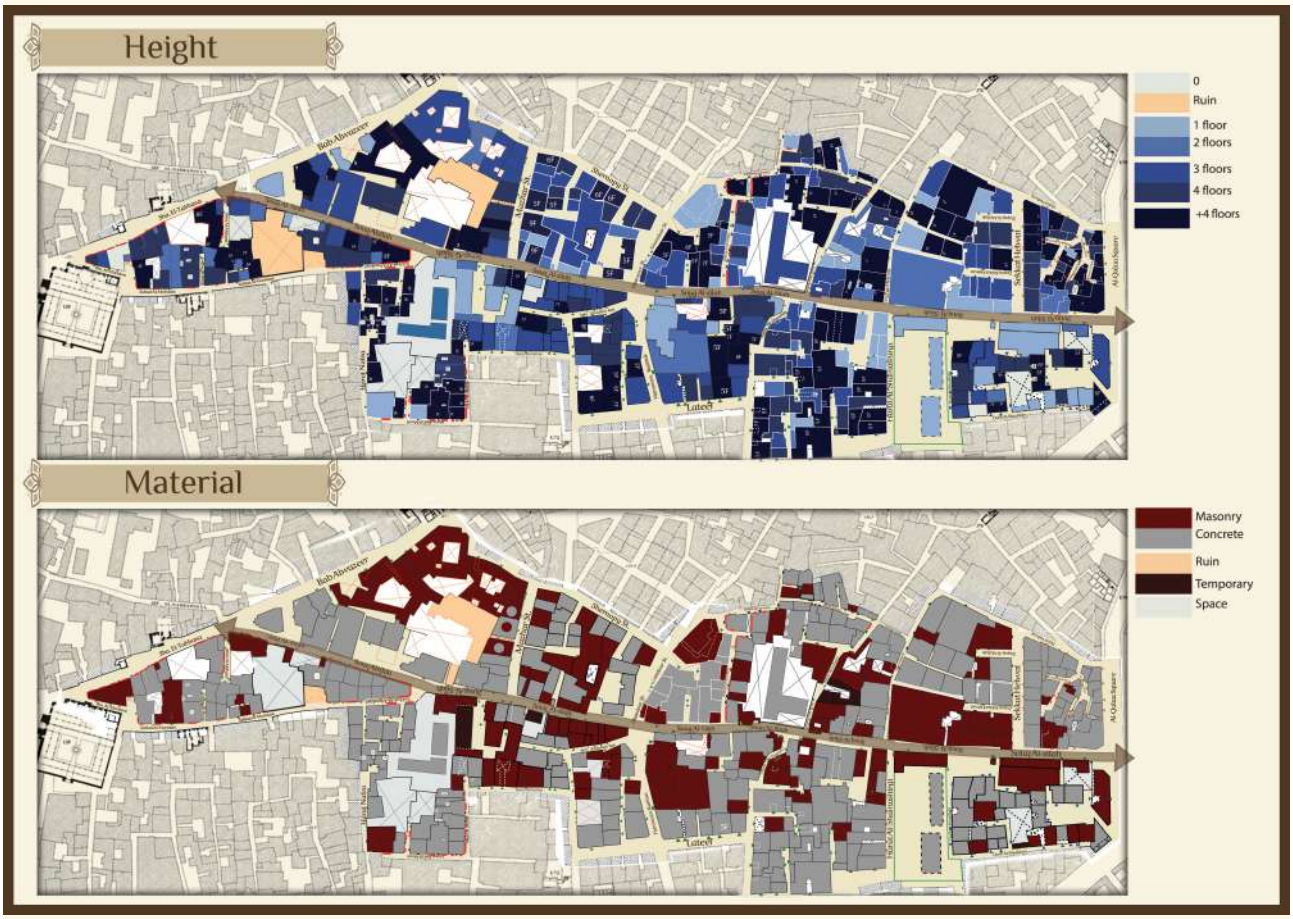


建物の年代判定においては、それぞれの建物の様式によって区分するとともに、1938 年地図との比較からその概要を判別した。1850 年以前のものについては、マムルーク朝やオスマン朝の様式が使われており、観光考古省に登録されたものは地図にその年代を書き込んだ。特に観光考古省に登録されていないものについては、石造持ち送り、壁の石積みなどをその判断基準とした。1850 年から 1938 年については、様式の中にヨーロッパ風の意匠が入り込むこと、1938 年地図の敷地との整合性などを判断基準とした。1938 年から 1980 年については、1 階に切石積みを用いて、2 階以上を鉄筋コンクリートとするもの、入口やバルコニーの様式などから判断を試みたが、70 年代、80 年代の完璧な区別は困難を極める。特に比較的質素な建築においては、1980 年という時代が特に意味を持たない場合もあるように思われ

る。しかしながら、カイロが 1979 年に世界遺産に指定され、1981 年からサダト政権がムバラク政権に変わったことも重要な転機と考え、1980 年に境界を設定し、区分を試みた。

建物の高さについては、階数によって色分けした。ただしモスク等の歴史的建造物では、非常に天井高が高い場合もあり、また近年のアパートでは階高が低いので、絶対的な高さではない。４階以上のものについては地図にその階数を書き込んだ。

躯体の構造材については、組積造 masonry と鉄筋コンクリート concrete、仮設建築 temporary を採用した。組積造は多くの場合、切石造であるが、鉄筋コンクリートを併用しないで煉瓦積みだけのものもこの範疇に入れた。



写真ページについては、地図に記入した番号を振って、それぞれの敷地に少なくとも 1 枚の写真を掲載するようにした。歴史的建造物として重要なものに黄色のマークを、価値のある建物にオレンジ色の囲いをつけた。また、小冊子をまとめるにあたり、特に都市の歴史を考える上で、ニコラスが基盤とした 1938 年地図との比較が重要であると考え、比較の記述、およびその区域の歴史的建築の指摘を行なった。なお。掲載のないエリアについても、同様な調査を行なっており、それらを含めたまとめは、今後の課題である。補足資料として、当該部分のナポレオン地図の情報、およびバイトヤカンの説明を加えた。（巻末資料集参照、サーベイ・レポートの引用はここまで）

現況調査から明らかとなった点は以下の通りである。建物高さは、先述した建築基準と比較すると、4 階以上の建築が 1980 年以後、特に近年の 2011 年の革命以後と目される建築に数多く存在する。建築基準としては明文化されていても、遵守されていないことは明らかである。しかし、本調査は違反建築の摘発のための調査ではなく、あくまでも現状の記録という姿勢を貫きたい。むしろ本調査によって明

らかにしたいことは、例え観光考古省の登録建築であって、その全てが登録されていないこと、また登録に値するような歴史的建造物が、崩壊するがママに残されてしまっていることである。前者は、本事業で住民に今後の活用法を住民とともに考えたハンマーム・バシュタークに明らかである。マムルーク朝にさかのぼる入口だけが登録され、他の脱衣室、冷浴室、温浴室、熱浴室、焚き口の部分は崩壊のままに任されている。さらに焚き口部分は、その上階にいわゆる一時的な部屋が作られており、貧しい人々がゴミ処理等をしながら、トイレも共同で暮らしている。こうした荒廃は、後者の未登録の場合にも指摘できる。調査地域では、とりわけ 1938 年地図に大敷地区分で表された敷地で、部分的に古い建造物が残っている場合にも、同様な状況を数多く指摘することができ、大きな問題点であることを指摘したい。

もう一つ、都市組成の遵守／逸脱という点での知見も得られた。建物の建て替え等は、所有者ごとに行われてきたようである。20 世紀初頭からのおそらくエジプト共和国成立くらいまでは、巨大規模敷地にグリッドでの開発が、スーク・シラーハ通りのハンマーム・バシュタークの南側バイトヤカンの東側で見られ、これはむしろヨーロッパ的な要素が入ってきたものとして今では歴史的存在になりつつある。ナーセル時代には国立アパートの建設や、主要通りのセット・バックが見られると同時に、1980 年代頃までは大規模敷地の開発に、袋小路が用いられていた点は興味深い。20 世紀前半のように巨大敷地の開発がおこらずに、所有者ごとの開発のために生じたのかもしれない。しかしながら、21 世紀になると敷地を統合して、巨大なアパートメントを建設する事例も見られ、この状況が続くと、歴史的都市組成は取り返しのつかない状況に陥っている。

何度も述べたことではあるが、カイロ旧市街の都市遺産としての蓄積は、数百年をさかのぼる建築物に加え、その街路網の古さにある。歴史建築の面する通りが、ほとんどそのままの形で残っているのである。それは、200 有余年をさかのぼるナポレオンの詳細地図によっても証明される。

しかしながら歴史の経過とともに、都市の運営も変化し、人口が増加し、さまざまな不具合が生じていることも確かである。歴史をもとに戻すことはできないが、歴史の経過としての現在を記録し、そこから何かを学び取り、未来への手立てとすることは可能なのではないだろうか。未来のスーク・シラーハが、その歴史の刻印をどこかに維持し、そこに住む人々が誇れる街になってほしいと切に感じている。

なお、残念なことではあるが、本調査の期間中、スーク・シラーハの近傍ダルブ・ラッバーナ（牛乳屋街）では、世界遺産のコアゾーンにあるにもかかわらず、登録歴史的建造物をのぞいて全ての住宅や街路が撤去された。このような乱暴な開発は、今後再考せねばならない点であることを強調したい。

コーカリアーン

スーク・シラーハ通り

ルカイヤ・ドゥドゥ

■３．住民ワークショップ

①趣旨と全体の流れ

リビング・ヘリテージという生きる都市遺産の保全に対して住民自らの介入を推進するために、「２．検討　①スーク・シラーハと保存案対象建物」で紹介した 6 つの対象建物に対して、住民がなにを必要としていて、どのような使い方が望まれるのかという点を、住民に尋ねることを目的として行なった。オンラインを用い、日本側からはコメントを行い、議論の深化をめざした。住民たちが自分自身の希望を述べることは、まちづくりに関与しようとすることをあらわすと判断できると考えられる。

バイト・ヤカン周辺の住民を集めてバイト・ヤカンにて開催、1月8日女性、1月9日男性、1時から4時

なるべく回数を増やして、住民の意見を聞く。住民とは、スーク・シラーハ全体を対象とするわけではなく、トヨタ財団事業以来のバイトヤカン周辺に作られたコミュニティで、今回は男性と女性を別途考える。彼らの傾向として、男性は伝統的木工業従事者が中心で、女性は就学期の子供を抱える人が多い。

話し合う点、

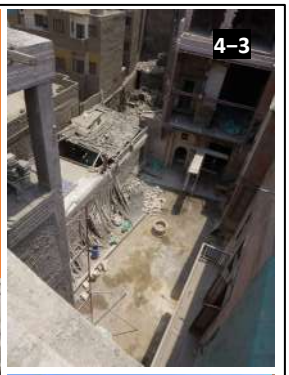
１）今までのプロジェクトを振り返り、現在の問題点や良いところ、物語（無形遺産の収集）
２）サビール・クッターブなど現在利用されていない歴史的建造物の活用方法、特にサラーがツーリストインフォメーションセンターに提案しているマンジャク宮殿の使い方
３）スーク・シラーハに必要とされるインフラや施設等
４）みんなの思い描く未来のスーク・シラーハとは
５）住民目線で木工業の組合の在り方
６）実際の事業がどこから始めて欲しいか

日本人協力者および関心のある人にオンラインで公開、アラー氏、サラー氏、および調査協力者（イマード、ファーリス、ハーガル、ファーティマ；建築家）がファシリテーターとして参加

成果物としては住民から集めた情報、歴史情報を盛り込んだビジュアルな地図（アラビア語、英語）、ワークショップ自体の記録

エジプトの場合、日本の商工会や町内会のようなコミュニテイがないので、コミュニティ概念自体が異なる。住民ワークショップは、参加する人々が、面白そうだという意識を持つことが重要で、それがコミュニティ形成にあたる。

この基盤となったのは、筆者らが推進してきたバイトヤカンでの住民との活動である。重要な点は 2016 年から 2018 年に行った一連のワークショップ、さらに続けて現在でも開かれている女性と子供たちのワークショップ、あるいは木工業者の訓練所などの設営を経て、バイトヤカンを中心にコミュニティが形成され、みんなの場所、自分たちの場所として認識できるようになったという点である。



ヤカン邸　一部は17世紀に遡る住宅
トヨタ財団応募　2016年5月～2018年4月 「歴史的カイロにおいて歴史的建造物と伝統的居住様式を軸として持続的コミュニティを考える」
Alaa Habshi　29回のワークショップ女性+子供→男性
現在も草の根支援の職人訓練所の建設
Ola 主催の女性と子供のワークショップを持続中
WSを機に、コミュニティ形成、みんなの場所
https://whc.unesco.org/en/canopy/cairo/

これを応用すれば、もう少し広い、スーク・シラーハ通り、あるいはダルブ・アフマルを、自分たちの遺産として認識し、住民参加のまちづくりへとつなげていけるという前提のもとで進めた。

1 月 8 日に女性、1 月 9 日に男性という形で進めた。女性と男性に対し別なワークショップを設定したのは、女性たちは男性が一緒だとなかなか本音で話し合えないという、イスラーム圏のジェンダー状況を配慮したものである。これは、従来のワークショップで身につけていたことであった。また、この地域の男性は工房に勤務あるいは経営の木工業者が多いことから、休日である日曜日が集まりやすいという事情を勘案したものであった。両日とも、バイトヤカン一階のホールに 2 つの大きなテーブルを設置し、数名ずつの 2 つのグループに分かれ、それぞれに住民の考えを建築として解釈するファシリテーターが二人ずつつく形で進めた。カイロ側日本人グループが、スーク・シラーハの地図に 6 つの建物とその特徴的な写真を貼り付けた台紙を準備し、そこにファシリテーターが付箋紙や直接の書き込みで住民の希望を書き出していくというスタイルをとった。ファシリテーターは、ダルブ・アフマルで長く保全に取り組む、建築家で大学教授のサラー氏とアラー氏の他に、現況調査をともに行った 4 名の建築家たちに依頼し、事前に連氏執筆の「保存まちづくりと住民参加のファシリテーション—エジプト、保存まちづくりの参考資料—」の英訳に目を通してもらった。

ワークショップはエジプト側および日本側のスタッフ紹介の後に、連氏が日本における住民参加のまちづくりを紹介し（本章の②に収録）、サラー氏とアラー氏からのダルブ・アフマル、スーク・シラーハ、歴史的町並みについての解説があった。筆者からサビール・クッターブやハンマームについて昔の建物機能の説明と、新たに考えられるような機能の紹介を試みた。新たな活用法として、以下にその写真を添付するが、伝統的喫茶店、手工業品売り場、土産物店、カフェ、運動クラブ、伝統的公衆浴場、美容室、共同洗濯場、共同焼物窯、共同調理場、共同パン竈、幼児塾、小展示場、図書館、コンピューター・カフェ、組合事務所、歴史博物館、小劇場、コンピューター教室、コミュニティ集会場、貸事務所、手工業展示場、旅行者センターなどを具体的事例として提示した。

これらを印刷し、ハサミで切って台紙に貼り付けることもできるように試みた。女性たちにとっては、この方法が親しみやすかったようである。

مطعم يعيد استخدام الحمام التقليدي

مكتب البيع المباشر للحرف اليدوية

حمام تقليدي

مقهى

بقعة بيع النجارة مكان

نادي رياضي

صالون جمالي

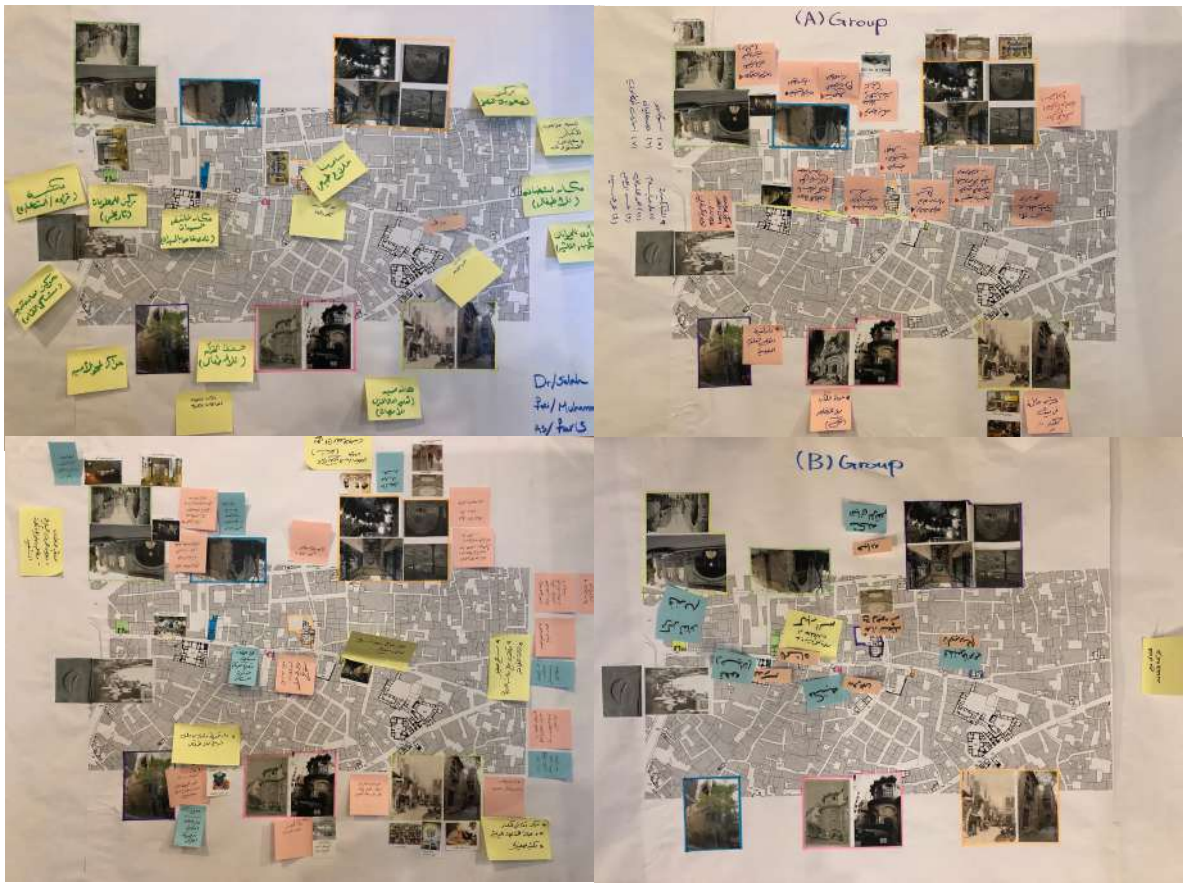
مغسلة مشتركة

فرن مشترك لإنتاج الفخار

مطبخ مشترك

فرن الخبز المشترك

発表の後に、グループ・ディスカッションに移り、ファシリテーターがそれぞれのグループの司会進行をして、台紙に記入を行った。40 分ほどの討論の後に、それぞれのグループのファシリテーターと代表者が自分たちのグループの意見を発表し、それに対して日本側からコメントを行い、さらにアンケートを記入してもらった。下図は、それぞれのグループの意見を書き込んだ台紙である。



1 月 8 日女性住民の提案　A、B グループ　　1 月 9 日男性住民の提案　A、B グループ

ファシリテーターとしてのアラー氏とサラー氏の説明については、本章の③で、それぞれのグループの結果およびアンケート結果は④で、日本側専門家のコメントと感想は⑤で詳述する。

従来のワークショップでも感じたことであるが、住民たちは自分たちの意見や疑問を伝えることにためらいはなく、活発な会話や議論が交わされる点は、エジプトの利点であると思う。女性の場合は、和気藹々と新たな利用についての希望のグループディスカッションが本音で進んだのに対し、男性の場合は道徳、近頃の若い子たちの逸脱した行動、ゴミやトゥクトゥクなどの建前としての問題点が議論されていったのは、対比的であった。女性たちはワークショップをみんなの場として楽しんでいたようだが、むしろ男性たちは、自分の意見を通したいという側面が目立ったように感じた。男性住民は、自分の殻が硬いようで、新たなものに躊躇を感じるのに対し、女性住民は新規プロジェクトに積極的で自分たちの住む地域をよくしていきたいという意欲に満ちていた。

1 月 8 日女性住民のワークショップ　　1 月 9 日男性住民のワークショップ

後述の「■６．オンラインシステムについて」とも重なるかもしれないが、ここでは、エジプト側で生じたオンラインの状況と問題点について指摘したい。住民参加のワークショップについて、筆者はすでに経験済みであったが、会場を用いて日本とのオンライン開催ということで、さまざまな新たな困難が生じた。まず、カイロ旧市街でのネット接続ということで、安定したネット環境を保持することができずに、ネットの繋がり方の不具合が何度か生じた点がある。また男性ワークショップの日には、1 時からの突然の停電で、開始時間が 1 時間余りも遅れるというハプニングがあった。Zoom の同時通訳機能を用いて、日本側とエジプト側を繋ぎ、エジプト側では基本的にはアラビア語で行うこととしたが、会場の声を zoom のマイクがうまく拾えていなかったと同時通訳からの指摘があった。カイロ側ではノートパソコンを２台準備し、一台をホストとし、もう一台は通訳を日本語に切り替え、確かめながら行った。また、会場での臨場感とオンラインの向こうとは、かなりの温度差があるのではないかと感じた。日本側の意見を伝える場合も、ファシリテーターとしての建築家には理解されていたと思うが、住民たちにとってはやはり遠い世界のことと感じられている節が見当たった。むしろファシリテーターと日本側の事前および事後の議論を充実させることが重要であると思われる。

・ワークショップの計画

■趣旨：シーク・シラーハのイスラーム建築と街の良さを住民と共有し、6 つの対象建物のコンサベーションにおける『何が問題で、何を求めるか』、このエリアに何が必要か、の意見を聞く。日本側からはコメントを行う。これらはこのエリアと 6 つの歴史的建物のリノベーションデザインの材料になる。
■日程・方式→ハイブリッドオンライン開催、（会場はグループ配置）
・第一回（1 月 8 日 13～16 時、日本時間 20～23 時）女性
・第二回（1 月 9 日 13～16 時、日本時間 20～23 時）男性
※2 時間ワークショップ、1 時間は食事会、
■役割分担
・カイロ側：深見（司会進行）檜山と柏木（ﾎｽﾄ PC、ｶﾒﾗ）　※通訳とは ZOOM で繋げる。
　説明・ﾌｧｼﾘﾃｰﾀｰ→サラー、アラー（8 日）、ﾌｧﾘｽ（9 日）、記述助手→ﾌｧﾘｽ、ﾊｰｶﾞﾙ、ﾌｧｰﾃｨﾏ、ｴﾏﾄﾞ
　日本側への説明助手→ｻﾌﾞﾘｰﾝ、ｻﾐｰﾙ、
・日本側：連（WC 説明、ｺﾒﾝﾄ）、松村（ｻﾌﾞ PC）、コメント→布野、岡田、磯野、荒牧、宍戸
■タイムスケジュール
※準備 12:00～（19:00～）会場セッティングと機器テスト
（A、B,2 つのグループ配置、テーブルの中央に台紙とポストイットとサインペンを置いていく
　会場の正面に、ﾎﾜｲﾄﾎﾞｰﾄﾞ 1 台、ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾀｰ、ﾏｲｸ、ｽﾋﾟｰｶｰ、ｽｸﾘｰﾝ、ﾒｲﾝﾊﾟｿｺﾝ、ｶﾒﾗ、ﾋﾞﾃﾞｵｶﾒﾗ）

スタート 13:00～（21:00～）
① **挨拶とスタッフ紹介**（深見）5 分　　※本日の目的、全体の流れ、カイロ側スタッフ紹介
② **日本側スタッフ紹介とワークショップ説明**（連、PPT 利用）10 分※住民参加の建築まちづくり事例
③ **スーク・シラーハへの思い**(サラー、アラー、PPT 利用）10 分※このエリアを良くするキーについて
④ **６つの歴史的建築の特徴、期待される利用の説明**（深見）5 分
13:40～
⑤**グループディスカッション**（40 分）(各ファシリテーターが司会進行)※助手は適宜日本側に状況説明
・参加者自己紹介　　（助手は台紙の上部に、参加者、ファシリ、助手の名前を記入する）
・6 つの建物について順番に、質問や会話をリードして、順に指名し、意見を聞く形で進める。(助手は住民の意見をポストイットに記入して、適切な位置に貼る。※1 枚に 1 つの意見を記入）
※住民から質問があれば応える。※使い方の事例写真を準備しておき該当するものを貼る。
14:20～
⑥**グループ発表**（15 分）→7 分×２グループ（A,B）
・ファシリテーターと住民 1～2 名で発表する（住民はファシリテーターが指名する）
※深見さんが司会進行を行い、各発表後に少しコメントをする。
14:35～
⑦**日本側からのコメント**（30 分）→6 分×5 人
・布野、岡田、磯野、荒牧、宍戸、連
※深見さんから日本側に振っていただき、連が司会をして順に指名していく
15:00～
⑧**まとめ**（5 分）深見
（全体まとめ、これを元に更新案を作成する、３月の WMF 共催ワークショップで更新案発表をする、アンケート説明）
〇アンケート
（①本日の WS：良かった、普通、良くなかった、②興味のある対象建物に順番付け、③自由記入）
※助手がアンケート用紙とサインペンを参加者に配る
〇食事会　（15:10～16:00）※ﾚｺｰﾃﾞｨﾝｸﾞ

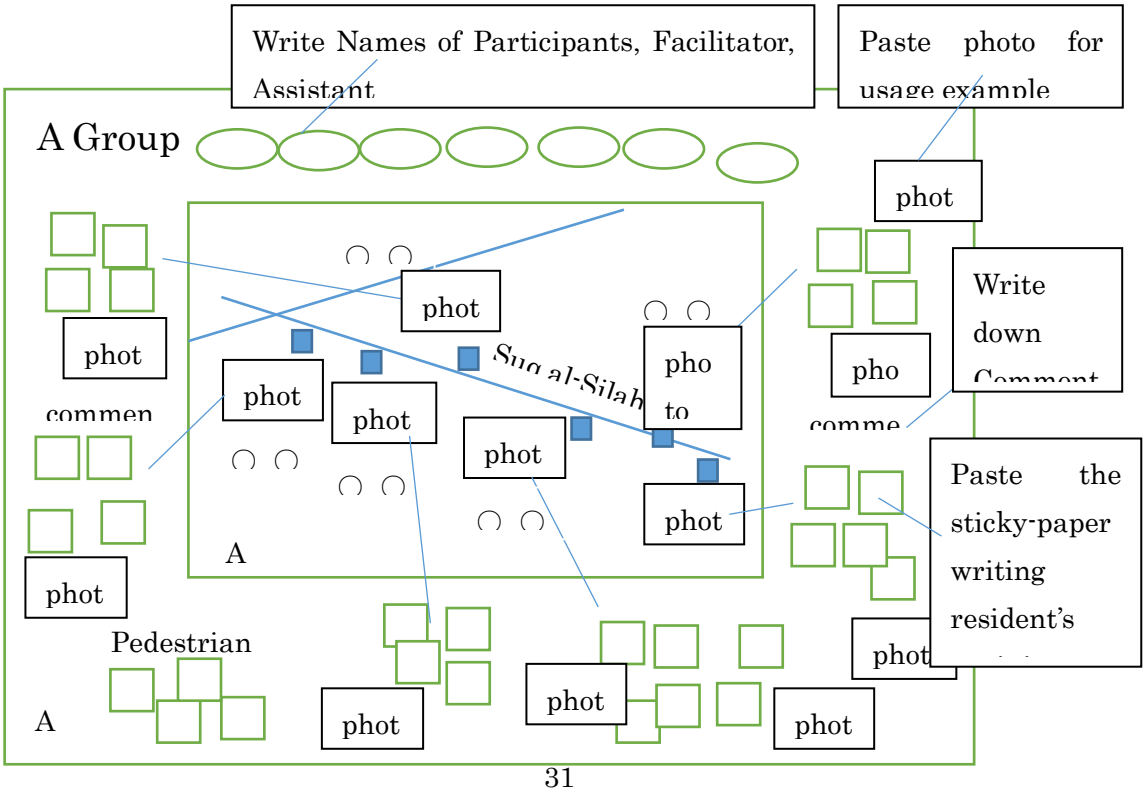
スーク・シラーハ通りと 6 つの歴史的建築物		
スーク・シラーハ通り Souq al-Silah		マムルーク朝（1250～1517 年）およびオスマン朝（1517～1805 年）の建造物が残る通り。その意味は武器市場通りで、商館の遺構も多い。
マンジャク宮殿（邸宅） Palace of Manjak Silahdar		1346 年建設の武将マンジャクの邸宅の門。彼の職位は武器司だったので、ファサードのスパンドレルには刀の紋章が浮き彫りにされる。
公衆浴場（ハンマーム） Hammam (Amir) Bashtak		1341 年武将バシュタークが建設した公衆浴場入口が残る。背後にはオスマン朝期の、伝統的な風呂建築が荒廃した遺構の状態で残る。
サビール・クッターブ（イルゲイ・ユーズフィーモスク附設） Sabil Kuttab attached Mosque of Ilgay Yusufi		1373 年武将イルゲイが建設したマドラサ（イスラーム法学院）に付設されたサビール・クッターブ（給水所・寺子屋）。通りの角に位置している。
サビール・クッターブ・シナン・パシャ （ウィカーラに附設） Sabil Kuttab Mustafa Sinan attached Wikala		1630 年に商館（ウィカーラ）に付属する形で建設され、現在 1 階の給水所とその脇の街区門が残る。2 階には寺子屋（クッターブがあった。
サビール・クッターブ・ルカイヤ・ドゥドゥ Sabil Kuttab Ruqayya Dudu		1761 年に若くして亡くなった娘ルカイヤのために母が建設した美しい給水所・寺子屋。カーブを描くファサードと上階の軒の形が特徴的である。
サビール・クッターブ・ハサン・アガー・コーカリアーン Sabil Kuttab Hasan Agha Kokalian		1694 年にコーカリアーンが建設したもので、本来は商館、邸宅（一部はバイトヤカン）と同時に建設された。角部にたつ典型的サビール・クッターブ。

・マップ、台紙準備の打合図

【スーク・シラーハ通りと 6 建物マップ】

【台紙準備の打合図】

■Basic Paper（Results）



② 住民参加、日本の事例紹介

連健夫、JCAABE 代表理事

住民参加のまちづくりの事例です。住民参加のまちづくりの良さは、「住民が街の良い点と問題点を考える」「良い点を活かし、問題点を改善する提案ができる」「それを専門家と共に実行する」「自分の街を大切にする気持ちが生まれる」、日本では都市計画法に住民参加が位置づけられています。これは赤坂通りまちづくりの会の街歩き、良い点を問題点を考えるワークショップです。

街の良い点と問題点を見つけます。

会場に戻り、グループに分かれて話し合い、提案をまとめて、発表、共有します。

提案の実践です。落書き消しワークショップ、お花植え。

落書き消しワークショップ
Graffiti,erasing workshop

お花植え
flower planting

道路の更新案作成
Create renovation
plan for the street

通りのリノベーションのデザイン案を考えました。

次は、建築設計における利用者参加の事例です。これは、隠岐の島海士町の農林水産物可能施設です。

隠岐の島は日本のこの辺りにあります。既存の建物が手狭で、増築をしたプロジェクトです。ハーブティーやクッションなどが手作り特産物として作られています。

建築設計における利用者参加の事例
（隠岐の島、海士町、農林水産物加工施設）
A case study of user participation in Architectural Design. Ama-cho,Oki Island. Agricultural and Marine Products Processing Facility

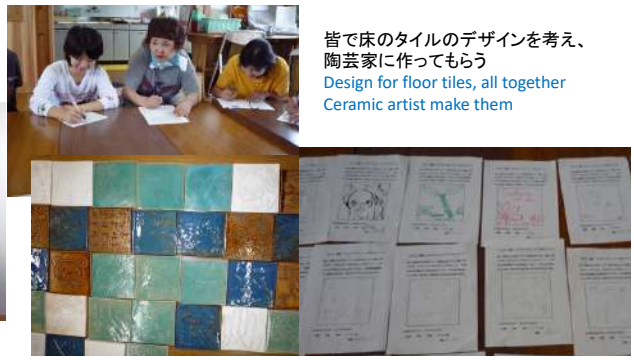
メンバー
（利用者）
で新しい建物について話し合う
Discuss about new building
By the user

夢をコラージュで表現
Express dreams
By collage

コンセプト：Concept
手作りと交流を楽しみ、夢と希望が感じられる場
Place for enjoy handmade and communication
To feel dream and hope
→人を迎え入れる建物
Architecture that welcomes people

メンバーである利用者で、新しい建物について話し合い、夢のコラージュを作りました。そこから、コンセプトは、手作りと交流を楽しみ、夢と希望が感じられる場、人を迎える建物としました。
3 つのコンセプト模型をつくり、投票で選びました。

3つのコンセプトモデルを創り、
投票で選ぶ
Create three concept models and vote on them



皆で床のタイルのデザインを考え、
陶芸家に作ってもらう
Design for floor tiles, all together
Ceramic artist make them

皆でタイルのデザインを考え、陶芸家に作ってもらいました。
施工も利用者が参加しました。塗装やウッドデッキ作りです。

施工での参加
Participation
in construction

完成！
Completion

完成です。
手作り特産品のショーケースができ、使いやすい建物になりました。

手作り品のショーケース
Show-case for hand made products

使いやすいスペース
User friendly space

以前は、建築設計やまちづくりは、
専門家だけで行っていました。
In the past, architectural design and town planning were done only by architects,as specialists.
まちづくり←住民が参加、
Town Planning ← Citizen Participation
建築設計←利用者が参加
Architectural Design ←User Participation
住みやすい街、使いやすい建築になります。
Create livable town and user-friendly architecture
皆さん、本日の住民参加のワークショップ楽しんでください！
Please enjoy citizen participation workshop today!

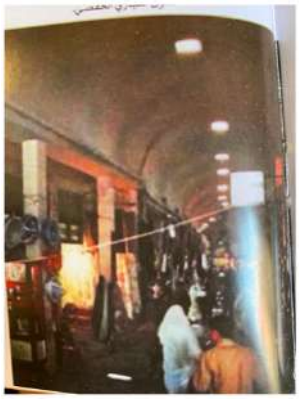
以前は建築設計やまちづくりは専門家が行っていました。そこに、住民や利用者が参加することによって、住みやすい街、使いやすい建築ができるわけです。皆さん、本日の住民参加のワークショップ是非、楽しんでください。

③　更新案の思い（サラー・ザキー）

1 月 8 日女性住民に向けてのスピーチ

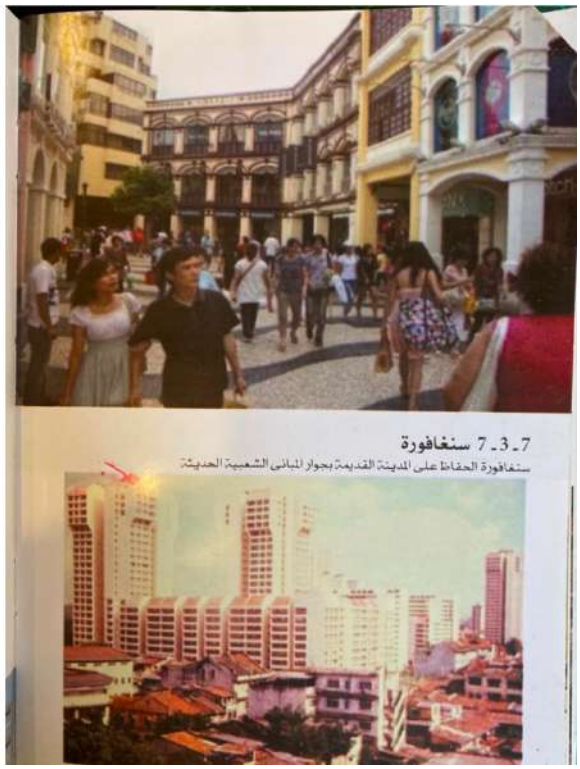
今日は、参加させていただき、有難うございます。エジプト以外の外国、インドもアメリカでも似たような住民参加のまちづくりのワークショップという事例があります。今回の場合と異なるところは、多くの場合すでに事業が決定して住民の意見を集めるためにワークショップを開催します。今回の場合は、住民の意見を集めて、政府の責任者に実際の行動を起こしてもらおうと目論んでいます。ですので、今日はスークシラーハに住んでいる人たちから意見を聞きたいと思います。

私はスーク・シラーハとバーブ・ワズィールで、何年も仕事をしてきました。この写真は中国のものなのですが、この写真に似たような、歩行者道路という事例をスーク・シラーハでも試してみたいと思い、実現は難しいかもしれませんが、期待しています。上の写真は中国のマカオですが、マカオも歴史的な街でスーク・シラーハに似ています。マカオではこの道を歩行者専用道路にして、人々が好む店、レストラン、喫茶店などゆっくり座ることができる店を用意しました。あなたがたの住んでいるスーク・シラーハには、ゆっくりする場所はありますか？歩行者道路にしたほうが良いでしょうか？



右の写真はモロッコのマラケシュの写真で、ここも歩行者道路にしてあるのですが、スーク・シラーハよりも狭い道で、古い道ではなく新しい道です。

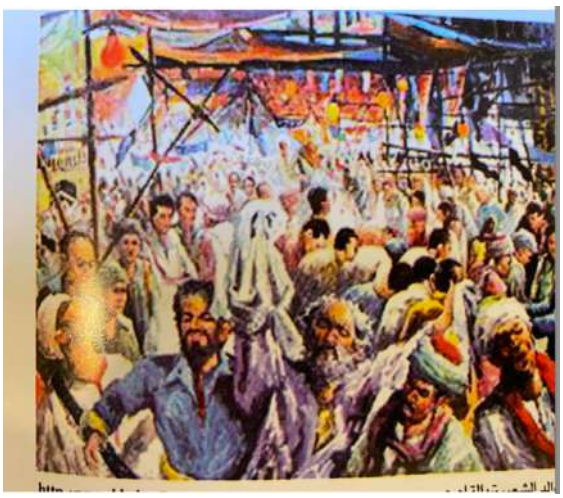
その横もモロッコのスークで天井が付いている歩行者専用道路です。外国人はこのような道が好きで、混み合っていて狭い道でも、車がいなければゆっくりと買い物をします。



右の写真はシンガポールですが、中国にも似たような場所があります。このエリアは観光客用のエリアで、住民も好んで散歩します。アーケードがある場所、カイロにもアーケードがある場所はありますね。ムハンマド・アリー通りのアーケードがそうですが、両側通行で交通事故がおこりやすいです。シンガポールの写真をよく見るとアーケードだけでなく路面も白と黒で工夫が凝らされています。

シンガポールで、街の道路改良のミーティングに国際建築家連盟の一人として参加しました。今日と同様に建築家と住民を集めて、道を改良するためにみんなの意見を聞くというミーティングでした。しかし、私

のようなエジプト人の建築家の意見までも聞きたいという点は素晴らしいと思います。建築家だけでなく、住民も参加していたので、今回のミーティングに似ていると思うととても、嬉しいです。



右の絵は、エジプト人がマウリドのお祝いにどのような活動をするのか、伝統的な踊りや屋台などを表している絵です。カイロには、人々の集まる道路の空間がありました。

右下の写真はトルコのニコシアの街です。この写真を見るとカイロの家と似てますね。この建物は 300 から 400 年前の建物ですが、住民がとても綺麗にしているので、観光客に好まれます。カイロにも同じような古い家がありますが、綺麗に整えられていません。

皆さんに聞きたいのですが、あなたの家は修復しなくても大丈夫ですか？家は綺麗に保存されてますか？階段やトイレはどうですか？

スーク・シラーハ通りが歩行者道路になって欲しいですか？賛成している人、反対している人もいるでしょう。トゥクトゥクやタクシーが必要な人もいるでしょう。

（会場から→ほとんどみんなが賛成しています。）

このスーク・シラーハ全部でたった 250m だから、それほど長い道路ではないので、車が入れなくても並行するバーブ・ワズィール通りに車を通せます。歩行者道路にすれば、ゆっくりと外国人も色々な歴史的建築を見学できます。

（会場から→プロジェクトが道を綺麗にするよりは、住民自身が綺麗にすれば、きっと長持ちします。）

その通りです。バーブ・ワズィールのプロジェクトでは住民にゴミを拾ってもらいました。あなたのおっしゃることは正しいです。みんなで頑張りましょう。

1 月 9 日　男性住民に向けてのスピーチ

スーク・シラーハとバーブ・ワズィールの間で我々がやったことについてお話しします。地図をあげましたが、左端がスーク・シラーハの通りで、右端がバーブ・ワズィール通りです。

次のページの最初の写真のように、建物の状態はあんまり良くなかったです。環境があまり良くなく、壁が弱く、壊れていました。今にも壊れそうなものもありました。それで我々は色々と手を施して壁の修復をしました。周りには伝統的な場所もあり、我々はそれらを元に戻したいと思い修復しました。ここ一帯は、200 年前から 100 年前にはとても良好な住宅地で重要な場所でした。そして、多種多様な人人々が住んでいました。木工職人や大工、手作り職人も多かったのです。

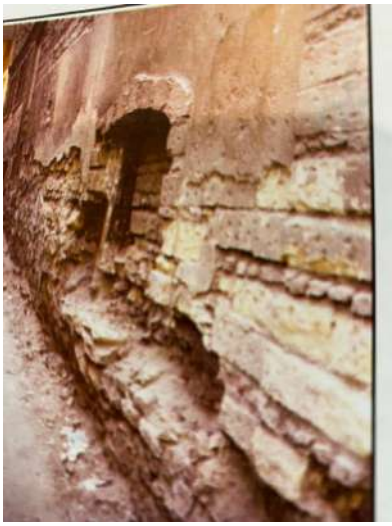
しかし残念ながら、状況が悪化してきて、街はあまり良くなくなってしまいました。しかし、我々は様々な修理、例えば建物に

ペンキで塗って、小さな台所も作って、住民が望んでいる改修を行いました。住民と協力し、住民も修復作業に参加していただきました。これはすごく良い協力関係でした。

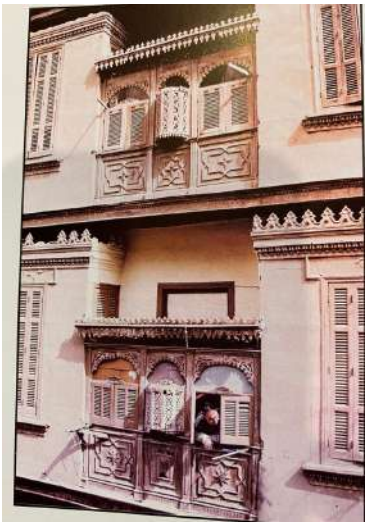
このプロジェクトはバーブ・ワズィールと言う通りにある有名なアメリカン・リサーチ・センターが中心になって行い、この通りの修復はその研究所から費用を頂きました。住民と我々も一緒に協力して作業を行いました。

一番下左の写真はゼイナブ・スッカルの家です。ご覧になっている黒い所はすごく壊されていたところで、住民と協力して直しました。活動全てに住民が参加しています。今日は、このワークショップに参加している皆さんからご意見を聞きたいと思います。そして将来一緒に協力して我々、そして皆さんの夢を叶えられるように努力したいと思います。

スーク・シラーハはご存知の通り、ひどい渋滞があり、環境が悪くなってしまいました。でもこれからみんなで協力して改善することによって、経済も活性化し、歩行者にとっても歩きやすい道になります。改善することが大事だと思います。日本の専門家の皆さんは協力してくださっています。我々みんなで協力してエジプト政府に手紙を出し、我々住民と一緒に協力して地域を改善する提案をしたいと思います。みんなで努力して夢を叶えたいと思います。

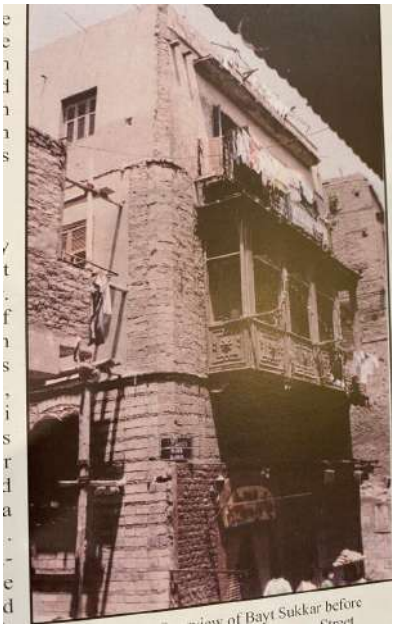


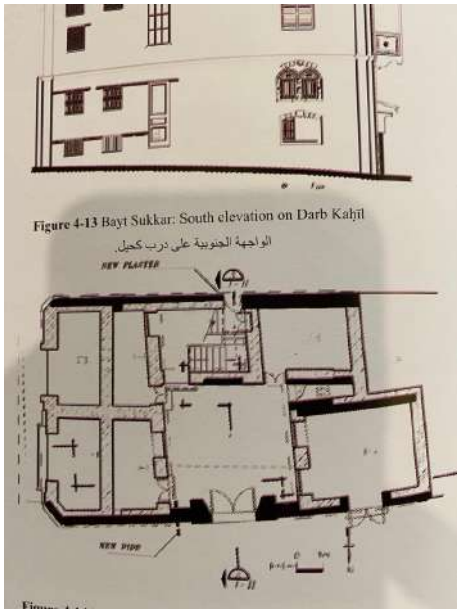
いたんだ基礎



ガンドゥールの家

ハヤーティンの家





ゼイナブ・スッカルの家　修理前　　１階平面図

・更新案の思い（アラー・ハブシー）8 日、9 日

皆さん有難う。私たちのバイトヤカンプロジェクトは皆さんのおかげでうまくいきました。スークシラーハの住民を使って歴史的住宅再活用の実験をしたような形となりますが、あなたたちがいなければ、バイトヤカンはできなかったでしょう。

日本の 60 年前には、東京近郊にも京都にもスーク・シラーハのような古い通りがありました。スーク・シラーハの方が古いですが、日本の歴史的な通りの 60 年前は、とてもひどい状態でしたが再生しました。このケースから私たちは学ことができます。

日本は 60 年前に発展計画を立てるとき、住民参加をしないといけないことに早く気づきました。住民が計画に参加しないと、途中で反対する、あるいはプロジェクトが終わったのちに、それをサポートしないということがおこってしまいます。ですから、私たちもバイトヤカンを発展させるために、ワークショップを開いて住民に参加してもらっています。特に女性の皆さまには感謝をあらわしたいです。なぜなら、彼女たちのおかげで私たちのアイディアや考えていることを、家族内の子供やご主人に伝えることができました。女性だけに参加せると言われないように、9 日には男性の時間を作りますので、男女みんなが参加したことになります。

サラーさんも私も日本人も、自分の意見を伝えますが、私たちの考えていることはあなたたちの意見と合うのか知りたいです。

今日の私のタイトルは「我々の夢」です。アラーの夢でもなく、・・・・みんなの夢です。この夢のために日本人専門家と協力し、エジプト政府の国際機関とも協力して、この夢を叶えたいと思います。

このバイト・ヤカンは 2009 年に購入して以来、色々な努力がありました。２階には近い将来、図書館がオープンし、カイロの歴史に関する本が置かれます。この家は、ムハンマド・アリーが娘とその夫ヤカン氏にプレゼントした家でした。ヤカンがサウジの戦いから帰った時です。この周辺には一連の邸宅がありましたが、この中庭周りだけが残り、そしてアフマド・サードのおばあさんの所有になりました。アフマドの奥さんはいらっしゃいますか？実は彼女に色々とサポートしてもらいました。アフマドは、この近くで肉屋を営業する人です。アフマドがこの家を持っていたことは幸運でした。彼は私がバイト・ラッザーズを修復したことをよく知っていて、「ここに 2 つのアパートを建設予定なのですが、アラーさんに買ってもらえないですか」と私に尋ねたのです。もしも高いアパートが建っていたら空気、太陽を遮っただけでなく電波も悪くなったはずでしょう。

2009 年から今までのバイトヤカンの修復の変化を見るとだいぶ変わったでしょう。頑張ればできると思われることでしょう。この家の修復自体は私の家族の努力でできたものですが、今バイトヤカンには私たちたくさんの家族がいますので、これからもっと素晴らしいことができるでしょう。ここの中庭や門は社会のものです。オーナーのものだけでなくて、社会、みんなの所有物だと思って、みんなで大切に使うことが社会的役割になると思います。

このような歴史的な場所は再度活かして保存し、社会のみんなで使いたいと思います。バイトヤカンを修復しているときに、深見さんが私に言った言葉で忘れないのは、「コミュニティはこの家の命となる」と言う言葉でした。そして、日本でも大きな家のホールを一つの家族のものではなく、社会みんなのものにしていることを教えてくれました。サラーさんも言ったように道も狭くて、通りにはゆっくりできる場所がないので、こういう場所が必要です。特に女性にはそういう空間がありません。男性たちには喫茶店がありますが。つまり、あなた方がいなければこの家には命はありませんでした。2016 年からここでは少しずつワークショップを始めました。

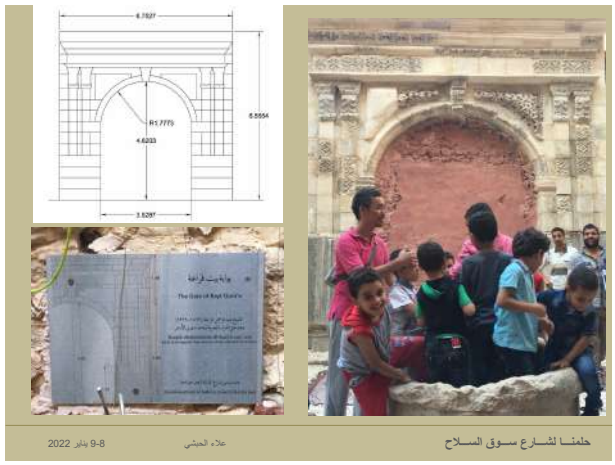
もう一つの目的は、場所の記憶を守ることです。ものを壊してしまうと、記憶から思い出がなくなってしまいます。夏用の映画館を覚えてますか？近くのシェイク・アブドゥル・ラーマン・コッラの家が取り壊された時に、その家の門の石を集めてきました。彼はシェイク・ムハンマド・アブドの学生の 1 人で、アズハルのムフティーの一人という偉人だったのに、彼の家を壊してしまったのです。私たちは保存しようとしましたが、無力で、残骸の 53 個の石を集めてここに運び、このアーチを復元しました。

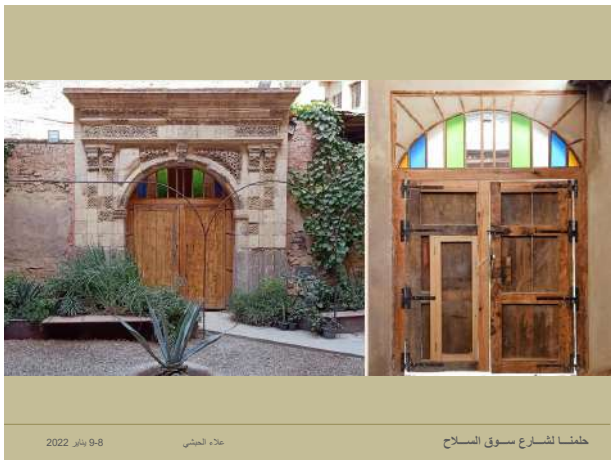
地元のコミュニティのメンバーは、この門が取り壊されていることをすぐに教えてくれました。運んだ石を前に、門が最初に建てられた真の比率を見つけるのに苦労しながら、中庭で再構成しました。

すると、その比率は設計に潜む黄金比であることがわかりました。それは、再建の経験によって、遺産には発見されなければならない教訓があることを示しています。そして、これらの価値をコミュニティや家への訪問者に説明するために、ゲートの隣に設置したガイドボードに由緒を刻みました。

タッバーナ通りの家が壊されて記憶の命を失いましたが、ここで再び命を得たのです。

この門をひらけばその後ろには何があるでしょう？木工職人の工房にしました。つまり、その門に命を授けたというよりは、スークシラーハの住民に経済的な命を与えるという扉を開いたのです。この工房は日本大使館のサポートでできました。これからも色々な希望の扉を開こうと思っています。





もう一つの昔の思い出はスズメです。扉のところにスズメがいたでしょう。前はスズメの声が聞こえなかったのは、緑がなかったからです。環境というのは、人間だけではなくて、人間と自然が混ざった状況であるということから、緑を作る必要があるとかんがえて庭園を作りました。この庭を作ったときにオランダ人にお願いして作りました。ヘルシーなハーブを選んでくれたので、バイトヤカンのお茶を作ることができました。美味しいものを作ることも、売ることもできるでしょう。これを見て、みんなも家の中に緑を作ったらどうでしょう。みんなで行えば、きっと街が緑でいっぱいになるでしょう。

さらにもう一つできたことは、この家を０エネルギーにしたことです。太陽光のソーラーパネルを屋上に並べました。皆さん、この頃の悩みは電気代でしょう。電気の集金が来ると気分が悪くなるのじゃないですか？家計の節約のためにこのアイディアを広めたいと思いませんか？私の場合、産業省に連絡して、自分のお金も使いましたが、省も手伝ってくれました。それにパネルが設置できない皆さんの電気料金を削減するために、余った電気を近隣に提供すれば、より皆さんとのつながりを強化することができます。

バイトヤカンでは10年くらい仕事をしましたが、実は私とサラーさんはこの地域で長く仕事をしていて、ちょうど仕事が始まったのは、20 代の方が生まれた頃です。私たちの夢は、創造できる価値に基づくわけですが、私たちは今どんな価値を持っているのでしょうか？さきほどの連さんの発表の時に、ハーブティーや陶器を作る例がありました。私たちは何ができるでしょうか？私たちにあるのは歴史的建築と鳩？鳩は環境にはあまり好ましくないのですが、何か考えられるかもしれません。経済的に役立つ方法を見つければ、地域はますます良くなるでしょう。エジプトでは昔から鳩を有効に使っていて、トレーニングだけではなく、伝統的で有名な食べ物にも使います。エジプトで昔からやられている様々な方法や手段は残念ながらなくなってしまったものも多いのですが、それらを復活させるなど、歴史を生かしたアイデンティティを保存したいと思っています。我々はアイデンティティを確立し、それを守ることによって、観光客がもっとたくさん来てくれるのではないかと思います。

もう一つの価値を考えるとマウリド（聖者誕生祭）やウスブーア（生まれたて１週間目）のお祝いがあるでしょう。皆さんの生活が歴史的カイロの住民文化に根ざしていることをワークショップで確認し、バイトヤカンの中庭空間をこうしたお祭りに使っていただくことにしました。赤ちゃんが新しいメンバーとして加わったことをみんなに示すことは、赤ちゃんの未来がコミュニティと結びついたことになり、よりコミュニティを強化できるのです。

地域の子供たちや若者のワークショップは、彼らの意識を高めるだけでなく、彼らが未来にとって最高の保存を推進する者となるのです。昔の美しさを学び、その価値について考えます。そして彼らの中で才能のある人たちは、ますます上達していきます。昔の良き日々は終わったという考え方は、彼らのように学ぶ若者がいて、未来の世代が育っていることを感じる時、誤った認識だと気づかされます。

カイロならではの建築的・構造的特徴に 14 世紀のウンム・スルタン・シャアバンのために木製の格子細工があり、優れたデザインと精度が見られます。工房で作成されたコミュニティのデザインが、スーク・シラーハにはあったのです。伝統的な大工もたくさんいます。とても素晴らしいもので価値の高いものだと思います。それらは経済の成長にも影響すると思います、伝統的な大工を活かして経済を活性化することも考えています。

しかし、この頃では需要不足、若い人の職人離れなどから先ぼそりの状況で、職人は数名の名人に限定されてしまいました。一方で、伝統的な工芸品においても、もう少し現代的な歩み寄りが必要です。高い技術を記録、保持することも重要ですが、新たなデザインとの共同、製品の性格による機械の使用、若い技術者の要請など、バイト・ヤカンのアーチの向こうで進みつつある工芸センターは、そこを目指しています。それに先立って国際交流基金の援助で、日本の木工職人とここスーク・シラーハで 1 週間にわたるワークショップを開催しました。

次頁上図はスーク・シラーハ近傍の木工職人の工房の分布図です。ダルブ・アフマルの木工職人組合

を復活させます。組合を上手に作れば、材料を安く買えるし、政府のサポートももらえます。このアイディアは昔からあり、シェイフ・タイーファと呼ばれるリーダーがいて組合を取り仕切っていたので、同じアイディアで復活させるとうまくいくと思います。

私たちの夢のもう一つ、ハーラに命を復活させることです。昔は、大工のハーラ、銅細工師のハーラ、水運びのハーラもあって、地域の特色がありました。私たちのハーラをとり戻したいと思いますが、モダンな形でどのような発展が可能であるのかを考えつつ、ハーラを再構築すること、これが私の夢です。ハーラという住まいのまとまりのお話をしましたが、サビール・ムスタファ・シナーンを知っていますか？その隣にはハーラへの門が残っていますね。

ムスタファ・シナーン、ルカイヤ・ドゥドゥ、コーカリヤーン、去年や一昨年にこうしたサビール・クッターブはとても綺麗に修復されました。でも鍵が閉まっています。私たちがしまっているサビールを使いたいと、行政側に話せばどうなるでしょうか？どのように使いたいですか？例えば木工職人の組合、木工博物館、工芸の学校、そして最後に最初のマンジャク門を展覧会として使えばどうでしょうか？

最後に、上の写真はバイトヤカンに与えられたイクロム ICROM の賞です。みんなで未来を考えて、もっとたくさんの賞をみんなでもらいたいですね。

バイト・ヤカンを中心に話させていただいたのですが、ぜひこれからはみんなで一緒に努力して、スーク・シラーハのすべての地域に、こうした活動を起こすように頑張りたいと思います。ありがとうございました。

④住民の意見
住民ワークショップでの参加者の意見（各グループでの台紙コメントから）

〇スーク・シラーハ通り、全体に関わるもの
　各グループ共、通りの両側の建物の修復が必要とのコメントがあり、修復によってスーク・シラーハ通りをオープンミュージアムにして観光客に来てもらいたいなど、賑わいの創出に関する提案があった。歴史ガイドツアーや手芸を教えるワークショップの開催といったプログラムに関するコメントや、庶民的レストラン、手工芸品の直売場を設けるなど生業に関わるコメントも注目される。交通に関してトゥクトゥクなどによる混雑や停車の問題を指摘するコメントやそれを解決するための歩行者専用道路にするといった提案が、男女とも見られた。ゴミ処理業者を雇って通りをきれいにする、など現状の問題解決のためのアイデアも見られた。
〇宮殿（邸宅）マンジャク・シラーフダール邸
　スーク・シラーハ通りの入口に位置し、観光案内と地域の名所を紹介するセンターが適しているといったコメントが男女ともにあり、また子供向けのオープンシアターや小室の１つを女性の手工芸品のギャラリーといった建築的特徴を活かした提案も見られた。また工芸品を教えるための教室、昔からあった焼き菓子や伝統的な料理が食べられるレストランといったこの地域ならではの提案が注目される。
〇公衆浴場、ハンマーム・アミール・バシュターク
　男女とも、もともとの用途である公衆浴場としての再利用の要望が多い。女性と男性の利用を曜日や時間によって分ける、観光客についても曜日や時間によって使い分ける、というカスタマイズのアイデアがある。興味深いのは、上階をキッズエリアとして改装し、ハンマームで過ごす間に子供を預けることができるようにするという提案や高齢者のためのサウナと理学療法施設というアイデアもある。またプライバシーの工夫や交通サービスへの要望もあった。
〇サビール・クッターブ（イルゲイ・ユーズフィーモスク）
　男女ともイスラーム教を教える学校、コーランを学ぶ学校として再利用するという意見が多い。観光施設としてオープンするという意見と共に、現在、モスクは祈るために使われている、病院が併設されており救急関係部屋としても使われているという情報提供もあった。
〇サビール・クッターブ・シナン・パシャ（ウィカーラに附設）
　男女とも、ゲストハウスやホテルとしての利用や、コーヒーショップを１階に設けるなど観光的利用の要望が多くあった。また小さな貿易センターとし、地域でワークショップを開催して製品を売るといった提案もあった。
〇サビール・クッターブ・ルカイヤ・ドゥドゥ
　男女とも、観光的利用として、レストランやカフェといった人が集まる場、といった要望のみあらず、もともとの用途を捉え、タキヤすなわち通行人へ水を供給する施設、地域で困窮している人へ食料を提供するセンターとしての利用提案が特筆できる。女性からは、女性のためのホスティングエリアといった意見があった。
〇サビール・クッターブ・ハサン・アガー・コーカリアーン
　男所とも観光施設として利用、小さな書店を置く、祈りのために開放といった意見があり、これに加え、男性は子供たちに開放するという意見、女性からは高齢者のための文化センター、イスラーム教徒のための結婚施設、識字教室といったアイデアがあった。

住民ワークショップ意見（女性）A グループ台紙	
スーク・シラーハ通り全体に関わるもの Souq al -Silah	・スーク・シラーハを修復し、オープンミュージアムとして観光に利用する。 ・女性や子供に手芸を教えるワークショップを開催する。 ・手工芸品の直売所を開設する。 ・子供向けの小劇場を開き、古代の民話や地域の歴史を紹介する。 ・状態の悪い建物の撤去・解体、既存建物のファサードを地域の歴史的特徴に合うよう再構築する。 ・撤去解体建物の所有者に適切な代替住宅を提供する。 ・ダルブ・アンシア病院に隣接する画家アフメド・ハラワニ家の調査・修復を行う。 ・スーク・シラーハの両側建物を修復して、オープンミュージアムの観光地として再開する。またこの地域の歴史を学べる歴史ガイドツアーを実施する。 ・スーク・シラーハを交通問題のない歩行者専用通路にする。 ・通りの両側に庶民的料理のレストランをオープンさせる。
宮殿（邸宅）マンジャク・シラーフダール邸 Palace of Manjak Silahdar	・完全なかたちで再開し、子供たちのための公園への入口として修復する。 ・スーク・シラーハのランドマークとして、昔にはあった焼き菓子や伝統的な食品を販売する小さなレストランをオープンする。 ・小室のひとつには、住民の手工芸品/ハンドメイドの展示を含める。 ・園内には、子供向けのオープンシアターを設ける。 ・観光案内と地域の名所を紹介するセンターとして開設する。
公衆浴場ハンマーム・アミール・バシュターク Hammam Amir Bashtak	・観光施設や治療場として再オープンし、修復して住民や観光客に利用されること。 ・女性のための美容サロンを開く。 ・直接行ける交通便を提供する。 ・住民（男性・女性）のための利用日、外国人観光客のための利用日を設定する。 ・ポピュラーな浴室として再利用。
サビール・クッターブ イルゲイ・ユーズフィー（モスク附設） Sabil Kuttab attached Mosque of Ilgay Yusufi	・完全なかたちで修復し、イスラーム教を教える学校として再利用する。 ・コーランを覚える家として使用する。 ・観光施設としてオープンする。
サビール・クッターブ・シナン・パシャ（ウィカーラに附設）Sabil Kuttab Mustafa Sinan attached Wikala	・完全なかたちで修復し、観光施設としてオープンする。 ・ゲストハウスとして使用する。コーヒーショップを 1 階に設ける。 ・部屋を修復し、ホテルの客室として貸し出す。
サビール・クッターブ・ルカイヤ・ドゥドゥ Sabil Kuttab Ruqayya Dudu	・完全なかたちで修復し、観光施設として再利用する。 ・タキエ（イスラーム神秘主義宗教施設）、あるいは通行人へ水を提供する施設として再利用する。 ・地域で困窮している人へ食料を提供するセンターとして利用する。（昔の使われ方の復活）
サビール・クッターブ・ハサン・アガー・コーカリアーン Sabil Kuttab Hasan Agha Kokalian	・完全なかたちで修復し、観光施設して再利用する。 ・小さな書店を設ける。 ・高齢者のための文化センターとして利用する。

住民ワークショップ意見（女性）B 台紙	
スーク・シラーハ通り全体に関わるもの Souq a l -Silah	・今のストリートの様子を見て、恥ずかしくなることもある。 ・私の息子は、車のせいで路上で事故にあった。 ・私の家のオーナーは、高層ビルを建てるために、私の家族を追い出したがっている（彼らは月 4 エジプトポンドで部屋を借りている）。 ・犬や羊のような動物が通りを行き交い、私や家族を悩ませている。 ・学校はとても混雑している。 ・私は書くことも読むこともできません （20 歳女性） ・スポーツクラブ、体育館 ・芸術的才能の開発センター ・母親たちに家庭でできるリサイクルの方法を教える(女性ワークショップ) ・ゴミ問題を解決する ・スーク・シラーハで電気自動車を使用する
宮殿（邸宅）マンジャク・シラーフダール邸 Palace of Manjak Silahdar	・再開と開発、門の手入れをする。 ・ゲートの入口を歴史情報センターにし、スーク・シラーハ地区への案内をする。 ・スーク・シラーハのベストスポットの紹介とそれに関する情報を案内する地図を配布する。 ・バザールとしてスーク・シラーハの住民が作ったアラベスクや手工芸品などの製品を展示するコーナーを作る。 ・観光名所として利用する。 ・屋根があると、リファーイー・モスクとスルタン・ハサン・マドラサの絶好の眺めが楽しめるストランになる
公衆浴場 ハンマーム・アミール・バシュターク Hammam Amir Bashtak	・一般的なハンマームとして再開する。 ・女性のための日と男性のための日を設定する。 ・上階をキッズエリアに改築し、ハンマームで過ごすまで子供を預けることができるようにする。 ・高齢者のためのサウナと理学療法がのぞまれる。
サビール・クッターブ イルゲイ・ユーズフィー（モスク附設） Sabil Kuttab attached Mosque of Ilgay Yusufi	・モスクは今も礼拝するために使われている。 ・男性と子供のためのコーランとイスラーム教のクラスを追加する ・ハラムリク（禁制の場所）として、女性のためのイスラーム学校にし、子供と一緒に学べるようにする.
サビール・クッターブ・シナン・パシャ（ウィカーラに附設）Sabil Kuttab Mustafa Sinan attached Wikala	・小さな貿易センターとしてウィカーラを再開し、同じ地域でワークショップを開催し、その製品を展示する。
サビール・クッターブ・ルカイヤ・ドゥドゥ Sabil Kuttab Ruqayya Dudu	・女性のためのホスティングエリアとして開発する。 ・小さなレストランとカフェテリアを備えたエンターテイメントエリアとして、女性が楽しく過ごすために集まる場所とする。男性はサッカーを見ながら集まるアフワ（伝統的喫茶店）がありますが、私たちには自由によれる場所がない。 ・女性の名前なので、同じ名前にする。
サビール・クッターブ・ハサン・アガー・コーカリアーン Sabil Kuttab Hasan Agha Kokalian	・礼拝のために再開する。 ・子供のための特別なエリアを持つ大きな図書館を持つ。 ・イスラーム教徒の結婚の儀式のための場所とする（كتب الكتاب）. ・識字のためのクラスを持つ.

住民ワークショップ意見（男性）A 台紙	
スーク・シラーハ通り全体に関わるもの Souq a l -Silah	・スーク・シラーハ をオープンミュージアムとして修復・再利用し、観光客にアピールする。 ・女性や子供に手芸を教えるワークショップや手芸教室を開設。 ・手工芸品の直売所を開設する。 ・古い民話を語り、地域の歴史や芸術の発展を紹介する子供向けの小劇場の開設。 ・ファティマ・ナバウィヤ病院近くのラミーの土地のように、状態の悪い建物の撤去と取り壊し、既存の建物のファサードを地域の歴史的特徴に合うように作り直す。 ・行動とモラルの啓蒙。芸術と才能の促進。 ・ダルブ・アンシア病院に隣接する俳優 アフメド・ハラワニの家の調査と修復。 ・通りの両側の建物を修復し、オープンミュージアムとして観光地として再 開、歴史認識ツアーを実施し、人々にこの地域の歴史について教育している。 ・通りを交通のない歩行者専用通路とし、トゥクトゥクを通りおよびすべてのエリアから排除する。 ・住民のための地下車庫を開設する。
宮殿（邸宅）マンジャク・シラーフダール邸 Palace of Manjak Silahdar	・住民の手工芸品を展示する公募展の入口として門を使用し、全体のエリアを完全に再開・復元する。 ・工芸品を教えるための小さな学校を開校。 ・小室の 1 つは、女性の手工芸品/ハンドメイドのための展示会を含むことが良い。 ・観光案内と地域の名所を紹介するセンターを開設する。
公衆浴場ハンマーム・アミール・バシュターク Hammam Amir Bashtak	・再オープンして修復し、観光地や治療場として住民や観光客が利用する。 ・美容室、女性用朝風呂、男性用夜風呂としてオープンする。 ・ハントゥール（馬車）のような直通の交通手段を提供する。 ・居住者向け（男性夜間、女性夜間）、外国人観光客向け（曜日）のカスタマイズが可能である。 ・人気のあるトイレとして再利用
サビール・クッターブイルゲイ・ユーズフィー（モスクに附設） Sabil Kuttab attached Mosque of Ilgay Yusufi	・完全修復し、イスラーム教の教科を教える学校として再利用。 ・クルアーンの暗記室として使用。 ・観光地としてオープン
サビール・クッターブ・シナン・パシャ （ウィカーラに附設）Sabil Kuttab Mustafa Sinan attached Wikala	・完全に修復され再利用され、観光地としてオープンしたい。
サビール・クッターブ・ルカイヤ・ドゥドゥ Sabil Kuttab Ruqayya Dudu	・完全な復元と再利用を行い、観光地としてオープンしたい。 ・タキエ（イスラーム神秘主義宗教施設）として再利用 以前は通行人の水補給のために利用されていた。 ・地域の貧しい人々に食料を提供するセンターとして利用する。そして以前のように給水場としても使用する
サビール・クッターブ・ハサン・アガー・コーカリアーン	・完全に修復して再利用し、観光地としてオープン。 ・小さな書店を併設。

住民ワークショップ意見（男性）B 台紙	
スーク・シラーハ通り全体に関わるもの Souq a l -Silah	・以前のように、観光客が再びこの通りに来てくれることが必要だ。 ・この地域でトゥクトゥクを使用するのは止めたい、なぜなら多くの事故が生じたからだ。 ・高層ビルが立ち並び、日当たりも悪く、空気も悪い。 ・子供たちは地域の重要性を理解できないので、地域をきれいに保とうとはしないが、私たち大人は地域を保つ意識を持つべきだ。 ・この地域にあるマカーム（墓廟）を撤去して、ザウィア（小モスク）を広くする。 ・ゴミ処理業者を雇い、通りをきれいにする。 ・適当な木を植えて欲しい。 ・スーク・シラーハを朝の時間帯は車を入れない人間専用の場所にし、夜間は工房の資材のためにだけ車の進入を許可する。 ・ハーラ（路地）やズカック（袋小路）に入るには、小さい救急車が必要。 ・消防署が近くにあること。
宮殿（邸宅）マンジャク・シラーフダール邸 Palace of Manjak Silahdar	・再開発とゲートのケア. ・ゲートの入り口を、スーク・シラーハ地区への案内をする歴史情報センターとする。 ・スーク・シラーハ地区で最も良い場所とその情報を案内する地図を配布し、各場所にその情報を提供する看板を追加する。 ・観光名所として活用する。 ・リファーイー・モスクとスルタン・ハサン・マドラサへの完璧な眺望のあるホテルとする
公衆浴場ハンマーム・アミール・バシュターク Hammam Amir Bashtak	・公共のハンマームとして再オープンする。 ・女性のための日と男性のための日があります。 ・ハンマームの完全なプライバシーを確保するための警備をつける。
サビール・クッターブ イルゲイ・ユーズフィー（モスク附設）Sabil Kuttab attached Mosque of Ilgay Yusufi	・モスクはすでに祈るために使われている。 ・小さな病院（クリニック）を併設し、救急部門が欲しい。
サビール・クッターブ・シナン・パシャ（ウィカーラに附設）Sabil Kuttab Mustafa Sinan attached Wikala	・地下にあるワークショップ（工房）を同じ場所に集めるため、ウィカーラを再開する。
サビール・クッターブ・ルカイヤ・ドゥドゥ Sabil Kuttab Ruqayya Dudu	・図書館. ・イスラーム教センター
サビール・クッターブ・ハサン・アガー・コーカリアーン Sabil Kuttab Hasan Agha Kokalian	・祈りのために開放する. ・クッターブを子供たちのために開放する。

⑤ アンケート結果

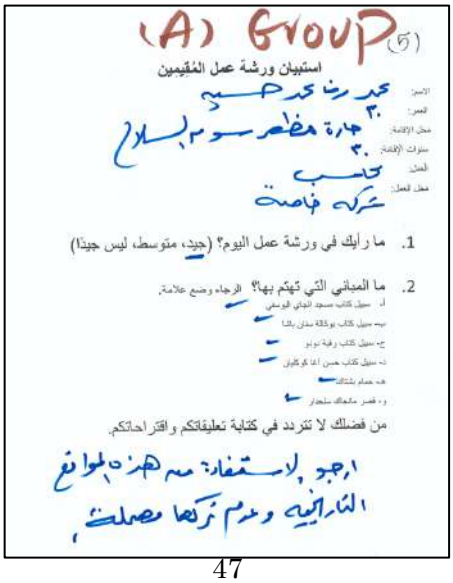
住民ワークショップ、アンケート結果のまとめ

1 日目の女性の参加者は 21 名、24 歳～72 歳、平均で 44 歳、様々な年層の参加者で、在住期間については短い者で 6 年、長い者で 53 年、平均で 30 年である。職業をみると、約半分が専業主婦である。職業の種類としては、秘書、教師、報道担当者、シェフ、テレビ局局長、心理学教師など様々である。ワークショップの評価については全員が良かったと応えている。興味のある建物について一番多いのは、ハンマーム・アミール・バシュタークク、２番目がサビール・ルカイヤ・ドゥドゥで、いずれも約８割の参加者が興味を持っている。３番目が、サビール・クッターブ・ハサン・アガー・コーカリアーンで、４番目が宮殿、マンジャク・シラーフダール邸であり、約半分の参加者が興味を持っていることが分かる。

自由記入において、女性専用ハンマーム、美容院、女性専用クラブ、女性のためのジムなど、女性に関わる利用内容が多いのが特徴である。観光関係においては案内所や観光客用の電気自動車、教育関係では、図書館、保育園、コーラン学校、無学者向けの学校、日本語学校、子供のためのクラフトクラス、芸術活動などがあげられている。また、多目的ホールといったコミュニティーのための用途もあげられているのが注目できる。交通関係として、トゥクトゥクを無くして代わりにバスを多くしてほしい、など現状の問題点の解決案もあげられていた。

２日目の男性の参加者は 15 名、33 歳～64 歳、平均で 44.7 歳と女性とほぼ同様である。在住期間は、短い者で 9 年、長い者で 64 年、平均では 40 年であり、女性よりも在住期間が長い人たちが参加していた。職業については、店のオーナーなど商売に関わっている人が 6 名と約 3 分の 1 を占めている。その他、俳優、経理、新聞記者、運転手、弁護士、会計士など様々である。ワークショップの評価については、ほぼ全員が良かったと応えている。興味ある建物について、一番多いのは、ハンマーム・アミール・バシュタークで約８割の参加が興味を持っており、これは女性と同様である。他建物については特に差はなく３分の２の参加者が興味を持っていると応えている。

自由記入においては、文芸技術の学校、研修者の手作り製品の販売店といった具体的用途のコメントや道徳を教えることなどモラルや教育に関わるコメント、ゴミ会社と契約を結ぶ、トゥクトゥクや車が入らないようにするなど現状の問題解決の提案など興味深いコメントが書かれていた。



【住民ワークショップ（1 日目、女性：21 名）アンケート結果】										
年齢	在住期間	参加者 21 職業	評価	A	B	C	D	E	F	コメント; A. Sabil Kuttab attached Mosque of Ilgay Yusufi, B. Sabil Kuttab Mustafa Sinan attached Wikala, C. Sabil Kuttab Ruqayya Dudu, D. Sabil Kuttab Hasan Agha Kokalian, E. Hammam Amir Bashtak, F. Palace of Manjak Silahdar
24	24	秘書	良		○	○	○	○		Hammam 再開、スポーツクラブ、障害児支援学校
35	35	主婦	良			○	○	○		女性専用 Hammam 再開、観光客向け案内所、展示会、遊歩道、古建築の修復、スポーツクラブ、図書館、多目的ホール、各建物に紹介の宣伝ポスターや電子画面設置、観光客用の電気自動車
44	7	主婦	良			○		○		Hammam 再開、女性専用クラブ、古建築や家の修復
30	11	主婦	良	○	○	○	○	○	○	美容院、保育園、コーラン学校、無学者向けの学校
49	24	主婦	良	○	○	○	○	○	○	コーラン学校、女性専用クラブ、ハンマームの再開、無学者向け学校
47	18	教師	良		○	○	○	○		スポーツクラブ、コーラン学校、女性文化センター、美容院、インフォメーションセンター、屋上やベランダの植樹、日本語や言語学校
39	15	主婦	良			○		○		女性専用クラブ、古い家の修復、Hammam 再開
31	9	主婦	良			○		○		女性専用クラブ、古い家の修復、美容院、保育園
40	40	主婦	良			○	○		○	図書館、観光客用の案内所、子供向けの芸術などの活動教育センター
32	32	主婦	良	○	○	○	○	○	○	美容院、保育園、コーラン学校、無学者向けの学校
37	6	報道担当者	良			○		○		女性専用クラブ、コーラン学校、古い家の修復
54	54	主婦	良	○						女性のためのジムを作って欲しい。貧しい人のためにいらない服を集められる場所を考えて欲しい。女性に仕事が見つかるように手伝って欲しい。
38	38	シェフ	良			○		○	○	
50	50	主婦	良			○		○	○	
49	non	non	良	○	○	○	○	○	○	
63	53	テレビ局局長	良				○	○		Hammam Bashtak を復活し、女性、男性、外国人の日を作ればよい。Hassan Agha Kokalian にはアラベスクなどの芸術を習える場所になって欲しい。
45	45	総務部長	良	○	○	○	○	○	○	
48	15	心理学教師	良	○	○	○	○	○	○	
46	46	ワークショップ教師	良	○		○	○	○	○	子供にクラフトを教える他に、読み書きのクラスを作って欲しい
72	52	non	良					○		トクトクをなくして欲しい。かわりにバスを多く通してほしい。
55	17	主婦	良							
44.1	30	←平均		8	8	17	12	18	10	合計

【住民ワークショップ（2 日目、男性：15 名）アンケート結果】										
年齢	在住期間	参加者 15 名 職業	評価	A	B	C	D	E	F	コメント; A. Sabil Kuttab attached Mosque of Ilgay Yusufi, B. Sabil Kuttab Mustafa Sinan attached Wikala, C. Sabil Kuttab Ruqayya Dudu, D. Sabil Kuttab Hasan Agha Kokalian, E. Hammam Amir Bashtak, F. Palace of Manjak Silahdar
57	57	俳優	良	○	○	○	○	○	○	一番重要なのは住民に躾や道徳を教えることである。
57	57	自営業	良	○		○		○		
59	9	定年暮らし	良					○	○	
50	15	Naqqash Me'adn Nahhas	良			○	○		○	文芸技術の学校を作り、研修者の手作り製品の販売店を作る。
30	30	経理	良	○	○	○	○	○	○	貴重な歴史的な建物を、放置したままにせずに、保っていただきたい
33	33	レストラン経営	良	○	○	○	○	○	○	ダルブアフマルにムイッズ通りのようになってほしい
64	64	歴史の教師、店のオーナー		○	○	○	○	○	○	スーク・シラーハには思い出がたくさんあって、イードの前の夜にハンマーム・バシュタークに友達と一緒に入った。ぜひハンマームが復活することを望んでいる。小さな頃と比べると通りの景観は大きく変わってきているが、今後よくなっていくことを期待している。スーク・シラーハに関する本を執筆中だが、まだ出版社が見つかっていない。このような本は、居住者に対して必要な歴史的情報を伝えることができるので、ぜひ出版できるようにと考えている。
42	42	新聞記者		○	○	○	○	○	○	ネットでの出版を職業としており、ダルブアフマルについても特集したことがあり、Hamdy 氏に手伝ってもらった。
29	29	運転手	良	○	○	○		○		
44	44	商人	良	○	○	○	○	○	○	
48	48	弁護士	良	○	○	○	○	○	○	ゴミ会社と契約を結ぶ。トクトクや車などが道に入るのを禁じる。オーディオ図書館を作る。コンピューターの使用法と修理についてのコースの開催を望む。
34		運転手		○	○	○	○	○	○	
33	33	会計士、ビジネスマン	良				○	○		
38	38	商人	良				○	○		
53	53	水道関連の店経営	良							
45	39	←平均		10	9	11	11	13	10	合計

⑥ 日本側専門家のコメント（荒牧、磯野、岡田、柏木、宍戸、深見、布野、連）
—アイウエオ順—

荒牧澄多

【二日間のワークショップを見て】
・男性、女性を問わず参加者全員が積極的に発言を繰り返していたのが、印象的です。日本で、このようなワークショップ行うと、往々にして一人ぐらい傍観者がいるものです。
　しかも、男性と女性、場は別でしたが、それぞれの観点から議論されたのはいいですね。
　日本ではよほど意識的に参加者を集めないと、どうしても男性の比率が高くなる傾向があります。また、言葉の強い男性の発言に引きずられることもあります。
・今回、具体的に取り上げられた 6 つの歴史的資産についても、その資産が生まれた経緯、これまでの町のなかでの位置づけ等を、参加者の皆さんが十分に理解されていたことを頼もしく思います。そして、修復の必要性が議論されたことは、大変望ましいことと思いました。その上で、歴史的な使い方に準拠した使い方、新たな提案などが積極的に議論されていたようで、これも望ましい方向だと思いました。
・活用方法を議論するなかで、住民にとってこの地区に不足している施設、機能が明らかになってきたのではないでしょうか。宗教や政治、歴史的背景を熟知していませんので、具体的な内容については、コメントしにくいのですが、女性の居場所、子供たちの居場所が特に希求されているように思いました。また、地場産業である工芸品を一同に揃えて、広く知らしめる施設も望まれているようですね。
・このワークショップを通して住民が、それぞれ個人として思っていたこと、考えていたことが、他の方々の同様な思いを抱いていたことが明らかになったのではないでしょうか。住民自らが考えるまちづくりへの、第一歩を踏み出したのではないでしょうか。
・特に気になったのは、ある男性が、地域を知る必要性を語っていたことです。
　生まれ育った場所は、当たり前の空間です。いいものは、当たり前すぎて意識に上がってきません。悪いものも、こんなものとそのまま享受してしまいます。わかっているようでわかっていないのが、地域に住まい続けている方々でしょう。これは、万国共通かもしれません。
　そこで提案ですが、ワークショップ参加者たちで町歩きを行い、町のいいところ探しをしたらいかがでしょうか。一人で歩くのと異なり、さまざまな視点から町を考えることができます。
　そして、いいとこマップやパンレットづくり。地域の歴史や文化を盛り込み。知っているようで知らない町の魅力を、地域の方々へ、そして来訪者に広く知っていただくために。
　地域を知ることによって、その地域に愛着を感じるようになります。より住みやすい町にしたいという意識を作っていくことが大事だと思います。
　私の住む、川越の喜多町という自治会では、新たにここに住むようになった方たち向けに、町を紹介するパンフレットを作りました。作ってみると、昔から住んでいた人々にも知られていない町の魅力がいっぱい出てきました。
・気になっていることの一つに、地域のとらえ方です。日本だと自治会や商店会など、ある一定のエリアを母体とした地域コミュティがあります。カイロのこれまでの様子を拝見すると、同業者の集ま

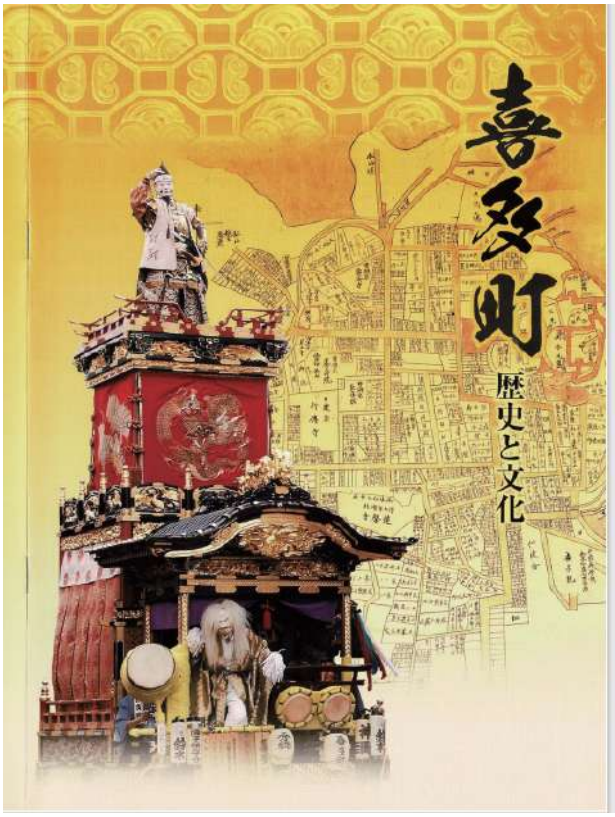
りはありそうですが、ある一定のエリアをベースとする商店会や日本の基礎コミュニティである自治会のようなものはなさそうですね。

ワークショップ参加者にとって、一体となってこのまちづくりを進めていくエリアをどのように捉えているか気になりました。

・もう一つ気になりましたのが、ワークショップ参加者の地域での位置づけです。このまちづくりを進めていこうとしているエリアにお住いの方々にとって、参加者の立ち位置はどんな感じなのでしょうか。

日本の場合、公募された方と地域の代表として推薦された方が参加されることが多くあります。地域からの代表者は、地域の意見を集約して代弁できることが期待されています。

・現地の方へのお願いです。今回のワークショップの議論を、地域の共有とするための工夫をお願いしたいと思います。例えば、簡単なニュースペーパーを作り配布するなど。



喜多町を紹介するパンフレット
地域内全世帯、事業所に配布

川越では、歴史的資産を活かしたまちづくりを考えるワークショップの経過のニュースペーパーを、旧城下町全域の約 2,700 戸に配布し、情報の共有化を図りました。私が、保存施策の説明に伺った時、その通信を持ち出して、十分理解しているよと言ってくれた方もいらっしゃいました。

・もう一つ、今回のワークショップで出た意見の中で、すぐにできることを見つけてください。どんな簡単なことでもいいと思います。壁新聞一枚でも。自分たちの議論が成果となって現れることは、次へのモチベーションとなるでしょう。

参考までに

交通問題が話し合われていましてが、川越も抱えています。

バスや自家用車、そして観光客向けの人力車が交錯する川越
2014 年の写真

2009 年に一方通行の社会実験をしました。しかし、周辺地区への影響の大きさなどから実現していません。

人と自動車とトゥクトゥクが交錯するカイロ

****

磯野哲郎

6 つの歴史的建造物の利用法についての男女別のグループ A とグループ B、合計 4 つのグループの意見には多くの共通性が見られた。その点は、6 つの歴史的建造物の利用法について共通意識があると考えられ、多くの地域住民の賛同を得られる可能性を反映していると思う。その一方で、マンジャク宮殿の屋上のレストラン利用（グループ B 女性）、ハマム・バシュタクに託児所（グループ B 女性）や美容室（グループ A 男性）のような個性的意見が見られたことも注目に値する。なぜなら、これらの個性的意見は、修復後の歴史的建造物に経済的、社会的な価値と持続的な運用のための資金源を示唆しているからである。

「観光アトラクションとしての観光利用」と言うのは簡単であるが、観光市場とのリンクや継続的で質の高い運用ができなけれ

ば観光利用は成り立たない。そして歴史的建造物の修復という技術的課題へ対応しただけでは、あっと言う間に経営不振に陥ってしまうことを認識しておく必要がある。観光案内所としての利用にしても、コンテンツや人材がなければ案内所として機能しない。詳細には触れないが、安定した経営や運用ができるようにするには、コミュニティ内外にバリューチェーンを作っていくことが必要である。

また、トゥクトゥクや車の乗り入れを禁止にするという意見も注目に値する。実際に適用することは容易でないが、イタリアのベニス、スイスのツェルマットのように自動車を排除している事例は世界各地にある。ヨルダンのペトラ遺跡でも電動カートが導入されている。但し、地下に駐車場を作るという案は、埋蔵文化財を破壊する可能性があり、慎重さが必要であろう。ワークショップで意見はでなかったが、同じ延長線でデジタル技術の導入が考えられないだろうか。IoT や 5G 通信を導入することで、自動運転の電動カートやロボットによる物資や製品の搬入・搬出、住民の駐車場までの移動を助けることができる。歴史的街区にデジタル技術特区を重ねることで地区の経済社会的価値を高めることができる。景観上で問題になるアンテナはミナレットに組み込むことで解決できるであろう。(TI)

****

岡田保良

１．文化財が有形であろうと無形であろうと、参加した住民による自分たちの町の改善に対する活発でかつ多彩な意見交換はきわめて印象的で、私たちの予想を超えるものがあった。同時に、彼ら彼女たちが、自分たちの暮らす町の歴史性やその遺産に対して十分に自覚していることも伝わってきた。

２．女性グループの間からは、子供たちにとって安全で健全な生活が保障できる町の再生を期待する声が目立ったほか、そこには町の将来に積極的に関わろうとする彼女たちの姿勢がみられた。アラー氏が、「女性は町の柱だ」と指摘していたが、それが単なるリップサービスしではないことを実感し、看取する。

３．男性グループの報告からは、町のもつ歴史的な風情や景観をじゅうぶんに認識しているとの自負が伝わってきた。また各モニュメントの活用というより、住民どうしのつながりや、技術工芸など無形的な伝統を大事にしようとする意見が印象に残る。

４．今までこのような住民の意思を汲み上げる仕組みがなかったとすれば、今後の町づくりにとって、今回の ワークショップの企て画は貴重なステップになったのではないか。彼ら彼女たちが、自分たちが共有する遺産として、いまの町なみの保存活用とより住みやすいコミュニティづくりに深くかかわっていくことに対し、私たちが多少なりともそのあと押しができるとすれば、このプロジェクトの意義は小さくないのではないかと思う。

５．この街区が 1979 年に Historic Cairo として登録された世界遺産のエリア内である点、その「顕著な普遍的価値 OUV」が何だったかについては、町の変化に合わせて確認し続ける必要がある。
ユネスコ世界遺産委員会は、その不完全な保全状況に対して繰り返し改善することを勧告しており、2021 年の委員会決議 を見ると、登録範囲の地図すらまだ完成しておらず、個々の建物以上に街全体の劣化が進行していて、もはや不可逆的な状況に達しそうだという懸念が表明されている。
そのことは、Historic Cairo にとって由々しき事態ではあるが、どこか他の世界にありがちな世界遺産にしがみつくということを意味するものでは決してなく、彼ら自らが望むべき町の姿こそ、世界遺産というブランドを維持する方向性であることを信じたい。

****

柏木裕之

若手エジプト人建築家とともに 4 回に渡り、スーク・シラーハ周辺の建造物について、推定建造年代や構造、階数や現在の用途、出入り口の位置などについて悉皆的な基礎調査を実施した。1950 年代以降に建てられた建造物が多く、鉄筋コンクリートの柱、床と焼成煉瓦壁で構成される現代の建造物も多数を占めた。またシャッターが閉ざされたままの空き店舗も目立った。

歴史的イスラーム建築と呼ぶべき古建造物は、現役のモスクなどの例を除けば、大半が廃墟の状況を呈していた。その要因として 1992 年のカイロ地震を挙げる住民がおり、応急的な措置のまま放置されている遺構も観察された。歴史的建造物には持送りが多く認められることから、当初は上階を持つ構造であったと推測されたが、現在は崩落し、一階の壁だけが残存する状況にある。工房や倉庫として活用される例も散見されたが、多くはゴミが不法に投げ捨てられ、衛生環境の悪化を招いていた。これらの遺構は政府によって順次解体、撤去される予定で、住民の多くも支持している。だが憂慮すべき現状とはいえ、遺構の消失はこの地区の歴史性の希薄化につながることが危惧される。そのため取り壊しを安易に進めるのではなく、まずはゴミを回収し、歴史的な建造物として見つめ直し、再評価する時間を稼ぎながら、何らかの活用方法を模索することが望まれる。

一般に町並み保存が模索される地域は、比較的短い期間に集中的に資本が投下され、町並みの骨格が高い完成度で作り上げられたケースが多く、後の世代はそれを維持すればよかった。逆に言えば町並みの保存は、その維持が困難になってきたことに発する。スーク・シラーハ周辺も同様で、モスクとその周囲には石灰岩ブロックによる低層住居群が広がっていたと推測されるが、現在は低層階の上に複数階

を増築しているケースも見られ、複雑な様相を呈している。また RC 造の現代建築も多く、かつての風景を取り戻すことは容易ではない。まずは点在する歴史的な遺構をいかに維持し、つなげていくかが課題であろう。

現在のエジプトは、重機が唸りを上げ、国土の開発が活発に行われている。その姿はかつての日本のバブルと重なり、そうした風潮の中で古建造物の維持という提言は理解されにくい。だがバブルはいつか必ず弾ける。バブルで多くの歴史を失った日本として、現状維持は後ろ向きではないことを粘り強く伝えていく必要があるだろう。

今回周辺住民による意見交換会を実施した。最高の会議とは知らない人が見たら喧嘩しているとしか思えない会議であるという言葉を改めて実感した。とともに住民の地域に対する深い愛情や歴史的建造物に対する正確な理解、活用への強い関心にも正直驚いた。一方で参加者に地元の職人が少なかった点が気がかりであった。スーク・シラーハ周辺は職住一体のまちであり、特に家具や柱間装置などを作る木工職人の割合が多い。木工のまちとして持続的に発展するためには住居だけでなく、職場環境の改善、向上も欠かせない。今後の大きな課題である。

****

宍戸克実

住民の皆さんが地域の問題や魅力について議論している姿に、私はとても感動しました。活動を継続することにより、Souq Silah の地区環境はよりよくなっていくと思います。ワークショップでは、地域や居住環境について色々な意見が発表されました。特に、街路環境の問題、子供たちの安全な環境、歴史的建築遺産の有効利用、観光化に関する意見が多かったと思います。

Souq Silah をオープンミュージアムにしたいという方向性にはとても共感しています。一つ一つの歴史的建築遺産が小さくても、Souq Silah の魅力を生かすことができればオープンミュージアムの実現は可能だと思います。オープンミュージアムでは、地域住民は重要な演者になります。歴史的建築遺産と共に生活する住民の姿こそが、オープンミュージアム最大の見所と言えます。

マンジャク宮殿は、Souq Silah の表玄関と言える場所にあります。地域外からの訪問者に対して、地区のゲートでありシンボルを示すことのできる場所だと思います。Souq Silah で生産される伝統工芸品や手工芸品、食品、菓子などを展示・販売したりする場所に適していると思います。

ハンマーム（公衆浴場）遺構は Souq Silah の中心的な場所に立地しています。ハンマーム周辺は伝統的な広場ですが、交通量が多いため歩行者にとって歩きにくい場所になっています。ハンマームを再建して、昔のままの形と機能を取り戻すアイディアは素晴らしいと思います。また、曜日や時間を分けることにより、観光客と共用することが可能だと思います。歴史的に、ハンマームは地域住民の交流空間としての役割を担ってきました。ハンマームはかつて、女性たちにとってのアフワのような場所だったと言われています。美容院やマッサージ施設を望む意見がおおく見られたことから、女性の交流施設が渇望されていることが推察されます。現在のカイロではハンマーム文化・習慣のほとんどが失われているようです。日常的な使用を目的とした公衆浴場にするのは難しいかもしれません。結婚や儀式、宗教イベントのような特別な機会に利用するようなハンマームにするというアイディアが現実的なように思います。女性住民が日常的に利用できる機能として、共同洗濯場や共同キッチンなどが考えられます。また、女性や子供の日常生活を支援する施設なども候補として考えられます。

Sabil Kuttab に関しては、本来の宗教的機能の再開を望む意見が多くありました。これもやはり、学童保育的な役割が期待されているのだと感じました。Sabil Kuttab を図書館にするというアイディアに賛成です。複数ある Sabil Kuttab を分散型の図書館として活用することで、教育支援や学童保育的な役割を担うことができると思います。それぞれの Sabil Kuttab は書架と学習室で構成され、利用者の年代や性別、分野で分散させることも可能です。

Souq Silah 通りの重大な問題は、やはり交通だと思います。自動車の存在しなかった時代に成立した歴史的都市とその街路は、歩行者のスピードとサイズで形成されています。Souq Silah で車と歩行者が共生するためには、車の乗り入れを制限する必要があります。車の時間帯制限や一方通行制限、人力による車両の導入なども考えられます。また、歩行者優先の空間であることを強調する街路デザインを採用し、自動車がスピードを出しにくくする手法もあります。街路樹を植えることは、景観的、環境的にメリットがある一方、街路の幅を狭くしてしまうデメリットがあります。壁面緑化や街路上緑化という方法もあります。共通デザインのオーニングや庇を建築物ファサードに設置することで、個性的な街路風景を生み出すことができます。

****

檜山元一郎

スーク・シラーハ通りに点在する 6 か所の歴史的建築などの有効利用等を足掛かりに同地区の暮らしをどの様に改善したいかを地域住民が 2 日に渡り活発に話し合った。ファシリテーターとして同地域に長年に渡って携わっている 2 名の建築家が務めたことで、限られた時間で住民の考えを分かち合えたように感じている（写真⑧）。個人的には地域住民の交流の場としてハンマームの復元を望んでいる声が上がったのが、風呂好きの私としては嬉しかった。

参加者が大人に限られていたことにも起因するが、印象深かったのは参加者の方々が同地区の歴史的価値を理解され、景観や街の安全についても懸念されている点だった。地震などで一部倒壊しかけている建物や廃墟の扱い、ゴミのポイ捨て対策、狭い街区内での交通往来の危険と課題は多く、解決もなおざりになっている。事前に地域全体を見て回ったが、緊急度の高い内容も点在している。ここでは官民の垣根を超える発想が求められる。

2 日間を経て、予算の確保や責任分界点の明確化と調整事項が多いことは認識しているが、マンジャク・シラフダール宮殿とハンマーム・バシュタークを復元して新しい形態で利用することで地域再生の為の取っ掛かりのシンボルとするのも一案と感じた。何れも劣化が激しく、早期に手を付けることが望まれる建物である。これによって街にも新しい息吹を注ぎ込むことが出来ればバイトヤカンと同様に愛され、地域整備への布石に成り得るだろう。用途次第では観光客の利用も増えれば自ずと注目を浴びるので、ひいては街が文化的に向上すると考える。

その他、浅い知見の中で何点か特に気になった事象について挙げたい。

・居住中の建物が倒壊しかけている。行政の早期介入が必要。下記写真①ではアパート頂部が道を挟んで対面アパートに倒れ掛かっている。

・廃墟となっている建物の取り扱いを判断して、倒壊する前に必要に応じた補強なりの対策が急務。（写真②③）

・ゴミのポイ捨てが目立つ。トゥクトゥク同様に公共のルールや社会生活の規律をどの様に根付かせるかは難題。（写真④⑤⑥⑦）

①

②

③

⑥

⑦

④

⑤

⑧

****

深見奈緒子

街の未来について、住民の声を聞くことは、とても重要なことである。なぜならば、通りの雰囲気、息遣い、そしてそこに立ち並ぶ建物について、一番馴染み深いのは、毎日をそこで過ごす住民たちである。そして、その通りがよくなったり、悪くなったりする鍵も彼ら住民が握っていると言えるだろう。毎日の居場所を少しでも良くしていくには、どうしたら良いのだろうか。もちろん、政府や公の事業や助成が必要であることには間違いないが、また、私たちのような他者が意見を言い、蓄積された知恵を共有したりすることも重要ながら、住民たちが、自分たちの街の良さに気づき、それを誇りに思えるようになっていくことが、街の未来を保証するもっとも重要な一つの道筋であると私は信じている。

今回は、このワークショップに出席して、出席者が皆、前向きに街のあり方や、歴史的建築の再利用について臨んでいることを、とても逞しく感じた。色々な問題があると言うことを、自分たちできちんと認識していることは、スーク・シラーハを良くしていくことの基盤となるだろう。また、6 つの歴史的建築に対して、これはいらないというような意見を言う人がいなくて、みんなが修復してみんなの場所として用いたいと考えていたかったことにも安堵している。加えて、女性たちは、今のスーク・シラーハにはなくて、自分たちの生活に必要なみんなの場所を、そこに入れ込むことを、楽しげに語っていた。それに引き換え、男性たちは、根本の問題を重視し、熱く議論をかわしていた。今回のワークショップを男女別に開催したことは、よかったと感じている。私たち、口をつぐみがちな日本人に比べると、スークシラーハの人々は、自分の意見をはっきりと伝えることに、本当に長けていると感じた。

ファシリテーターとしてのサラー教授とアラー氏、そしてその教え子の建築家たちの力は、想像にあまりあるものであった。住民たちとの間をつないで、彼らの意見を引き出せたのは、彼らのおかげである。そして、通訳者の人々にも、お世話になった。みんなの協力の賜物である。

一つ気になった点は、住民の観光に対する意識である。ムイッズ通りのようにしたいという意見があったが、ムイッズ通りには、なんだか生活感が欠けていると私は感じる。一歩奥に入れば、スーク・シラーハと同様に、賑わいが街を包んでいるのだけれど。スーク・シラーハの観光化は重要な課題となるであろう。ただ、私としては、ムイッズ通りとは異なった形の、もっと観光に来た人が、そこのコミュニティと対話をもち、ただ単に古い建物を楽しむだけの場所ではない方向性を考えて欲しい。

こうしたワークショップを続けていくことは、住民が街の通りや歴史的建築に対する意識を持続していくために重要なことであると考える。それと同時に、いかにして住民の意見を汲み取ったプロジェクトを実現に移していくのかと言うことが、大きな課題であろう。事業の実現のためには、大きなお金が必要だけれど、例えばゴミ問題や道徳の問題などは、住民の身近な注意や気づきで、改良される点もあるのではないかと考える。

私は、アジアの東の日本で、イスラーム文明の残した建築文化について研究していて、いつもスーク・シラーハの歴史的建築を訪れるたびに、ここに住んでいる人たちを羨ましく感じている。あんまり近くに居るので、住民の方達は気づいていないのかもしれないけれど、6 つの建物それぞれに素晴らしさがある。マンジャク・シラフダールの門の素晴らしい石細工の天井は他に類例がない、イルゲイ・ユーズフィーのサビール・クッターブの特徴的な柱頭と建設の物語はマムルーク朝の歴史を紐解かせ、サビール・シナーン・パシャの赤い色が美しいイズニク・タイルを幾何学的に配置し、ルカイヤ・ドゥドゥは真珠の宝石箱のような作品で、ハンマーム・バシュタークの色大理石の入り口から入る伝統的なハンマームはどんなに気持ち良いものだろうと想像し、ハサン・アガー・コーカリアーンはコミュニティの場となったバイトヤカンの入り口に相応しい建築である。これらの素晴らしいモニュメントが、実際に住民たちによって、大切に使われる日を夢見たい。

****

布野修司

議論そのものには参加できませんでしたが、ファシリテーターによってまとめられた参加者の様々な提案をみると、短い時間であったにも関わらず、数多くのすばらしい提案が含まれていると思います。問題は、様々なアイディアをどう実現していくか、だと思います。素晴らしい提案も、実現していく過程では、地区の住民の合意形成が必要ですし、様々な法・制度、行政当局との調整が必要になります。そして、何よりもファンドが必要になります。

まず、提案したいのは、今回のようなワークショップを持続的に行うゆるやかな組織体を住民、専門家、行政当局を含めたかたちでつくることです。そして、できること小さなことから始めるのがいいと思います。また、具体的な活動を広く世界に発信し、共通する問題を抱えた他の地域の人たちと交流し、お互いの経験に学ぶといいと思います。今回、オンラインで参加したのですが、日本のまちづくりにとっても、大きな刺激になると思います。

ファンドについては、イスラームにはワクフの伝統もあります。近年ではクラウド・ファンディングも可能性があると思います。国、行政当局による事業化を期待するうえでも、とにかく小さな実績を積み重ねていく姿勢が必要だと思います。

****

連健夫

■1 日目、住民ワークショップ（女性）で感じたこと

オンラインであり、アラビア語、英語、日本語の三ケ国語を扱う難しさがある中、とても良いワークショップになったと感じました。日本側の住民参加のまちづくりの紹介の意図を、アラ―氏とサラー氏がしっかり受けとめ、スーク・シラーハの更新への思いを参加者に伝えている感じがしました。グループディスカッションは、とても話が盛り上がっている感じがありました。発表では、サラー氏と住民が一緒に発表し、専門家（建築家）と住民とのコラボレーションを感じました。興味深かったのは、マンジャク・シラーフダール宮殿について、観光利用のみならず、子供たちのための公園ゲート、子供向けのオープンシアターなど、子供の利用が提案されていたこと、またハンマーム・バシュタークでは美容サロンの提案や、サビールでの手工芸品の展示など女性らしい提案があったことです。スーク・シラーハ全体をオープンミュージアムとして捉え、観光に活かすことのみならず、図書や高齢者の文化的利用、コーランを学ぶ学校など、教育や文化に関わる利用が提案されており、外部利用と住民利用の両方の目線があることは、大切なポイントと感じました。

■２日目、住民ワークショップ（男性）で感じたこと

停電でスタートは遅れたが、１日目でできなかった深見さんの６つの歴史的建物の話と、発表後に日本側からのコメントができたことは、全体のまとまりがあり良かったです。つまり、日本人専門家から観たイスラム建築の価値を伝えた上でディスカッションができたこと、住民が日本側からの客観的評価を聴くことができたからです。パソコンから見るグループディスカッションでは、熱い議論が交わされている感じがしました。発表で興味深かったのは、車の混雑や周囲の建物の劣化の問題が話題になっていたこと、住民がこの街の良さを知る必要があると熱弁されていたことです。これに対して、日本側からのコメントとして、住民で話し合うことにより問題を共有することの大切さや、布野先生からのクラウドファンディングの紹介、荒牧氏から川越で住民自身が街の歴史パンフレットを作成したことを紹介されるなど、住民と日本側の専門家がキャッチボールできたことも、今回のワークショップの成果と思いました。

■更新案への意見・提案

住民のアイデアと専門家であるアラ―氏とサラー氏の思いを、うまくブレンドしていただきたいと思っています。以前、アラー氏から木工製品の展示場所や博物館、事務所が必要という話があり、今回のワークショップの提案にはなかったですが、それらも是非、更新案に入れると良いと思いました。

■４．エジプト行政（NOUH）関係者へのオンラインレクチャー

①趣旨と全体の流れ

本事業は日本文化庁委託の事業であるために、エジプト側の国家機関との協力関係を示すことが、重要な課題であった。「■1 事業概要　③実際の事業推移　（１）協力関係」において、国立都市景観調和機構との関係性はすでに指摘した。オンラインレクチャーについては、以前から親交のある国立都市景観調和機構のハイジ・シャラビー博士が主導的な役割を果たし、彼女との合議の上で、日時の設定などを行った。

大きな目的は、今回の事業に対する日本側の思いを伝え、より持続的なプロジェクトへの継続を狙ったものであった。日本側からは以下の構成を提案した。まず日本に蓄積された中東の伝統的都市空間に対する知見、その一つとして喫茶空間のあり方、日本の川越での保全実例、海外の歴史的建造物再利用の実態、日本での住民参加の試み、前回のプロジェクトでの日埃学生共同作成の町の更新案の紹介と今後の課題という 6 つの話題構成であった。当初は 2 つずつ（それぞれのタイトル；1 日目中東の空間特質、2 日目都市保全の実例、2 日目住民参加に向けて）を 3 日に分けて、あるいは 3 つずつ（それぞれのタイトル；1 日目中東と日本の空間特質、2 日目都市遺産の使い方）を 2 日でというスケジュールも考えたが、平日の同機構所属の技術職員を対象とするために、むしろ 1 日で済ませてしまうことが良いという結論に達した。

それぞれの発表については、続く「②日本側専門家からの事例・情報」に当日の資料を掲載し、「③質疑応答・意見交換」、および「⑤アンケート結果」を添付する。今回はオンラインのみの会合となったために、前回のワークショップと比べると、ネット接続等の問題は生ずることはなかった。ただし zoom でのオンラインということで、あまり活発な議論はできなかったことは残念であった。しかしながら、今後もこのようなオンラインを続け、今度はエジプトの国立都市景観調和機構の事業を紹介したいという意見は、明るい未来を感じさせるものであった。またサラー氏が、1 月 8 日 9 日の住民ワークショップに触れて、スーク・シラーハ通りでは、地区開発に対する住民参加のモデル例となることを力説し、設計に住民が参加し、住まいのニーズを満たす方向性で進めることを指摘した。

ここでは、ハイジ氏の英文レポートから、彼女の意見を抄録することとする。筆者の「中東都市における歴史地区とそこから学ぶこと/時間と空間の集積」で指摘するように、利用される用途や、サビール（公共泉）やウィカーラ（商館）のように用途を失った建物も多くある。ヤカン邸（バイトヤカンを含むイブラヒム・パシャ・ヤカンの邸宅を指す）は都市構造の中で大きな面積を占め、イスラーム時代特有の内部に向かって建てられていた。歴史都市の開発は、その設立の時代からの地位と成長を凍結するものではなく、地域の人口の必要なニーズを提供しなければならないが、歴史地域の普遍的な価値を失うことのないように留意する点は重要である。

宍戸氏の「都市における活動のための公共空間；街路と伝統的な喫茶店」という発表に対して、伝統的喫茶店を分類し、しかも地域ごとに比較した例は、評価できる。またカイロの数多くの伝統的喫茶店をその通りとの関係やモスクの関係で分析した点は、興味深い。都市保全への住民参加というテーマからは瑣末な点ながら、発表者が述べた伝統的コーヒー店は、むしろカイロ発祥ではなく、オスマン朝の時代にトルコからもたらされたものであるとハイジ氏は指摘する。しかしながら、コーヒーの飲用はイエメンで始まり、最初の伝統的喫茶店は、16 世紀初頭のアラブ圏（カイロが有力だが、ダマスクス、メッカ説もある）にあったとすることが定説と言える。この質疑応答については、エジプト人の深い思い込みの側面を感じた。

荒牧氏の「川越の歴史的建造物の保存に向けた取り組みについて/街並とその現代的活用」という発表に対して、住民参加に対して市役所の役割が重要であることは見習うべきことである。また歴史や見どころ、祝祭などを明らかにして、観光目的のパンフレット作成という点も、評価できる。若い世代の人々が喜んで川越という古い街に住みたいという意識は、エジプトから考えると不思議だけれど、カイロ旧市街でもこのような動きを創出させることに取り組みたい。

磯野氏の「カフェ、ブティックホテルなど、歴史的建造物の現代的な利用法」については、さまざまな国での歴史的建築の活用から、学ぶことも多いが、住民の賛同を得たものなのかという点が気にかかった。ルクソールの新クルナ村では、世界遺産地区内において、建築家ハサン・ファタヒが設計したモスク、市場、劇場、住宅などが今でも使われており、国立都市景観調和機構ではその保全に携わっている。この事例は、エジプトでのモデルケースとなると考えている。

連氏の「日本の住民参加のまちづくりの仕組・事例—建築の参加のデザイン事例」については、国の法律（都市計画法、建築基準法、景観法などの全国一律の法律）のもとに地方条例が位置づけられることが印象にのこり、より小さな地方自治体が決める政令があり、各地域の個性が生かされるというシステムが築かれ、市民参加が重要なので各都市で独自の計画法がつくられているという点に、感化された。都市計画の策定に住民が参加し、その上でまちづくりや創造のビジョンを議論し、それをもとに地域が行動することは素晴らしいことで、住民一人では難しい点を建築家など専門家によるサポート体制が整っていることも見習いたい。

布野氏の「学生ワークから見るヒストリックカイロの可能性（2018 年作品）と NOUH へのアドバイス」については、地域の住民、政府当局、ユネスコなど異なるステークホルダーが日常的に地域の将来について議論できる持続的なプラットフォームやコミュニティ開発センターなどの組織を設立する方法は、現在のカイロ旧市街に非常に有用な提案である。サラー氏から、ハンマーム・バシュタークの再開発についての、住民もまさに美容センターなどを求めていることが指摘され、観光客を誘致するために通りを通行止めにするというアイデアも支持された点には同意する。これらの提案を日本と協力する形で進めていきたい。そうすることによって、スーク・シラーハの通りの価値が高まり、住環境もグレードアップすることが望まれる。

プログラム

エジプト行政関係者への日本人専門家のオンラインレクチャー
（JCAABE 文化庁受託事業、カイロ旧市街の住民参加の保存まちづくり）
（NOUH：エジプト国文化省傘下の国立景観調和機構、研修）

【カイロ旧市街　"歴史地区をどのように再生し、活用するか？"】

■2022年2月21日　１８：３０～２２：００　（ZOOM オンラインレクチャー）

○　18:30-18:40 オープニング E. Muhammad Abou Sa'ada(or Dr. Heidi Shalaby)
連健夫（JCAABE 日本建築まちづくり適正支援機構、代表理事

①　17:40-19:10 中東都市における歴史地区とそこから学ぶこと／時間と空間の集積
深見奈緒子：日本学術振興会カイロ研究連絡センター長

②　19:10-19:40 都市における活動のための公共空間；街路と伝統的な喫茶店
宍戸克実：鹿児島県立短期大学准教授

③　19:40-20:10 川越の歴史的建造物の保存に向けた取り組みについて　／街並とその現代的活用
荒牧澄多：川越まちづくり NPO 役員、蔵の会

○20：10-20：20 休憩

④　20:20-20：50 カフェ、ブティックホテルなど、歴史的建造物の現代的な利用法。
磯野哲郎：財団法人国際開発センター　主任研究員

⑤　20:50-21:20 住民参加のまちづくりの仕組と事例／建築の参加のデザイン事例
連健夫：建築家、日本建築まちづくり適正支援機構代表理事

⑥　21:20-21:50 学生から見るヒストリックカイロの可能性(2018 年作品) と NOUH へのアドバイス
布野修司：日本大学教授

○　21:50-22：00 クロージング、ハイディ・シャラビー博士、サラー・ザキー教授、岡田保良（国士舘大学）
（各講演は 20 分、質疑応答は 10 分）

※日本からの傍聴参加者への留意点
・当講演会は、日本人専門家がエジプト行政関係者に対して行うもので、当会での質疑応答はエジプト行政関係者からになります。日本からの傍聴参加者の質疑についてはチャットにご記入ください。後ほどご回答させていただきます。
・オンライン入室後は、音声及び画像はミュートでお願いします。
・入室された方の記録のために、名前と所属のご記入をお願いします。
・英語の通訳が入ります。ZOOM のお聞きしたい言語ボタンをご利用ください。

■ZOOOM 招待 URL は以下の通りです。
https://us06web.zoom.us/j/84295619995?pwd=MkxmbG5aeCtnODRvSk16cE1XbU1vUT09
パスコード 585460 会議 ID：842 9561 9995

②日本側専門家からの事例・情報

１．中東都市における歴史地区とそこから学ぶこと／時間と空間の集積（深見奈緒子）

私は、イスラーム、特に中東、インド、中央アジアなどのイスラーム建築と都市の歴史を研究しています。今日は、中東の歴史的街区を保全するために、今までの歴史的蓄積から学べる点についてお話ししたいと思います。歴史都市カイロの魅力は、歴史的建造物がよく残っていることに加えて、複雑な街路網が、建物の新陳代謝はあっても概ねその形を維持しているところにあります。

右図は、赤い部分がエジプト誌に記載された古地図で、黒い部分がニコラスワーナーの現代地図ですが、多くの部分が一致しています。

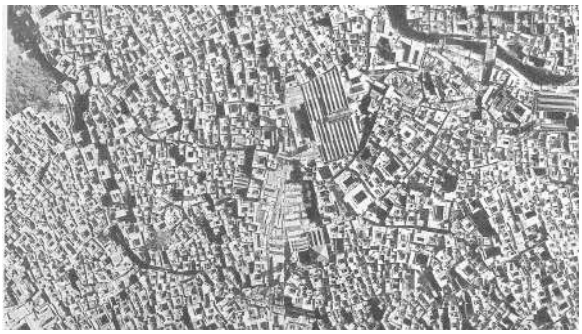
右の写真は、スーク・シラーハ通りのバイトヤカン前の光景と、イルゲイ・ユーズフィー・モスクを見たところで、ともに19世紀末の写真です通りの太さが一定でなく、そこかしこにポケットのような空間や出窓の日陰を作っていることがわかると思います。また、ファサードが出窓や持ち送りを用いて、変化の中に統一を作り出していることもその魅力の一つです。

今では、高い建物など変化はありますが、道はそのままです。また、歴史的な建物は維持されています。

下図右から2番目のサラー教授が関与したプロジェクトでは、昔の雰囲気が戻ってきています。また、下右端のサビール・クッターブ・コーカリアーンでは修復によって随分美しくなりました。

全てを昔に戻すことは無謀なことですが、このような遺産を維持しながら現代生活に合わせてさらに魅力的な街にしていく方法を考えることが、私達の仕事だと思っています。

エジプト、アラブの人々に、東方の島国日本からきた私が、イスラーム建築の魅力をお話しするのは場違いかもしれません。今回のお話では、どのようにして右図のような不思議で魅力的な都市が作られ、どのように維持されてきたのかをお話しすることで、今後の歴史都市保全政策のヒントになればと考えています。



どのようにしてこうした形態が生まれてきたかという点をお話しします。初期イスラーム時代には、征服都市すなわち既存の都市をアラブ軍が征服してそのまま用いる場合と軍営都市があります。ダマスクスやアレッポのようなグリッド都市や、アフラシアブやレイのような非定型都市もありました。ところが、アラブ軍が作った軍営都市は整形な都市が多かったようです。

Afrasiab, pre Islamic to 13c.

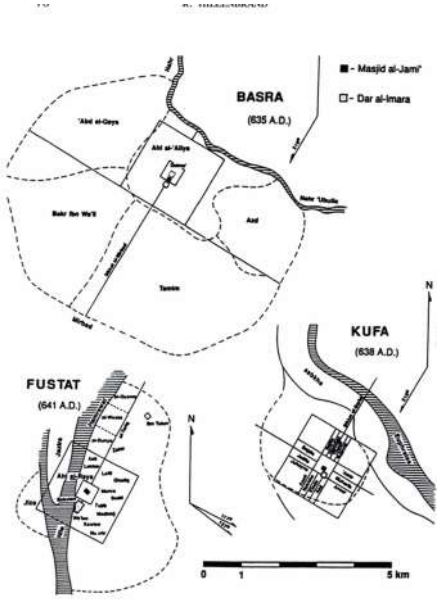
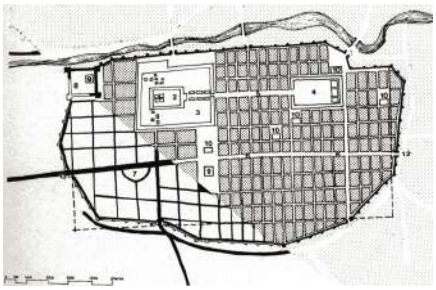


Fig. 4. Hypothetical overall town plans for the *amsar* of al-Basra, al-Kufa and al-Fustat (after D. Whitcomb, "The *Mîr* of Ayla: Settlement at al-'Aqaba in the Early Islamic Period")

Early Islamic Misr by Hillenbrand

Anjar in Lebanon

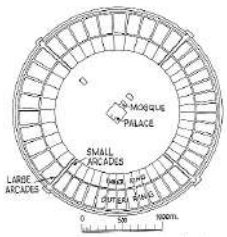


Damascus, Roman period

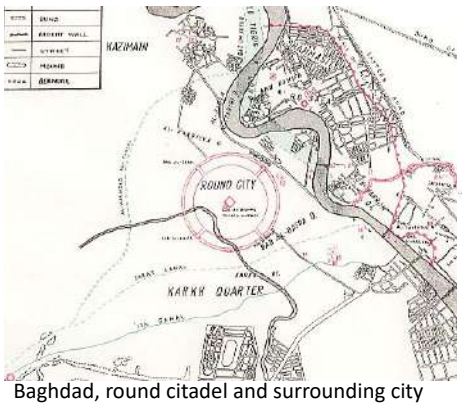
Aqaba in Jordan

Early Islamic small city

10 世紀頃までは、バグダード、カーヒラ、マディーナザフラーなど宮殿都市は、一般市民の住む市街とは別に、統治機能を担い帝国の表象となりました。これらとは別に一般市民が住む非定型な都市が共存しました。

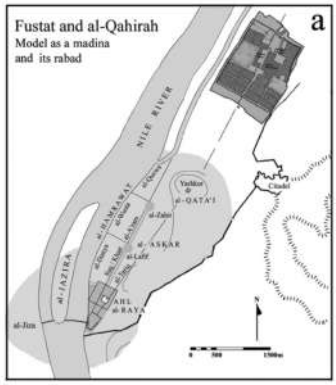


Palatial city



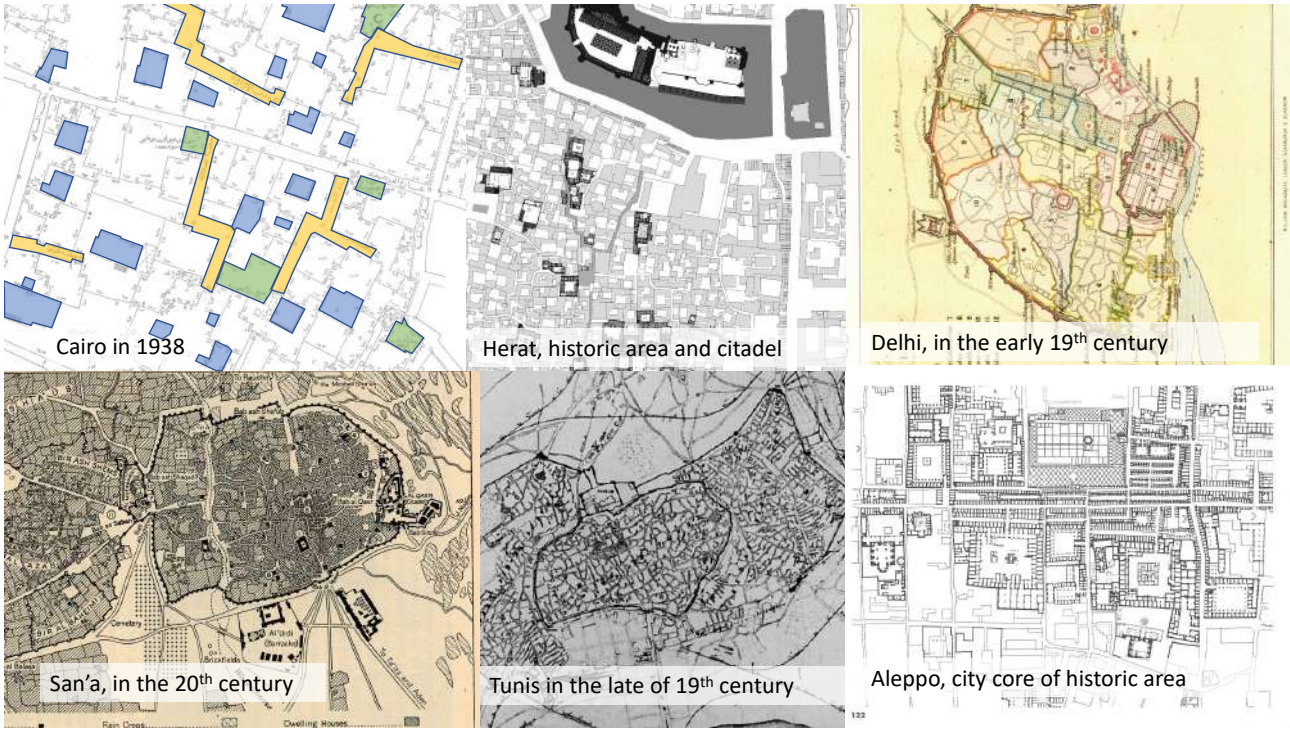
Baghdad, round citadel and surrounding city

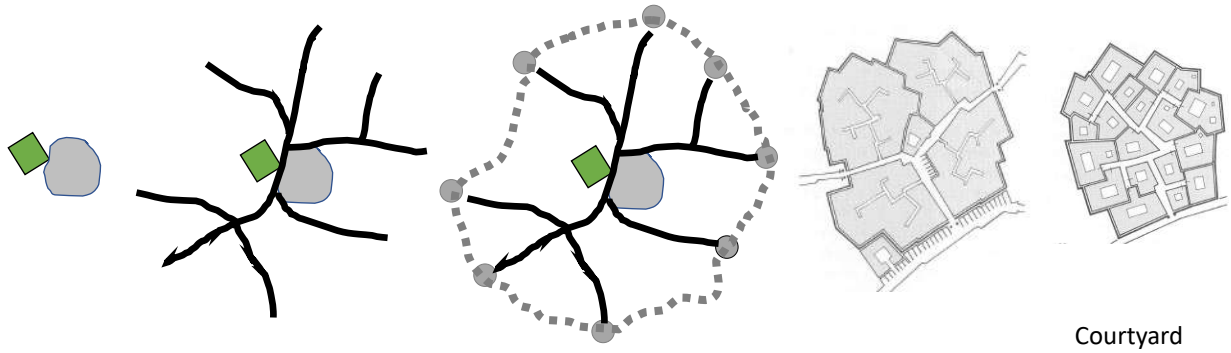
Cordoba and Madina al-Zahra



Fustat and Qahirah

11 世紀以後になると下図にあげたような非定型都市の傾向が強まりますこの状況は 20 世紀初頭にいたるまで持続し、継続性という歴史的蓄積がこのような一見有機的にみえる都市を熟成させたことになります。





Religious center
Market

Main street

City wall and city gate

Quarter(hara) as residential areas and their public facilities

Courtyard dwellings and cul-de-sacs to achieve tight living quarters

Bases of sovereign (palace;residences) → tend to be away from city centres

Political projects → water projects, religious donations

旧市街を読み解くための簡便な観点として、以下の5つを指摘したいと思います。

①宗教的中心と市場

②主要街路

③市門と市壁

④居住区域としての街区とその公共施設

⑤稠密居住を達成するための中庭住居と袋小路

それに加えて、為政者の拠点が中心から離れたところにあり、彼らは水事業や宗教的寄進をすることによって都市に間接的に関わってきたという点が挙げられます。

安定性を維持するための構造とは、乾燥地域という地理的環境と中世から近世という歴史的環境を基盤に育ったものです。そこでは、ムスリムの統治者の元でイスラーム法による、土地所有システム、ワクフシステムが機能していて、モスクやマドラサなどの宗教施設とハンマームやウィカーラなどの世俗施設を同梱し、拠点的な開発がなされました。それを可能としたのは都市の支配者が遊牧系の出自であって、ハーラや工人集団、スーフィーコミュニティなどに属する街区住民の自治が図られていたからではないでしょうか？

先ほども申しましたように、全てを過去に戻したいというわけではありません。過去の文明が築いた遺産を、できるだけ活用しながら、その利点を次世代に伝えていくことが、重要です。と同時に、今後連続講義で話に登りますが、過去の文明が築いた遺産をきちんと管理運営することによる経済効果も見込まれます。

今までお話ししたシステムの中で、ワクフシステムにおける宗教建築と世俗建築をつなげて考え、そこから上がる収益を地域維持に使い、公共の誰もがアクセスできる施設を充実させるという点は大いに利用できる側面です。

下図は、ダルブ・アフマルの歴史的建造物をプロットしたものですが、こうした建造物が相互に経済的関係性を持ちながら、住民のサービス、あるいは旧市街観光に役立てていくシナリオが求められています。

安定性を維持するための構造

◆乾燥地域という地理的環境
◆中世から近世という歴史的環境

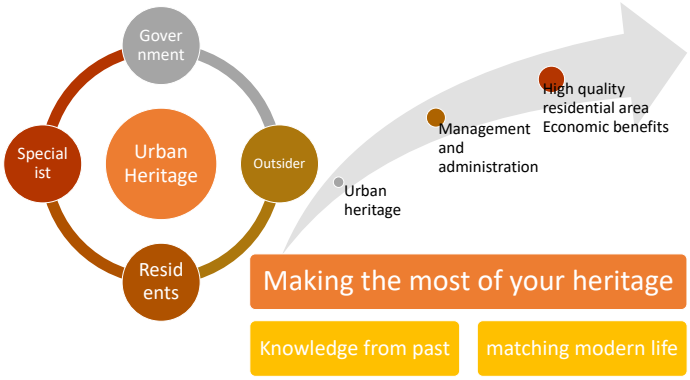
◘イスラーム法

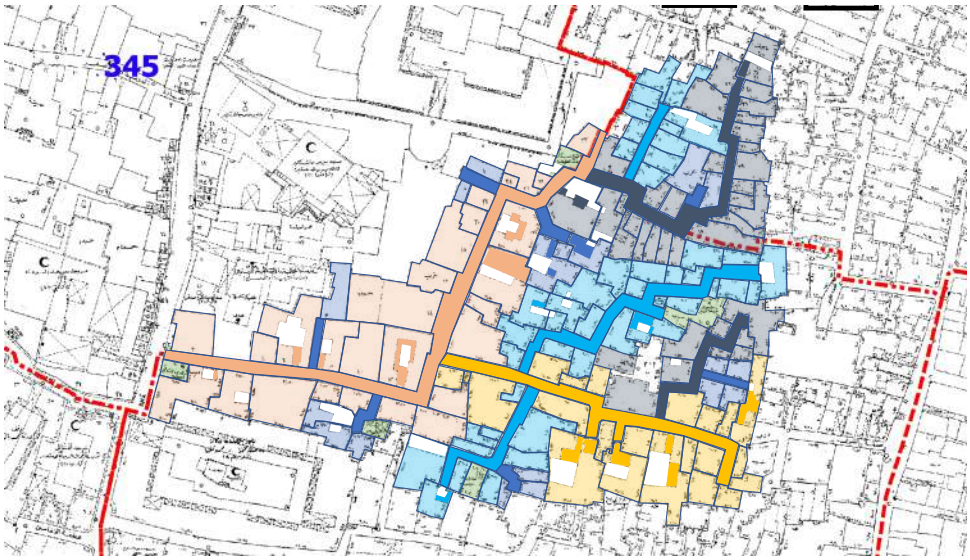
➢土地所有システム
・不動産は神の所有、使用権が個人に属する
・相続によって均等分割、土地使用権と建物使用権は別
・細分化する所有

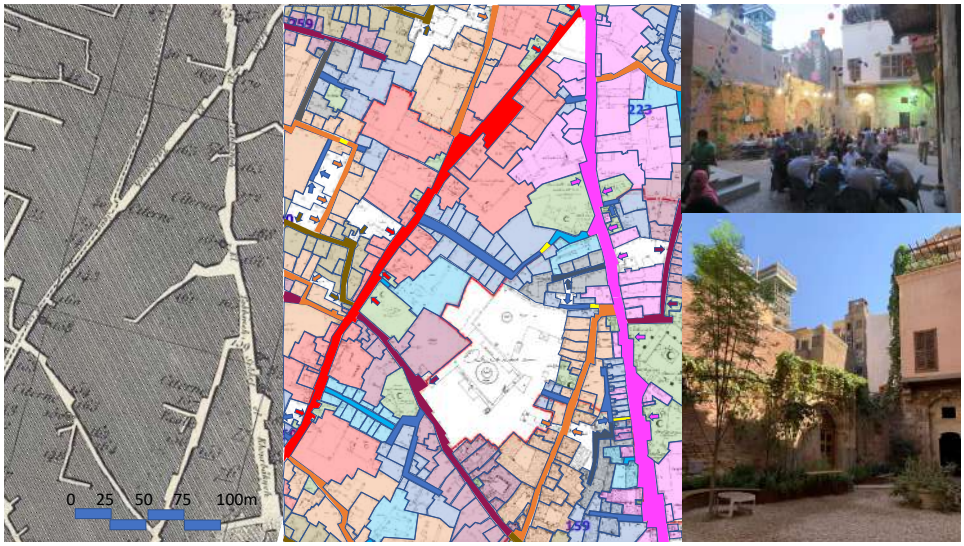
➢ワクフシステム
・公的建造物を喜捨によって維持
・所有権の移動を停止する
・相続による分割を防ぐ

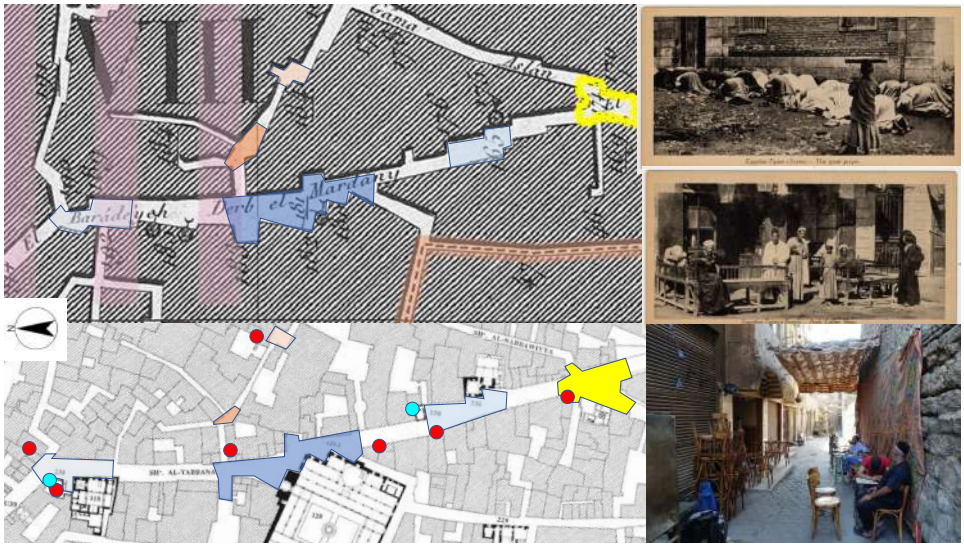
→宗教施設とワクフ財を同梱した都市の拠点開発

✓都市の支配者が遊牧系の出自
街区住民の自治









もう一つ、快適な居住環境を維持するためのコミュニティのための街区（ハーラ）や袋小路などは、今後の歴史都市保全に役立つ点ではないかと思います。一番上の図はガマレイヤの大きな袋小路を、1938 年の地図に落としたものですが、袋小路の中にも小さな塊があることがわかります。

袋小路だけではなく、通り抜け街路にもコミュニティがあります。上から2番目・左のナポレオン地図に表された街路名を、中央の 1938 年の地図にたどることができます。中央の地図の白抜き部分は 1938 年の地図に両側の道路番地が記入してあるものです。中央地図の真ん中下の白抜き部分は、イブラヒム・パシャ・ヤカンの住宅ですが、こうした広大な住宅はプライベートな部分だけではなく、パブリックな役割をも果たしていました。それをまさに実行しているのは、左のアラー教授のバイト・ヤカンということができるでしょう。

細かな点になりますが、街路の歪みや歴史的建築の凹凸によって生じる小さな広場も、未来への活用性を秘めているように思います。一番下の図に示した小さな広場は、人々の集まるスペースになって、今でもアフワや金曜礼拝などに使われることもあります。

最後に、歴史的カイロには、大きな問題も山積しています。自動車交通、建物高さ、ゴミ問題、安全性の確保、インフラの整備、貧困居住区などなど。こうした問題点を解決しながら、世界に誇れる歴史都市カイロの遺産とともに居住する道筋を作っていけることを希望します。

2. 都市における活動のための公共空間；街路と伝統的な喫茶店（宍戸克実）

こんにちは皆さん。私の名前は宍戸克実です。日本のカレッジで建築を教えています。大学生の時にトルコに留学して、伝統的なアフワに興味を持ちました。今日は、日本人の私が、エジプト人のみなさんへ、カイロのアフワについてプレゼンテーションすることに挑戦します。

皆さん、カイロのアフワに、どんなイメージを持っていますか？良いイメージもあれば、悪いイメージもあるかもしれません。でも、アフワはとても不思議な場所だと思います。

アフワは、家でもなければ、仕事場でもありません。でもアフワでは、家のようにくつろぐし、仕事の話をすることもあります。アフワはまるで、街の中にある、家のリビングや客間、仕事場のような場所だと思います。

まず、カイロのアフワの話をする前に、他の国の伝統的なアフワを紹介します。

右の地図に示された国の都市のアフワです。もちろん、カイロにも、これらの国々にもスターバックスのような現代的なアフワはたくさんあります。今回は、伝統的で庶民的なアフワだけを紹介します。

右図はトルコのアフワです。イスタンブルもカイロと同じように、アフワの歴史はとても古いです。やはり、たくさんのアフワがあります。イスタンブルの冬は寒くて雨も降るので、店内に客席がたくさんあります。

右図は、シリアとイランです。カイロと同じようにシーシャを吸っているのが見えます。アフワの数は、カイロやイスタンブルほど多くはありません。

右図は、タンザニアとケニアです。街の至る所にBarazaというマスタバ（ベンチ）のようなものがあるのが特徴です。アフワはこの街路や広場のマスタバを使って営業しています。

右図はインドのです。インドのアフワは、ほとんどが露店タイプです。露店の周りに座るところがないので、立って飲みます。でも私は、カイロのアフワのように、座ってお茶を飲むのが好きです。

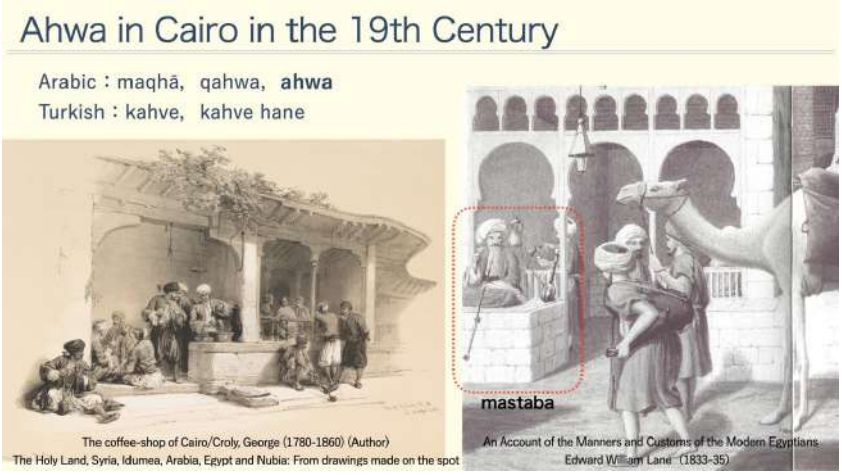
現在、ヨーロッパにも、アメリカにも、日本にも、世界中にアフワがあります。現代的なアフワも、伝統的なアフワも、それぞれの地域の特徴があります。しかし、アフワの起源は、ここ、アラブです。カイロのアフワは、世界で最も古い歴史があります。そして、現在でも、カイロ旧市街には、伝統的で庶民的なアフワがたくさんあります。ちなみに、アラビア語ではマクハー、カフワと呼ぶこともありますが、エジプトではアフワが一般的です。トルコ語ではカフヴェ、カフヴェハーネと呼ばれます。19世紀のレーンの絵には、石造のマスタバの上に座ってシーシャを吸い、室内でコーヒーを淹れるアフワが描かれています。

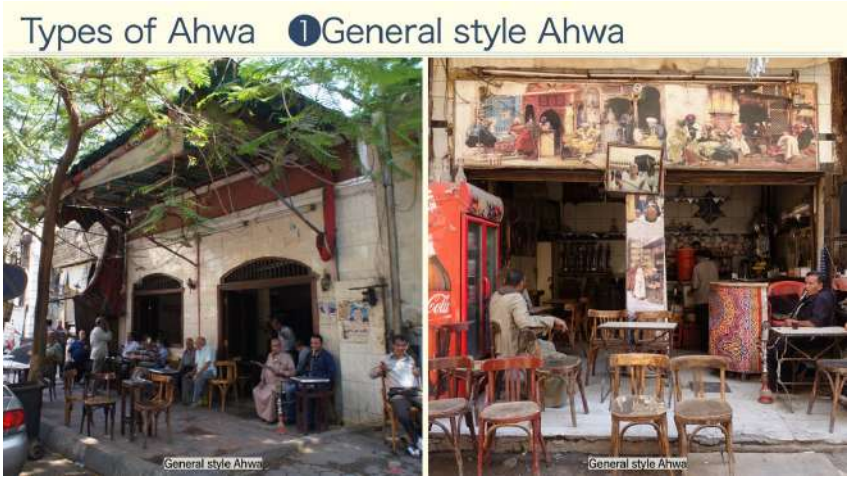
アフワの形式は、大きく３種類に分けることができます。

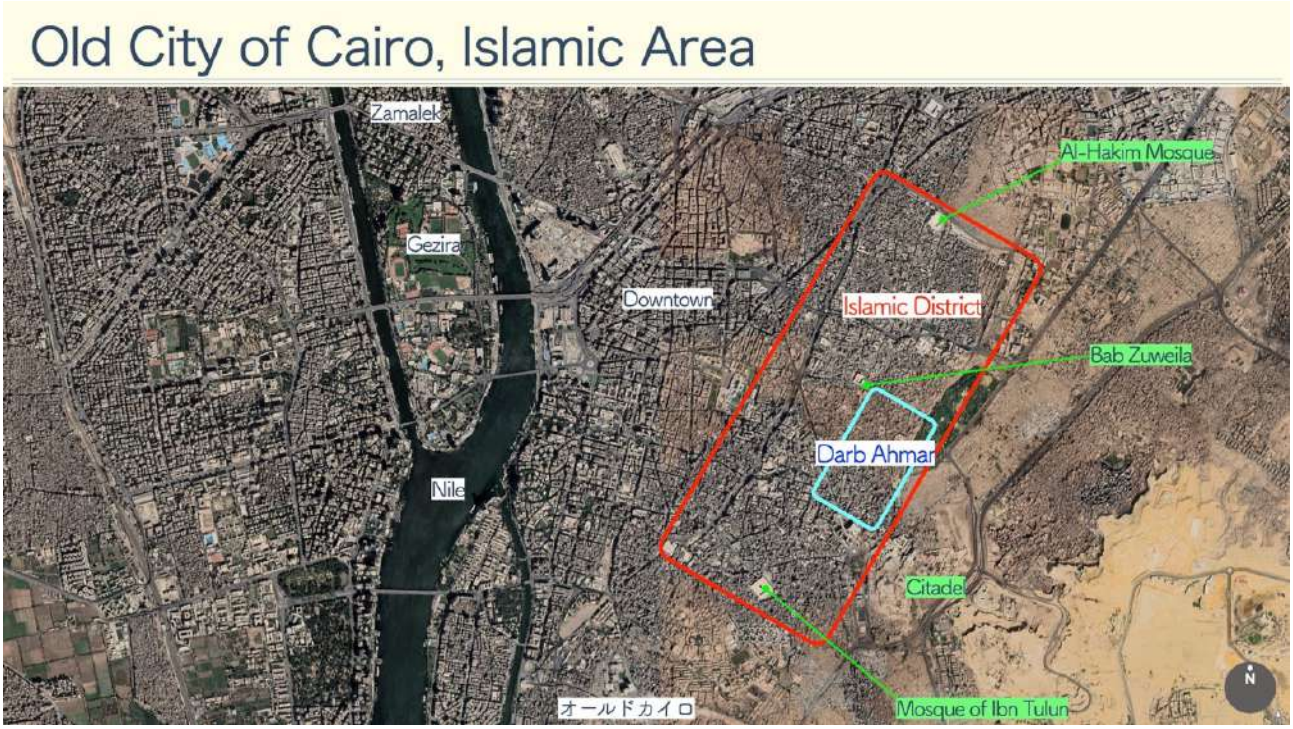
まず、上から２番目の図が、一つめの形式です。店内に客席があって、外にも客席があるのが、一般タイプのアフワです。Souq Silahにもこのタイプがたくさんあります。

次に上から３番目の写真がストリート形式です。店内に客席がなく、客席は街路や広場などの屋外にしかありません。とても開放的で、私のような外国人や観光客でも座りやすいアフワです。

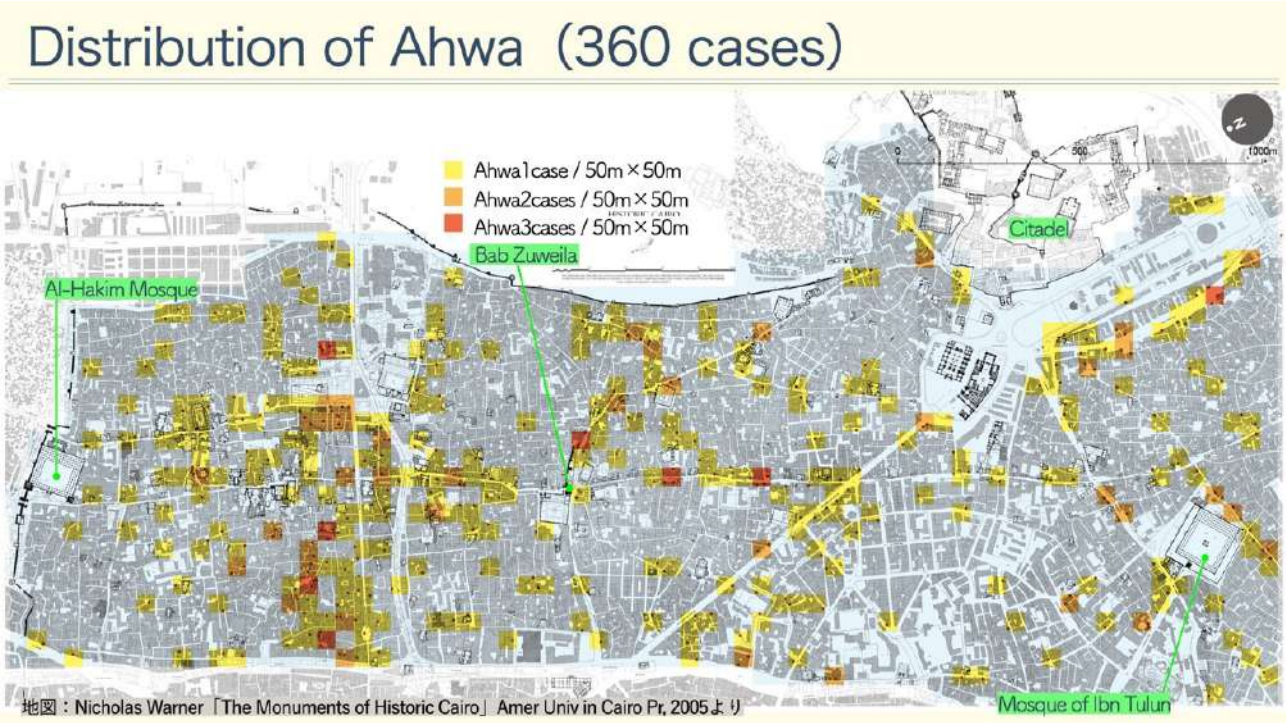
最後に、一番下の図は、デリバリー形式のアフワです。建物の隙間に店を構え、客席もありません。配達が専門なので、とても小さなアフワです。





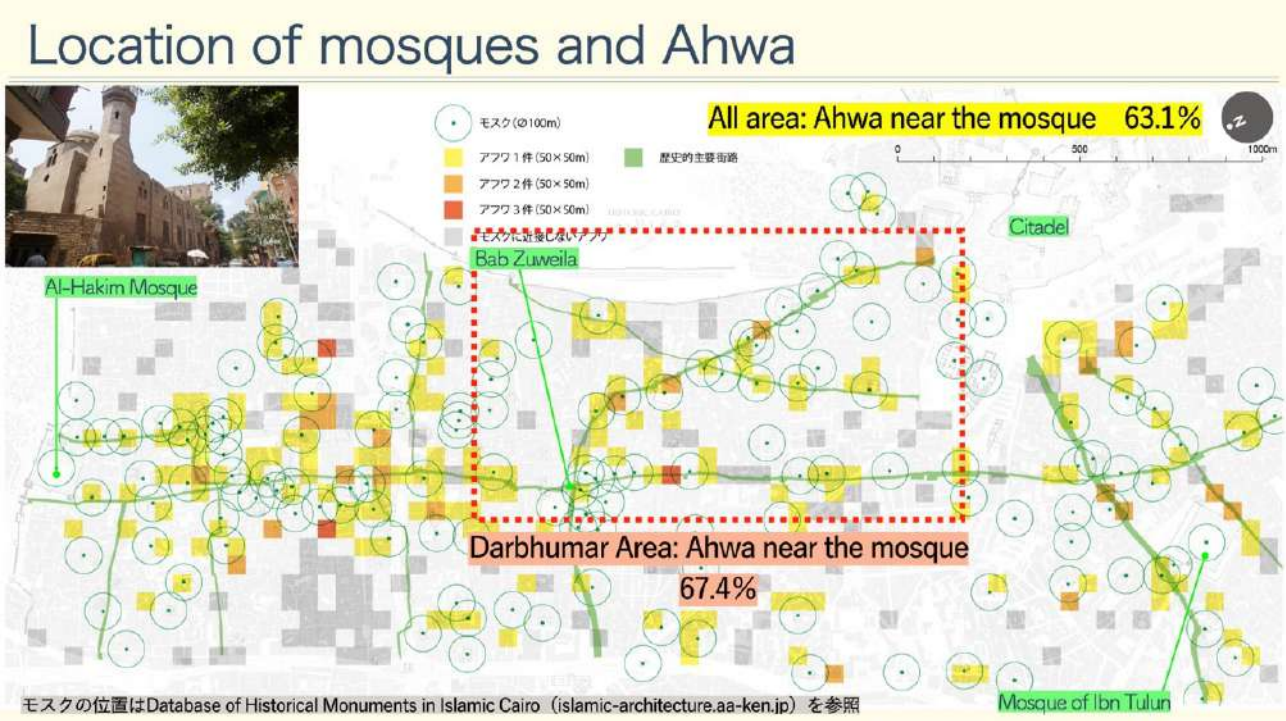


では、次に、カイロ旧市街全体のアフワを紹介していきます。こちらは、カイロ全体の地図です。赤い枠が、旧市街のイスラーム地区です。水色の枠が、ダルブアフマルです。私たちは、この赤い枠の中のアフワを数えました。



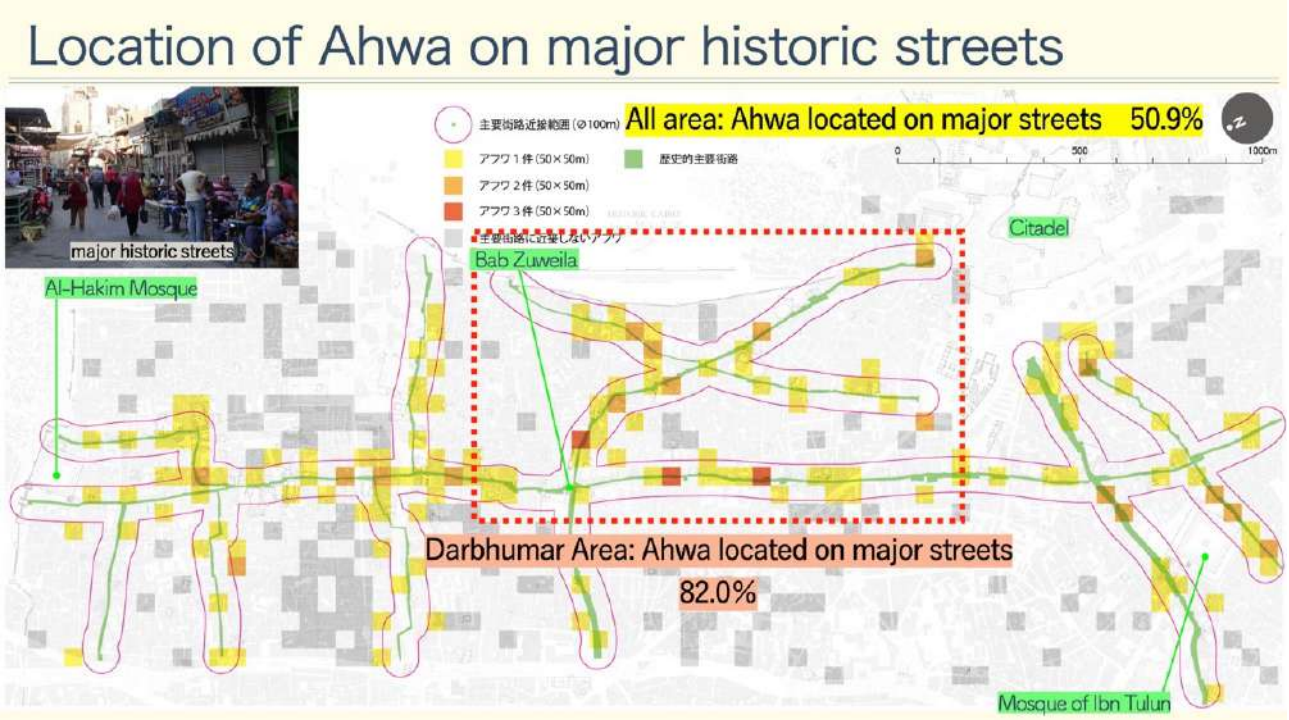
その結果が、こちらです。地図の向きが変わりました。全部で約 360 件ありました。
おそらく、世界で最もアフワが多い都市だと思います。色の着いた四角は 50m×50m の大きさです。アフワの密度を色で示しています。

濃いオレンジ色の四角の中には３件のアフワがあります。薄いオレンジ色の四角の中には２件、黄色の四角の中には１件、のアフワがあります。



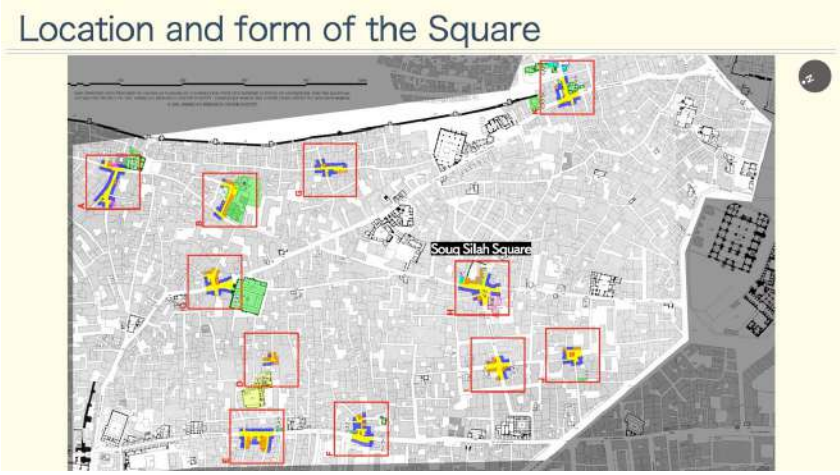
こちらの地図は、モスクに直径 100m の円を書きました。このモスクの円に含まれるアフワがどれくらいあるのか、調べました。赤で囲った範囲が、ダルブアフマルです。

この範囲の中では、67 パーセントのアフワが、モスクの近くにあることがわかりました。モスクの場所は、街の大切な場所です。街の大切な場所には、アフワがあるということを示しています。



では、次にこちらの地図を見てください。カイロ旧市街の歴史的に重要な街路を、幅 100m の範囲で囲みました。歴史的に重要な街路には、Souq Silah ストリートも含まれています。この範囲に、どれくらいのアフワがあるか調べました。

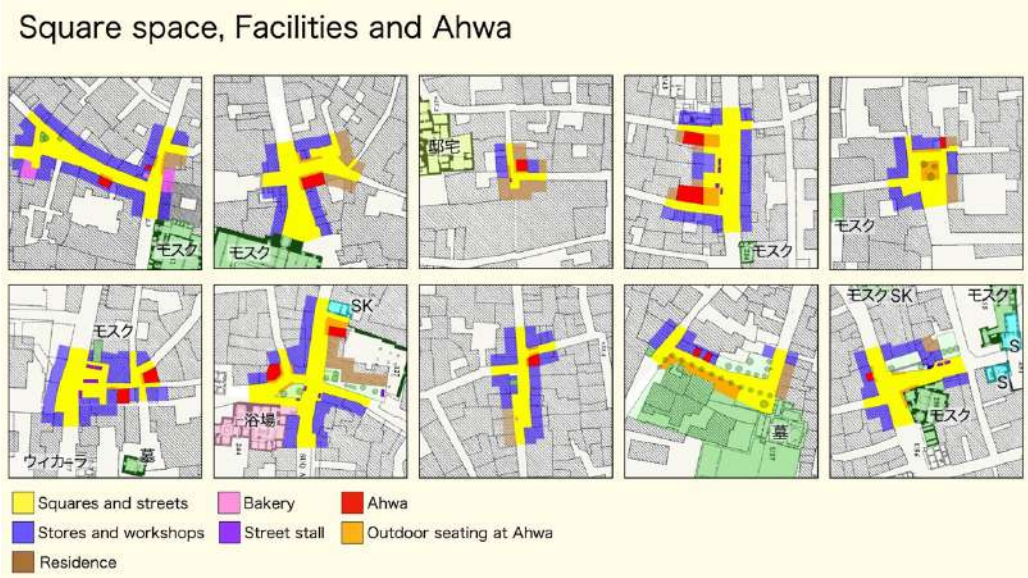
82 パーセントのアフワが、重要な街路に立地している、ということがわかりました。アフワは、歴史的に重要な街路にあって、さらに、モスクやスークと結びついていることがわかります。人々、物や商品、情報、が行き交う場所、そして、宗教的に重要な場所、街の大切な場所にアフワがあります。



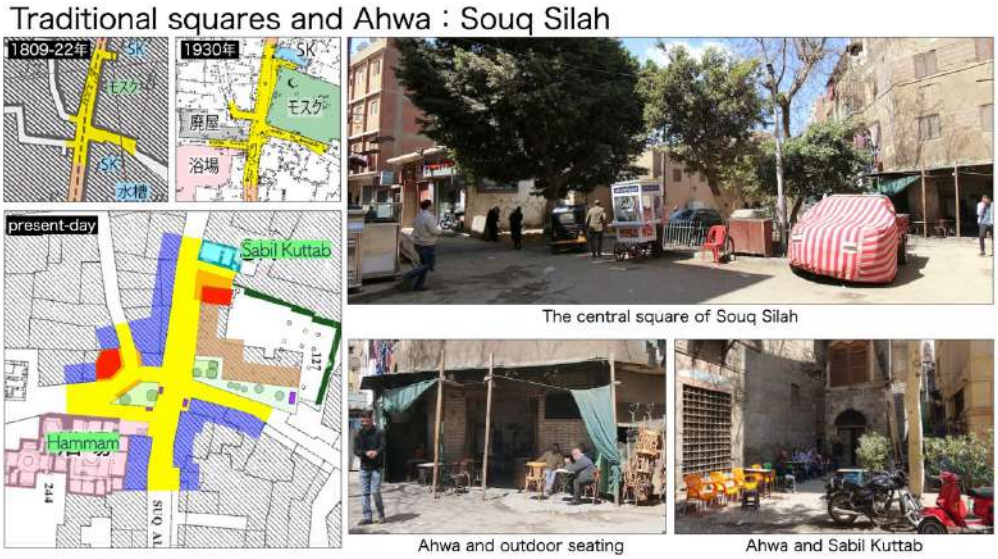
では次に、アフワがたくさんあるのは、どんな場所なのか見てみましょう。特に注目した場所がこちらです。これらは小さな広場になっている場所です。

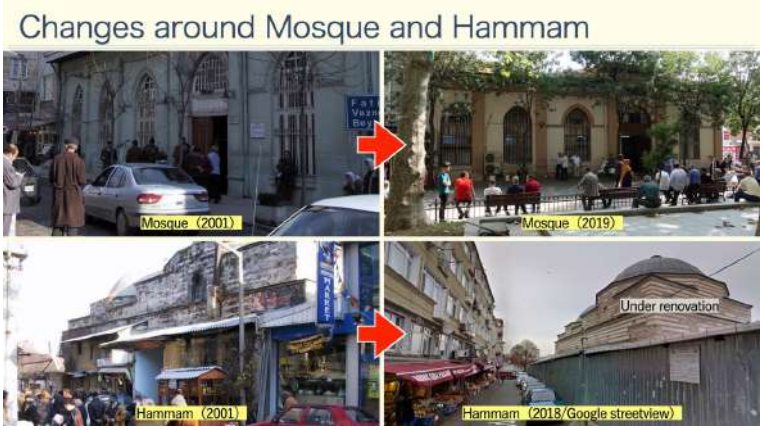
上から 2 番目の図が、一番上の地図の広場を拡大した地図です。黄色が広場、赤がアフワ、青が店舗、緑がモスクや霊廟です。黄色の広場は、街路が交差していたり、街路の一部が広くなっている場所にあります。また、モスクや霊廟、ハンマーム、サビールクッターブのような、歴史的建築物の周りにある不整形な小空間も、黄色い広場の一部になっています。

ダルブアフマルの広場は、街路やスーク、歴史的建造物と一体的な空間構成になっています。そんな場所に、アフワがあり、広場にアフワの椅子が並んでいます。こうした場所をもっと整備すれば、街全体がよくなるかもしれません。



では一番下の図で、Souq Silah の広場を見てみましょう。ここは、街路が交差していて、複雑な広場を形成しています。モスクだった場所やハンマーム、サビールクッターブもあって、その周辺の小空間も広場の一部になっています。街路は車が通りますが、こうした小空間は安全なので、アフワがあり、屋外に客席が並んでいます。こうした広場が、家のリビングや客間のような場所になれば、街はもっと良くなると思います。





では最後に、トルコのイスタンブル旧市街にある、カドゥンラル・パザルという地区の事例を紹介します。この地区は、トルコの南東部のシールトという街の出身者が多く暮らしています。南東部出身者が集まるアフワがたくさんあります。南東部の食材店やレストランもたくさんあります。

私がトルコにいた約 20 年前は、あまり整備されていない地区で、観光客はいませんでした。

しかし、行政が地区の魅力に気がつき、環境の改善に取り組みました。違法建築を撤去して緑地を整備し、道路を広場にしました。アフワやレストランの屋外客席を、広場に置けるようにしました。車の通行を制限し、広場を作ることで、買い物客や観光客がたくさん訪れるようになりました。

20 年前は、モスクの前は混雑した道路でした。ここも車の通らない広場になったので、モスクの前で人々が会話を楽しんでいます。この地区には、地域住民が使うハンマームもあります。現在は改修工事中ですが、このハンマームが地域の新しいシンボルになる予定です。現在この地区は、地域住民も暮らしやすく、買い物客や観光客もくる、魅力的な場所になっています。

今でもアフワはたくさんあって、南東部出身者が集う場所になっています。アフワは普通の風景ですが、街にとって、地域住民にとって、とても大切な場所です。Souq Silah も、女性や子供も暮らしやすく、歩きやすい街になれば、観光客も来たくなると思います。Souq Silah がそんな街になることを、私は願っています。

私の発表はこれで終わりです。ありがとうございました

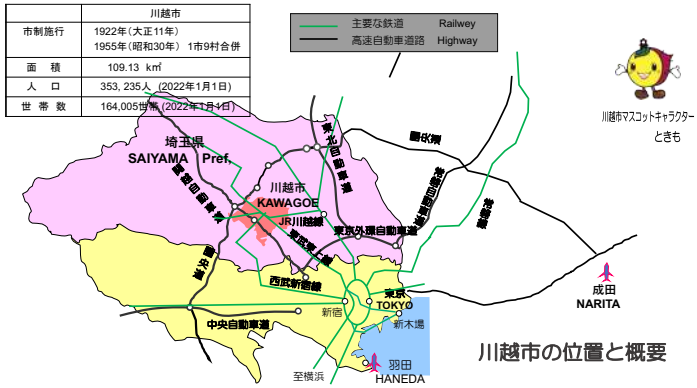
3. 川越の歴史的建造物の保存に向けた取り組みについて／街並とその現代的活用（荒牧澄多）

市民が主体的に関わって歴史的資産を活かしたまちづくりを進めている日本の川越の町について報告します。左奥に、日本のシンボルである富士山が見えています。手前の低い屋並が伝統的建造物群保存地区です。中央に、川越のシンボルである時の鐘が見えます。時の鐘は、時計がない時代、川越の町に時刻を知らせた鐘を突くために建てられた鐘楼です

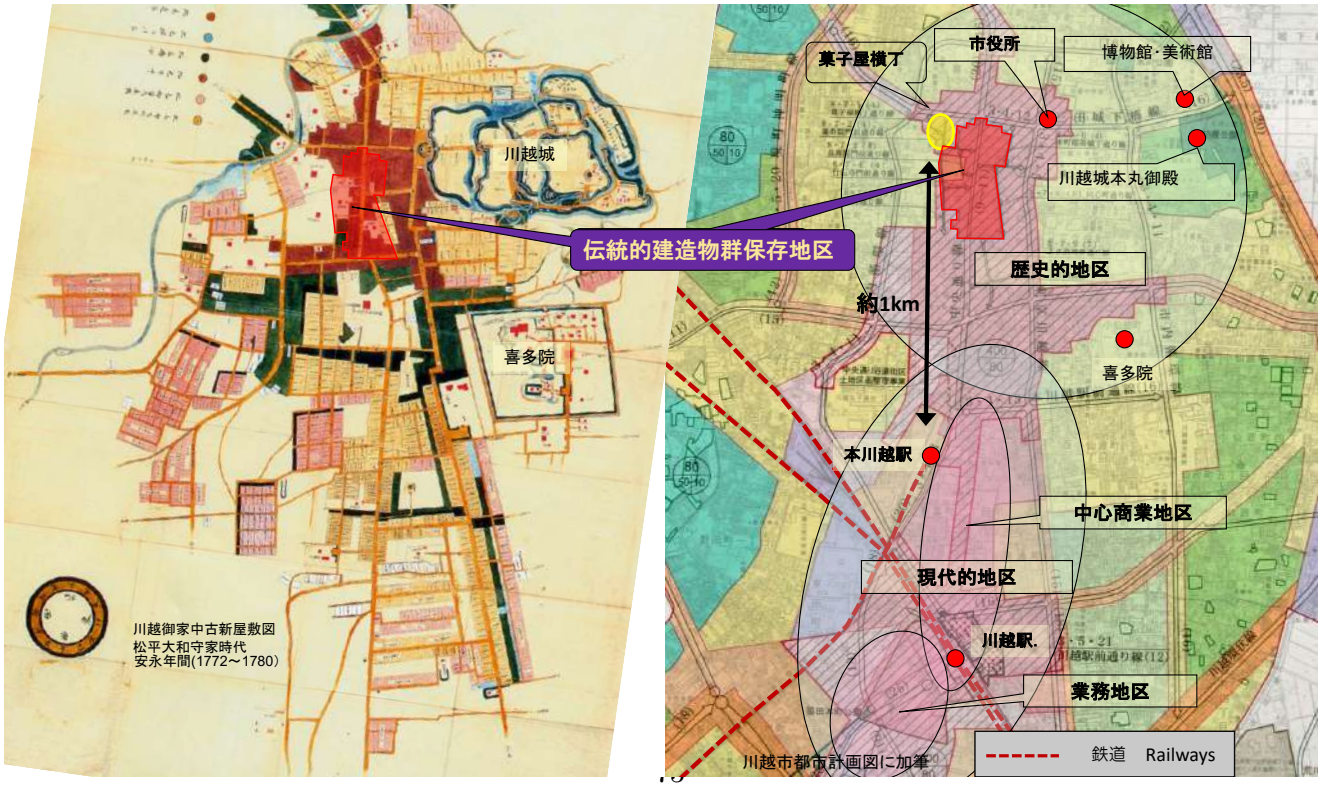
日本には、国の文化財保護法によって守り伝えられている伝統的な町並み保存地区が、現在 126 地区あります。下左図は、その位置を示したもので、川越は、日本の首都である東京にもっとも近い場所にある保存地区です。

日本における重要伝統的建造物群保存地区の分布

下図は東京との関係を示しています。都心から、さまざまな交通機関を使って約 1 時間の距離にあります。また、高速道路からのアクセスもよく　成田空港や羽田空港などの国際空港からも 2 時間程度の距離にあります。都市の規模は左上の表をご覧ください。面積は約 109 平方キロメートル。人口は約 35 万人です。



川越市の位置と概要



川越の中心市街地を見てみましょう（前頁下図）。左側は 18 世紀後半の地図、右側は現代の地図です。右側地図で、町の北側地区が歴史的エリア。南側地区が現代的エリアになっています。鉄道の駅ができた南側が近代になって大きく変わり、武家地から商業地に変わったほかは、商業地や住宅地などの土地の使い方は、近世の都市が基盤となっています。伝統的建造物群保存地区は赤いエリアになります。

市立美術館（奥）
と博物館（手前）

氷川神社
埼玉県指定文化財

菓子屋横丁

喜多院
重要文化財

川越氷川祭りの山車行事
UNESCO無形文化遺産

川越城本丸御殿（1848）
埼玉県指定文化財

東照宮
重要文化財

歴史的資源

それでは、伝統的な町並み以外の歴史的資源を見てみましょう（上図）。喜多院や東照宮という近世の江戸幕府（徳川家）ゆかりのお寺や神社。ともに国指定の重要文化財です。氷川神社は、中央の写真の祭礼の中心となる神社です。ちなみにこの山車は、私の住んでいる自治会の所有です。右下の写真に見えるようなお城の御殿建築も残っています。右上の写真の菓子屋横丁は、町並み保存地区に隣接する、子供向けの昔ながらのお菓子を売るお店が、集まっている小路です。川越祭りは、ユネスコの無形文化遺産に登録されています。この祭りは、川越最大の祭りで、町の人や職人、近隣農村部の方など、近世の川越の経済圏の縮図ともなっています。コロナ禍前は、祭礼の二日間に約 100 万人の見物客が訪れていました。

再開発ビル
1990竣工

クレアモール

西武新宿線本川越駅　（1991 竣工）

川越駅東口
JR川越線・東武東上線

商店街背後のマンション群

現代都市川越

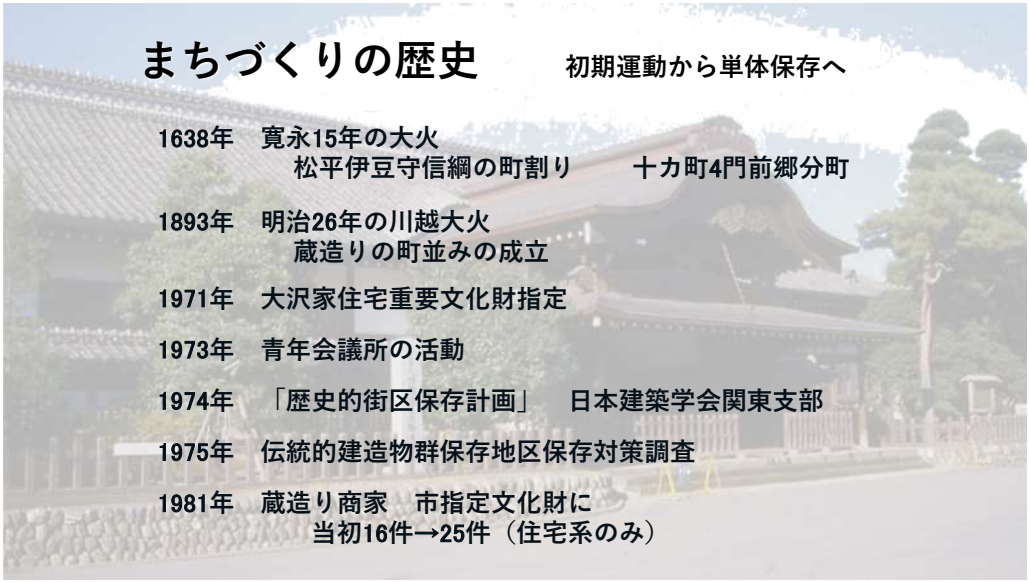
撮影　川越市

川越駅西口
JR川越線・東
武東上線

ウェスタ川越

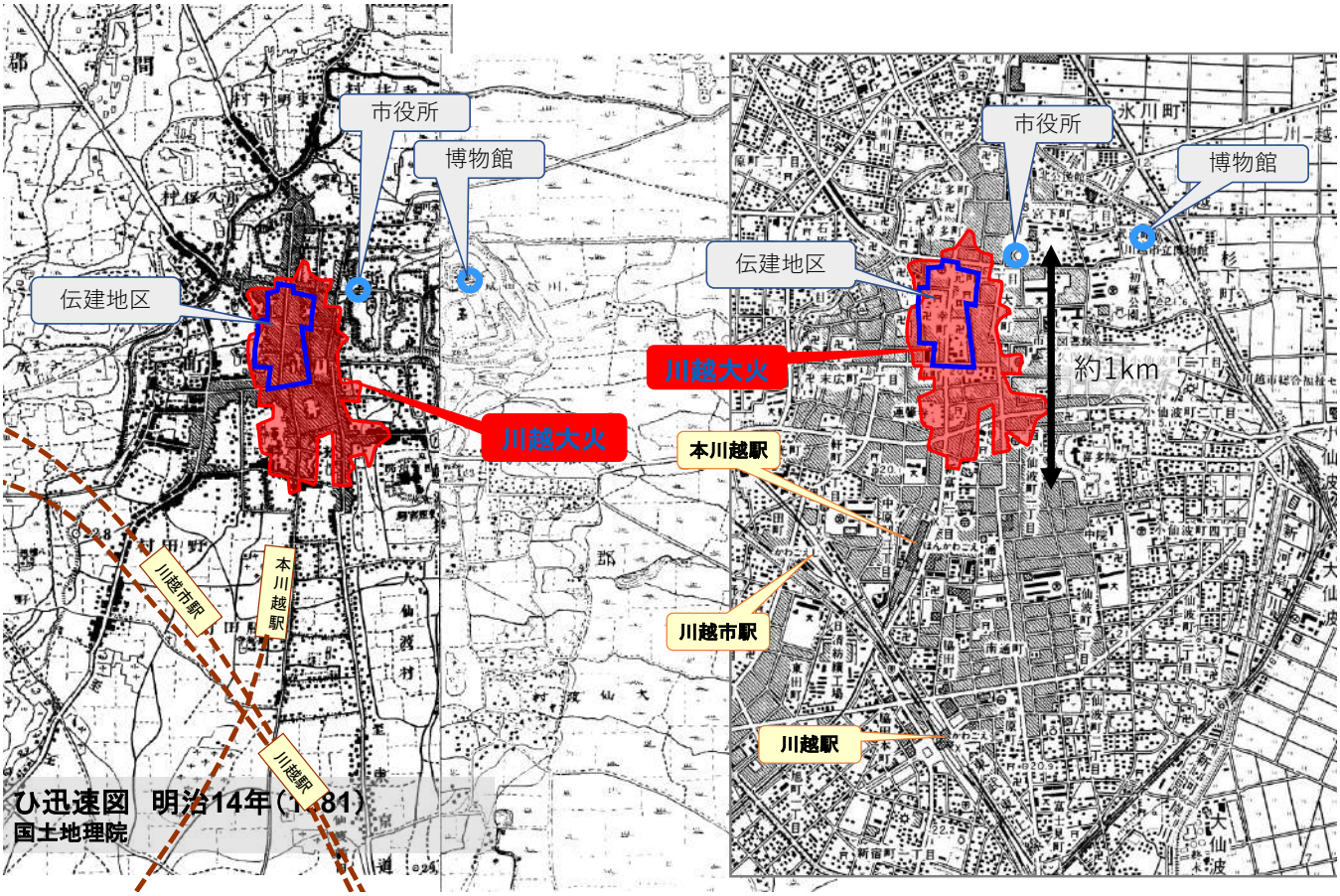
民間資金による商業施設

一方、鉄道駅のある南側の市街地エリアはというと、ごらんの通り（前頁下図）、高層のビルが立ち並ぶ、現代都市です。中央上の写真の商店街は、コロナ禍以前に撮ったためマスクはしていませんが、今も人出は変わっていません。地方都市の中でも最も栄えている商店街です。この地区では、今も高層住宅の建設が続いています。



今のまちづくりにつながる歴史を簡単にご紹介しましょう。1457 年にお城が築かれます。背景の写真ですが、19 世紀半ばに建て替えられた川越城の本丸御殿です。1638 年に大火があり、何枚か前のスライド（75 頁下右図）でお見せした町の都市計画の基礎がつくられます。そして 1893 年の大火で、今の町並み景観が生まれます。

下図の左側は、1881 年の地図です。右側は、現代のものです。赤いエリアが火事で焼けてしまいます。当時の川越の町の全戸数の 40%弱が焼失しました。しかし、中心商店街の面積からするとその 60%近く焼失したのではないでしょうか。この大火の後に復興した町並みが保存地区になります。青線で囲んだ部分です。



1893年の大火後の蔵造りの町並み

1900頃

1893 年の大火から数年たった川越の町並みです。「蔵造りの町並み」と言われています。この蔵造りという建築様式は、木の軸組構造の上に、何回も泥を塗り重ねて作ります。1923 年の関東大震災より前の東京は、このような建築がたくさん建っていましたが、地震とその後の火事、そして戦争によってすべて失われてしまいました。川越には、日本の首都東京の歴史的景観を残す町としても有名です。

まちづくりの歴史

まちづくり運動転換期（保存から活用へ）

1983年　川越蔵の会発足（2002年NPO法人化）

1、住民が主体となったまちづくり
2、北部商店街活性化による景観保存
3、町並み保存のための財団形成

自主的ワークショップ

1986年　川越一番街活性化モデル事業調査報告書
（コミュニティマート構想）
一番街商店街による歴史的町並みを活かした商店街再生構想

87年　一番街商店街町並み委員会発足

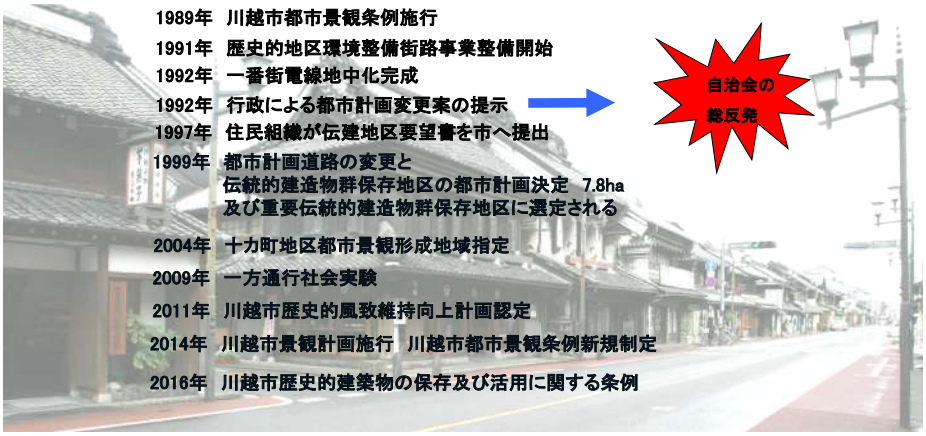
88年　一番街町づくり規範制定

歴史を活かしたまちづくりの開始

さて時代は下りまして。1971 年に 1794 年に建築された大沢家住宅が国の重要文化財に指定されます。川越の人にとって、身近すぎてその価値がわからなかった「蔵造り」が国の文化財として指定されたことによって、その価値に気づくことになります。1973 年には、外部の専門家たちからの示唆もありましたが、川越青年会議所が、蔵造りの町並みの保存方法を考えます 1974 年には、日本建築学会が川越の歴史的な町並み保存についてのアイディア設計競技会を開催します。1975 年には国の補助金をうけて、町並み保存に関する調査を行います。しかし住民の賛同を得ることができなかったので、保存地区にはなりませんでした。1981 年には、町並み保存地区にできなかったので、川越市が独自に文化財に指定し守るようになりました。

川越のまちづくりが市民が主体となっていく過程をみてみましょう。1983 年に蔵造りの街並みが残る地域の若手商店主や、蔵造りの町並みに関心を寄せる広範囲な市民、そして専門家が「川越蔵の会」を結成します。そこでは、住民が主体となったまちづくりを標榜にかかげ、市民と専門家が一体となって自主的にワークショップを始めます。そこで議論されたことを、ワークショップに参加した商店主たちは、商店街に持ち帰り、国の補助を受けながら、商店街にふさわしい方策を検討していきます。そこで生まれたのが、自分たちで町並みをコントロールする組織「町並み委員会」とまちをよくしていくためにルールである「まちづくり規範」です内容は後でご紹介します。ここから、歴史的資産を活かした住民主体のまちづくりが本格的始まります。

まちづくりの歴史　町づくり運動の熟成



これに呼応するように、川越市役所もいくつかの方策を導入します。町の景観を守る条例をつくり。細街路の路面整備をします。日本の町では、道路の上空に多くの電線が張り巡らされていますが、それらを道路の下に埋めました。町がきれいになるにつれ、多くのお客さんが来るようになりました。そこで市役所は、町並みを守る方策を住民に提示したのです。しかし、住んでいる方々から反発を受けました。その理由は、一つには、市役所からの一方的な提示であり、住んでいる人の意見が反映されていないというもの。もう一つは、お客さんが来るようになって商売をしている人はいいのですが、商店の金儲けのために町を守るのはおかしいというものです市役所は、自分たちの提案を撤回することになりました。

まちづくりの歴史

十カ町会の住民自身による合意形成

93～97年　十カ町会ワーク第1弾

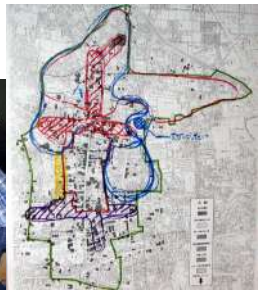
↓

伝建地区指定へ向けて合意形成

02～04年　十カ町会ワーク第2弾

↓

景観形成地域指定へ向けて合意形成



市役所の提案を撤回させた住民ですが、このままでは、自分たちが住み続けたい町にならないと考えた住民がいました。そこで、地域の基本的なコミュニティである自治会の方々が、まちづくりを勉強する組織を作ります。十カ町会です。当初 11 の自治会、のちに 12 の自治会の集まりになります。そこで、町を再認識することから始まり、どうすれば、歴史を感じながら住み続けられるまちができるかを議論していきます。

その結果、自分たちの町で一番大事にし、後世に伝えていかなくてはならない地域を国の保存地区にして、その周辺は、川越市の方策を取り入れた緩やかなまちづくりをしようということになりました。その後、歴史的町並みの中心部は、国の町並み保存地区になり、周辺部は歴史を生かしながらも緩やかな規制がされている地区となりました。この地区のメインストリートは、車と人が複雑に交錯する道です。まるでスークシラーハみたいに。あまりにもあぶないので、自動車を一方通行にする実験も行いました。しかし、住民の合意を得られず、まだ、実現していません。その後、川越市は、歴史的町並みを維持していくためにいくつもの方策を導入しつつ、今に至っています。

では、先ほどお話に出てきた「町並み委員会」について説明いたします構成メンバーは、商店街や自治会などの地域に住んだり、商いをしている方々の代表。次に、専門家。大学の先生や都市計画コンサルタンツなど、都市計画や建築の歴史の研究者です。そして、行政は基本的にはオブザーバーとして、保存地区の建築行為を許可する時

町並み委員会

伝統的建造物群保存地区内のまちづくり検討機関

構成　1　商店街、自治会などの地域の方々（主催者）

2　研究者、専門家

（都市計画や建築史の研究者、　まちづくりコンサル）

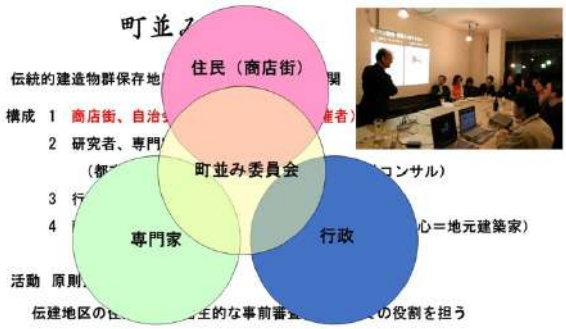
3　行政（都市景観課、商工振興課）オブザーバー参加

4　商工会議所　NPO法人川越蔵の会（デザイン部会が中心＝地元建築家）

活動　原則月1回

伝建地区の住民による自主的な事前審査機関としての役割を担う

の有力な判断材料にします。最後に、商工会議所やまちづくり市民団体である「川越蔵の会」のメンバーです。この会は、保存地区内の行為に市役所が許認可する前の、住民自身による審査機関となっています。ここでの決定は、強制力はありませんが、許認可権限をもっている市役所では、もっとも重要な参考意見としています。また、コミュニティとしての強制力が無言のうちに働いているような気がします。



右上図のような関係です。

続いて町を作っていくためのルール「まちづくり規範」についてお話しましょう。この町で、長い歴史の中で培われてきた住まい方のルールを簡単な箇条書きで表現し、それを現代社会に応用することによって住み続けられる町を作ることを目的にしています。理念として

町づくり規範

全67項目
都市としての位置づけから看板まで

長い歴史の中で培われてきた住まい方のルールを簡単な箇条書きで表現し、それを現代社会に応用することによって、歴史を生かした住み続けられる町をつくる。

理念は次の３段階からなる

① 町並みの規制は、ファサードデザイン　にとどまるべきではない。

② 単なる規制、制限にとどめるべきではなく、望ましい形態を示す。

③ 個々の建物に対するデザインから地区の都市としての位置付けまで考える。

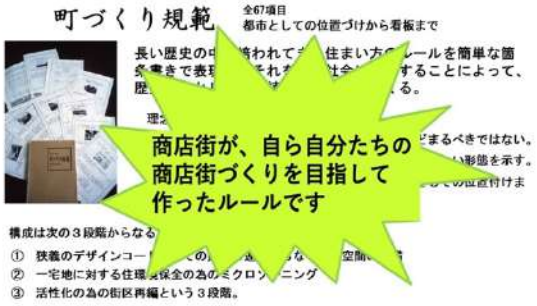
構成は次の３段階からなる

① 狭義のデザインコードとしての建物の連続からなる街路空間の整備

② 一宅地に対する住環境保全の為のミクロゾーニング

③ 活性化の為の街区再編という３段階。

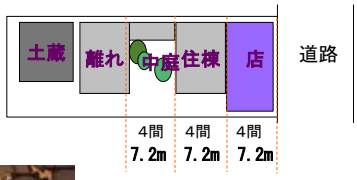
外観だけではない規制のありかた。数値制限ではなく望ましい姿の提示。ここの地区だけでなく都市全体の在り方のから考える。そして、構成として、道路に面する個々の建物整備に始まる街路空間の整備。一宅地の整備。街区の整備。というように、いくつかのレベルでの提案をしています。ここで重要なのは、担い手が、このルールの策定にかかわり、担いてが納得し、担い手が使いこなせる内容になっていることです。当然のことながら、この策定には専門家の関与が欠かせませんでしたが。商店街が、自ら自分たちの商店街づくりを目指して作ったルールです。

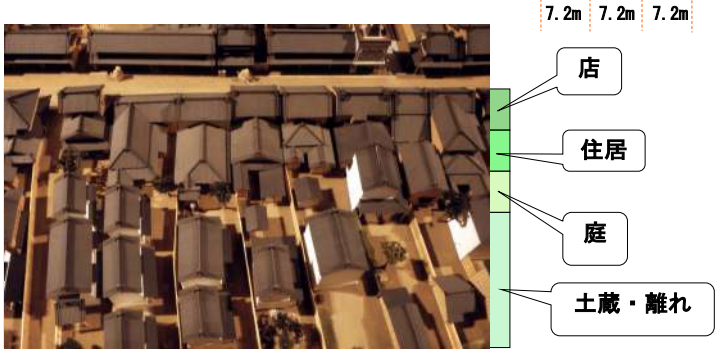


ルールの代表的なものとして４間・４間・４間のルールがあります。１間とは日本の伝統的な長さの単位である約1.8m。従って４間は約7.2mになります。間口が狭く奥行きが長い日本の伝統的な商家の敷地はこの図のように使われることが多くあります。１軒１軒のゾーニングが連続することで街区内に中庭の連続が生まれます。街区内のグリーンベルトです。これが通風や採光といった個々の住宅の環境を守る空間へと変わります。

町づくり規範の代表的な項目

4間・4間・4間のルール（1間≒1.8m）
7.2m×7.2m×7.2mのルール





写真は川越市立博物館蔵模型

町並みは生き物です。川越の町並み景観の変化をみてみましょう。今から 44 年前は看板で古い建物を隠していました。伝統的な建物は、古臭く汚らしいと思われていました。その 10 年後、市の文化財に指定された時にとりあえず看板を塗り直しました。そして看板を外し、建物を昔の姿に戻しました。しかし店舗内装は歴史的な重みを感じられる現代店舗にしています。そして電線を地中化し、さらに街路灯を新しくするとともに歩道部分を石畳にしました。川越では歴史的な町並みを守りながらも、変えていいものは現代の要求に合うように更新してきました。

1978年

1988年頃

2007年

1989年頃

1993年

町並みの移り変わり　一番街

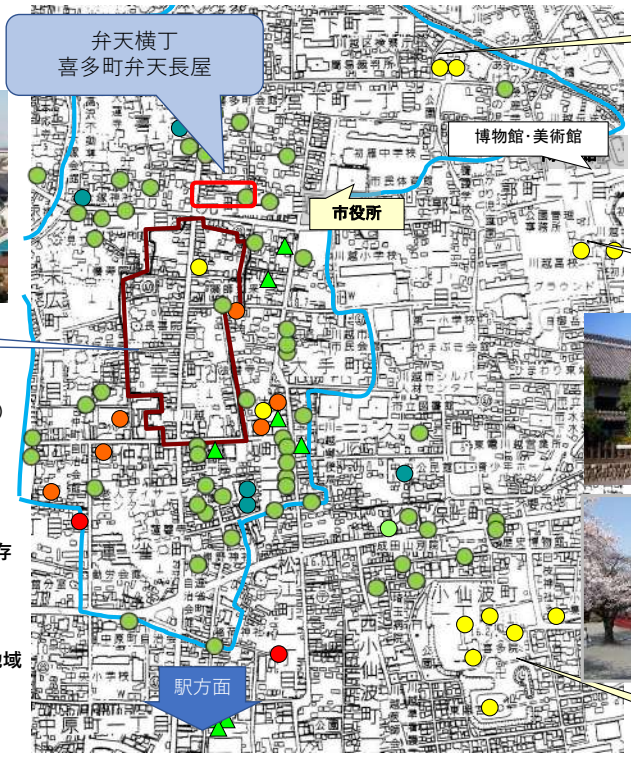
ここで最近の事例をご紹介しましょう。町並み保存地区のすぐ北側でのリノベーションの事例です。通称「弁天横丁」と呼ばれる一角に建つ長屋の改修事例です。

伝統的建造物群保存地区

- 国・県指定文化財
- 市指定文化財　町家（伝建地区を除く）
- 市指定文化財　社寺その他
- 登録文化財（景観併用含む）
- 景観条例に基づく保存建造物

川越市川越伝統的建造物群保存地区
平成11年重伝建選定
約７．８ha

川越十ヵ町地区都市景観形成地域
平成16年決定
約７８．0ha



弁天横丁の西側入口

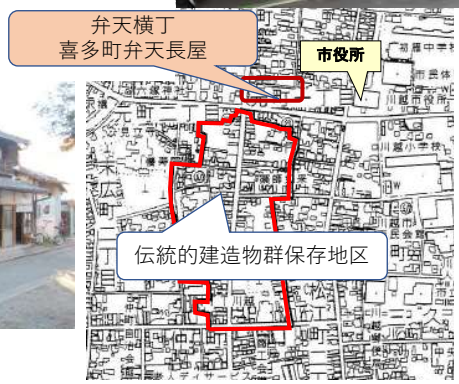
芸者の置屋街
「芸者横丁」

飲食店街
「弁天横丁」

空家の目立つ
うらぶれた小路

再生

喜多町弁天長屋



まちづくり市民団体による
空家の再生（弁天横丁の事例）

麻利弁天長屋

ここは、蔵造りの町並みができるきっかけとなった 1893 年の大火の後にできた小路です。芸者が住んでいた置屋街でした。その後、芸者の仕事を辞めた方々が、飲食店を開きます。しかし、その後、飲食を開いていた方々もいなくなり、空家となっていました。今回ご紹介するのは、左下の写真の長屋が舞台です。ちなみに、上の写真に着物姿のお嬢さんが写っていますが、彼女たちは芸者ではなく、日本の伝統的な衣装である着物を、レンタルで借りて街歩きを楽しんでいる観光客です。日常生活で着ることが無くなった伝統的な衣装を、川越を訪れることによって楽しんでいます。これも一種のコスプレでしょうか。

工事着手前 倒壊の危険性のあるブロック塀で
囲われていた。

ブロック塀解体後の様子

まちづくり市民団体による
手づくりの再生

様々な変遷をたどり最後は小
料理屋「悦」の後は空家

路地に面する外壁や
屋根の修理後

2021 年 7 月
オープン

この長屋、最初は 1893 年の大火からほどなく建てられた、織物関係の市場だった可能性が指摘されている建築です。市場の閉鎖後は、住居、そして芸者の置屋、飲食店を経て永らく空家になっていまし

た。そこを、まちづくり市民団体である「川越蔵の会」が建物所有者から借り受けて、セルフリノベーションで改修を行いました。元は左上の写真のように白いブロック塀で覆われていました。古い時代の構築なので、地震がきたらいつ倒れてもおかしくないようなものでした。逆に、古すぎるがため壊しやすかったのですが。

しっくいで壁塗り

オープニングの時は作業風景のパネルを展示

みんなでいらない内装を解体しています

これまでの内装材を剥がしています

みんなの力で完成!! みんな笑顔

みんなでレンガを敷きました

内壁の和紙貼り

和紙はユネスコの無形文化遺産登録

まちづくり市民団体とその運動に関心を持った人々が集まり、改修工事を行いました。まずは、解体。いらない内装を壊します。そして、新たな内装を施します。漆喰壁も塗りなおしました。素人なので、きれいに塗れないのは当たり前。その下手さが、味わいに変ります。壁紙も、みんなで張りました。なお和紙はユネスコの無形文化遺産に登録されたものを使っています。子供も一緒に作業して

喜多町弁天長屋の入居者達

江戸和竿師
人力車　いつき屋
アートクラフトグッズ
画家
プロダクツデザインナー
鍛鉄作家
着物の着付師
革製品修理

ともり食堂　田代友里さん

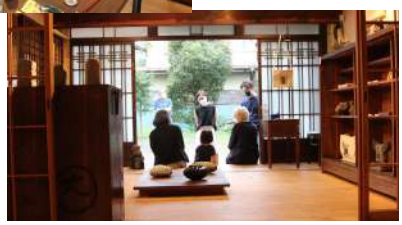
埼玉県東松山市出身→都内→川越
都内（護国寺）から移転

将来の子育てと仕事の両立ができそうな町
川越に対するブランドイメージ　憧れ

Remodule Painting　福島英人さん

古い物から新しい価値を見い出したい
歴史的な建物は、自分が目指すイメージを表現しやすい空間

弁天横丁に新しいコミュニティが生まれだした



入居者の画家による
音楽と創作活動のパフォーマンス

います。オープニングでは作業風景をパネルにして展示しました。そして、川越で活躍されている陶芸家の展示販売です。参加者みんな満足げな表情です。

この長屋に入った方々は多彩です。入居条件としてアートクラフト系など新しい文化を発信してくれそうな方を選びました。東京から川越に来られた方、古い建物だからこそ創作意欲を駆り立てられる方。先日は音楽とペインティングのパフォーマンスも開かれました。落語会を開いたこともあります。おじさんたちが愛した飲み屋がなくなった今、この長屋は新しい道を歩み始めました。世代を超えたコミュニティも生まれ始めました。

喜多町では、自治会に住む方々に自分の町を知ってもらうためにパンフレットを作成し、全戸に配布しました。

昨年この周辺に位置する喜多町自治会では新たにパンフレットを作成しました。このコミュニティに暮らす人々に地域の歴史や文化、祭礼行事等を知って頂くためです。このようなパンフレットを作ることによって自分の住んでいるコミュニティを知って、好きになってずっと住んで頂くための一手法です。

そこに住まう人々が地域のまちづくりに主体的に関わることにより、地域資産を生かした持続可能なまちづくりを進めることができます。そこでは、市民は市民として、専門家は専門家として、行政は行政としての役割を理解し、それぞれが責任をもって活動することにより、より良いまちづくりを進めることができるでしょう。これで私の報告は終わらせていただきます。川越の事例がすこしでもカイロのオールドシティの皆様のお役にたてれば幸いです。

そこに住まう人々が地域のまちづくりに主体的に関わることにより、地域資産を生かした持続可能なまちづくりを進めることができます。

そこでは、市民は市民として、専門家は専門家として、行政は行政としての役割を理解し、それぞれが責任をもって活動することにより、より良い、まちづくりを進めることができるでしょう。

おわり

4. カフェ、ブティックホテルなど、歴史的建造物の現代的な利用法　磯野哲郎

【いくつかの事例をとおした歴史的建築物の利活用についての考察】

建築物は、人間の社会経済活動の場のために人工的に作られたもの、であるとも言え、その時代における一定の価値のもつことで存在し、維持され、活用されてきた。価値観が変わった違う時代において、歴史的建築物（historical buildings but those not historic enough)は、素材や材料の入手が困難、設備が求められる機能を満たせ稲井など、徐々に時代の価値から離れていき、使われなくなってしまうことがある。その場合、物理的な修復を施しても新たな価値が伴わなければ再び使われなくってしまう恐れがある

建築物の価値とはそれを所有する人、使う人によって異なり必ずしも普遍的な価値があるわけではない。しかし住宅、商店、アトリエ、礼拝所など建物の目的によっておおよその傾向はあると考えられる。時代を超えて多くの人に共通の価値を保ち続ける建築物は維持され続ける。モスクのような礼拝所は時代が変わってもその価値は変わらない。一方例えば住宅のように、大家族制から核家族へのライフスタイルの変化、車に依存する車社会、通信インフラとデバイスが必要な情報化社会の影響を受けざる得ないものもある。今日はまとまりのあるものではないがエジプトの人たちにとって近すぎず遠すぎないいくつかの事例を見てもらいスークシラーハの活性化の参考になれば幸いである。

建築物の価値とは？

What is value of buildings?

建築物の価値は時代とともに変化する、住宅、商店、アトリエ、礼拝所・・・

The value of buildings changes with the times:　housing, shops, studios, places of worship ...

時代を通してあまり変わらないもの、礼拝所など

Buildings that do not change over time:　place of worship ...

刻々と変わるもの、住宅（ライフスタイル、クルマ社会、情報化・・・）

Buildings that change moment to moment:　housing (lifestyle, car, information ...)

民間や商業利用のものを中心に、いくつかの事例をとおして考察する

In this presentation, make a case study mainly on private and commercial use.

下右図はイラン西部の町ザンジャーンのバザールの中にあるハマムを改装したチャイハネである。ライフスタイルの変化からイランでも公衆ハマムの利用は減っている。この事例は元々のハマムに家具を入れ、殆んど手を加えていないので高額な費用も関わらずある意味手軽な再利用方法であろう。ラマダン中の訪問のためバザールもシャッターがおりている店があるが本来ならもっと人が多いことを付け加えておく（下左図）。

チャイハネには、ハマムの待合室の雰囲気がそのまま残っている。番台もそのまま？（下左手前部分）と思われる。我々は、ラマダン中に訪れたためチャイハネは休業中であった。中央の男性がザンジャーン州遺跡観光局のアドバイザー、奥のふたりはテヘランの遺跡手工芸観光庁（ICHHTO）の職員、左の日本人女性はイスタンブール在住の HIS 職員（下左）。

ハマムらしく、クシュティ（本来はミール）と呼ばれる、伝統武道のトレーニングに使われる木製の道具が置いてあった（下右）。

次に紹介するのは、同じくザンジャーン州のエコロッジで、ペルシャ語ではブームギャルディと呼ばれる。イラン政府（ICHHTO）は、伝統的なエコロッジ（ブームギャルディ）の普及を推奨しているが、ザンジャーン州はブームギャルディの発祥地である。大きな市場のテヘランから 300km の距離の旅行目的地であることから、宿泊需要が見込めることが理由である。

ブームギャルディには、政府が認証したロゴと標識が掲げられている（下左）。

住戸の入口の扉も趣がある（下左）。これが訪ねたブームギャルディの入口（下右）。

入口をくぐったところ（下左）。入り口から入った中庭・囲炉裏、小部屋が塀沿いにあり、伝統的な料理や工芸の体験ができる（下右）。

壁にはアラベスクのアートも描かれる（下左）。ワゴンには、村の人たちが作ったアクセサリー、ナッツ類を並べて販売している（下右）。いわゆる委託販売で、売上は提供した村の人に還元される

このブームギャルディのオーナー夫妻。テヘランから移住してきた若いふたり（下左）。客の大半はテヘランからの若者の団体とのことである。

上右は、別のブームギャルディ（エコロッジ）で、よりテヘランに近いガズヴィーン州のアサシン教団で有名なアラムート山にある。ガズヴィーンの町はテヘランから 150km であるが、アラムート山までだと宿泊を伴う観光目的地である。

オーナー夫妻（上左写真中央の 2 人）は、元々この地の出身で、定年を機にテヘランから戻ってきた年配の夫婦は。先祖代々からのペルシャ絨毯、伝統的な農具などを展示している。

緑豊かな庭にある食堂（上右写真）。

シンプルだがモダンに改装された寝室（右）。

次は、イラクと国境を接するイラン南西部で、クルド人が多く住むコルデスターン州、ホラマン渓谷ホランマンタクト村。茶色の看板は、常に、遺跡手工芸観光庁の認証した観光村の標識。1984 年にこの道路ができるまでは、クルマのない隔離された地域であった。今ではペルシャ語が通じるが、住宅様式、衣装、言語、風習が守られてきた。山の向こうはイラクで、命がけの国境密貿易が盛ん。観光客が来るようになって村の人たちの現金収入の機会が増えてきた。コロナ禍前には、年間 60 万人の観光客が訪れ、ドイツやオーストリアなどからの外国人も訪れていた。

山肌に連なる伝統的な階段状の石造りの家々（上左）。日当たりの良い屋上のテラスでは、村の女性たちが、クルド人の伝統的なカラッシュと呼ばれる履物作りをしている。近寄って作業を見ることはできるが、女性たちの写真撮影を嫌うので、遠景でしか撮影できなかった（上右）。

カラッシュのソールは、男性職人の仕事である。カラッシュは、岩山の上り下りに適したクルド人男性用の履物である。世界工芸評議会（WCC）の認定を受けている（下左）。

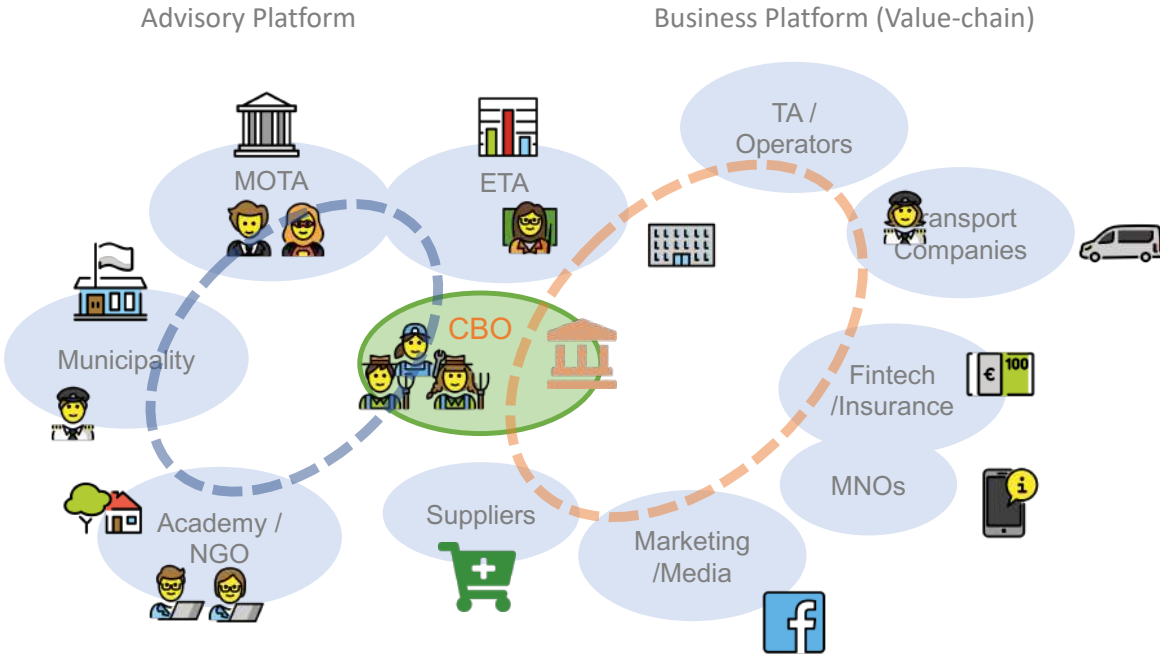
最後に、一転して、モロッコのマラケシュ、ジャマエルフナ広場に近い邸宅を 6 部屋のこじんまりとしたブティックホテルに改修したダールソハンを紹介する（下左）。よりエジプト人には身近であろう。

ダールソハンの屋上はジャグジーとサンデッキに利用されている（下右上）

1 階にあるマグレブ式のサロンにはモザイクタイルがふんだんに取り入れられている（下右下）。

高い人気のブティックホテルであるが、改装には高額な費用がかかる。また、ヨーロッパをはじめとした外国人が顧客であることから、宿泊客に満足してもらうためには、様々な外部の人や会社との連携が必要である。調度品、アメニティなどのサプライヤー、料理、ハウスキーピング、マーケティングなど、様々な分野にわたる。

歴史的建築物を使った住民による事業を考えた時、2 つのネットワークが必要だと言える。ひとつは事業についてのバリューチェーンを構築すること、もうひとつは公的組織との連携体制を作っておくことである。どちらかだけでは事業として成り立たないし、歴史的建築物の保全と活用から離れていってしまう恐れがある。バリューチェーンは、コミュニティの内外にあり、サプライヤーやサービスプロバイダーはコミュニティの中で築いていくことでコミュニティの活性化や雇用の創出に結びつけることができる。公的組織には、観光遺跡省、観光庁、市役所、大学・研究機関・NGO などがある。以上、まとまりのない紹介であるが、スーク・シラーハの活性化の参考になれば幸いである。



5. 住民参加のまちづくりの仕組と事例/建築の参加のデザイン事例（連健夫）

建築家の連健夫と申します。日本建築まちづくり適正支援機構の代表理事をしています。私からは、「日本の住民参加のまちづくりの仕組と事例、建築での参加のデザイン事例」を説明させて頂きます。

日本の建築まちづくりの法体系ですが、全国ルールの上に地域ルールが乗っかっているという仕組です。全国ルールは全国統一の法律で、都市計画法、建築基準法、景観法などがあります。これに地方自治体が決める条例が加わります。この条例によって、地域の個性を活かすことができるわけです。

1992 年の都市計画法で住民参加が位置づけられました。そのことにより各自治体でまちづくり条例が作成されました。自治体によっては作成していないところもあります。住民参加を大切にしている自治体では街づくり条例があると考えて良いと思います。

これは、東京都港区の街づくり条例の事例です。この中で住民参加のプロセスが示されています。最初に自主的なまちづくり活動があり、それを街づくり組織として登録する、そこで話し合ってまちづくりビジョンを作り、それを下地にして地区計画という規則を作ることができます。つまり、住民が街づくり条例によって、法的に有効な規則を作ることができるということです。これらは住民だけでは難しいので、登録専門家がサポートをする仕組みがあります。

日本の住民参加のまちづくりの仕組・事例
建築の参加のデザイン事例

Mechanisms and examples of community participation in Japan, and their design of architecture

連健夫、建築家、JCAABE日本建築まちづくり適正支援機構代表理事
Takeo MURAJI, Architect,
Chairman of Japan Commission for Appropriate Architecture and the Built Environment

日本の建築・まちづくりの法体系
The Legal System of Architecture and Urban Development in Japan

地域ルール Local Rule
・条例 Ordinance
地方自治体が決める→地域の個性
Decided by local government→Local Individuality

全国ルール National Rule
・都市計画法 City Planning Act
・建築基準法 Building Standards Act
・景観法 Landscape Act
など

1992年、都市計画法で住民参加が位置づけられた
→各自治体でまちづくり条例ができた。
（どこの自治体でもあるわけではない）

Citizen participation was established in 1992 City Planning Act
→Town Planning ordinances have been established in each municipality
(Not every municipality has one.)

街づくり条例における住民参加のプロセス（港区）

Process of Citizen participation in Town Planning ordinances (Minato Ward in Tokyo)

→住民がこのプロセスにおいて地区計画を作ることができる。
Citizens can make local act in the process

→登録専門家が住民を支援する
Registered specialist supports the citizen's activities in the process

私は、港区の登録まちづくりコンサルタントとして、住民をサポートしています。住民参加のまちづくりの事例をお話しします。住民参加のまちづくりの良さは、「住民が街の良い点と問題点を考える」「良い点を活かし、問題点を改善する提案ができる」「それを専門家と共に実行する」「自分の街を大切にする気持ちが生まれます」　これは赤坂通りまちづくりの会の街歩き、良い点と問題点を考えるワークショップの事例です。

住民参加のまちづくりの事例
Example: Town planning with citizen participation

【住民参加のまちづくりの良さ】
Good points of the participation

- 住民が街の良い点と問題点を考える
  The residents think of good points and problems in the town.
- 良い点を活かし、問題点を改善する提案ができる
  They can make good idea for the solution.
- それを専門家と共に実行する。
  They can run them with specialists.
- 自分の街を大切に使う気持ちが生まれる。
  As the results, they have a feeling of looking after the town.

赤坂通りまちづくりの会：待ち歩き、
良い点と問題点を考えるワークショップ
Akasaka street community: working workshop
To think of good points and problems

街の良い点と問題点を皆で歩きながら見つけます。緑は潤いを与えてイイですね。神社は歴史と伝統があり、良い点ですね。ゴミや落書きは問題点ですね。

良い点
Good Points

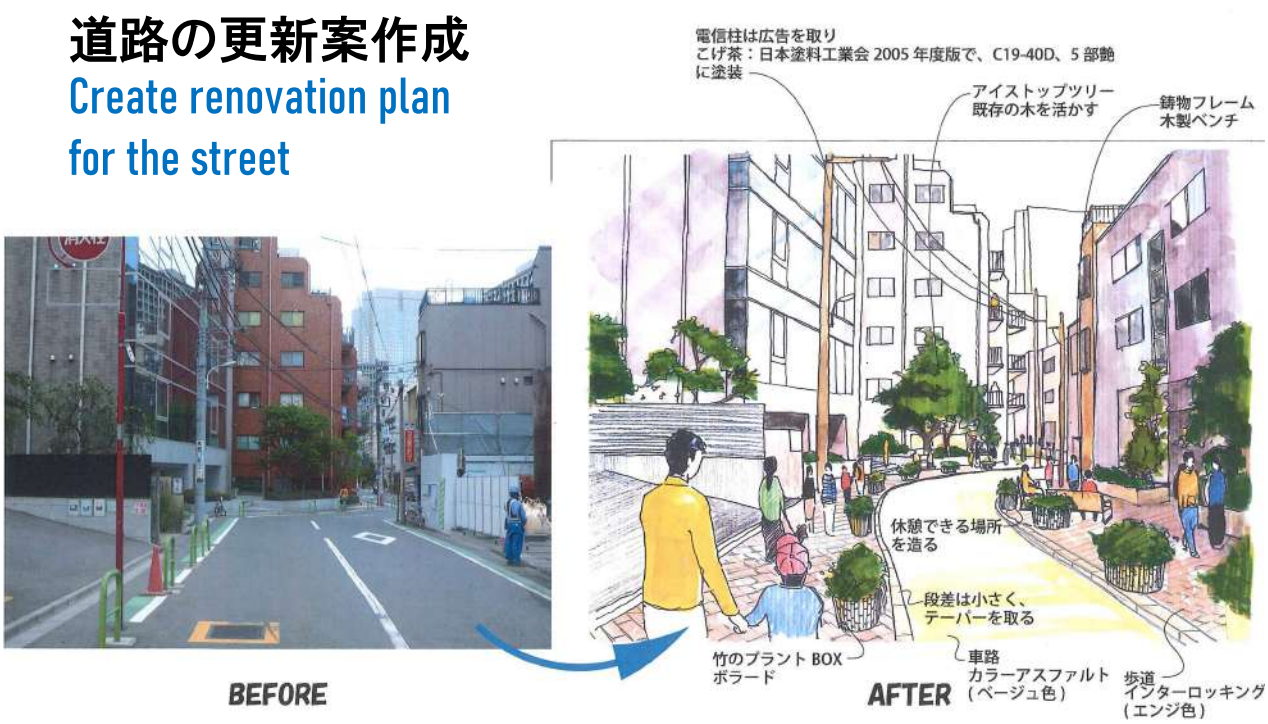
緑　Green
神社　Shrine

問題点
Problems

ゴミ　Gabage
落書き　Graffiti

会場に戻って、グループに分かれて話し合います。各グループにはファシリテーターが司会進行を行います。良い点を活かす、問題点を解決する提案をまとめ、発表し、皆さんと共有します。

それらを元に、通りのリノベーションのデザイン案を考えました。歩道を広げて、緑を設け、所々にベンチを設けます。



提案の実践です。落書きを消すワークショップを行いました。また美観活動としてお花植えを行いました。

提案の実践　Practice of the suggestions

落書き消しワークショップ
Graffiti, erasing workshop

美観活動　お花植え
Aesthetic Activities : flower planting

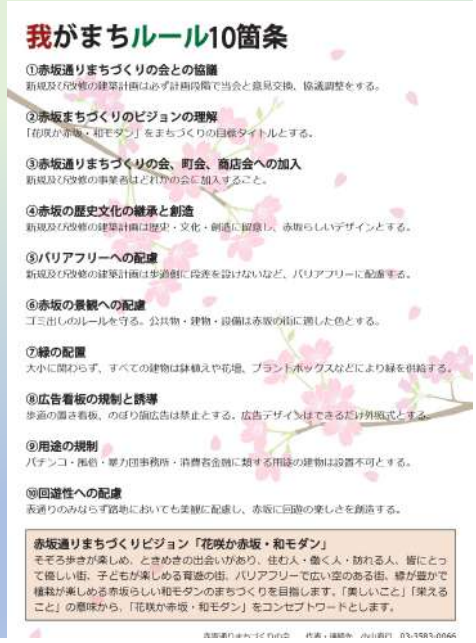
建築計画に対して、我がまちルールを元に意見交換を行っています。これはデザインレビューと言えますね。意見交換後に建築側から要望を取り入れたデザインが出てきて、皆から拍手がおこりました。

建築計画に対して我がまちルールを元に意見交換を行う（デザインレビュー）

Exchange opinions on building plans based on our community rules.　（Design Review）

意見交換の後、要望を入れたデザインが説明され皆拍手 After the discussion, the design incorporated our requests was explained to us,　everyone clap!

Ten roles about our town, Akasaka



我がまちルール10箇条

①赤坂通りまちづくりの会との協議
新規及び改修の建築計画は必ず計画段階で当会と意見交換、協議調整をする。

②赤坂まちづくりのビジョンの理解
「花咲か赤坂・和モダン」をまちづくりの目標タイトルとする。

③赤坂通りまちづくりの会、町会、商店会への加入
新規及び改修の事業者はどれかの会に加入すること。

④赤坂の歴史文化の継承と創造
新規及び改修の建築計画は歴史・文化・創造に留意し、赤坂らしいデザインとする。

⑤バリアフリーへの配慮
新規及び改修の建築計画は歩道側に段差を設けないなど、バリアフリーに配慮する。

⑥赤坂の景観への配慮
ゴミ出しのルールを守る。公共物・建物・設備は赤坂の街に調した色とする。

⑦緑の配置
大小に関わらず、すべての建物は鉢植えや花壇、プランドボックスなどにより緑を供給する。

⑧広告看板の規制と誘導
歩道の置き看板、のぼり旗広告は禁止とする。広告デザインはできるだけ外国語とする。

⑨用途の規制
パチンコ・風俗・暴力団事務所・消費者金融に類する用途の建物は設置不可とする。

⑩回遊性への配慮
表通りのみならず路地においても美観に配慮し、赤坂に回遊の楽しさを創造する。

赤坂通りまちづくりビジョン「花咲か赤坂・和モダン」
そぞろ歩きが楽しめ、ときめきの出会いがあり、住む人・働く人・訪れる人、皆にとって優しい街、子どもが楽しめる育遊の街、バリアフリーで広い空のある街、緑が豊かで植栽が楽しめる赤坂らしい和モダンのまちづくりを目指します。「美しいこと」「栄えること」の意味から、「花咲か赤坂・和モダン」をコンセプトワードとします。

建築設計における利用者参加の事例です。これは、隠岐の島海士町の農林水産物加工施設です。隠岐の島は島根県の北にあります。既存の建物が手狭で、増築をしたプロジェクトです。ハーブティーやクッションなど手作り特産物が作られています。

建築設計における利用者参加の事例
（隠岐の島、海士町、農林水産物加工施設）

A case study of user participation in Architectural design.
Ama-cho,Oki Island.
Agricultural and Marine Products Processing Facility

メンバーである利用者が新しい建物について話し合い、夢を表現したコラージュを作りました。そこから、コンセプトは、手作りと交流を楽しみ、夢と希望が感じられる場、人を迎える建物としました。

メンバー（利用者）で新しい建物について話し合う
Discuss about new building By the user

夢をコラージュで表現
Express dreams By collage

コンセプト：Concept
手作りと交流を楽しみ、希望が感じられる場
Place for enjoy handmade and communication to feel dream and hope
→人を迎え入れる建物
Architecture that welcomes people

３つのコンセプト模型をつくり、投票で選び　ました。投票が参加の機会となりますね（下左）。皆で床タイルのデザインを考え、陶芸家に作っていただきました（下右）。

施工にも利用者が参加しました。壁に断熱材として古新聞を詰め、塗装やウッドデッキ作りを行いました（下左）。完成です（下右）。手作り特産品のショーケースができ、使いやすい建物になりました。

以前は建築設計やまちづくりは専門家だけで行っていました。そこに、住民や利用者が参加することによって、住みやすい街、使いやすい建築ができるわけです。この参加のデザインにワークショップは有効です。

建築や街の保存継承は、それらを使う住民の参加によって持続可能になります。建築家や専門家と住民との創造力のブレンドによって、価値があり、深みある街を作ると思います。

6.　学生ワークから見るヒストリックカイロの可能性（2018 年作品）と NOUH へのアドバイス（布野修司）

私は、2016 年から 2017 年にかけて、エジプトの新しい学校建設をお手伝いするために３度カイロを訪れましたが、その際、歴史的カイロをずいぶん歩き回りました。そして、2017 年の夏に、アラー先生が主催する、日本とエジプトの学生たちとスーク・シラーフの未来について議論するワークショップに参加する機会を得ました。そのワークショップの概要とその時に考えたことをお話ししたいと思います。

ワークショップは 8 月 17 日～21 日、5 日間にわたって行われたのですが、ファシリテーターとして日本大学から広田先生、山岸先生も参加しました。参加者は、それぞれ数人の６つのグループに編成され、それぞれスーク・シラーフを歩き回って、具体的に提案する場所を選定しました。

ワークショップの開始に当たっては、アラー先生から、バイト・ヤカンの改修、再生について、また、歴史的カイロの現状についてのレクチャーが行われました。また、ハンマーム・バシュタークなどスーク・シラーフにある歴史的建築物については深見先生からレクチャーが行われました。

そして、歴史的遺産について、その現状を見学するエクスカーションが行われました。

The Potential of Historic Cairo
Some Suggestions based on EJ Student Proposals at International　Workshop,2017

Dr. Shuji Funo
Guest Professor, Nihon University

I visited Cairo three times between 2016 and 2017 to help build a new school in Egypt, and during those visits I walked around historic Cairo a lot. Then, in the summer of 2017, I had the opportunity to participate in a workshop organized by Dr. Alaa to discuss the future of Souq al-Silah with students from Japan and Egypt. I would like to give you an overview of that workshop and what I thought about it.

EJ Student Proposals
International　Workshop,　2017

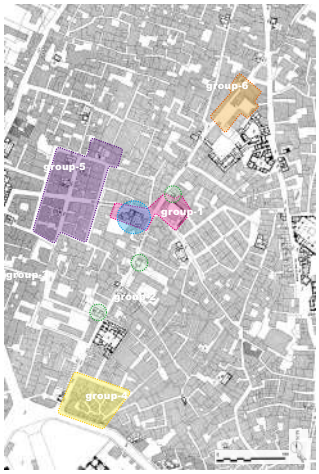
Egyptian and Japanese students worked together　from 17 to 21 August, 2017 to propose the future of Souq al-Silah.

Six groups of Japanese and Egyptian students were organized, each walked around Souq al-Silah Area and selected a target area. They made creative proposals, based on field survey and discussion.

Residents responded to each proposal by suggesting, and these points were　evaluated by them.

Facilitators:　Dr. Alaa el-Habashi,　Dr. Naoko Fukami
Dr. Naoyuki Hirota,　Dr. Teruki Yamagishi
Dr. Shuji Funo

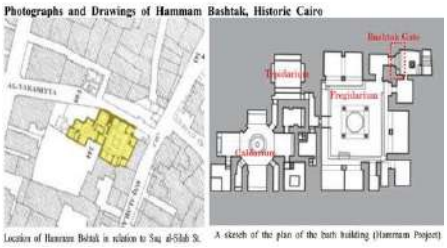
The workshop took place over five days, from 17 to 21 August, with Professors Hirota and Yamagishi from Nihon University as facilitators. The participants were organised into six groups of several people each, who walked around the Souq al-Silah and selected specific places to propose.



Hammam Bashtak　EJ Student Proposals
International　Workshop,　2017

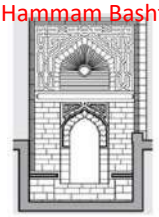
Hammam Bashtak

Date	Era	Condition	Reg. no
AH 742 AD 1341	Mamluk	Flooded with Water	244



At the workshop, Dr. Alaa gave a lecture on the current situation of the district, and information was shared on the situation where historical heritage is left unattended.

Hammam Bashtak



Bishtak Gate as surveyed in 2006 (Hammam Project)　Gate as of today (AEH)　The Frigidarium (AEH)　PAUTY 1933

The Frigidarium (AEH)

Dr. Fukami also gave a lecture on the historical buildings in Souq al-Silah such as the Hammam Beshtak.

Current Situation

One of the collapsed in the the Fregidarium (AEH)

One of the collapsed in the the Fregidarium (AEH)　　The Caldarium as of present time

An excursion was then organised to see the historical heritage in its current state.

各グループは、それぞれ地区を歩いて、ターゲット地区を選びましたが、最も広範囲に El Darb El Ahmar 全体の歴史的建造物など分布をもとに歩き回ったのは Group6 でした。

Group６は、そして、スーク・シラーフから６つの場所について、さらに詳細に検討を加えました。

Hammam Bashtak EJ Student Proposals
International Workshop, 2017

Each group walked around the district, discovering various problems and discussing suggestions for making the district more attractive. Group 6 was the one who walked the most extensively around El Darb El Ahmar and suggested some places.

group-6
Highlighting the features in the urban fabric of El Darb El Ahmar

Event House, EJ/Author creation

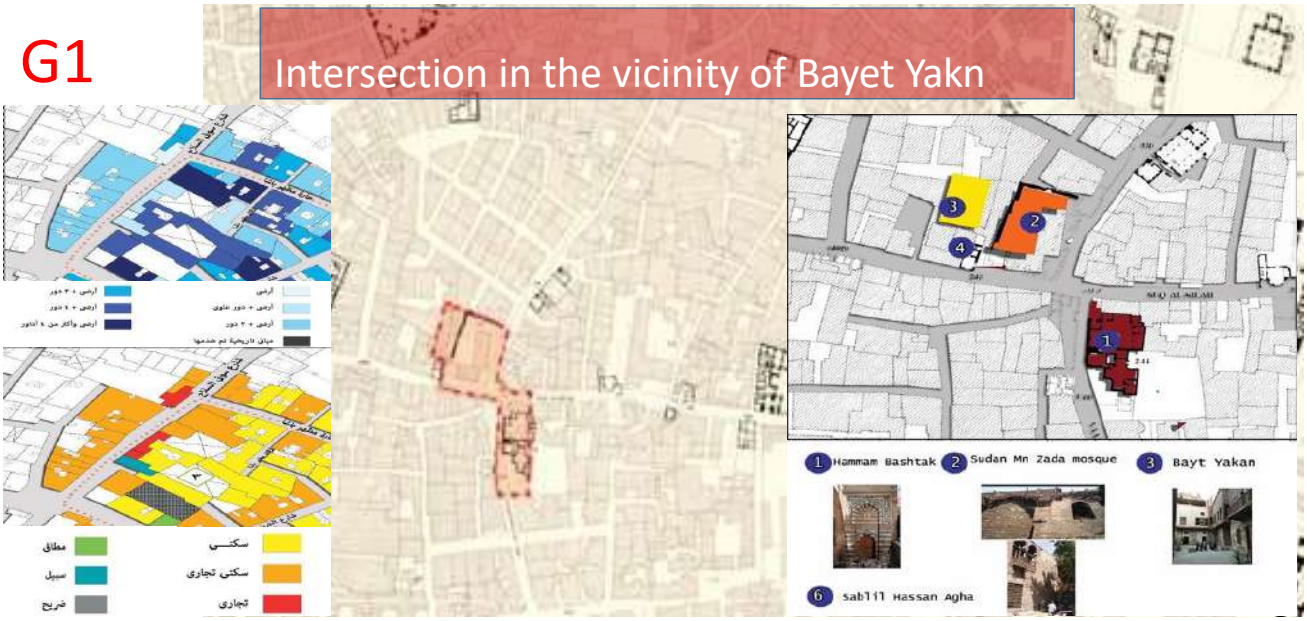
Group6 then went on to examine the six locations from Souq al-Silah in more detail.

group-6
Highlighting the features in the urban fabric of El Darb El Ahmar

	強み	弱み	機会	脅威	目的
床用寄木細工の工房	寄木細工製品代理店	輸送による騒音	寄木細工の展示	工房で使用する機械による文化遺産への影響	歴史ある伝統工芸の活用
Sednawy	特徴的なリッチにあり、延床面積が広い	廃墟	延床面積が広い為、新しい空間として活用	管理がされていない為、建物の状態が悪い	不足している都市サービスの配置
駐車場	空間がある	有効活用されていない	都市空間を生み出す	渋滞と環境問題	コミュニティの形成
交差点の所の建物のフ ァサード	ランドマーク的な立地にあり	ファサードのデザインに統一性が無い	マドラサ=アミールに人々を引き付けるため のデザインに変える	この建物の重要性が理解されていない	観光客を引きつけるチャンス
マドラサ=アミール・クトルブガ・アルザハビィ	文化遺産	使用されていない、また北上するとき気に遮 られ見えていない	本来の機能に乗っ取り、宗教の教えの場と しての活動拠点	未使用による建物の劣化の恐れ	宗教コミュニティの形成
閉じられたバイト=アルラザーズの入口門	バイト=アルラザーズの正門	門の崩壊による閉鎖	観光資源として活用	存在の沈黙	本来の状態に戻す

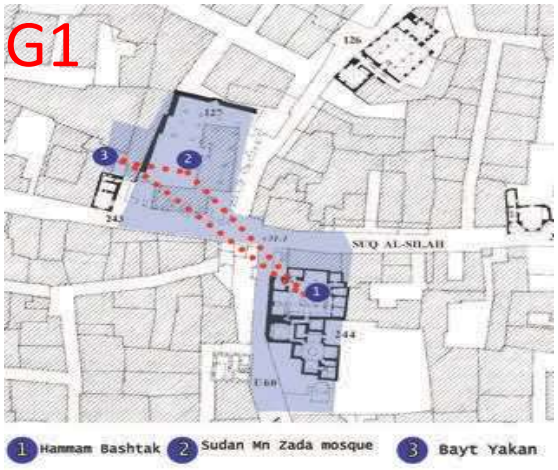
そして、その 6 カ所について、それぞれ場所の強み、弱点、推奨、問題点、提案をまとめています。

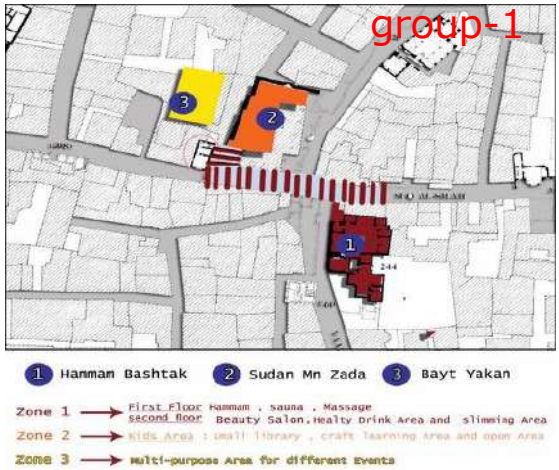
Group１は、バイトヤカン近くの交差点、五差路に注目しました。具体的には、ここに小さな公園を設けたらどうか、という提案です。また、通りにパーゴラのような日陰をつくる覆いを設けて、歩行者の便宜を図ろうという提案です。



Group-1 propose a park-like intersection for women and children and A pergola that creates a shade to walk around historic buildings. They focused on the intersection near Bayt Yakan, a five-way intersection. The proposal is to create a small park here. The group also proposed to create a pergola-like shade cover on the street for the convenience of pedestrians.

Group1 が提起したのは、要するに、地区内の交通（トゥクトゥク）の問題です。 公園を作るためには、歩行者の分離を実現する必要があります。 また、時間による交通制限が必要です。 これは、交通計画が必要になります。日本の「歩行者天国」のように、時間を限って、例えば、土曜日曜は歩行者優先にすることも考えられます。



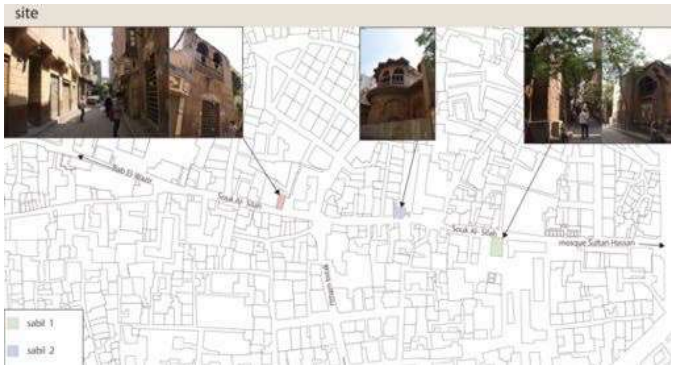


What they are raising is traffic(Tuk Tuk) issues within the district. In order to create a park, it is necessary to realize pedestrian separation. In addition, it is necessary to restrict traffic by time. This can be achieved by transportation planning. Like the Japanese "pedestrian paradise", it could be limited in time, e.g. on Saturdays and Sundays, when pedestrians have priority.

G2

Revitalization of Sabil Kuttab

group-2



Group 2 is focusing on four Sabil Kuttabs (traditional water stations with Qur'an schools) facing Souq al-Silah

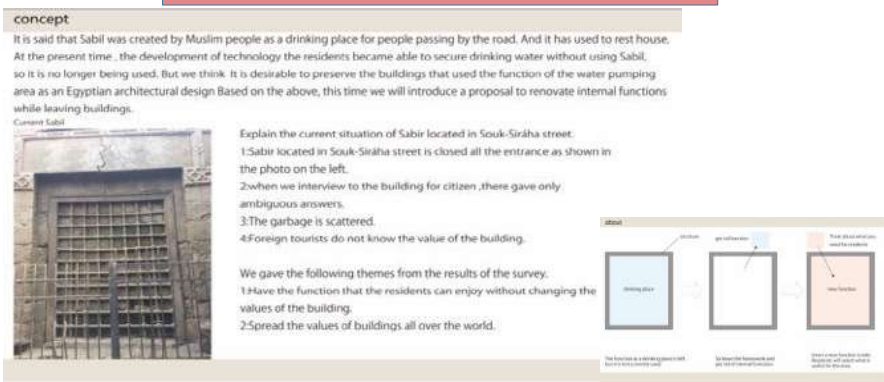
Group2 は、Sabil Kuttab に注目しました。

スーク・シラーフには、4 つの Sabil Kuttab がありますが、それぞれ、転用する提案が行われます。

G2

Revitalization of Sabil

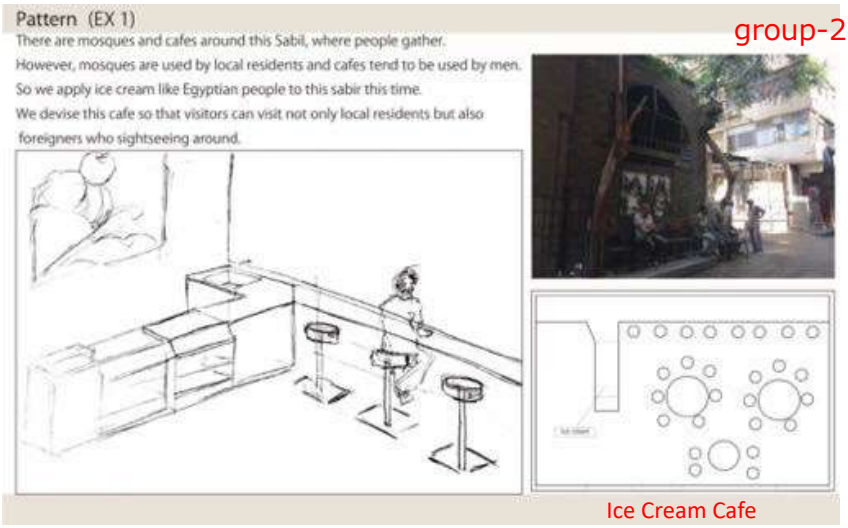
group-2



There are four Sabil Kuttab in Souq al-Silah, each of which will be proposed for conversion.

G2

group-2



For example, they propose to use it as an Ice Cream Café.

例えば、左図は Ice Cream Café にする提案です。

下左では、小さな博物館、地区情報センターに転用したらどうか、という提案です。

下右図は図書館、セニナー、集会スペースに転用にする提案です。

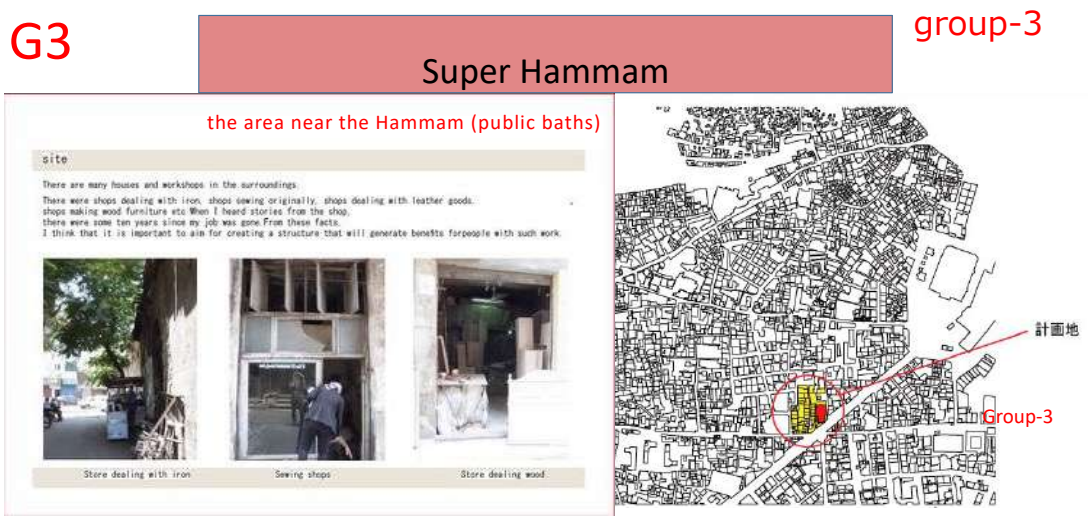
G2

Revitalization of Sabil Kuttab

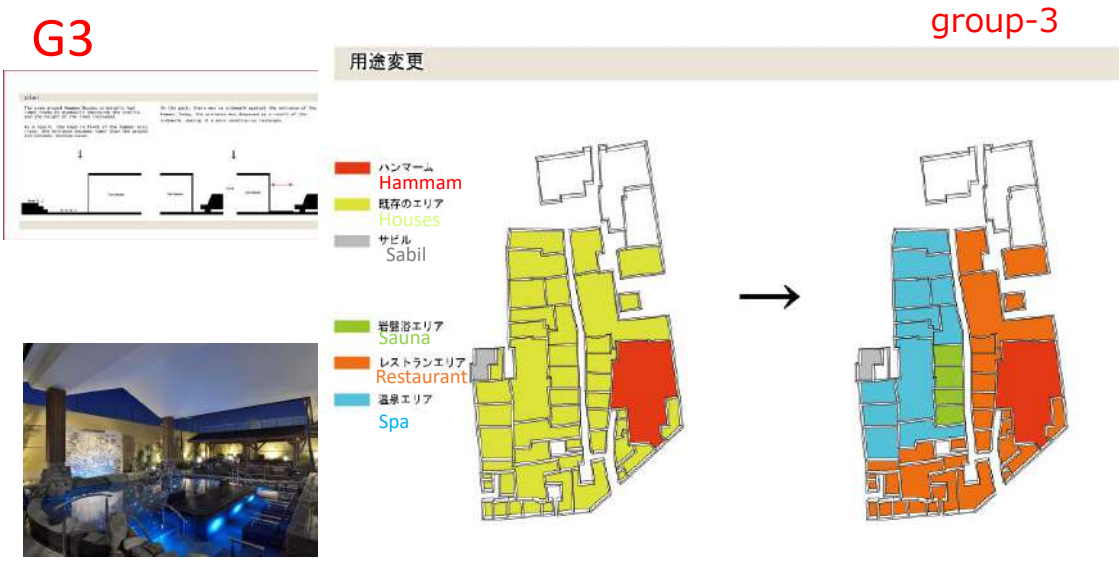
group-2

The proposal is to reuse it into a small museum and district information centre.

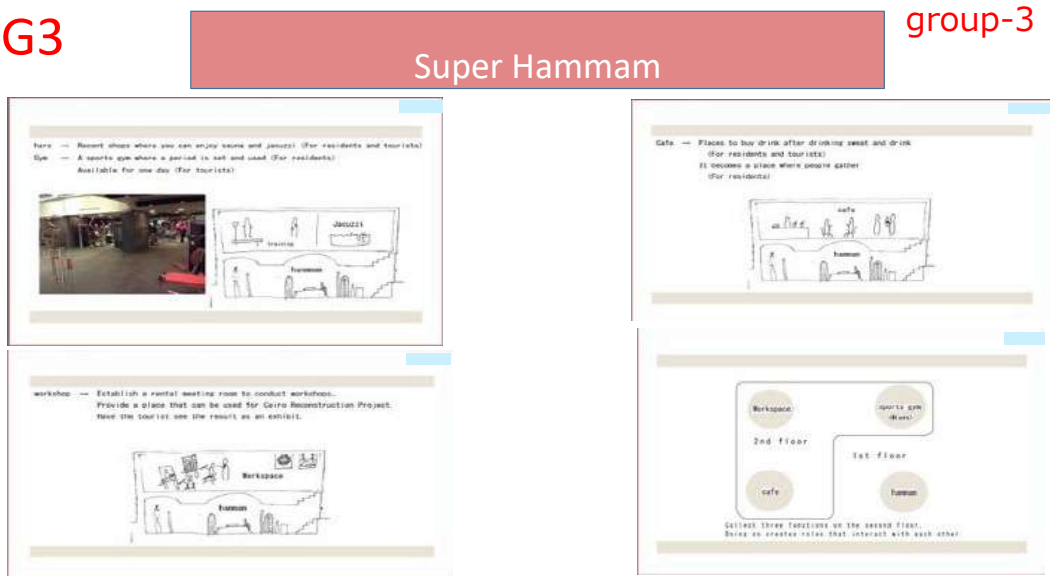
The proposal is to convert it into a library, a seminer and a meeting place.



Group3 This is a proposal to modernise the hammam. In Japan, the Super Sento, or Super Spa, is a popular way to add various functions to bathing facilities. When Dr. Alaa came to Japan, we introduced that Japanese public baths have been declining, but new Super Sentos are emerging.



Group3 proposes to have restaurants area and annex of spa.



They also suggest that a gym and various other spaces could be added.

Group3 ハンマームを現代化しようという提案です。日本では、スーパー・セント Super Spa といって、入浴施設に様々な機能を付け加えて人気を集めています。アラー先生が日本に来られた時には、日本の銭湯も衰退してきたけれど、新しいスーパー・セントーが出現していることを紹介しました。

ジムや様々なスペースを付加できるのではないか、と提案しています。

G4 A Gate to Souq al-Silah - High Densed Neigbourhood Block

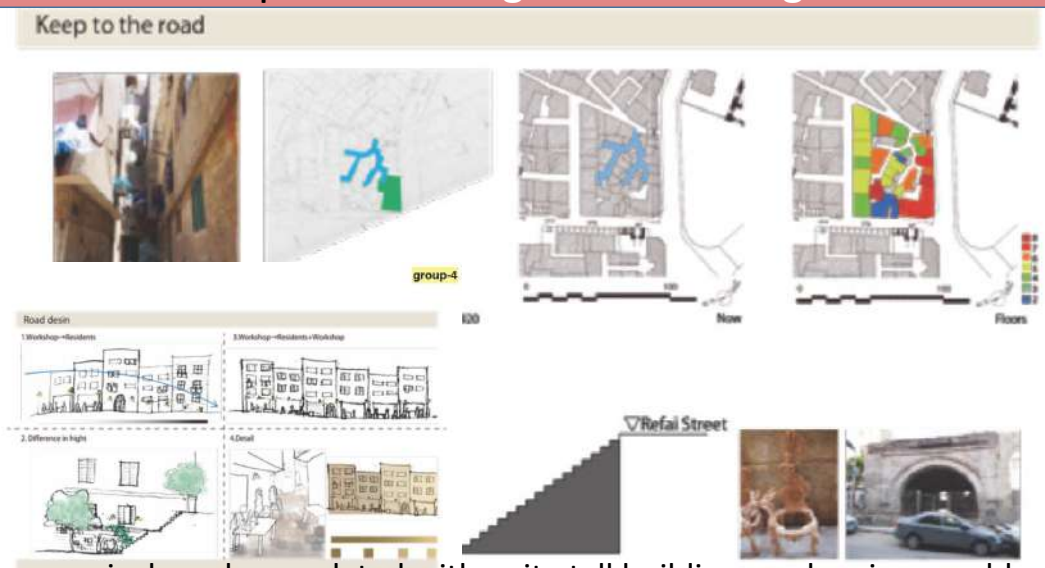
group-4

Group 4 has selected the city block to the east of the southern entrance to Souq al-Silah as its target district.

Group 4 は、スーク・シラーフの南エントランスの東に位置する街区を対象地区に選定しています。

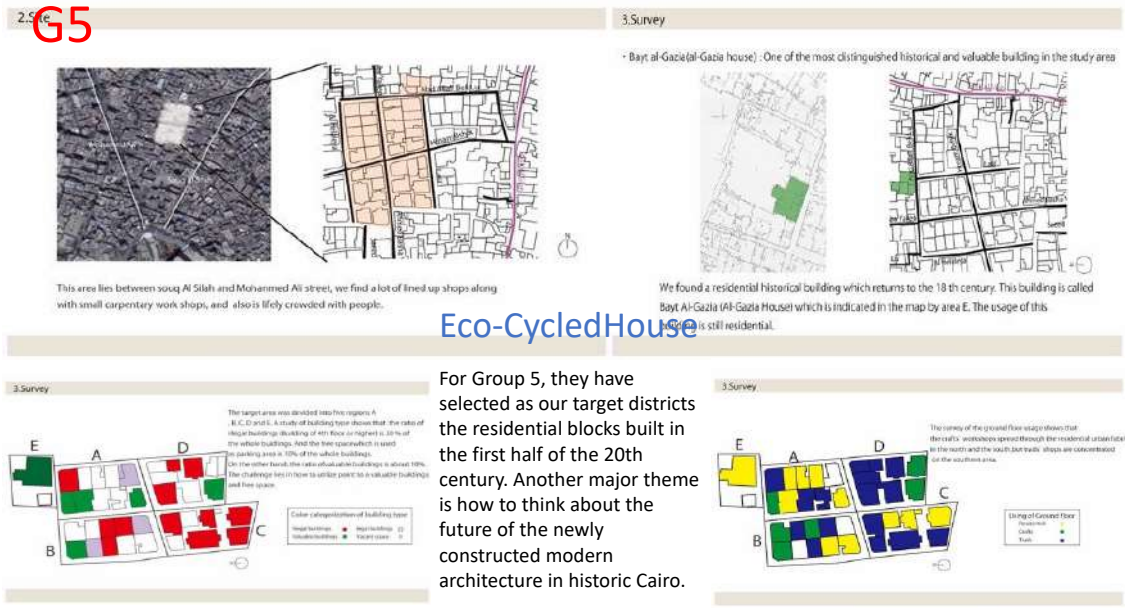
G4 A Gate to Souq al-Silah - High Densed Neigbourhood Block

group-4

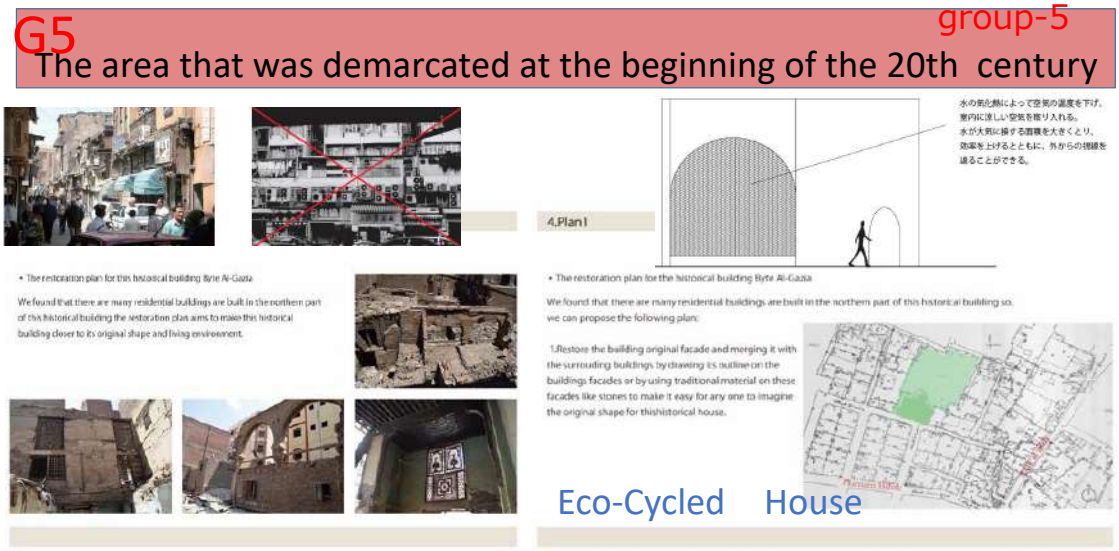


The area is densely populated with quite tall buildings and various problems are pointed out, such as problems of sunlight and refuse. Detailed proposals will be made for the installation of street lighting at night.

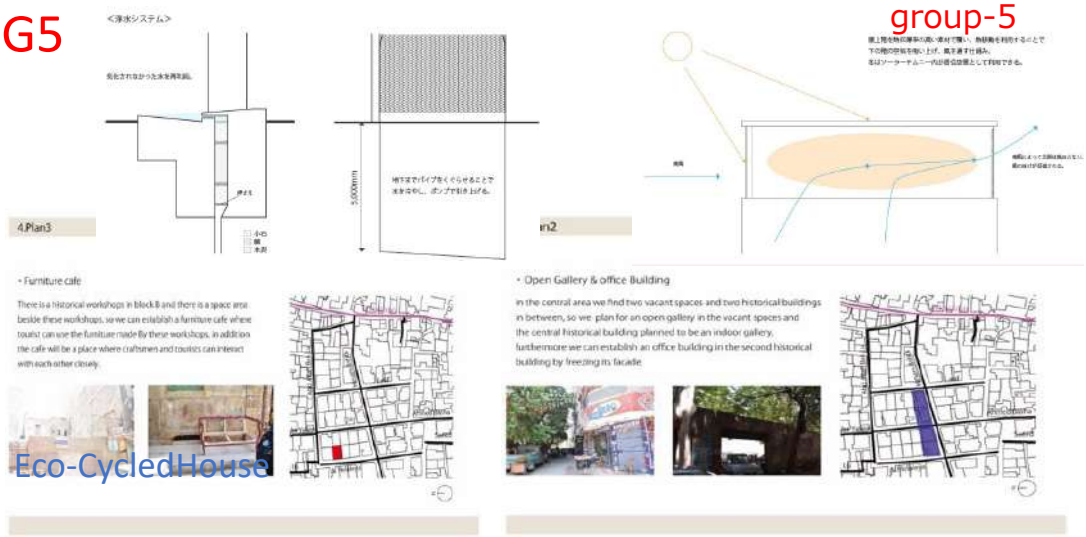
かなりの高層建築が密集する地区で、日照の問題、ごみの問題など様々な問題が指摘されます。夜間の街灯の設置など、細かい提案がなされます。



For Group 5, they have selected as our target districts the residential blocks built in the first half of the 20th century. Another major theme is how to think about the future of the newly constructed modern architecture in historic Cairo.



Group 5 proposes an eco house based on passive technology, using renewable energy wherever possible.



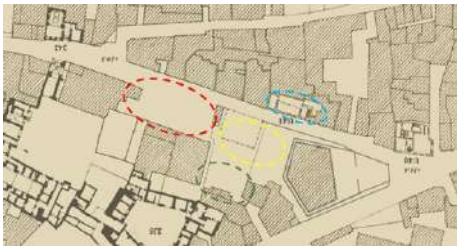
Group5 will also focus on the district's craft industry, proposing a furniture gallery and more.

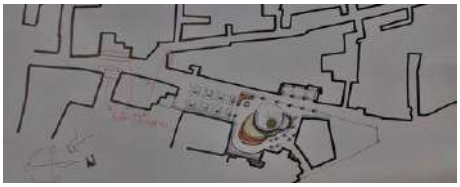
Group5は、20世紀前半に建設された集合住宅街区を対象地区に選定しました。歴史的カイロにおいて、新たに建設されてきた現代建築の将来をどう考えるかも大きなテーマです。

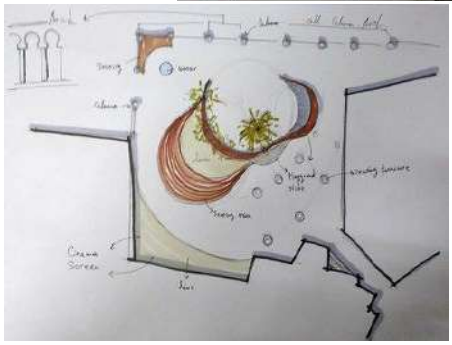
Group5は、パッシブ技術を基本とする、可能な限り再生エネルギーを用いるエコーハウスを提案します。

Group5は、また、地区の工芸産業に着目し、家具のギャラリーなどを提案します。

G6 group-6
The area where Souq Silah Road branches off.







Group6 は、最終的には一カ所を選んでモニュメントを設置する提案を行いました。

ワークショップは参加した学生たちにとっても大変刺激的な経験だったようです。一人の学生は上のような感想「このワークショップで感じたのは、カイロの歴史の深さです。 カイロの歴史を建築で守ることは非常に難しいと感じましたが、立派でした。 この地域に住むすべての人がこの問題について考えてくれることを願っています。 そのためには、ワークショップを継続してワクワクすることが非常に重要だと思います。 子供たちが将来のカイロについて考えてくれることを願っています。」を述べています。

最も重要なことは、地区住民、行政当局、ユネスコなどのさまざまな利害関係者が日常的に地区の将来について話し合うことができる、持続可能な場所やコミュニティ開発センターなどの組織をどのように作成するかです。いくつかの基本指針をあげると以下のようになります。

（１）コミュニティ主体の計画
（２）参加による合意形成
（３）小規模プロジェクト
（４）段階的アプローチ
（５）地区の多様性の維持
（６）都市景観の再生
（７）コミュニティ・アーキテクトの採用

Conservation of Urban Landscape (Historical Cultural Heritages) and Revitalization of Community

0 The most important thing is how to create a sustainable place or an organization such as a community development center where various stakeholders such as district residents, administrative authorities, and UNESCO can discuss the future of the district on a daily basis.

1 Community-based plan

It is not possible to rely on public assistance for all reconstruction, and it is not realistic due to financial problems. However, there are limits and impossible for the victims to work on their own reconstruction. Also, leaving all such reconstruction to self-help is a waiver of public responsibility. However, if the national and local governments cannot respond in detail to the circumstances and demands of each individual and each district, the community should be considered as the main body of the reconstruction plan, and mutual assistance by the community is the basis.

2 Consensus building by participation

Participation of local residents is indispensable in formulating and implementing reconstruction plans. Various interest adjustments are required in planning, and their effectiveness cannot be guaranteed unless consensus is reached among the local residents. The community has the role of forming consensus with the participation of local residents.
3 Small scale projectLarge-scale projects do not fit in for consensus building. In order to recover and improve the living environment within a familiar range, it is better to accumulate small-scale projects.

3 Small scale project

Large-scale projects do not fit in for consensus building. In order to recover and improve the living environment within a familiar range, it is better to accumulate small-scale projects.

4 Step-by-step approach

That is, a step-by-step approach is needed. It is desirable to guide each movement step by step under certain rules.

5 Maintaining the diversity of the district

The district has a history of the district, and the composition of the inhabitants is unique. Reconstruction plans should be implemented in a way that respects the uniqueness of the district and allows for diversity. In other words, the uniform method does not always fit into the entire city.

6 Regeneration of cityscape:

The history of the city and the importance of its memoryHistorical and cultural heritage should be restored and regenerated as much as possible in order to maintain the uniqueness of the district. Cities are formed over historical time, and the atmosphere and landscape of the town is a valuable common property for the lives of the inhabitants. I want to aim for regeneration that values people's memories.

7 Utilization of community architect

For the reconstruction district plan, it is necessary to listen to the requests of the community residents and make various advices. There have already been examples of instructors and students from local universities opening offices in the field and conducting volunteer activities for housing counseling, but it is desirable to have a mechanism for allocating such human resources to each district and how to provide assistance.

③. 質疑応答・意見交換

1. 中東都市における歴史地区とそこから学ぶこと／時間と空間の集積（深見）

Q.1 住民参加の維持・修復の活動は、上手く進んでいると思いますが、今後における維持・修復について具体的な案や計画はありますか。

A. この事業を今後も続けていきたいと思いますが、やはり資金源の問題もあって、どの程度継続できるかは分かりません。ただ、4 月からのプロジェクトに応募しました。

2. 都市における活動のための公共空間；街路と伝統的な喫茶店（宍戸）

Q.1 解決策の具体的な案をお聞きしたい。例えばトルコの事例写真があったかと思いますが、どのようにしてあのようになったのかに興味があります。

A. トルコの事例ですが、20 年前は整備が行き届いてない地区でした。その地区の良さを皆さんが感じ、南東部から人が移り住み、食文化や独特な喫茶文化ができてきました。それに行政が目をつけて、そこを整理していきましょうという話になってきました。道路に車がたくさん停まり安全に歩けない問題があったので、そこをまず解決するということで道路の一部を広場にしました。そういった場所に、アフワが外部に置けられ、観光客とか買い物客が来るようになってきたのです。

3. 川越の歴史的建造物の保存に向けた取り組みについて ／街並とその現代的活用（荒牧）

Q.1 時間を経ても街の良さが無くならない。それはどうやって実現できたのか。ルールの成果なのか、住民の意識の高さなのか、政府からの補助金なのか。建物を維持・保存を可能にする要因・モチベーションは何なのか。

A. どうしたら持続可能な街になるのかというご質問と思いますが、確かに補助金は大きなモチベーションです。古い建物を直しながら使うのには大変なお金がかかります。地震のことも考える必要があります。必要な部分に補助を出すことによって、負担を減らしてあげるのはモチベーションになります。ルールづくりについては、長い年月に暮らしてきたスタイルを現代的にしています。過去から未来へ継承すべきものを継承し、変えた方がいいものがあるものは変えるという考え方です。水道・電気・ガス・暖房などの設備は新しくするが、中庭などの考え方や外観は継承していくといったことです。専門家のアドバイスを受けながら、住民が話し合ってルールを作っていくというのが大切と思います。

Q.2 川越の町に東京からの移住者がいるとのことですが、その理由はなんでしょうか？

A. 東京がどんどん変化して、ふるさと感がなくなっているが、古い建物がある川越には、ふるさと感を感じることができるからだと思います。古い建物は住むのは難しいですが、落ち着いた歴史が感じられる街に住みたい人はたくさんいます。また中には、ここだと落ち着いて子育てが出来そうだっていう方もいらっしゃいました。お祭りも魅力の1つと思います。川越祭りですが、二日間で 100 万人の観光客が来る大きな祭りです。そのお祭りに参加したい、お祭りと共に生きていきたい、そういう人もいます。やはり歴史的なものがあることによって都市の魅力が格段に上がると思います。単に、東京からの時

間的距離だけでなくて、地域に自分がどう関わりたいか、という点では、現代都市よりはこの歴史がある街のほうが地域との繋がりがしっかり持てる。それらが歴史的な街の魅力と思います。

Q.3 東京からの移住者の年齢層はだいたいどれぐらいですか。

A. 子育てを始めようとする人、ちょうど子供の学校が入るタイミングの方、家を買うとお金がかかるのでローンを組める年齢、30 歳前後の方が多いです。

4. カフェ、ブティックホテルなど、歴史的建造物の現代的な利用法（磯野）

Q.1 伝統的公衆浴場（ハンマーム）の改修について、住民の同意や金額的なものについて教えてください。

A. ハンマームについて、彼らが改修したのは、お客さんがいなくなったことが、一番の動機だったと思います。じゃあどうしようかと言うときに、それでは機能を変えようという風になったと聞きました。 ですから、お金がほとんどかかってないですし、掃除をして家具を入れただけですね。使用者がいなくなった原因はバルレヴィー時代に伝統的公衆浴場が不潔なので禁止令が出たことによると思います。

5. 住民参加のまちづくりの仕組と事例／建築の参加のデザイン事例（連）

Q.1 最後のスライドの右側の写真はどちらの写真ですか？

A. これは 1 月に行ったカイロ旧市街での住民ワークショップの写真で、サラー先生、アラー先生、そして深見先生が住民と話し合いました。スーク・シラーハの通りをどうようにしたらいいか、そこにある歴史的建物の使い方について、皆で話し合ったわけですね。この方法は、まさしく利用者である住民が参加している状況で、左側の写真の、東京の赤坂で行っている住民参加のまちづくりと同じことですね。サラー氏とアラー氏は建築家という専門家です。その専門家と住民のアイデアをブレンドしていくことが、持続可能性に繋がると思います。そのプロセスを通して、住民が街や建築に対して理解を深め、誇りを持つことになりますね。

□サラー氏のコメント：住民参加に関してですが、事例をお話ししたいと思います。集合住宅でトイレや洗面の改修を依頼された時に、昔のアラブ式なのか、ヨーロッパ式が良いかなど、利用する人でないと分からない情報があります。住民と専門家が話し合うことによって、良いものができます。もう一つの例ですが、洗濯物を干す時に、外から干したものが見えるのは嫌だとのことで、私たち専門家はバルコニーに簡易的なスクリーンを設け、道を歩く人から見えないように工夫したことがあります。これも話し合うことによってアイデアが生まれるという住民参加の良さだと思います。

6. 学生から見るヒストリックカイロの可能性(2018 年作品) と NOUH へのアドバイス（布野）

□コメント：日本人学生の貴重なアイデア、ありがとうございます。若い方の意見を取り入れることは大事だと思います。ハンマームをスーパースパにして活用するアイデアは面白い。エジプトでも女性の美意識は高まっている。歩行者天国の案も良かった。自動車通行禁止を毎日することは無理だが、指定日であればできそうだ。露店を出したりして観光客を呼び込むことができそう。布野先生がおっしゃっるように、みんなで議論し、みんな

で取り組むことがエジプトにいい環境をつくるために必要です。まわりにも広めていきたいし、将来的に価値が高まることになるので参加してくれる人も増えるはずだ。

A. アラー先生とサラー先生を日本のグループはサポートしたいと思っている。ここでの実験を日本の経験にも活かしたい。是非、これをカイロにおけるNOUHと協力したエジプトのモデルケースにする仕組みを作っていただきたいと思います。ルクソールとか、他の場所についても日本の経験と交流するような機会にも広げていただければよいですね。

④ コメント（岡田保良）

皆さんこんにちは。岡田と言います。深見さんや布野先生とは長くお付き合いいただいています。皆さんイコモスという組織をご存じでしょうか。ユネスコの世界遺産を審査する役割を担っている組織です。そのイコモスの日本の委員会での代表を務めています。

今日、日本の専門家から6つの発表がありました。その中には、荒牧さんが紹介された川越、それから連さんが紹介された東京のど真ん中の赤坂の話もございました。実は日本にはこういう歴史的な街並みを住民たちの手で作っていこうというグループがたくさんあります。そして日本の国の法律で指定された保存のエリアも確か 100 を超えていると思います。そのように、日本には半世紀くらいにわたって住民が街並みを作り上げていくシステムが、あちこちに根付いています。

一方、カイロの歴史地区、ヒストリックカイロは、世界遺産になってから随分経つと思いますけれども、そこでのまちづくりが一体どんな風に進められているのか、について私はよく承知していませんでした。けれども、1月のワークショップでの話を伺っていると、カイロの皆さんはとても高い意識を持ってらっしゃることがわかりました。その中で、先ほど布野さんがこれからの課題を話されましたけれども、これからは皆さんがいろんな意見を出し合って街を作っていく、その枠組みやルール作りをやっていかないといけないんじゃないかと感じました。おそらくそういう形でのルールづくりあるいは枠組みづくりに、日本の色んな経験がお役に立つのではないかと思います。

そして、その世界遺産という観点から申し上げれば、世界遺産だからどうこうするということではなくて、理想的にはやはり住んでいる方たちが、自分たちの街の歴史を大事にし、それを再生し、活用しながら次の時代の街を作っていく。それが世界遺産としての価値についても損なうことがない、という枠組みができれば理想的なんじゃないでしょうか。

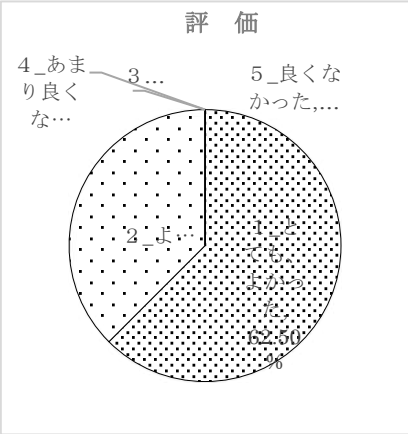
今日のような意見の交換は、私はまだ始まったばかりでこれから何度も続けていただきたいと思っていますし、私自身もできればもっと知っていきたい。実は、私、スーク・シラーハを訪ねたことがありません。是非一度は訪ねてですね、皆さんと意見を交換したいと思っています。更に申し上げればイコモスという、パリに本部がある NGO の組織ですけども、その NGO の中には歴史的な街、あるいは一般の住宅なんかを保存し活用しようという国際的なグループもあります。そういったところにも目を向けていただき、議論に参加していただいて、ヒストリックカイロの将来のまちづくりに活かしてもらえれば嬉しく思います。日本とカイロの皆さんとのこれからの交流が、ますます盛んになることを願いまして、ご挨拶としたいと思います。ありがとうございました。

⑤アンケート結果

●属性：アンケートを記入した頂いた方は 8 名、その属性は

・フリーランスの都市遺産管理コンサルタント・博士・建築家

・日本イコモス・大学研究者・ICOMOS・IIWC

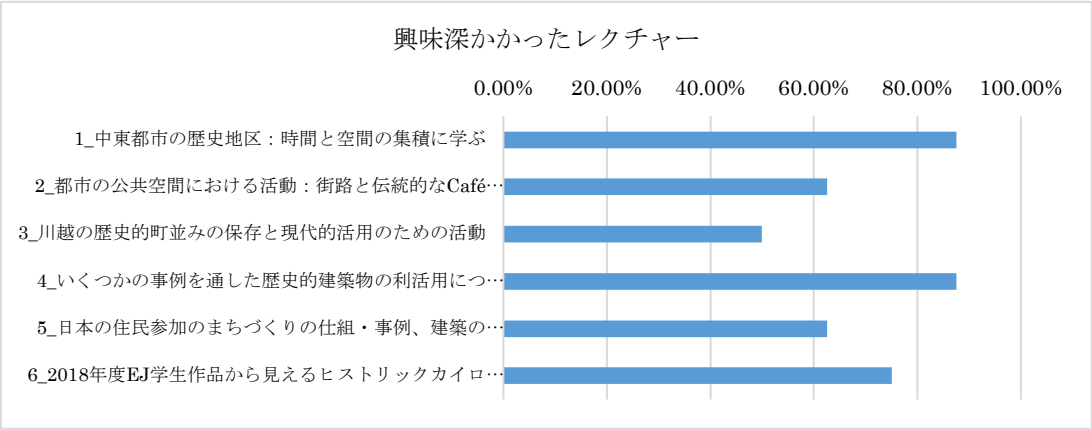


●オンラインレクチャーの評価

3 分の 2 が「とても良かった」、残りがすべて「良かった」と応えており、「普通」「良くなかった」「あまり良くなかった」は０であり、満足度の高い内容であったと評価できる。

●興味深いレクチャーの問いについて

一番多かったのは「１中東都市の歴史地区：時間と空間の集積に学ぶ」と「４いくつかの事例を通した歴史的建造物の利活用についての考察」。次に「学生作品から見えるヒストリックカイロの可能性と NOUH へのアドバイス」であった。身近なテーマに対して興味が持たれたのかと推察される。



●意見・感想など（自由記述）

・多くの可能性を秘めているが、実際の利益を得るためには、特にエジプトにおける法律や統治の枠組みについて集中的な経験を積み、文脈を理解することが必要である。

・すごくエキサイティング

・歴史的建造物の再利用やコミュニティとの関わり方について、新しいアイデアを得ることができた。

・歴史的建造物の利用や再利用の様々な選択肢を理解することができ、古い建物を再生するために他の国からどのように学び、住民が自分たちの地域を改善するためのアイデアを得るのを助けることができるのか、とても役に立ちました。

・プレゼンテーションが良く、サステナビリティと歴史都市における活動の多様性に関連する重要な側面を露呈しています。

・このウェビナーを開催するために、ホスト側の努力に感謝します。カイロの街並み保存の現状と日本側の貢献の仕方を知ることができ、大変勉強になりました。

・重要伝統的建造物群保存地区制度は 1975 年に始まってから半世紀が経ち、当初の活動主体となった住民の主体が子世代へと世代交代する中で、一部で価値の継承が難しくなっています。次の 50 年、100 年と世代を超えて持続可能であり続けることは容易でないですが、多世代にファン（賛同者）を増やす為の努力（またはきっかけ作り）は必要なのだと思いました。本日は、ありがとうございました。

・「たいへん興味深かった。今後の進展と思うが、カイロの歴史地区の具体的な保存活用事例や仕組みを知りたいと感じた。

■５．更新案意見交換会と街歩きワークショップ

①趣旨と全体の流れ

１月８日、９日に開催した「■３．住民ワークショップ」による住民の意見を集約する形として、この「更新案意見交換会と街歩きワークショップ」を設定した。すでに、本プロジェクトに最初から関わり、1 月の住民ワークショップでファシリテーターを務めたサラー氏とアラー氏に、実際にワークショップで発せられた住民の意見を図面上にあらわしたデザイン・コンセプトを依頼してあった。二人は、スーク・シラーハで長らく保全活動を続ける建築家である、前者はアズハル大学建築学部、後者はメヌーフィヤ大学工学部の教授を勤めている。依頼内容は、アラー氏には、地域としての未来像、特にスーク・シラーハのコンサベーションの方針の提示を、サラー氏にはスーク・シラーハで実際に携わったプロジェクトを含め、住民ワークショップの題材とした 6 つの歴史的建造物の活用とそのリノベーション案についての提案を求めた。

本ワークショップを計画したことには、いくつかの理由がある。まず、本プロジェクトの目的が歴史都市保全における住民参加の推進にあるために、上記両名に依頼した住民参加を基盤としたデザイン・コンセプトを実際に住民がどのように感じ、実際にまちあるきして現場を見ることを知ることが重要であると考えたからである。こうした経験は、住民自身にとって遺産保全を考慮に入れたまちづくりを体感し、提案をかけ離れたものではなく自らの意見の反映として捉えられる。

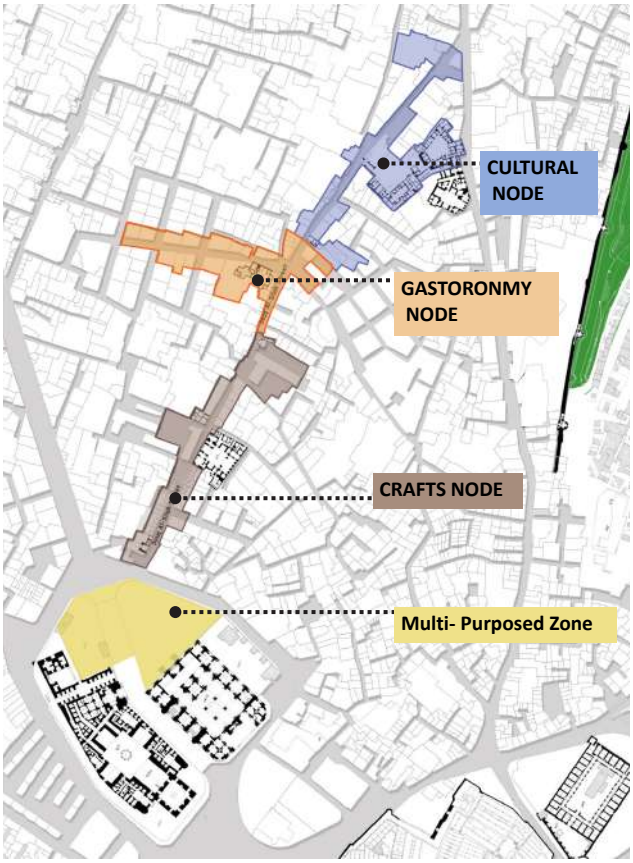
さらにもう一つの理由として、「■１．事業計画　①⑶世界遺産・歴史都市カイロ」で述べたように、カイロ旧市街の保全には、エジプト行政のさまざまな部門が関与している。また「同　①⑵カイロ旧市街保全・・」で指摘したような、海外の様々な団体が保存修復活動を続けており、歴史遺産を巻き込んだ社会啓発を行う地元の NGO も数多い。しかしながら、多くの場合において一対一関係で事業が進み、多様なステークホルダーが場を共有する機会が限られている。こうした指摘は、さまざまな関係者が口を揃えていうことで、中には 90 年代後半から 2000 年代にかけてはそうした場が存在したという意見もあった。このような経緯から、遺産保全に関する情報の疎通を図り、お互いに協力し合う場所が必要であることを実感していた。今回は、ユネスコ、ワールド・モニュメンツ・ファンド、観光考古省と組織

としての参加は限られていたが、こうした機会を増やしていくことは、旧市街カイロの保全上の問題点解決の一つの緒となるであろう。

加えて、エジプトでは行政側と住民という関係が、行政側が主体者で住民はその意見に従うという図式が根強く、行政側も住民の意見を取り入れる方策を未だ見出せていない状況にある。日本のように行政側を公共サービスの一つとして考え、もう少し気楽に自分の意見を伝えられる場が必要であることも、今回のワークショップ設定の理由である。

なお、参加者に関しては、国立都市景観調和機構をはじめ、いくつかのステークホルダーとしての機構に招待状を発送してあった。しかしながらエジプトの休日に当たる金曜の開催ということもあり、当日になってから不参加の連絡が相次いだ。反省点としては、何らかの機関を代表する参加者に関しては、講演や発言を依頼するなど、ワークショップ参加の必要性を最初から確約しておくことが重要である。また、公の機関としての参加者については、金曜日という休日は望ましくなかったのかもしれない。住民に関しては、あまり多くの住民が集まってもと思い、男女ともに 5 名ずつを当初は考え、事前のワークショップに参加した住民の中から、5 名ずつを招待した。当日になって男性は招待した 5 名だけであったが、女性は 12 名の参加があり、関心の高さを物語っている。なお、今回は住民に対して男性と女性の双方を招待したが、席順は自由にしていたにもかかわらず、男性と女性が部屋を半分に分けるような形で座った点は、興味深かった。しかしながら、質疑応答の際にも、女性も男性の前で自分の意見を強調する場面も見られ、意見交換についての支障はなかった。

ワークショップ開催にあたり、筆者からこのプロジェクトの概要と、その成果物の紹介、プログラムを説明した。



続いてアラー氏からダルブ・アフマル地域におけるスーク・シラーハのビジョンという発表が行われた。詳細に関しては、そのプレゼンテーションを掲載する。住民の 6 つの建物の活用希望案を土台に、スーク・シラーハ入口近くのスルタン・ハサンとリファーイーモスク前の広場を多目的ゾーンとし、通りを南から工芸ノード、中央を西に伸びる食文化ノード、北の文化ノードと大きく分ける提案で、それぞれのゾーンで見込まれる収入を提示し、年齢性別に分けて、住民自ら支払う費用と助成金という経済的側面をも指摘する提案であった。提案の特徴は、単に 6 つの歴史的建造物に注目するのではなく、通りの両側に広がる空間をも視野に入れたものであった。

工芸ゾーンでは、ウィカーラ・ラブアをブティックホテルや工房、あるいは工人の住まいとして改装し、ルカイヤ・ドゥドゥを工芸博物館、シナン・パシャを木工細工の展示場とし、現在の小学校を工芸学校と工芸センターに改良するという大胆なものである。空地に意味を持たせ、緑化庭園、中庭、展示場、工房などに使う点は、一つに解決策になるのかもしれない。また緑化庭園だけでなく、屋上緑化を実施し、都市の快適性を維持する提案である。

食文化ゾーンでは、ハンマーム・バシュタークの再生を核として、その周囲に入浴や美容に関する施設およびその熱源から伝統的な料理を作る共同台所を設置する。スーク・シラーハと交差して東西に走る道沿いに、多様な食料品店を並べ、現在空地となってしまっているところを公園化するという案である。さらにはバイト・ヤカンとナーセル時代のアパートの間に女性専用伝統的喫茶店を設ける。現在トゥクトゥクなどの駐車場となっている空き地を、フード・コート、駐輪場などに積極的に使用する。また、伝統的な習慣の一つに嫁入りの際にハンマームでヘナと呼ばれる体への着色を行うことから、ウェディングセンターを設ける点も興味深い。

文化ゾーンにおいては、伝統的建造物として観光考古省に登録されているバイト・ラッザーズの崩壊中庭を映画劇場に改築すること、および大規模敷地が空地となって荒廃している部分と通りを介してつながる地元のコミュニティセンター（現在は機能していない）を接続させて、会議および多目的用のホールとその周囲を囲む歴史都市の広場として用いる

さまざまな可能性を盛り込んだ素晴らしいプレゼンテーションで、工芸、ガストロノミー、文化のゾーニングは、住民の意見を大きく取り込んだものである。街を動かしていくためには、たくさんの問題に対面していくことはもちろん大事だが、この提案事例にあるような。明るい未来への地域ビジョンを提示していくことは、住んでいる人々に希望を与えていけると考える。

一方で、提案事例においてモスク等の宗教建造物を扱わなかったのは、ワクフ省が開発や修復に柔軟ではないという配慮からかもしれない。しかしながら、「■２検討　①スーク・シラーハと保存案対象建物」で指摘したように、歴史的宗教建造物にもスーク・シラーハを活性化させる可能性が含まれているように感じる。加えてすでに空地となっているものの再利用は推進すべきであるが、歴史的都市組成の記録という面からはどのような処方ができるのかということも重要であろう。もう一つ、ハンマーム・バシュタークを全面再生する場合、現在居住する貧困層の人々をどのように扱うのかという点も、留意せねばならない。特に最後の問題は、現在の政府のやり方では、貧民による疲弊地区（インフォーマル居住地）を撤去し、近代ヨーロッパ風の独立アパートメントをたてて収入源とし、貧困層はカイロから遠くに出してしまうという案が提案されているために、新たな住宅地計画手法の勘案が切望される。

筆者が調査を通じて興味深かったのは、1938 年の地図にある大規模敷地に対するおそらく個人規模の開発に、いわゆる袋小路の方式が使われているところがあることだ。現在は 7 層を超える高層の集合住宅となってしまい、住環境としてはあまり良いものではない。しかしながら、いわゆる曲折する袋小路を使っているという点は、現在の独立アパートメントとは異なる即地的な手法で、評価できるのではないだろうか。旧市街の開発に、現在カイロのインフォーマル住宅地域（サイエダ・ザイナブ、マスペロ等）で実行されているようないわゆる独立棟のアパート形式ではなく、歴史的な都市組成を保持しながら旧市街にあった住宅地を提案していく方向性を考えていく必要性を感じた。

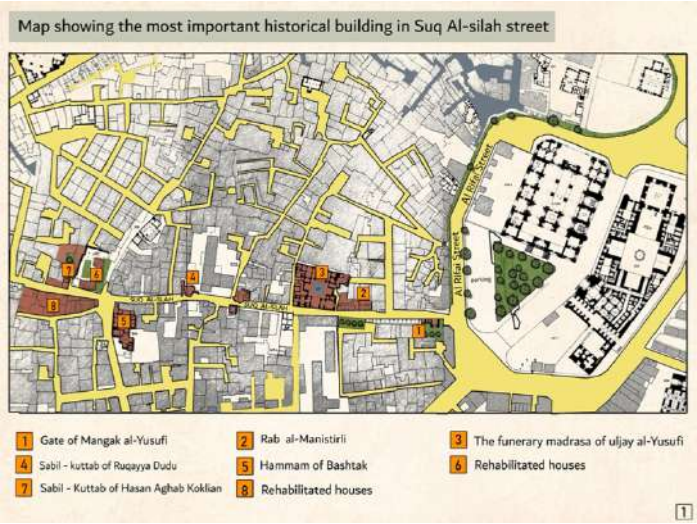
都市は多様な人々を受け入れ、その文化を育んできた。その結果としての旧市街の保全において、貧者の生きる権利、幸せな生き方という点は、歴史都市再生の一つの課題であろう。

続くサラー氏からの提案は、今まで遂行してきた彼自身のプロジェクトを含めて、スーク・シラーハ通りの重要な建造物を指摘することから始まった。カイロのイスラーム建築の代表とも言えるスルタン・ハサン・モスクと繋げて通りを考える視点を提示し、スーク・シラーハの存在にスルタン・ハサン・モスクが重要な役割を果たすとする。

入口のマンジャク宮殿は、ビジターセンターとして、図書コーナー等も設置し、２階とその屋上からはスルタン・ハサンを見下ろすことによって、カイロ旧市街の絶景ポイントとしての可能性が強調された。

通り沿いのラブアは、2 階を修復してホテルとし、屋上には無蓋のレストランを設ける。いくつかのサビール・クッターブとハンマーム・バシュタークについて歴史的重要性が述べられた。

加えて、20 世紀初頭の 3 階建てのヨーロッパの影響を受けたアパート（下層を店舗とする）およびナーセル時代 1960 年代の 5 階建てのアパートの修復事業についても言及があった。修復事業においては住まい手の希望を優先し、水回り、室数などの改変を行ったという。



住宅に関していうと、1850 年以前にさかのぼるものはそれほど多くない。1850 年代から 1938 年まで、あるいは 1938 年から 1980 年頃に建てられた住宅でも、階高が 20m を超えないアパートはいくつかあり、その改修を通じて、歴史街区のグレードアップを図ろうとするものである。これらのアパートでは、建設ののちに、上階が増築されたものも多いが、1980 年以後の 5 階建て以上の建物に比べると、歴史街区には調和的な側面が強い。こうした建築も遺産の一つと考えて、改築し修景をはかることは、住環境アップの一つの手法となると考えられる。また、先述した貧困層の住まいという点でも、何らかの解決法となるであろう。

サラー氏の当日の発表では、6 つの歴史的建造物のリノベーション案という点からは、少しズレていたように感じられた。とはいえ、今までの改修事例のプロセスは、まさに住民参加を実行してきたもので、今後もこのようなプロジェクトを伸ばしていくことが必要であろう。

2 名の更新案の提示後に、ユネスコカイロ事務所の高橋暁氏から「カイロ歴史地区におけるユネスコ支援事業」の発表があった。ユネスコは、カイロの無形遺産に注目して、伝統知識や技術の継承プロジェクトに取り組み、無形文化遺産記録作成に関する訓練事業の支援が行われたこと、現在「歴史地区カイロの伝統工芸の記録保存事業」を施行中であることが話された。スーク・シラーハにも伝統的木工細工があり、今後有形遺産と無形遺産の融合を図り、有形遺産としての歴史的建造物を無形遺産の保全に使えるような活用の立案が望まれる。さらに、ワールド・モニュメント・ファンドのジェフ・アレン氏から、スーフィー道場としてのタキエ・イブラヒム・グルシャーニーの修復プロジェクトの紹介が行われた。少し離れた地区の事例で、特に歴史的建物の記述、その後の修復、さらには地域への還元というステップが紹介され、住民たちも熱心に聞き入っていた。

その後、日本側も交えて質疑応答が行われ、実際のまちあるきへと出かけた。まちあるきを実行してよかったと思った点は、アラー氏とサラー氏のプレゼンテーションに出てきた未来像に対して、実態に即してその是非を考えることができるようになった点が挙げられる。建築家は図面上の空間を想定できるけれども、普通の人々はやはりその場で考えることによって、より具体性が増したのではないだろうか。それぞれの詳細については以下で詳述する。

なお、まちあるきから帰ったのち、4 時半過ぎというランチとしてはかなり遅い時間となってしまったが、バイトヤカンの各所でそれぞれにグループを作ってランチを取った。ランチの間にも、今日の話題や未来のスーク・シラーハのこと、あるいは近頃の街の問題点などが話題となっており、ワークショップ参加者の関心の高さを感じた。今後は、この関心をどのようにして、多くの人々に伝え、よりコミュニティの輪を大きくしていけるのかという点が課題となる。

・プログラム

未来のスーク・シラーハへ向けてのワーク・ショップ
2022 年 3 月 4 日（金曜日）
バイト・ヤカンにおいて
13 時半から

13:30-13:40
プロジェクトと地域の概要；歴史的価値と住民参加のワークショップ
深見奈緒子（日本学術振興会カイロ研究連絡センター）

13:40-14:00
スーク・シラーハのデザイン・コンセプト
アラー・ハブシー（メヌーフィヤ大学）

14:00-14:20
6 つの歴史的建造物の公的再利用についてのデザイン
サラー・ザキー（アズハル大学）

14:20-14:35
ユネスコ支援中の歴史的カイロにおけるプロジェクト
高橋暁（UNESCO）

14:35-14:50
ワールド・モニュメンツ・ファンドの現在のプロジェクト；イブラヒム・グルシャーニーのタキエ
ジェフ・アレン（WMF）

14:50-15:30　質疑応答

15:30-16:00　スーク・シラーハのウォーキング・ツアー

16:00-　昼食

■会議出席及びオンラインサポート：柏木、檜山
■会議出席及び通訳：ファーリス、イマード、ハーガル、ファーティマ
■日本側オンライン出席者：連、布野、岡田、磯野、荒牧、宍戸、松村

②更新案プレゼンテーション:スーク・シラーハのデザインコンセプト(アラー・ハプシー)

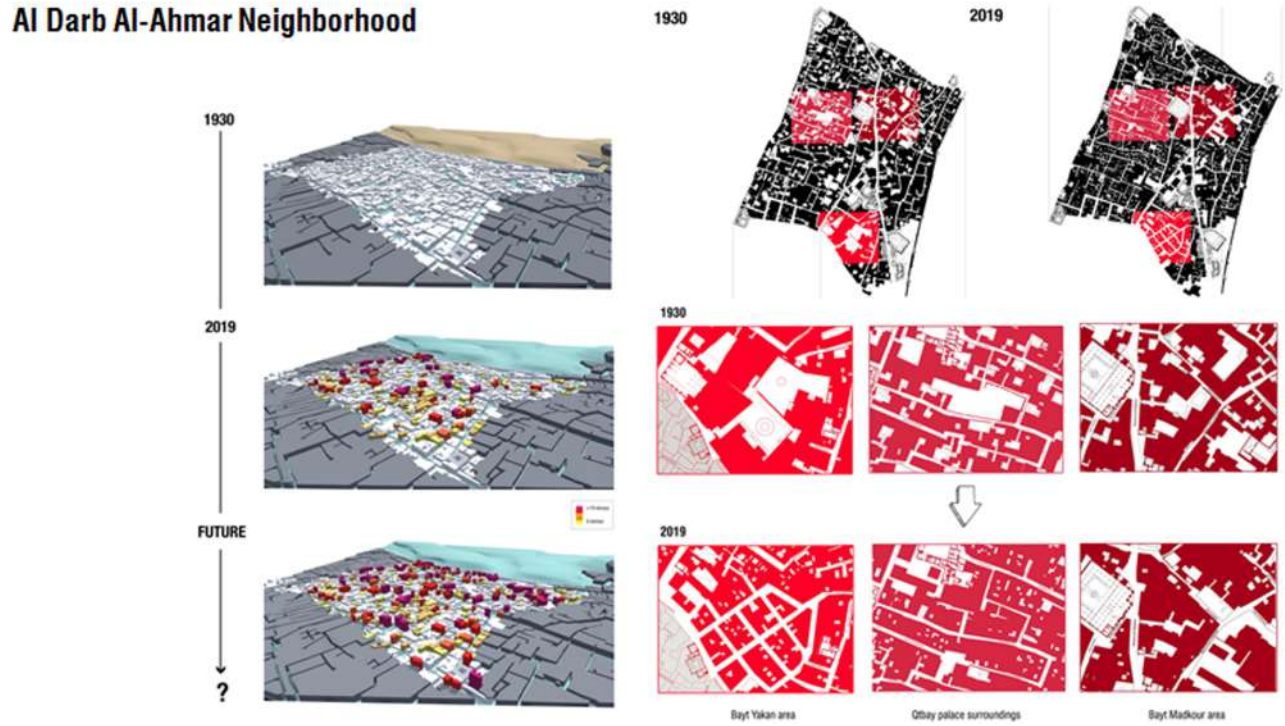
【SOUQ AL-SILAH VISION IN AL-DARB AL-AHMAR】

私たちは、こうしたワークショップを何度も行ってきました。みなさんお越しいただきありがとうございます。住民の方々、ユネスコの高橋さん、観光考古省のアムルさん、ありがとうございます。

今、実は、スーク・シラーハは大変重要な時期に差し掛かっています。それは、国のレベルで、開発や修復が注目されているからです。

私のテーマは「スーク・シラーハの我々の夢」についてお話しいたします。私は、実は 90 年台からスーク・シラーハに関わっています。ですので、長い間専門家として知り得た知識についてもお話しいたします。我々は、発展と問題点の双方を見てきましたので。

このスライドは、昔と今のアーバンファブリックを比較したものですが、昔は道路にマスタバがあって女性も使い、アフワ(伝統的喫茶店)のようになっていました。大きな空地が減って高い建物がたち、街が建物で窮屈になってきています。こうした事例は、街の環境悪化の一つです。我々は、何がこうした悪化の原因となったのかを考え、その原因をみんなで理解するようにしたいと思います。



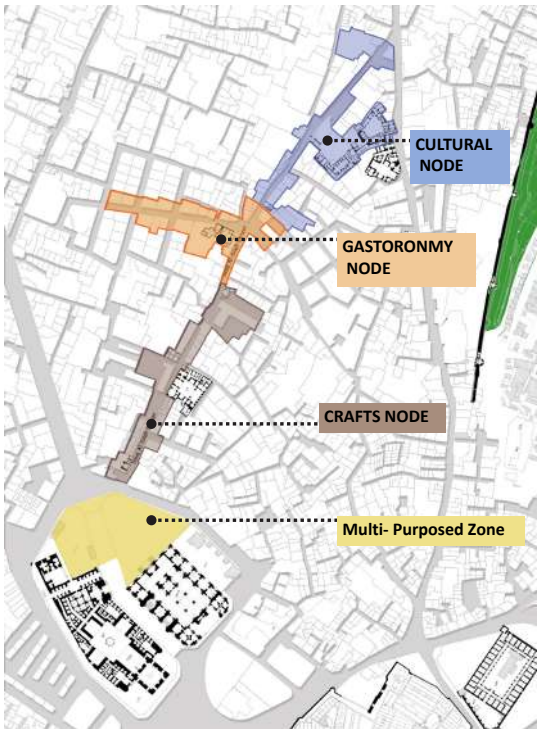
日本人グループは、エジプト人建築家たちと一緒に街を歩き回って、色々と調べました。街を小さな地区に分けて、それぞれの状態を具体的に記述しました。最新の地図で、住民の建物ごとに記述し、街の問題点や新しい現象などが取り上げられています。そして、この会場でのワークショップ、オンラインでのレクチャーなどを続けて、話し合ってきました。

特に住民のワークショップでは、みんなの意見を集めました。この表が我々の夢で、これは私の夢だけではなく、これはスーク・シラーハのみんなの住民の夢です。全ての考えを集めて、そして表の中に入れたのです。

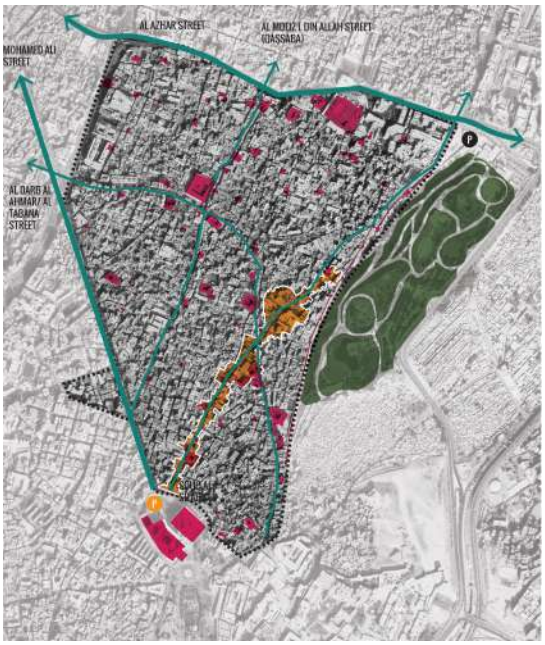
MONUMENT	Souq al-Silah WOMEN	Souq al-Silah MEN	Shared opinion	Japanese's
Hammam (Amir) Bashtak	• sauna and physical therapy for old peoples • upper floor to be a kid's area		• Tourists' attraction • treatment area as a public traditional hammam and a beauty salon.	• Place for special occasions like marriages, ceremonies, and religious events. • public laundries, public kitchens, wedding and funeral venues, and child support centers. • It is also important that the facility be accessible to female residents on a daily basis.
Manjak Silahdar	• public park and open theatre for children. • small restaurant selling baked goods and traditional foods. • Develop it as a touristic gate for a of Souq al Silah and information center • Restaurant on the rooftop	• School to teach crafts • Hotel with perfect view of Refaie Mosque and Madrasa Sultan Hassan.	• information center for tourist attractions • Exhibition and bazaar of handicrafts/hand made products of the local people	• a place to display and sell traditional crafts, handicrafts, foods, and sweets produced in Souq Silah. •
Sabil Kuttab attached Mosque of Ilgay Yusufi:	• tourist attraction • a takiyya • a hospice and center to provide food for the poor	• A small hospital, having emergency department • A prayer place like Zawiya	• Islamic center	• play a role in the care of school children. I agree with the idea of turning the Sabil Kuttab into a library
Sabil Kuttab Ruqayya Dudu	• Zawiya for prayers • A small restaurant and Cafeteria	• Tourist attraction • Library	• Islamic center	•
Sabil Kuttab Hasan Agha Kokalian	• library having special area for kids • Cultural center for the elderly, classes for the literacy • Place for Muslim marriage.	• Kuttab for kids.	• Tourist attraction • A bookstore • Prayer place	•
Sabil Kuttab Mustafa Sinan attached Wilkala	• A small restaurant and Cafeteria • hotel rooms	• wikala to be a small trade center for selling handmade products of the locals.	• Tourist attraction	•

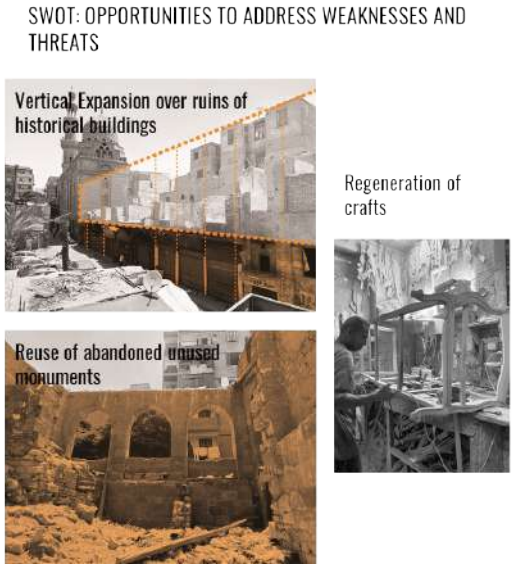
最終的には、ビジョンを作ることが目的となるので、みなさまのさまざまな提案を成し遂げるためには、いくつかの枠に分けることが必要です。例えば、スーク・シラーハの住民の経済環境を改善するものが一つ目の枠です。そして、二つ目はダルブ・アフマルの住民に行政側が提供するサービスです。3 つ目は住民に対するその他のサービス活動です。例えば障害のある子供たちのための活動なども考えられます。

Hara al-Yakaniya/Souq al-Silah Administration Unit		
Income Generating	**Community Service**	
	Evening Expenses	Subsidized
1) Gastronomy a) Bakery b) Restaurant c) Central Kitchen d) Kitchens at communities	1) Children a) Nursery b) Entertaining	1) Children a) Care Center b) Educational (kuttab) c) Educational (arts & crafts)
2) Crafts a) Craft Exhibition area b) Craft Museum c) Craft Market	2) Women a) Haramlik al-Hara b) Beauty Sallon	2) Women a) Wedding Center
3) Cultural a) Bookstore b) Movie theatre c) Boutique hotel to support crafts and Gastronomy	3) Men a) Administrative office for trades, and crafts and urban management	3) Men a) Fitness Center
	4) Elders a) Physical Therapy Center	4) Elders a) Literacy Center

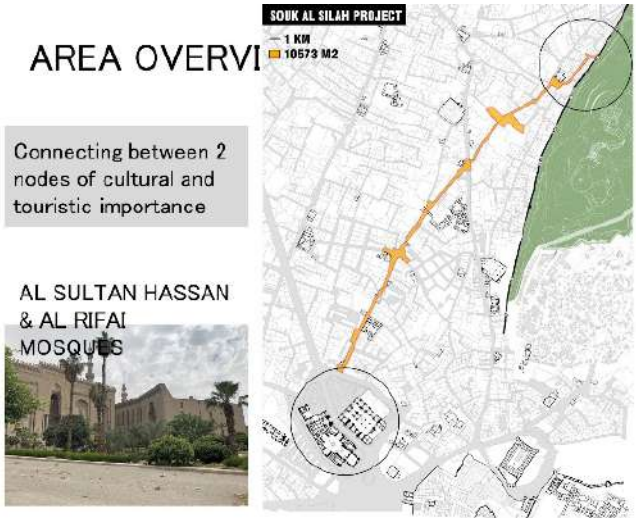


それから、それぞれの枠の中で何をなんのために行うのか、サービスなのか経済活動なのかを分類しました。また、みなさんの意見の中には、年齢、性別の別の対象があります。子供が安全に使える場所、男性や、女性ならばと、分けて考えてみました。まず、食文化のノードでは伝統的料理やアフワなど、あるいはみなさんの意見の中に共同の台所で住民女性が作った料理を提供するなどというものもありました。次は、伝統工芸のノードです。これは男性の方が、得意な分野かもしれませんが、女性もできないわけではないですね。展示会をしたり、手作り市場などが考えられます。最後に、文化活動のノードです。みなさんの意見の中に、本屋、映画館もありました。皆様の中には覚えてる方もいるかもしれませんが、昔はこの通りにムハンマド・アリー映画館がありました。また、小規模な文化センターを作ることも考えました。それからもう一つ、スルタン・ハサンとリファーイー・モスクを囲む広場は、その入り口に当たる多目的な空間で、そこから 3 つの特殊なエリア（ノード）からなるスーク・シラーハを導こうと考えました。特にこの地区は、子供に関する空間を充実させます。そこから、工芸空間、そして特に女性と関係する食文化の空間、さらには文化の空間へと至るわけです。これから、あまり詳細な活動は話せませんが、それぞれどの建物が利用できるかという点について、特に観光考古省の登録建物、あるいは修復して使った方が良い建物などが 3 つの活動にどう役立つのかということを紹介します。



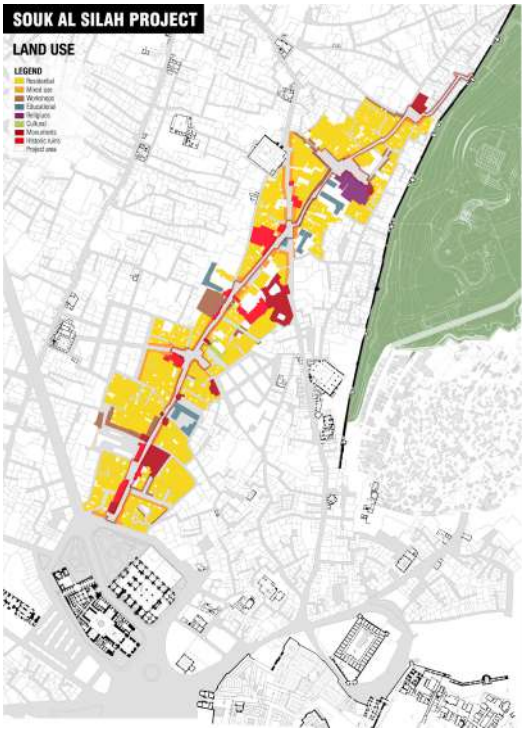


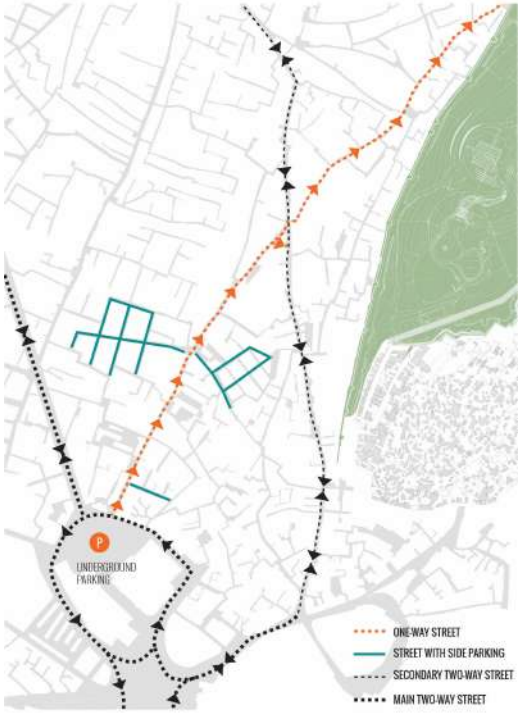
地域の住民が抱えている問題点、建物の老朽化、特に歴史的建造物の荒廃は大きいです。また、高い建物も目立ちますし、工芸の復興も需要な課題です。



とはいえスーク・シラーハはとても重要な地区です。南のスルタン・ハサンと北のアズハル公園を結びつけています。スーク・シラーハはタッバーナ通りを横切って、マフルーキー通りへ伸びています。この通りには、歴史的な文化に関わる建造物も多く、観光にも資する地域であります。

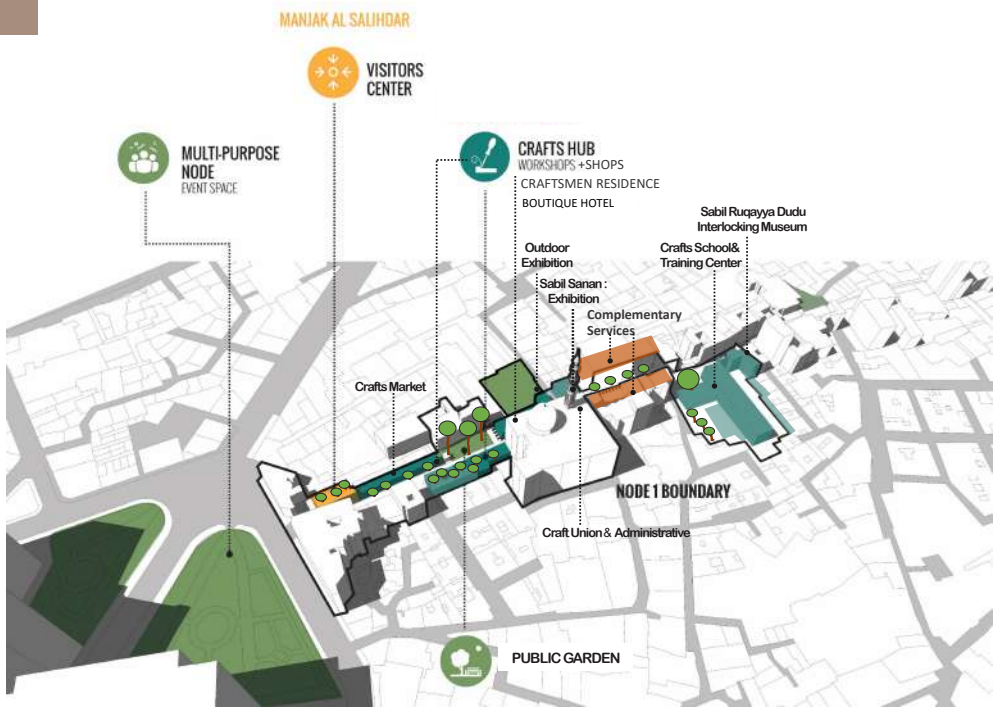
ただし、交通については配慮が必要です。車を減らすこと、政府機関の何らかの移動手段を考えること、一方通行にすることなど様々な解決法が考えられます。特に歩行者を中心に置いたプランが必要です。次に 3 つのテーマ、伝統工芸、食文化、文化について、どの建物が利用できるかという点に移ります。



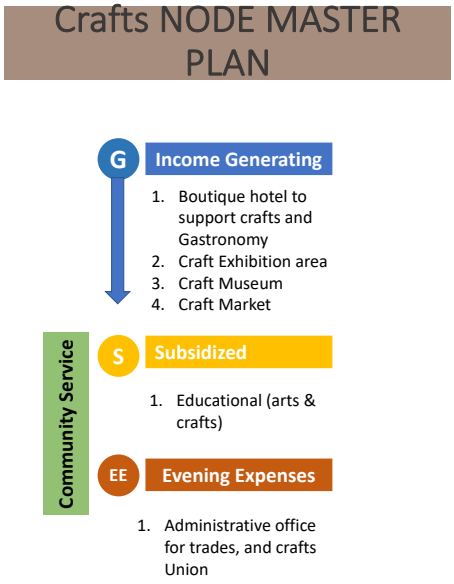


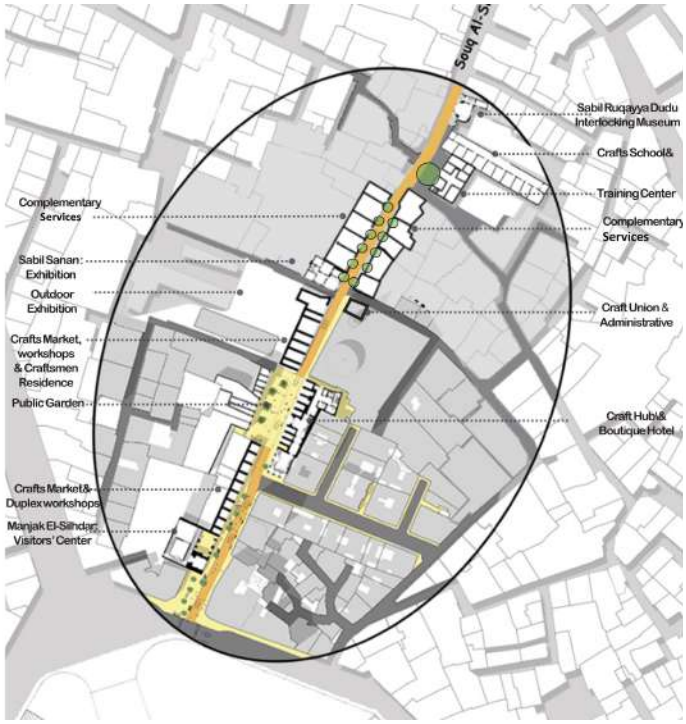
まず、工芸ノードについてです。なお、経済的側面については、青い色は住民が収入を得られるものです。黄色はファンディングや助成が必要なもの、オレンジ色は管理運営に関わるもので、後二者は行政等のコミュニティ・サービスと関連します。

Crafts NODE

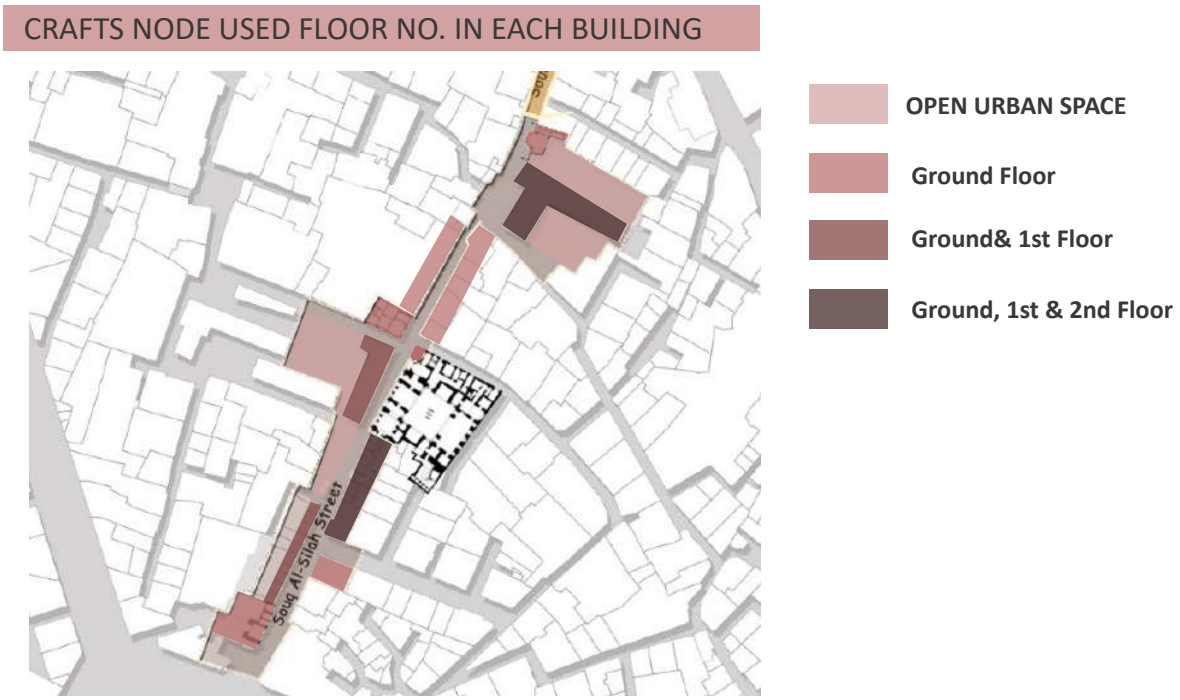


先程、アズハル公園について話しましたが、例えば古くなって使われずに放置されている建物を壊して、そこを緑化して街のポケット的な公園に使うことも考えられます。マンジャク宮殿にレストランを作ったらという案がありましたが、レストランは食文化ノードに入れ、バシュターク近くに共同台所を作ることを選びました。こうした中では管理運営者が必要になると思いますが、みんなで投票を行って、住民関係者の中から管理者を輩出することも重要です。ここはサビール・ルカイヤ・ドゥドゥですが、後ろに学校があります。ここを工芸学校にしたらどうかという提案です。



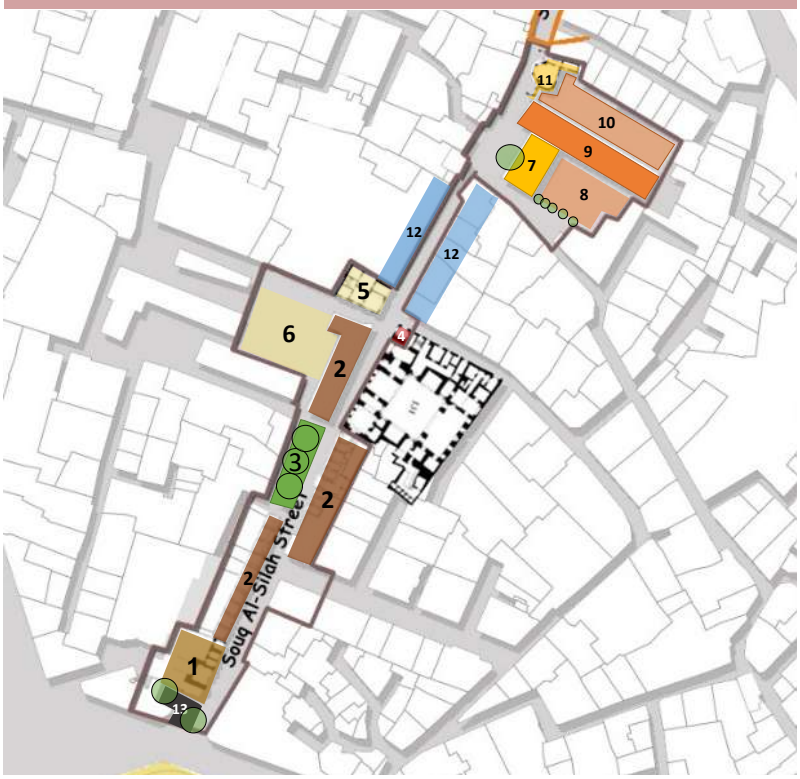


これは工芸ノードのマスタープランです。



次に、先程の経済の 3 つの段階の図ですが、建物機能を 1 階、2 階など階層ごとに分けますが、高くても 3 階とします。そして、先程の経済基盤との関連も考えます。

CRAFTS NODE USED FUNCTIONS GROUND FLOOR



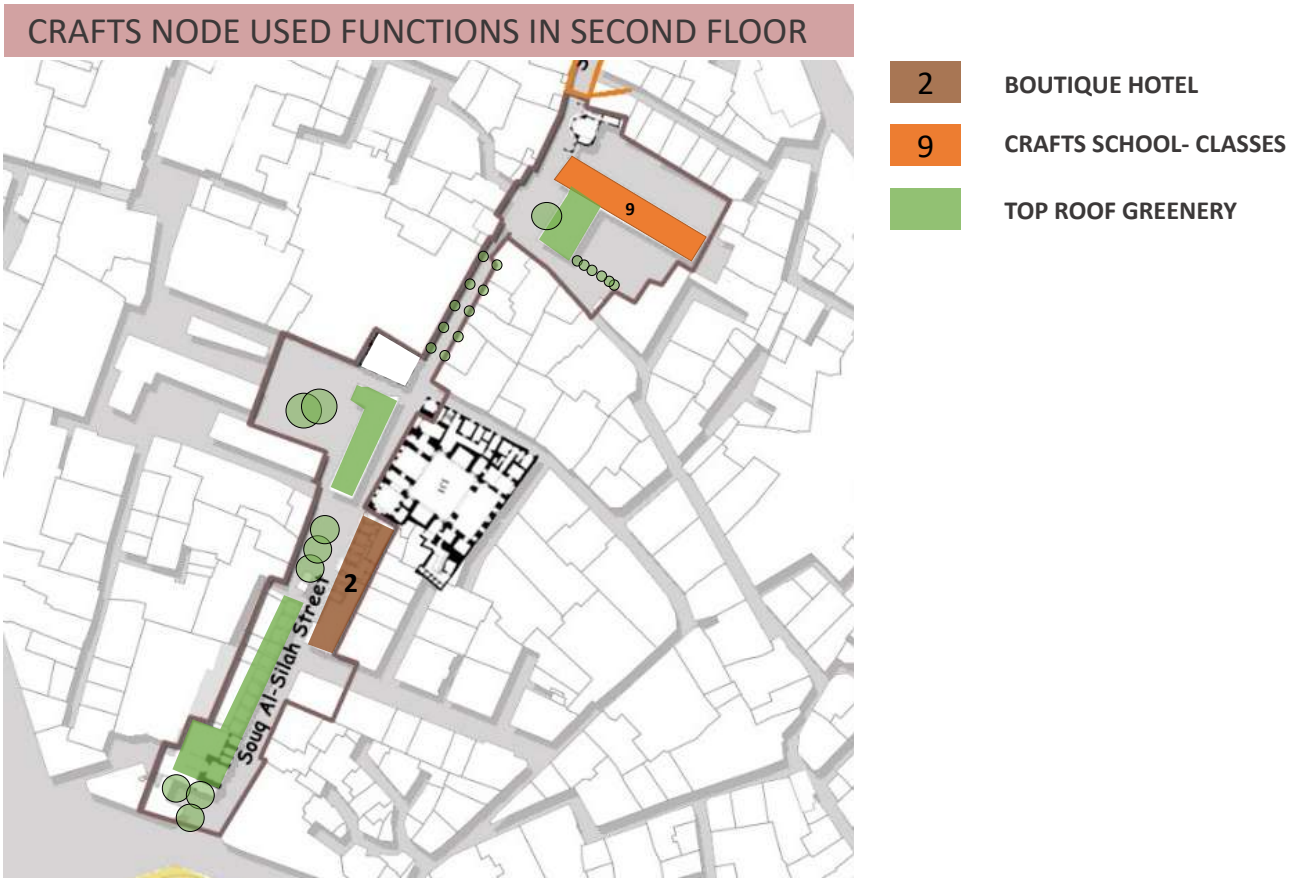
- 1 VISITOR CENTER IN Manjak El-Silhdar
- 2 CRAFTS WORKSHOP& SHOPS
- 2' Duplex WORKSHOPS
- 3 PUBLIC GARDEN
- 4 CRAFTS UNINO HEADQUARTER
- 5 EXHIBITION IN Sabil Kuttab Mustafa Sinan
- 6 OUTDOOR EXHIBITION
- 7 CRAFTS TRANNING CENTER
- 8 COMMON COURTYARD: Multi purpose between Training center and crafts school
- 9 CRAFTS SCHOOL- CLASSES
- 10 SCHOOL WORKSHOP AREA
- 11 INTERLOCKING MUSEUM IN Sabil Kuttab Ruqayya Dudu
- 12 COMPLEMENTARY SERVICES: Tools sellers, mini market, pharmacy
- 13 MUNICIPAL BICYCLES PARKING

1 階の使用法です。

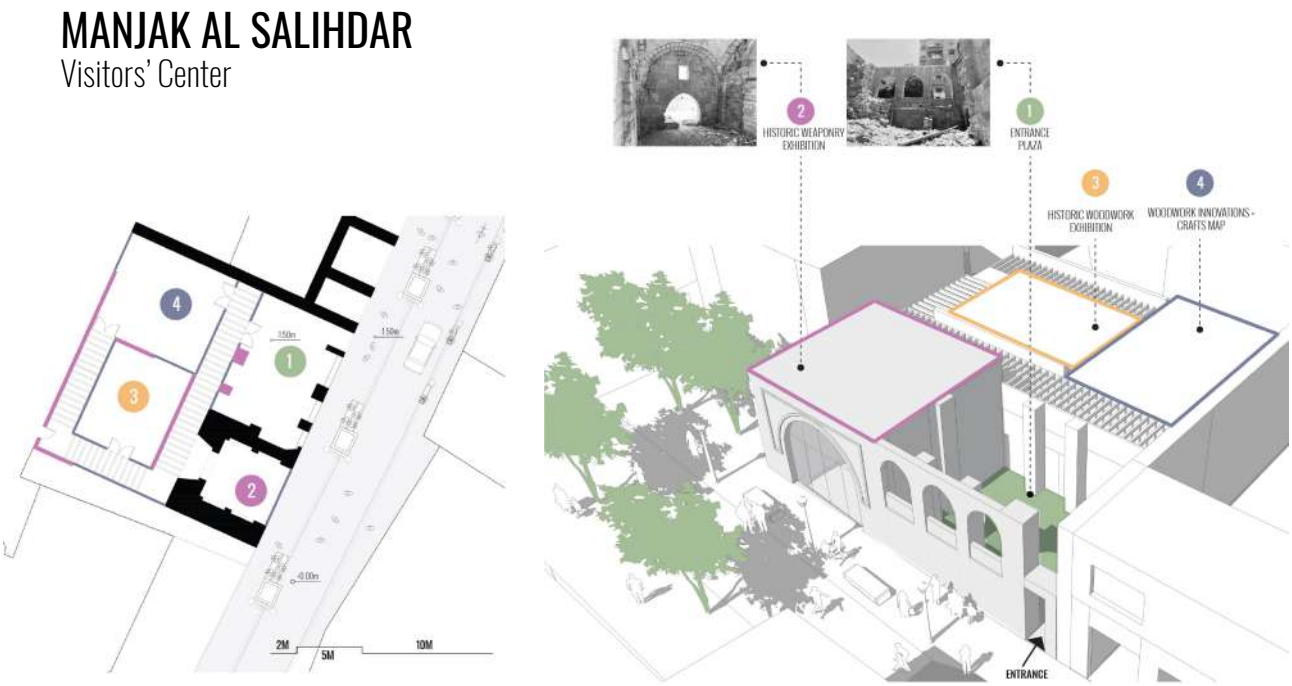
CRAFTS NODE USED FUNCTIONS IN FIRST FLOOR

- 2 BOUTIQUE HOTEL
- 2' DUPLEX WORKSHOPS
- 2'' CRAFTSMEN RESIDENCE
- 7 CRAFTS TRANNING CENTER
- 9 CRAFTS SCHOOL- CLASSES
- 11 INTERLOCKING MUSEUM IN Sabil Kuttab Ruqayya Dudu

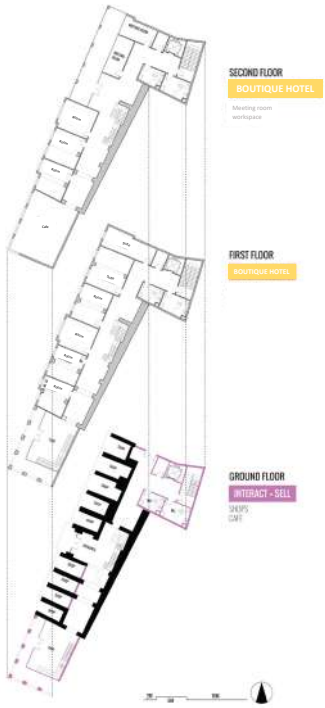
2 階の使用法です。



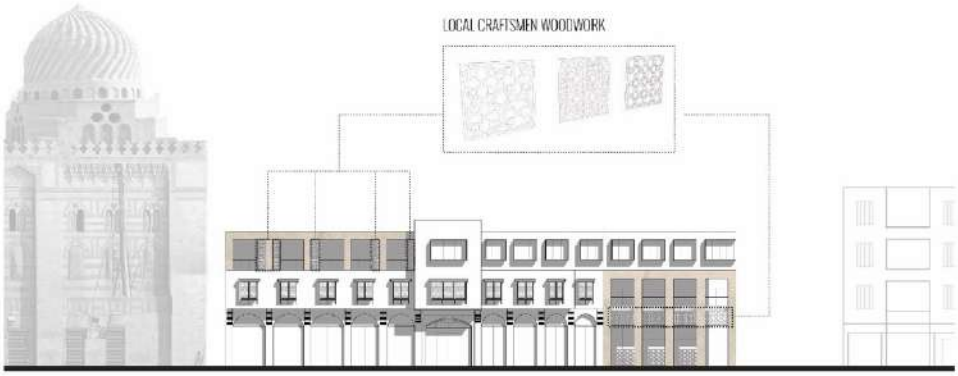
そして、3 階あるいは屋上ですが、屋上には緑をおいたほうが良いという案も採用しました。



一つ一つの建物のこれからの使用法に移ります。特にマンジャク・シラフダールの場合には、古いものを修復していかに新しい機能を入れようかという提案です。

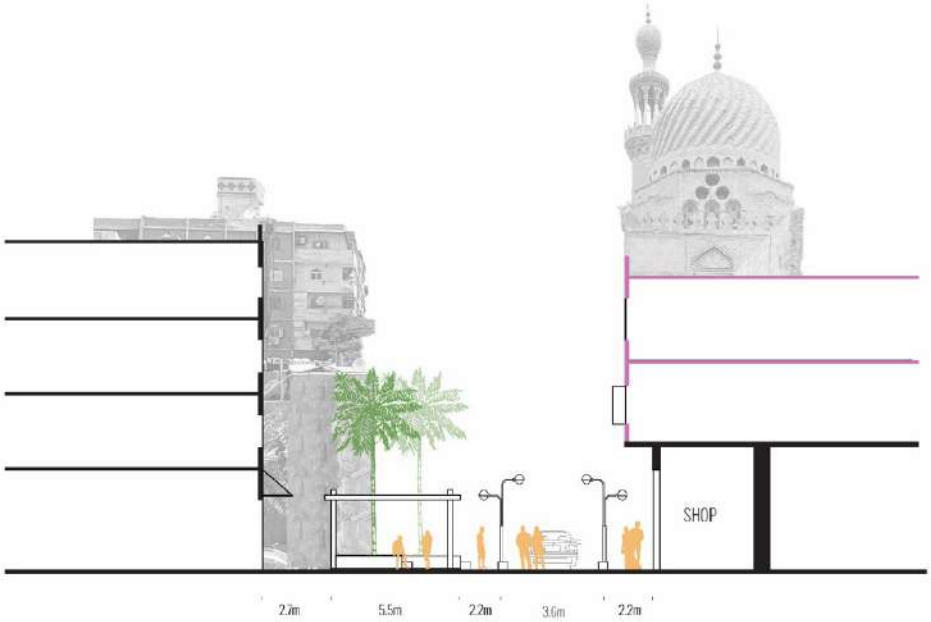


次にラブア・マネステルリですがその前には使用されていない広い空間があります。そこには現代的な新たな空間創出することを考えました。時間帯によって、フレキシブルに使えるような緑のある空間「椰子プラザ」を提案します。



この建築がどのようにして工芸のハブになっていけるのかを考えました。これが現代的なデザインを加えた後の図面です。

ラブアの上階はメゾネットとし、かつてのイメージに合わせてあります。かつては一室の中に階段が仕込まれて、ロフトのようになっていました。加えて、現代的なテイストで地元の木工細工の格子を入れてみました。

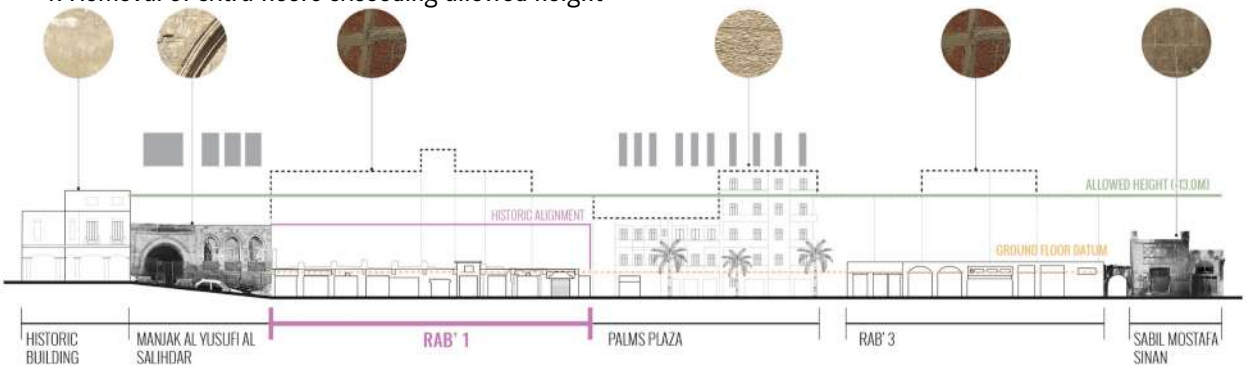


また、椰子プラザとの関係を断面図で示してあります。

NODES' CONNECTORS

ACTIONS:

1. Reconstruction of ruins to restore historic alignment
2. Restoration of Historic facades
3. Re-facading of modern buildings
4. Removal of extra floors exceeding allowed height



実際のファサードを見ていくと、許可された建物よりも高い建物も随分とあります。これをどのように解決していくかという点については、現在低い建物に階数を増加し、現在高い建物の階数を減少させるということを、観光考古省の方達とも話し合いました。

NODE 1 ACTIONS

BUILT FABRIC:

1-Restoration and rehabilitation of Manjak Al Salihdar

2-Restoration and reconstruction of upper floors of 3 Rab' ruins including Rab' Al Manesterli

3- Re-facading for 3 compatible residential buildings

4- Demolition of extra floors and re-facading of 2 incompatible residential buildings

PUBLIC GARDEN:

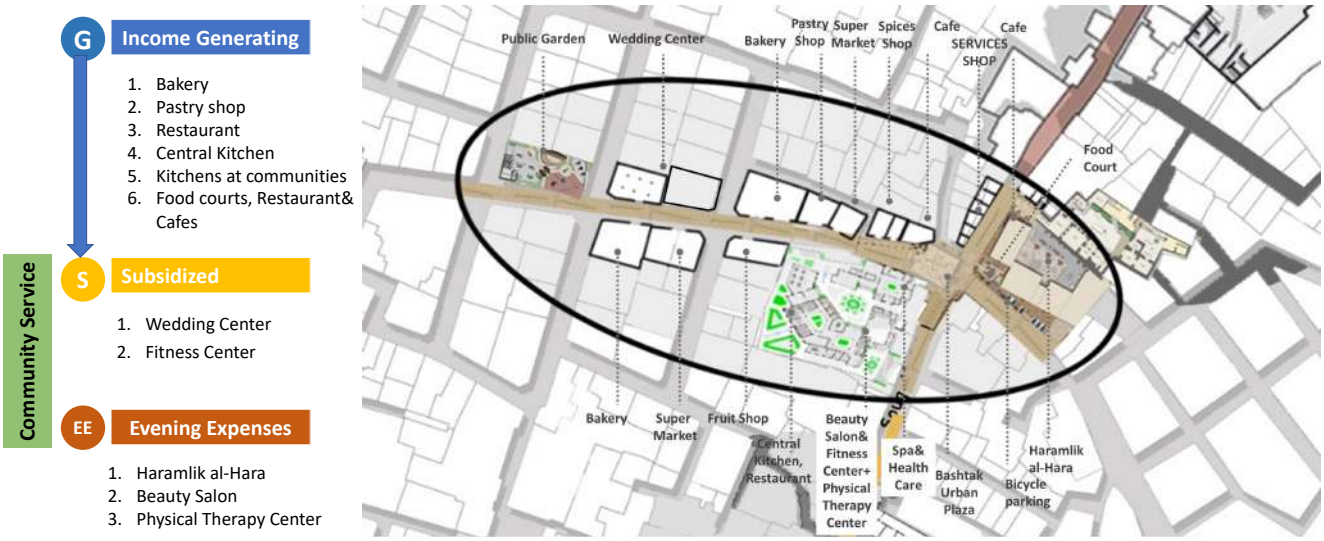
1-Regeneration of plaza with softscape, hardscape and street furniture

2-Street Greening

3-Street pavement

工芸ノードでは、建造物に関しては、マンジャク・シラフダールの修復と再生、ラブア・マネステルリ Rab' Al Manesterli を含む 3 棟のラブア Rab'遺構の上層階の修復と再構築、互換性を持つ 3 棟の住宅用建物のファサードの統一化、 非適合住宅 2 棟の余分な床を取り壊し外装の変更を提案します。さらに公園空間については、広場の再生、街路樹の緑化、路面舗装を進めます。工芸を焦点としながら、スーク・シラーハへの入口としての機能が重要だと思います。

GASTORONMY NODE



2 つ目の食文化ノードです。ハンマーム・バシュタークの角で、ガンドゥール通りとスーク・シラーハが交差します。先程と同様に 3 つの経済性を基盤として、共同台所、レストラン、小さな店舗などを考えます。こんな小さな店舗が何の役に立つのかと思う方もいるかもしれませんが、住民が参加して作ったり、住民も食べることができたり、地域に馴染んだ場所となることを期待します。

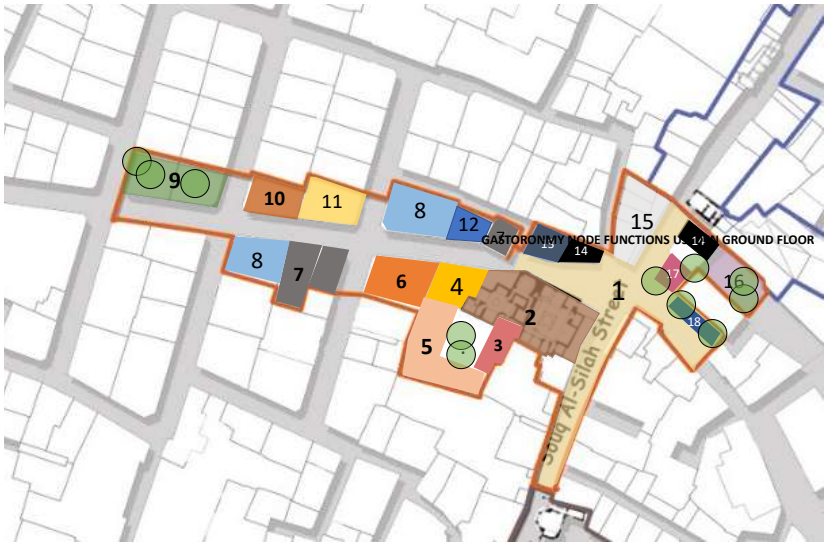
まず、階層分けの地図ですが、3 階までです。

GASTORONMY NODE USED FLOOR NO. IN EACH BUILDING

次に 1 階ですが、みなさんの中にパン屋さんが欲しいという方もいました。すぐ近くにレストランや八百屋さんがあれば、便利です。

ハンマーム・バシュタークについては、色々な意見がありました。小さなホテル、伝統的公衆浴場、結婚する人のための美容室などもありました。みなさんの関心が高いことがわかりますし、実際にバシュタークがハンマームである頃のことを知っていたり、ハンマームを使ったりという経験がそうさせているのかもしれません。ハンマーム・バシュタークの 3 階には、みなさんの案から理学療法センターとしています。そして、屋上レストランも作ります。

GASTORONMY NODE FUNCTIONS USED IN GROUND FLOOR



1 URBAN MULTIPLE PURPOSED PLAZA

2 SPA AND HEALTHYCARE CENTER alternately between women and men IN HAMAM BASHTAK

3 BEAUTY SALON

4 FURNACE ROOM FOR HAMAM AND FOR THE CENTERAL KITCHEN

5 CENTERAL KITCHEN AND PREPARING TRADITIONAL FOOD AREA

6 FRUIT SHOP

7 SUPERMARKET

8 BAKERY

9 PUBLIC GARDEN FOR HERBALE AND FRUITING PLANTS

10 WEDDING CENTER

11 OPEN SPACE FOR OCCASIONS IN WEDDING CENTER

12 PASTRY SHOP

13 SPICES SHOP

14 CAFES

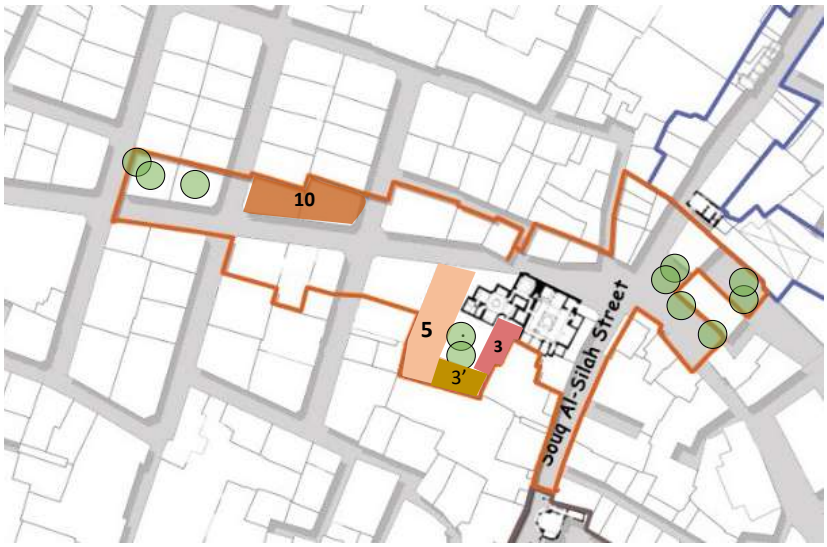
15 SERVICES SHOP

16 HARAMLIK AL-Hara

17 FOOD COURT

18 BICYCLES PARKING

GASTORONMY NODE FUNCTIONS USED IN FIRST FLOOR



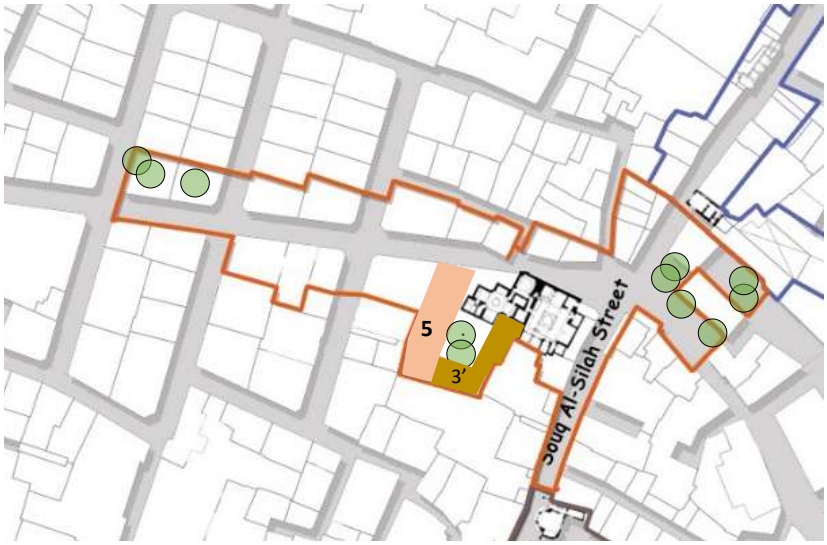
3 FITNESS CENTER

3' PHYSICAL THERAPY CENTER

5 OPEN AIR RESTAURANT & SEMI COVERED WITH SOLAR PANELS ON PERGOLA

10 WEDDING CENTER

GASTORONMY NODE FUNCTIONS USED IN SECOND



3' PHYSICAL THERAPY CENTER

5 OPEN AIR RESTAURANT - Top Roof

NODE ACTIONS

BUILT FABRIC:
1- Rehabilitation of Sabil-Kuttab Koklian
2-Restoration and rehabilitation of Hamam Bashtak Historical building, and another historical building in Front of Hamam Bashtak
3- Restoration, reconstruction and rehabilitation of upper floors of Rab'
4- Reconstruction of ruins including Sabil-Rab' Al Balfiya
And the ruins of Sudun Mir Zada mosque
5- Re-Facading for 5 compatible residential buildings
5- Demolition of extra floors and re-facading of 1 incompatible residential building

OPEN PUBLIC SPACES:
1-Regeneration of plaza with softscape, hardscape and street furniture
2-Street Greening
3-Street pavement

このエリアでは、建造物では Sabil-Kuttab Koklian の修復と活用、ハンマーム・バシュターク自体（正面入口ももちろん）の修復・再生、ラブアの上階の修復、再建、 Sabil-Rab' Al Balfiya とスドゥン・ミル・ザダ・モスク跡等の建築の復元、互換性のある 5 棟の住宅のファサード修景、非適合住宅 1 棟の余分な床を取り壊し修景する必要があると考えます。

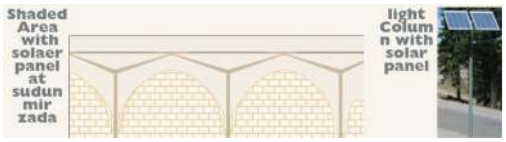
一方、オープンな公共空間の充実も、工芸ノード同様に大きな課題です。

BASHTAK URBAN PLAZA

Multi Uses Urban space-Bicycle Parking- Food Court

その一つとして、ハンマーム・バシュターク前にはかなり広い広場がありますが、有効利用されていません。デザインを考えることで、より活性化を目指します。ソーラーパネル付きの駐輪場、可動性のあるベンチ、フードコートなどを提案します。

Haramlik al-Hara



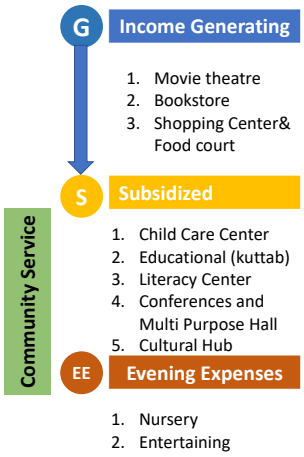
ここは、バイトヤカンの隣の空地ですが、女性のための空間、例えば女性のアフワ（伝統的珈琲店）にしたらどうでしょうか？エジプトでは女性はあまりアフワにはいきませんよね。バイトヤカンをみんなが使える女性のアフワだと思っていただいても良いのですが。

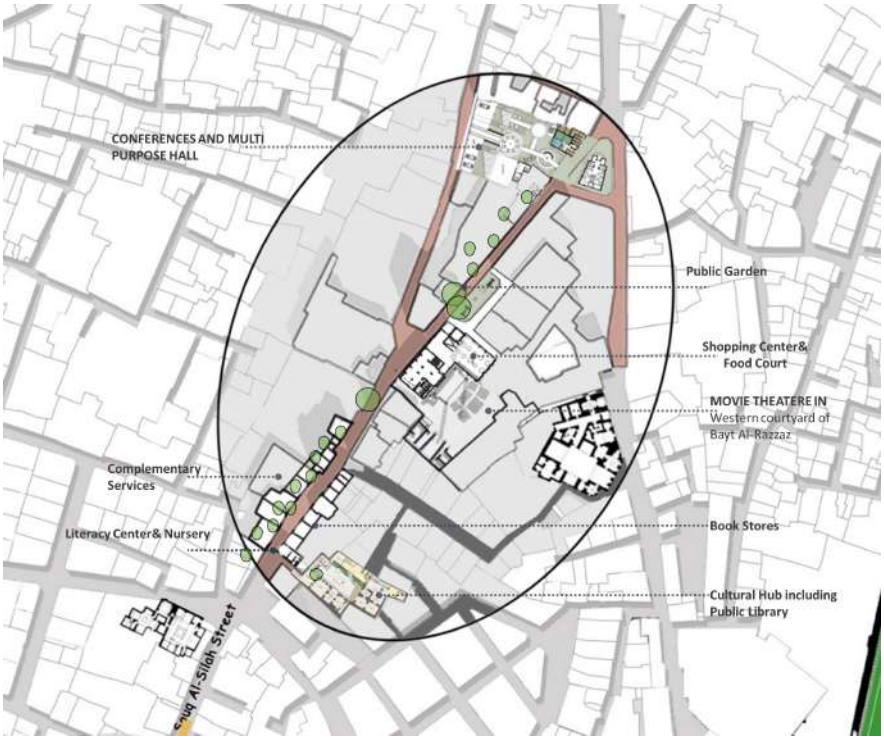
BASHTAK URBAN PLAZA AND ITS SURROUNDING:

SPA&HEALTHCARE CENTER, BEAUTY SALON, FITNESS CENTER, Physical Therapy Center , CENTERAL KITCHIENS, AND RESTAURANT

ハンマーム・バシュタークはこのようなデザインで、フィットネスセンターやホテル、理学療法センターなども作って、良いデザインにすることで、みんなに親しんでもらいたいと思います。中央には中庭を作って、美容室や食堂を入れることも考えています。スーク・シラーハ通りからハンマーム・バシュターク通りに抜ける遊歩道も考えて、ここには緑をたくさん入れ、車の心配なく滞在できる空間をつくりました。

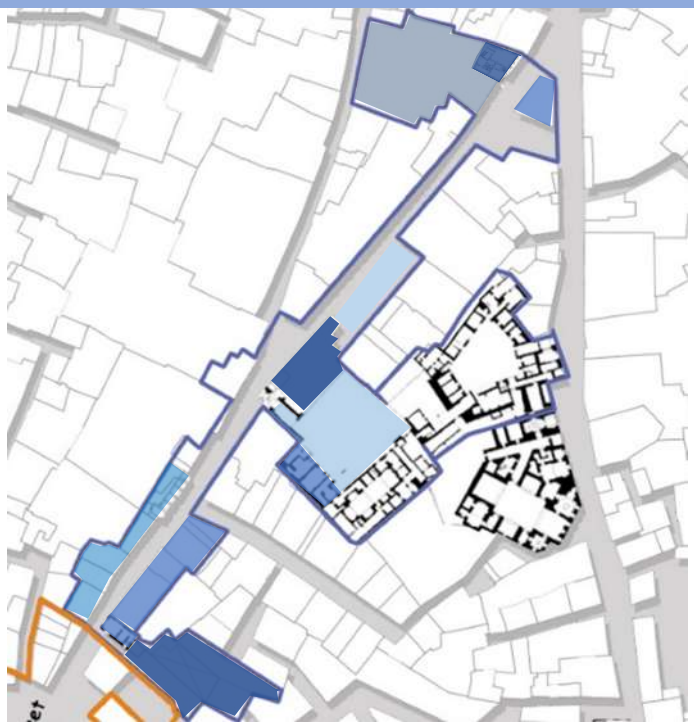
CULTURAL NODE

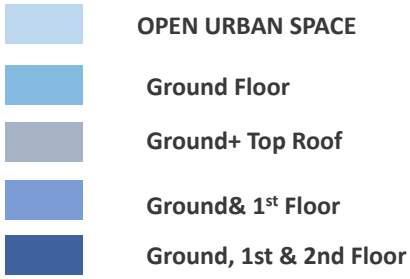




最後に文化ノードに移ります。バイトヤカンからザウィヤアーメルまでの地区です。前の 2 つのエリア同様に、経済性、緑、建物の中でどうするのかを考えました。

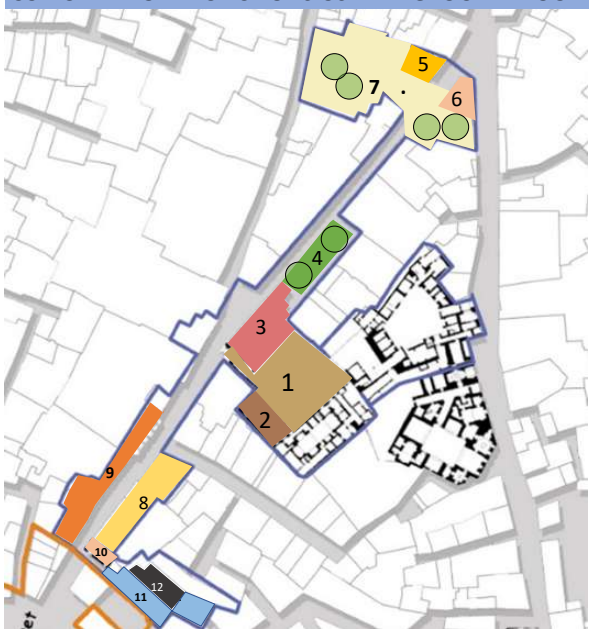
CULTURAL NODE USED FLOOR NO. IN EACH BUILDING





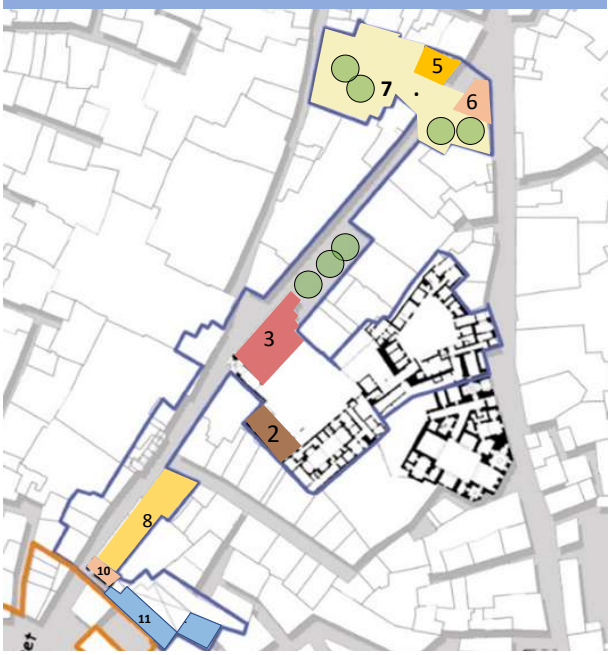
住民の一つの夢として、映画館や劇場を作ることにしました。バイト・ラッザーズの使われていない中庭を使うと良いと思います。ただ、同時に全てはできないので、少しずつ事業を進めていくことが大事ですね。1 階のでは映画館の前にはフードコートを、そしてセッバック部分は公園にしています。2 階ではコーカリアーンの隣のラブアの 2 階を増築し、そこに子供の医療センターをつくります。屋上緑化も重要です。

CULTURAL NODE FUNCTIONS USED IN GROUND FLOOR



- 1 **MOVIE THEATERE IN** Western courtyard of Bayt Al-Razzaz
- 2 **SERCIVES FOR THE MOVIE THEATER**
- 3 **SHOPPING CENTER& FOOD COURT**
- 4 **PUBLIC GARDEN+ BICYCLES PARKING**
- 5 **EDUCATIONAL (kuttab) IN** Zawyiat Aaref
- 6 7 **CONFERENCES AND MULTI PURPOSE HALL :** REAST AREA + HOLOGRAM+ RESTAURANT+ Services
- 8 **BOOKSTORES**
- 9 **COMPLEMENTARY SERVICES:** STATIONERY AND PAPERS SHOPS
- 10 **LITERACY CENTER**
- 11 **CULTURAL HUB FOR:** COMMUNITY TRAINNING WORKSHOPS, CULTURAL EVENTS AND LECTURES
- 12 **SEMI PUBLIC COURTYARD**

CULTURAL NODE FUNCTIONS USED IN FIRST FLOOR

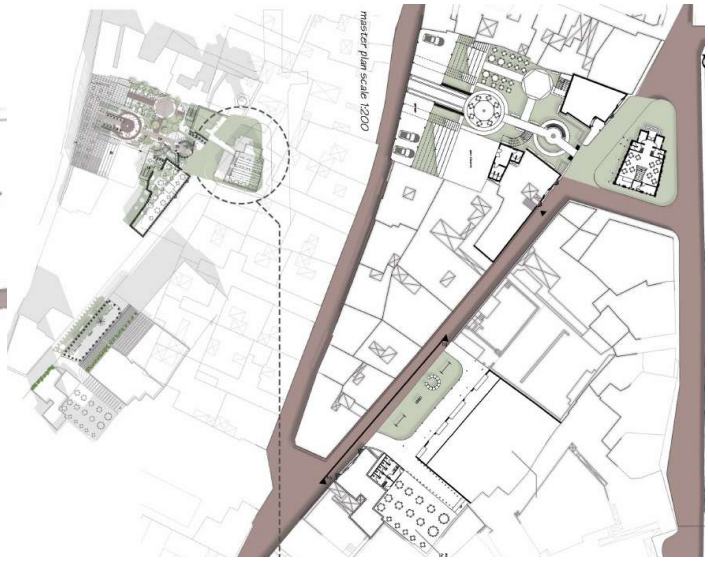


- 2 **VIP BALACONY FOR THE MOVIE THEATER**
- 3 **SHOPPING CENTER& FOOD COURT**
- 5 **EDUCATIONAL (kuttab) IN** Zawyiat Aaref
- 6 **CONFERENCES AND OCCASIONS HALLS**
- 7 **CULTURAL URBAN SPACE + SERVICES** REAST AREA + RESTAURANT : Green roof
- 8 **NURSERY& CHILD CARE CENTER**
- 10 **LITERACY CENTER**
- 11 **CULTURAL HUB:** Public Library and Lectures Hall

CULTURAL NODE FUNCTIONS USED IN second FLOOR

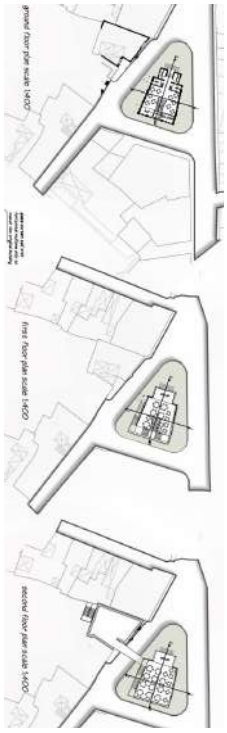
- 3 **SHOPPING CENTER**
- 5 **EDUCATIONAL (kuttab) IN** Zawyiat Aaref
- 11 **CULTURAL HUB :** RESEARCHER RESIDANCE

CONFERENCES AND MULTI PURPOSE HALL



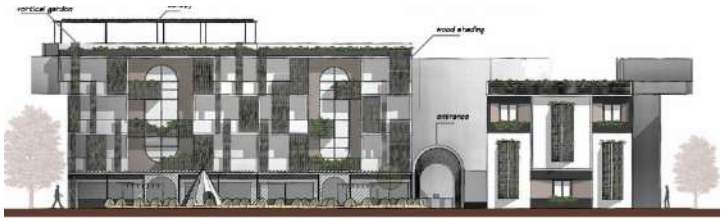
私の子供たちは、ここバイトヤカンに来るのをあまり好きではなくて、映画館やフードコートのあるニューカイロに行きたがります。でもここにも映画館やレストランを作れば、若い人たちも集まる場所になるでしょう。

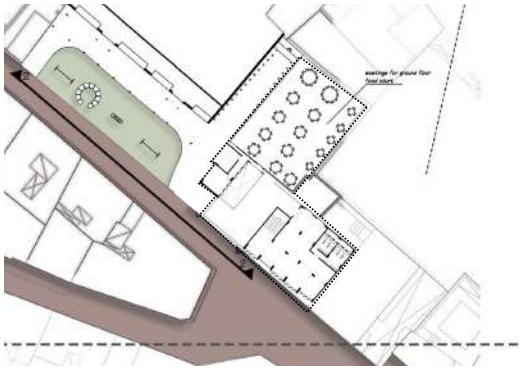
CONFERENCES AND MULTI PURPOSE HALL

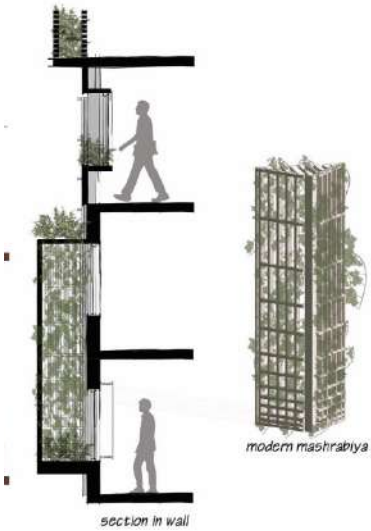


伝統的なデザインと新しいデザインをコラボさせた例です。若い人たちにとって古いものばかりでもつまらないかもしれないし、新しいものばかりだと古いものは守れないので、両方を混ぜ合わせて考える必要があります。ここには古いザウィヤがあったのですが壊されてしまったので、新たに立て直して結婚式もできるようなホールを作ったらどうでしょうか。三角形の敷地にある今使われていないコミュニティ・ホールと隣の現在の駐車場の土地を接合する形で、計画しています。三階レベルで両方を繋いでスーク・シラーハを横断するブリッジを作ってみるのも面白いかもしれません。

SHOPPING CENTER& FOODCOURT







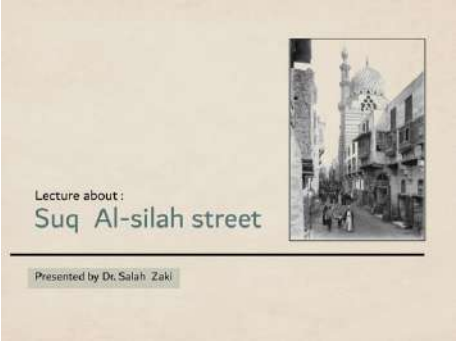
環境に優しいことを証明するために、緑を増やします。

MOVIE THEATER IN BAYT AL-RAZZAZ WEASTERN COURTYARD

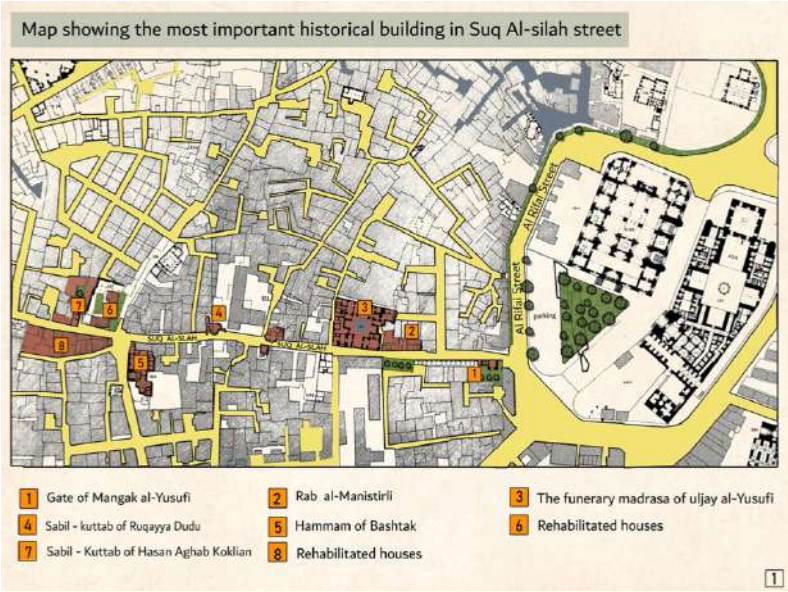
バイトラッザーズ劇場です

できるだけ皆様の夢を早く実現することが求められています。ご静聴ありがとうございました。

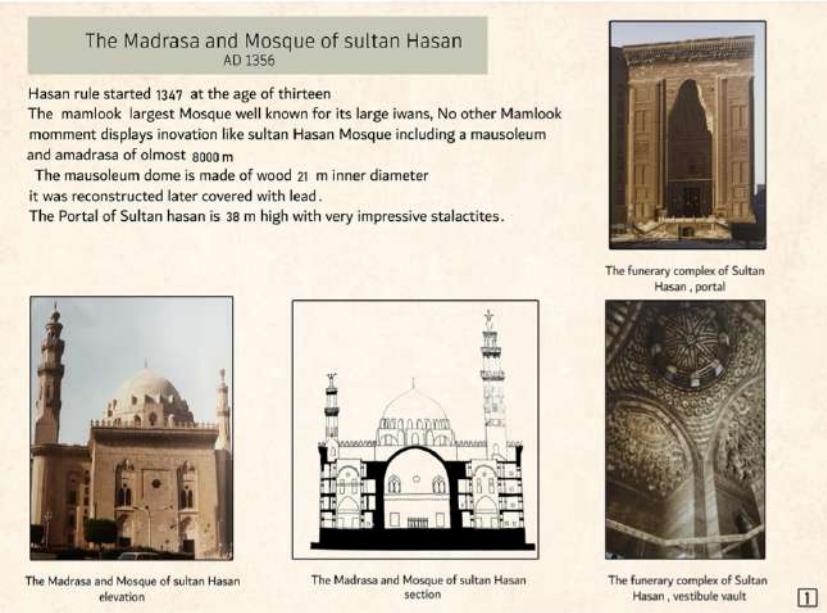
③更新案プレゼンテーション：6つの歴史的建造物の公的再利用についてのデザイン（サラー・ザキー）



長いこと、スーク・シラーハで仕事を続けてきており、保存状態の悪い建物がたくさんあることは心得ております。専門が建造物の保護・修復でしたので、一生懸命にその仕事に携わってきました。その一つ、バーブ・ワズィールのプロジェクトは成功裡に終わり、高く評価されています。特にカイロ市長からは、同様なプロジェクトを継続したいというリクエストもありました。このプロジェクトでは歴史的建築の修復と同時に、どのようにしたら建物を実用的に活用できるかという課題に取り組んだわけです。例えば古いアパートで台所がないというケースがありました。住民はとても困っていて、住みやすくすることが目的だったので、台所を作りました。ちなみにバーブ・ワズィールのプロジェクトは、カイロ市が主催したもので、海外からの資金援助はなかったです。

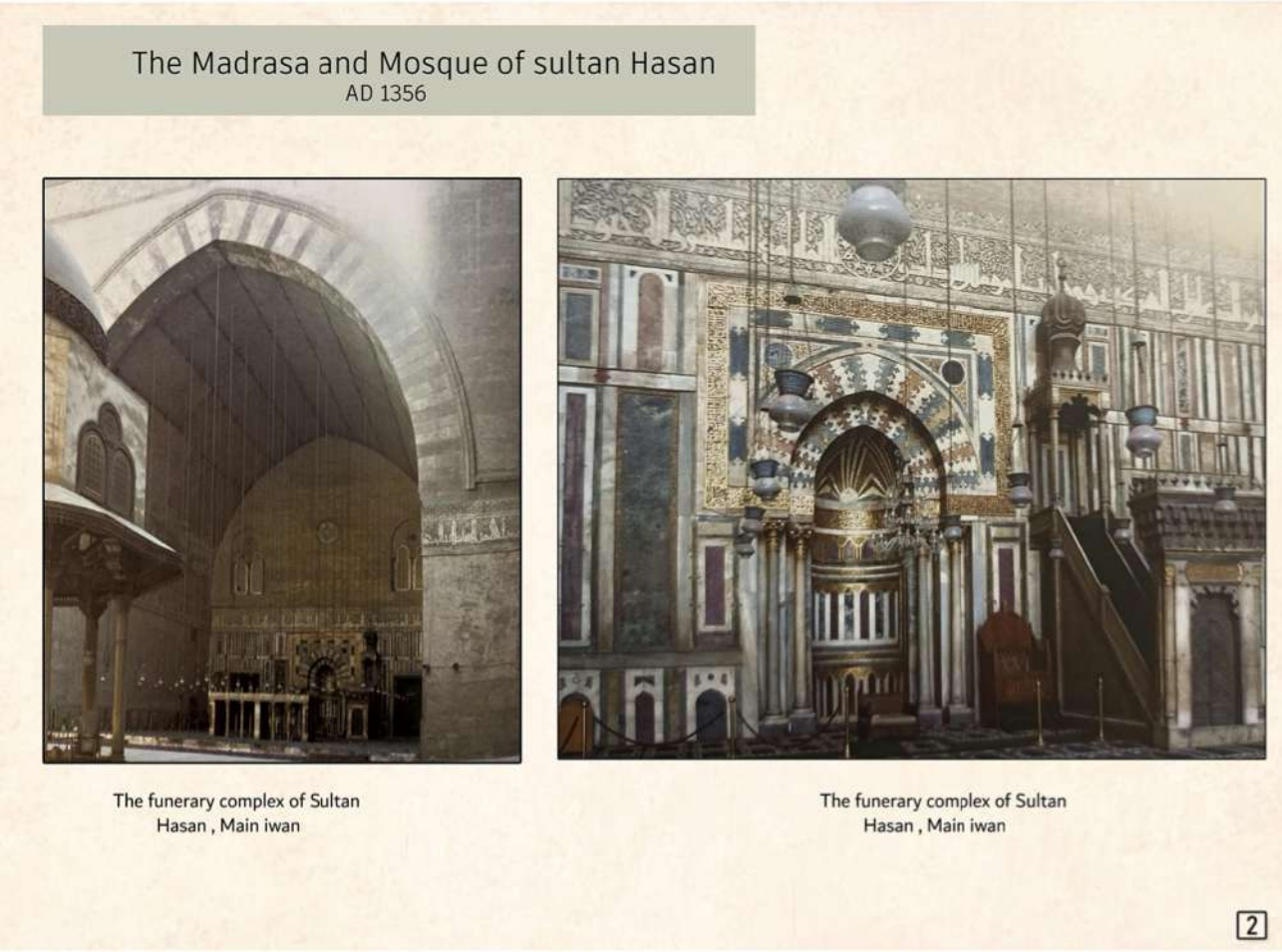


スーク・シラーハに取り組んだときには、バーブ・ワズィールと同様にすることが良いと思いました。古いアパートでは、とても狭かったり、部屋が一つしかなかったりの状況もありましたが、そこに住む人々の要望を聞いて修復することにしました。協力的な住民がたくさんいました。アパートの中には、階数の多い高いものもあります。一方、長い廊下に小さな部屋が付いている場合など、一戸あたり 40 平米くらいのものもあり、台所の増築などで住みやすくしていったわけです。この建物はバイトヤカンの隣にあるナーセル時代に建てられたアパートで、スエズなどからの避難民の住居として作られ、40 年あまりを経過していたのです。修復後には、住民の方々からも賛辞をいただき、娘を住まわせたという方もいました。同様なプロジェクトをここ、スーク・シラーハで続けていくことは重要で、まだまだ課題が残されています。

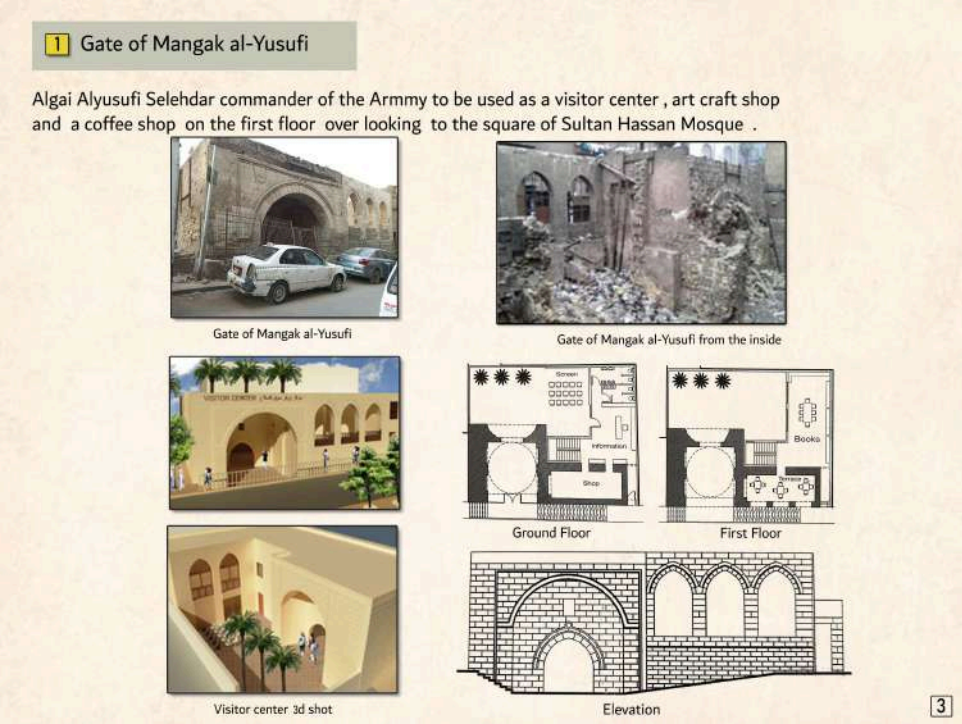


スーク・シラーハの入口はやはりスルタン・ハサンで、マムルーク朝最大規模を誇るこの建築をのぞいてスーク・シラーハを語ることはできません。

スルタン・ハサン・マドラサの内部には、伝統的工芸の数々の作品がありますが、これらは創建時の14世紀のものに加え、それぞれの時代に修復が繰り返され、その技術が今もなお保持されています。

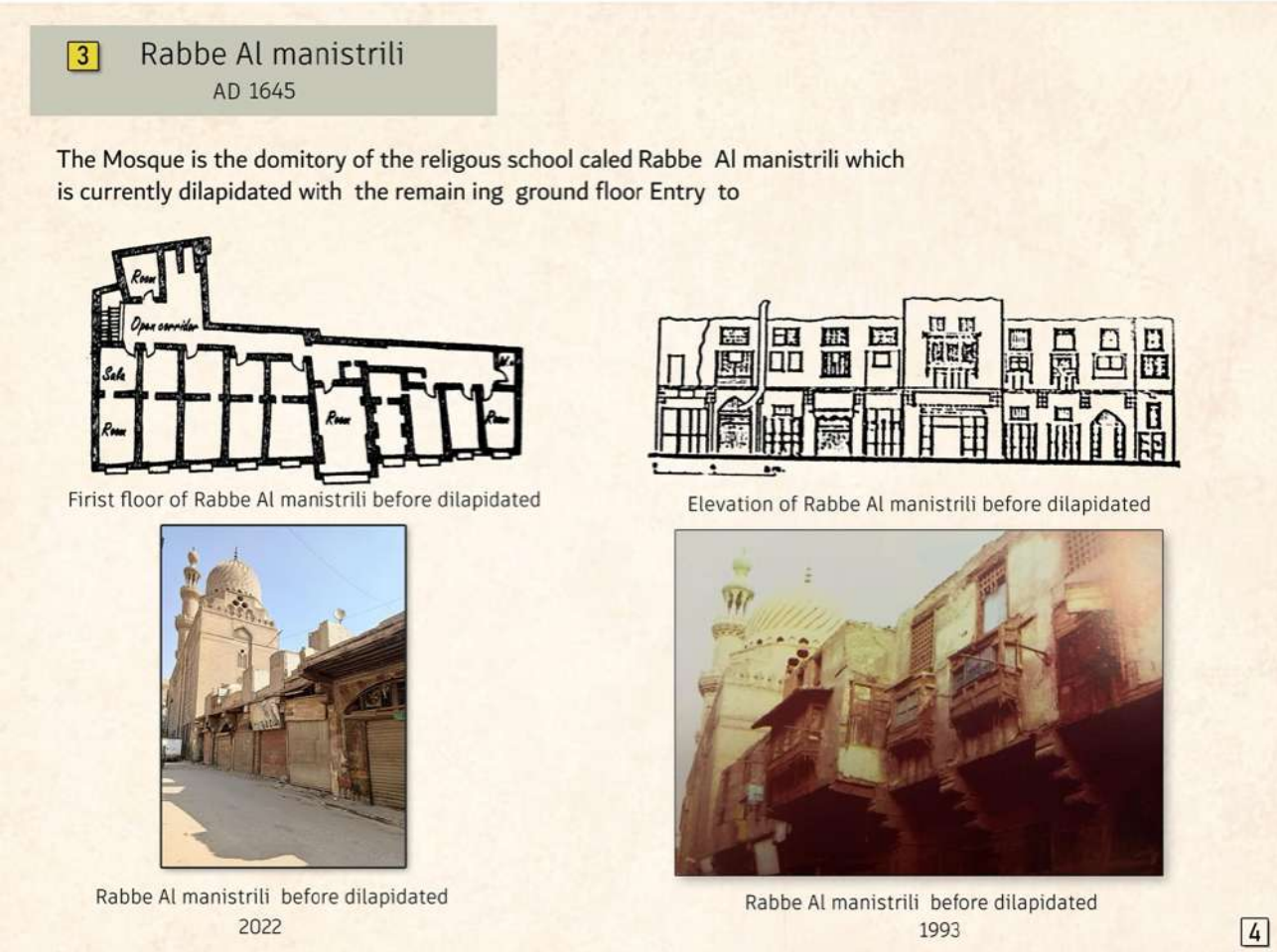


マンジャク・シラフダールの宮殿への門は、歴史的建造物としては、とても重要で、アラー氏から工芸の展示場にしたらどうかという提案がありました。私はやはり、ここはスーク・シラーハの顔として、観光客に歴史的な情報などを伝える旅行案内所兼文化センターにするのがふさわしいのではないかと思います。先に紹介したスルタン・ハサン・モスクと目と鼻の先にあるので、スルタン・ハサンを訪れる観光客に、さまざまな情報を提供できるわけです。また、2階テラスや屋上からは、スルタン・ハサンの素晴らしい眺望を確保できます。

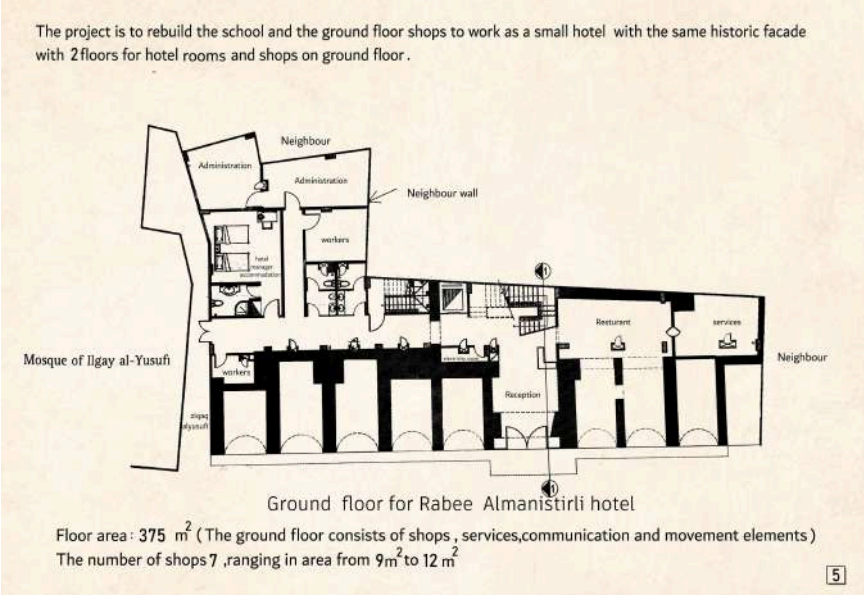


なお、先程、アパートの改修に付いてお話ししましたが、特にここマンジャク・シラフダール邸の近辺には、改修すべき建物がいくつかあります。それらと統合した地域として、修景していくことも重要です

次に、ラブア・マネステルリですが、隣にあるイルゲイ・ユーズフィーはマドラサ（イスラーム法学を学ぶ場）として建てられたので、このラブアの方が後に建設されますが、ラブアの 2 階の部屋にはイスラーム法学や神学を学ぶ学生たちが住んでいたのかもしれません。1 階には小さな店が並んでいました。

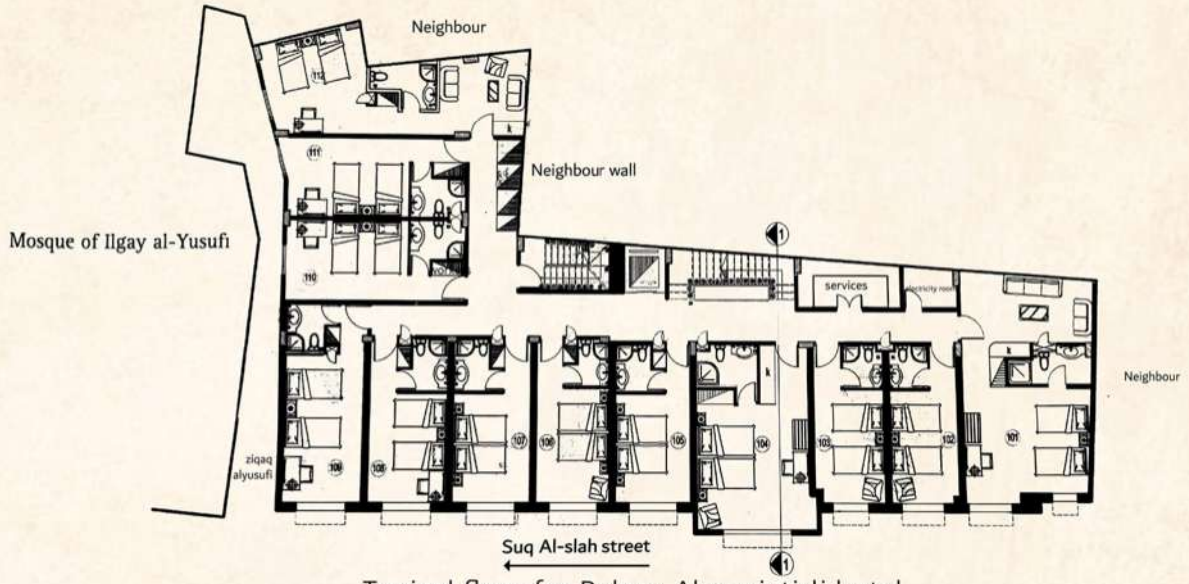


ここは、小さなホテルとしての改修を考えています。現在のこる組積造 1 階の構造をそのまま用い、軽い材料で 2 階を付加していけば良いと考えます。1 階には、本来の入口を用いて、裏に回れるようにします。そこに上階への階段や、管理室を配置します。ファサードにおいて入口北側の店のスペースはそのままにして、南側にはレストランを作ります。



2 階は、ホテルの客室にします。しかしながら、資金集めには苦労するかと思います。

The project is to rebuild the school and the ground floor shops to work as a small hotel with the same historic facade with 2 floors for hotel ros and shops on ground floor.

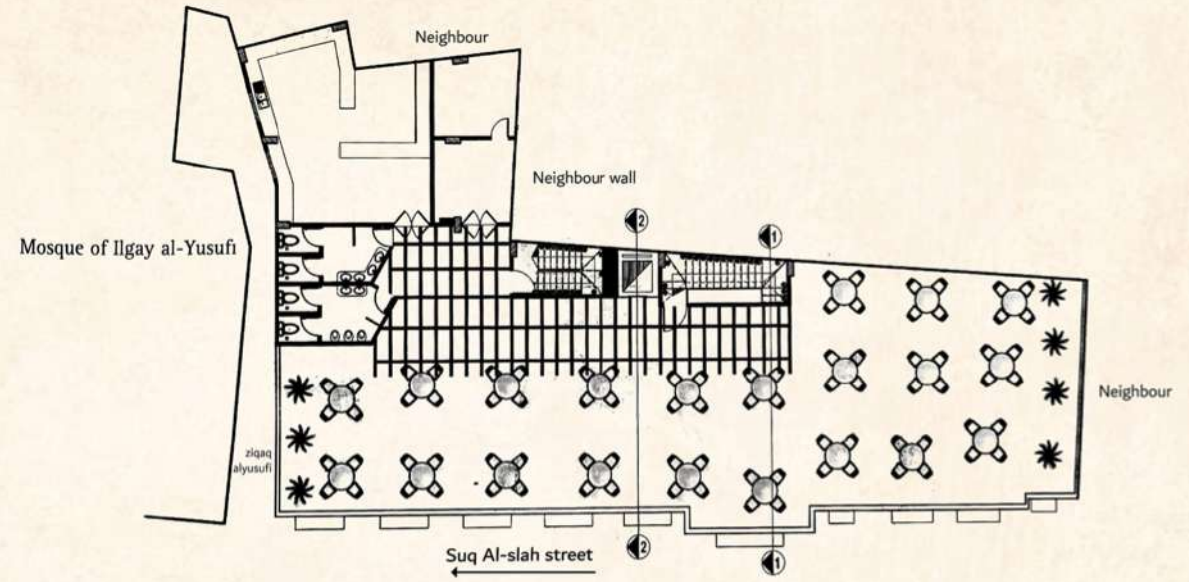


Typical floor for Rabee Almanistirli hotel

Floor area : 400 m^2 (The total number of rooms 24)

6

とはいえ、近傍のスルタン・ハサンを訪れる人にとっては、格好の宿泊場となります。ですので収益は十分に確保できると考えます。屋上はオープンなカフェ・レストランとします。



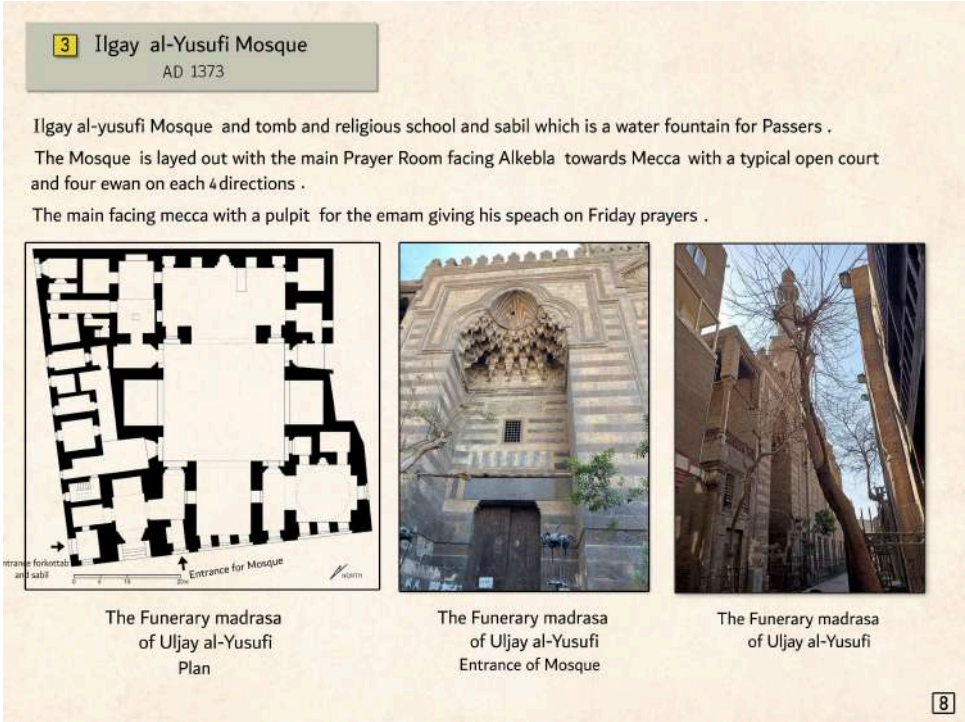
Roof floor for Rabee Almanistirli hotel

Floor area : 400 m^2 (it enough for 84 people , in adition to akitchen , toilets ,and laundry)
The floor of the roof overlooks apalm yard and the restaurant is shaded by a wooden canopy with shade plants

7

スーク・シラーハには歴史的価値のある建物が並んでいます。先程お話ししたイルゲイ・ユーズフィーもその一つで、現在はモスクとして使われますが、北西の隅にコーラン学校が付いています。

スーク・シラーハには見所がたくさんあるので、自動車交通をストップして、歩行者天国にすることが良いでしょう。それによって道を行く人々の安全が保たれます。



3 Ilgay al-Yusufi Mosque
AD 1373

Ilgay al-yusufi Mosque and tomb and religious school and sabil which is a water fountain for Passers .
The Mosque is layed out with the main Prayer Room facing Alkebla towards Mecca with a typical open court and four ewan on each 4 directions .
The main facing mecca with a pulpit for the emam giving his speach on Friday prayers .

The Funerary madrasa of Uljay al-Yusufi Plan

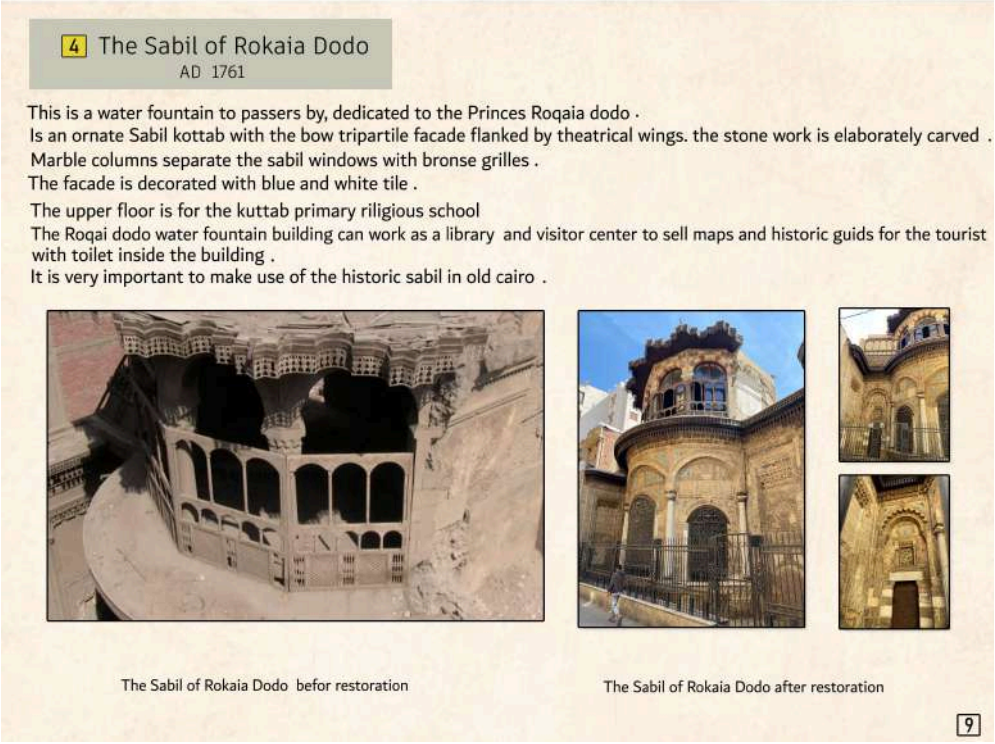
The Funerary madrasa of Uljay al-Yusufi Entrance of Mosque

The Funerary madrasa of Uljay al-Yusufi

8

サビール・ルカイヤ・ドゥドゥもその一つですが、とても綺麗で、特徴的な形をしています。このサビールは、先程マンジャク邸で提案したような、観光客にパンフレットを配布するような場とし、小さな図書館を併設することも可能です。スークシラーハを訪れる人にトイレを準備することも考えらます。

ちなみにカイロには数多くのサビール・クッターブがあり、その活用はスーク・シラーハを活性化させるでしょう。



4 The Sabil of Rokaia Dodo
AD 1761

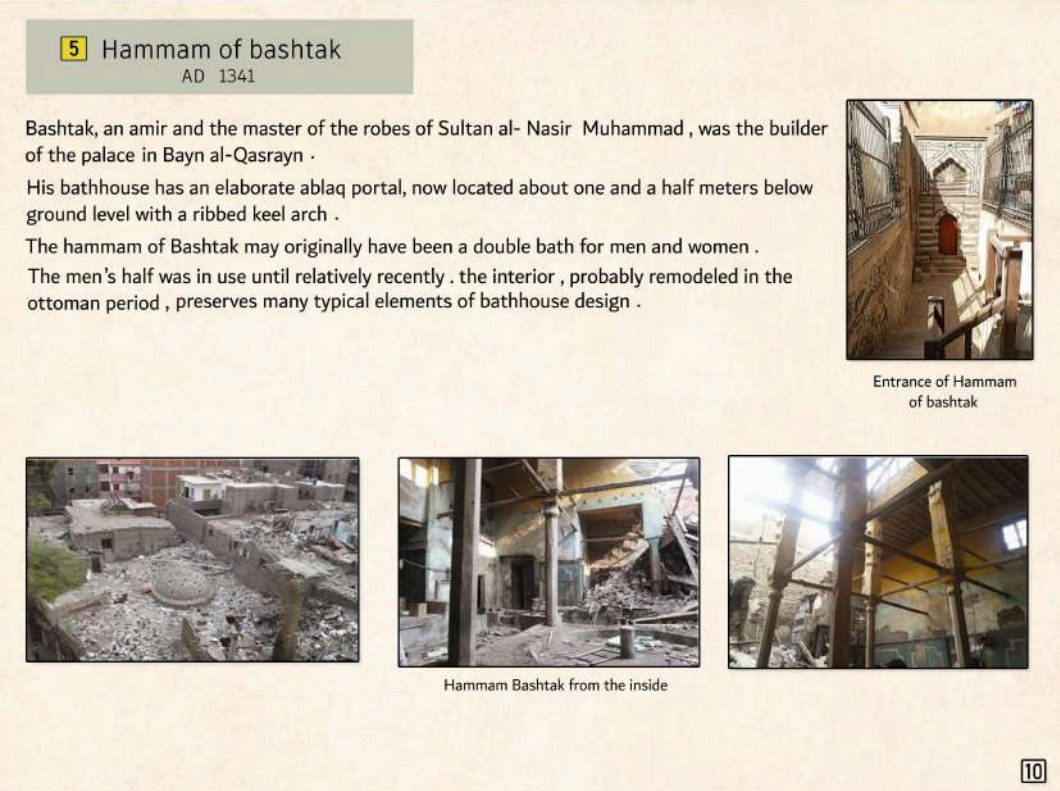
This is a water fountain to passers by, dedicated to the Princes Roqaia dodo .
Is an ornate Sabil kottab with the bow tripartile facade flanked by theatrical wings. the stone work is elaborately carved .
Marble columns separate the sabil windows with bronse grilles .
The facade is decorated with blue and white tile .
The upper floor is for the kuttab primary riligious school
The Roqai dodo water fountain building can work as a library and visitor center to sell maps and historic guids for the tourist with toilet inside the building .
It is very important to make use of the historic sabil in old cairo .

The Sabil of Rokaia Dodo befor restoration

The Sabil of Rokaia Dodo after restoration

9

ハンマーム・バシュタークについては、修復して伝統的公衆浴場の機能をそのまま復活することが望まれます。本来は男性部分と女性部分が対になる形の公衆浴場でしたが、男性部分の半分だけが残っています。ここを修復して、男性と女性の時間帯を分ければ、地元の人々もたくさん訪れるようになるでしょう。



5 Hammam of bashtak
AD 1341

Bashtak, an amir and the master of the robes of Sultan al- Nasir Muhammad , was the builder of the palace in Bayn al-Qasrayn .

His bathhouse has an elaborate ablaq portal, now located about one and a half meters below ground level with a ribbed keel arch .

The hammam of Bashtak may originally have been a double bath for men and women .

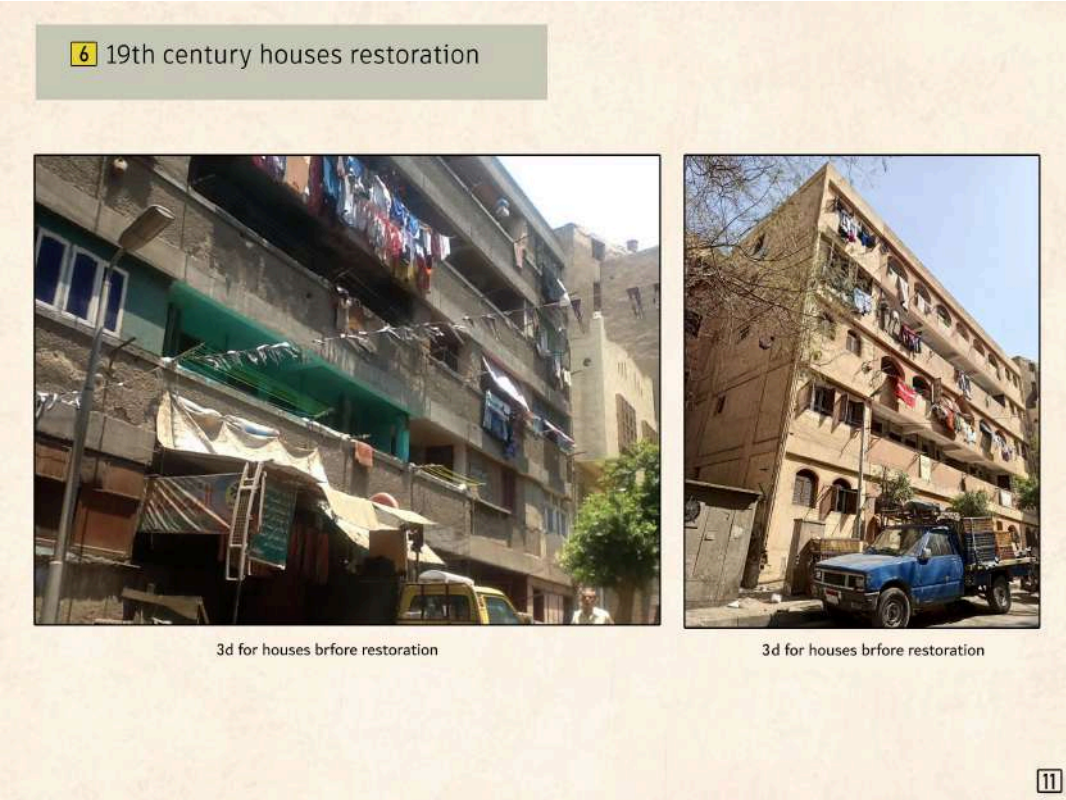
The men's half was in use until relatively recently . the interior , probably remodeled in the ottoman period , preserves many typical elements of bathhouse design .

Entrance of Hammam of bashtak

Hammam Bashtak from the inside

10

これは先程お話しした、ナーセル時代のアパートですが、修復前と修復後を比べていただければ、我々のプロジェクトによって、随分と綺麗になったことがお分かりになるでしょう。



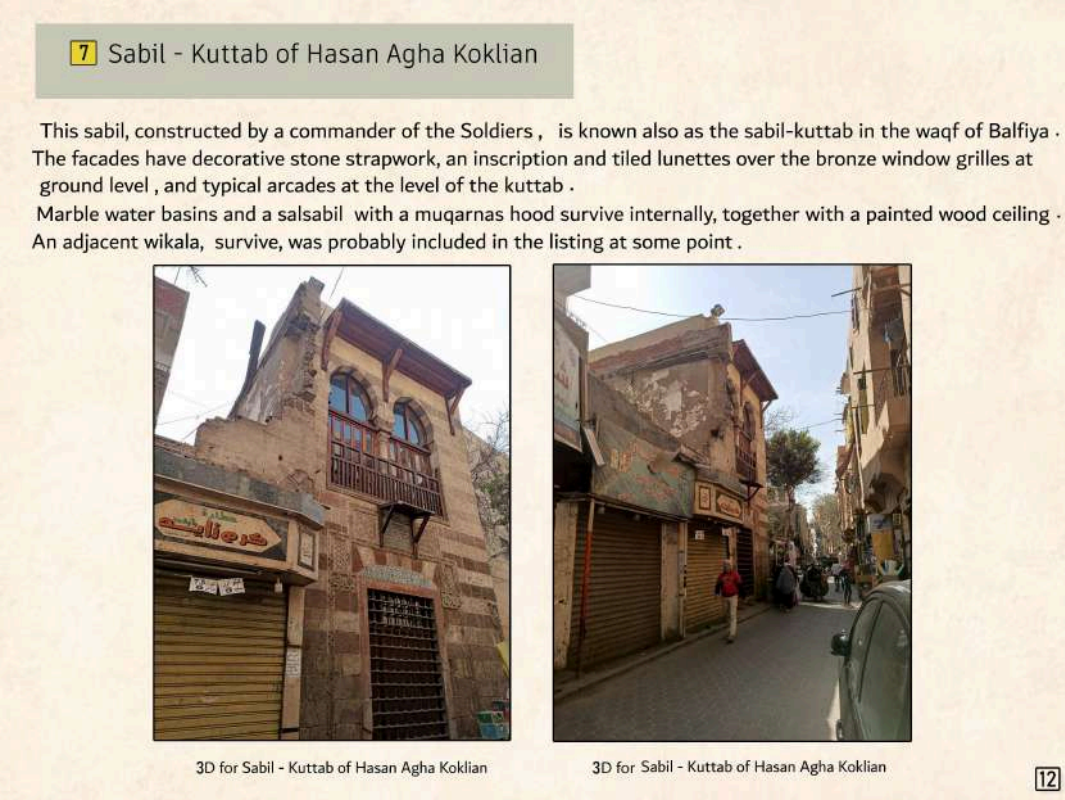
6 19th century houses restoration

3d for houses brfore restoration

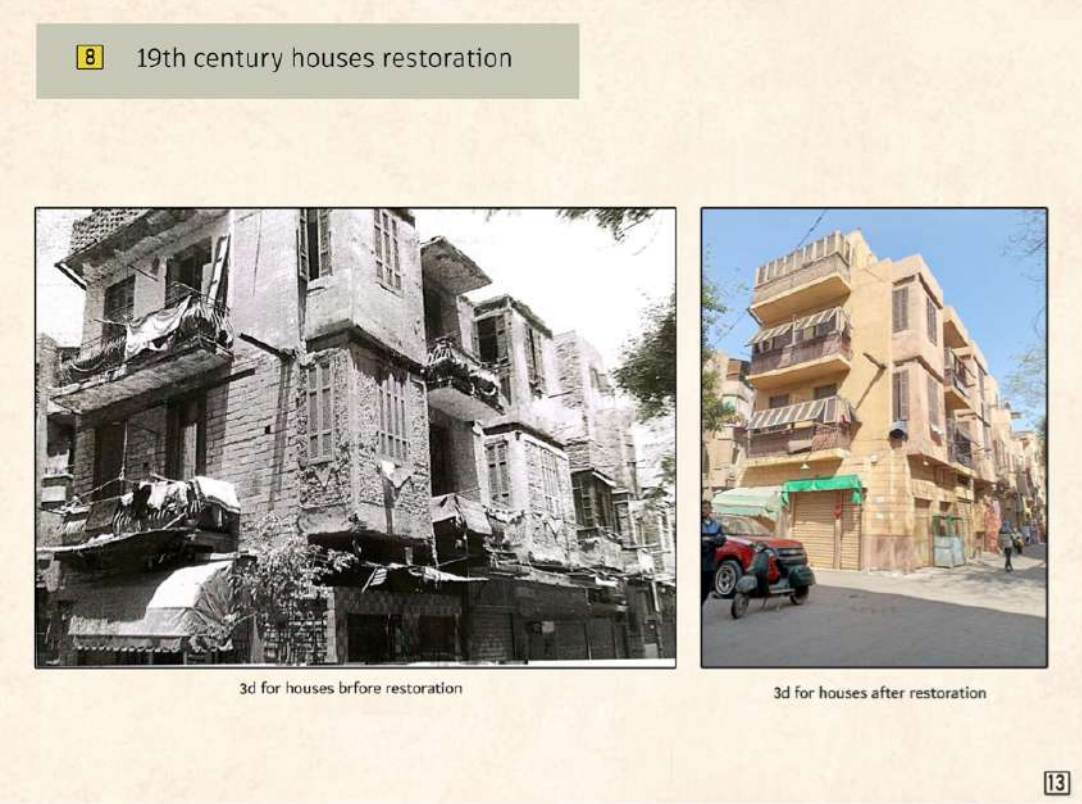
3d for houses brfore restoration

11

バイトヤカンの前にたつサビール・クッターブですが、ベルフィーヤと呼ばれるワクフ文書が残っています。本来は、隣のウィカーラ（商館）とバイトヤカンとセットで建設されたものです。現在店舗が入っているウィカーラ部分の修復と活用も大きな課題です。



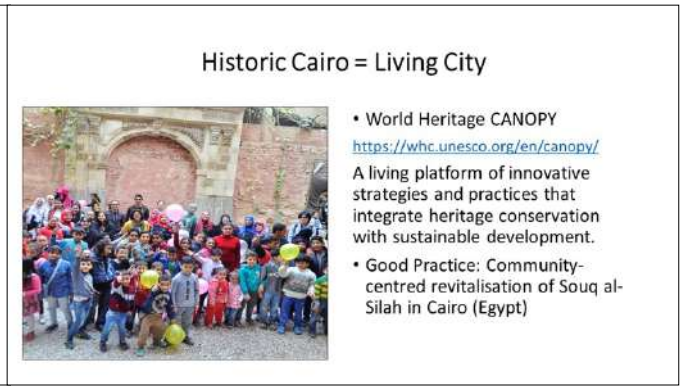
最後に、カイロ市のプロジェクトで、ちょうどバイトヤカン前のアパートの修復事例です。出窓やバルコニーについては、私的空間を外から見られないようにシェイドをつける工夫をしました。これで、私の発表は終わりです。ご静聴有難うございました。



④カイロ歴史地区におけるユネスコ支援事業

【Ongoing project at Historic Cairo supported by UNESCO】

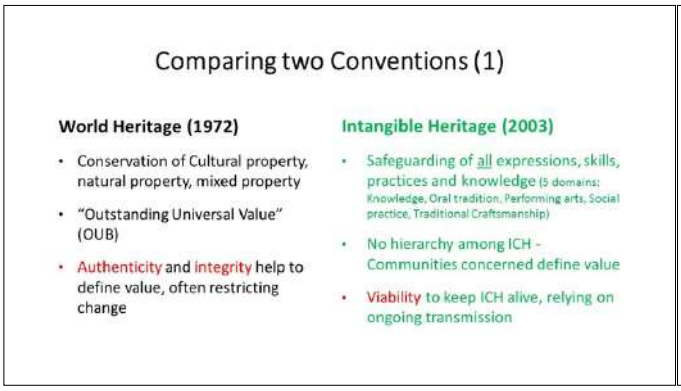
ユネスコカイロ事務所　文化担当官　高橋暁

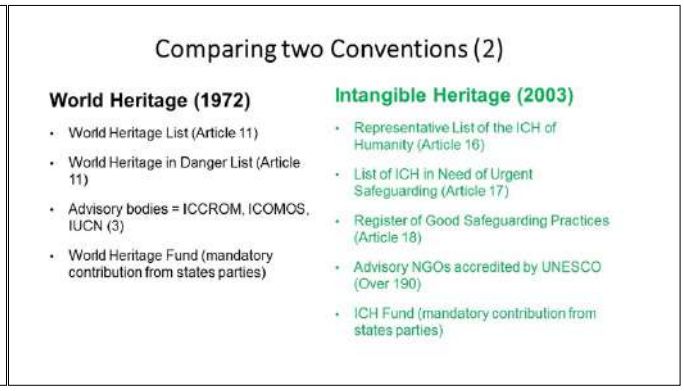


カイロ歴史地区は、エジプトの首都カイロにある世界遺産です。

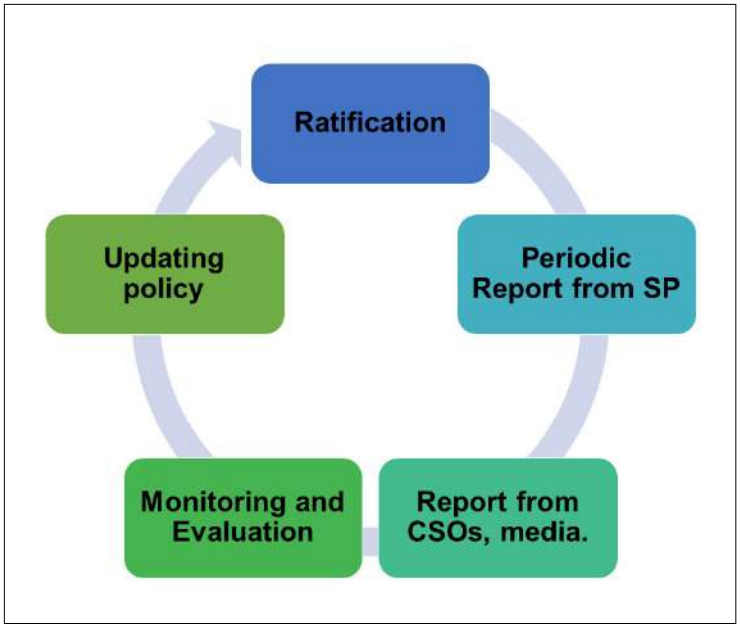
歴史地区カイロは人々の生活の場であり、生きている遺産といえます。トヨタ財団の支援を受けて、今私たちが集まっているこの場所で始まった「住民参加によるスーク・アル・シラー再興事業」は、昨年「世界遺産キャノピー」で紹介されました。「世界遺産キャノピー」は、文化遺産保護を都市の持続的開発に統合する革新的な戦略や事例を紹介するオンラインのプラットフォームです。

歴史地区カイロは、伝統知識や技術（無形文化遺産）の継承が行われている文化的空間でもあります。スライド左の写真は、ユネスコ無形文化遺産条約に登録されているエジプトの伝統的な人形芝居「アラゴーズ」で、カイロ歴史地区で鑑賞することができます。右の写真は、エジプトのフランス語新聞の無形文化遺産ワークショップ開催に関する記事に使われていたものですが、マシュラベイヤとよばれるイスラーム社会における伝統的な組細工制作の熟練者が、若い世代にその技術を見せている写真です。





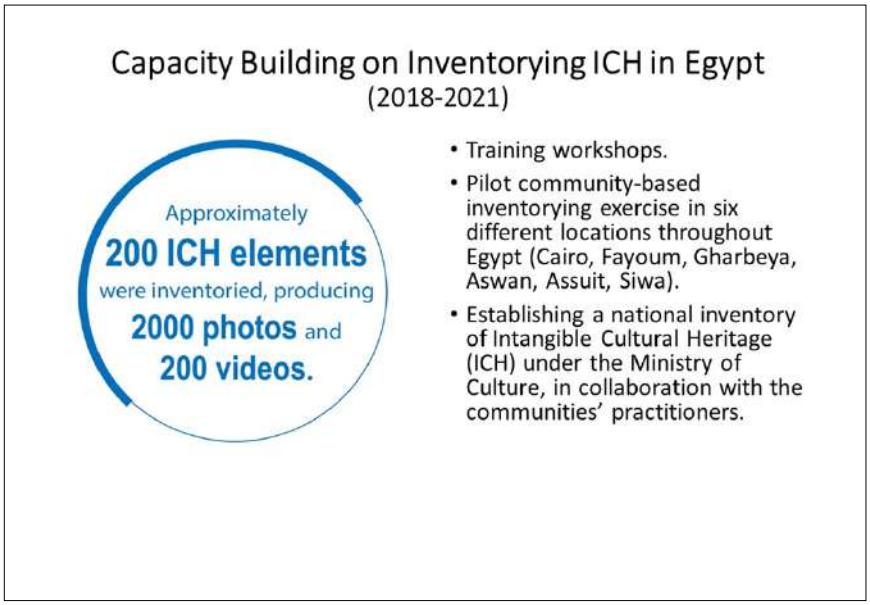
歴史地区カイロの保存に直接関連するユネスコの条約が二つあります。一つは 1972 年に採択された世界遺産条約。もう一つは 2003 年に採択された世界無形文化遺産条約です。二つの条約は、アプローチや国際協力の方法について若干の違いはありますが、世界の遺産と文化的表現の多様性の保護と促進という共通の目的を持っています。その違いをスライドに示しました。



条約を批准した加盟国政府は、ユネスコに対して定期的に有形・無形遺産の保存状況に関して報告書を提出する義務があります。ユネスコには、政府からのみならず、非政府組織やメデイアからも情報が寄せられます。ユネスコはこれらの情報を基に、遺産の保存状況を継続的にモニターしており、必要があれば関連の国に専門家を派遣して、遺産の保存状況を確認することもあります。この仕組みを通して長期的に、文化遺産保護の政策をより効果的なものにしていくことが究極の目的といえます。

歴史地区カイロについては、昨年の世界遺産委員会で４４COM7B.13 という決定がなされました。この決定はエジプト政府に対して 2022 年の 2 月 1 日までに幾つかの点に関して回答することを求めています。エジプト政府は報告書を締め切りまでにユネスコに提出しました。報告書は、正式に受理された後に、オンラインで見られることとなります。報告書はカイロ歴史地区保存に関して様々なイニシアチブやプロジェクトが進行中であることを報告しています。

次に無形文化遺産条約の施行に関してですが、ユネスコカイロ事務所は 2018 年から 2021 年にかけて、エジプトにおける無形文化遺産記録作成に関する訓練事業を支援しました。この事業によって、2000 の写真、200 のビデオによって、200 にのぼるエジプトの無形文化遺産の記録が行われました。

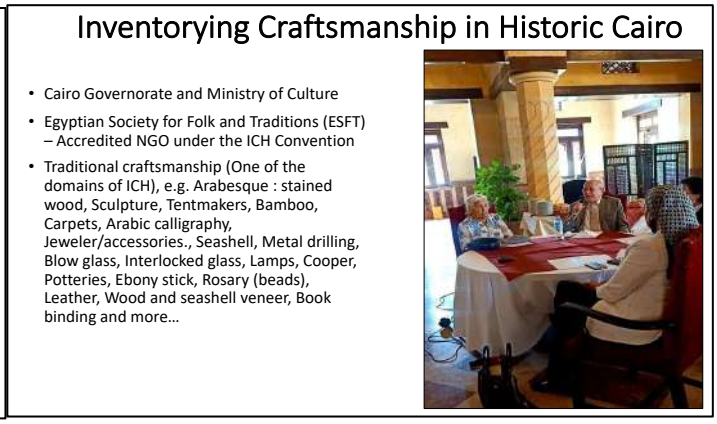


左上のスライドはアシュート県における伝統的なパン作りに関するものです。その右は、ファイユームにおける水車作成技術。

右のスライドは、カイロでは聖者誕生祭（マウリド）の際に欠かせない人形の形をしたお菓子の作成に関連する無形文化遺産の記録を行いました。

現在は、下左にあるように。無形文化遺産条約によって設立された無形文化遺産基金からの支援を受けて「歴史地区カイロの伝統工芸の記録保存事業」が行われています。事業の第一回のワークショップはアズハル公園内の会議場で開催されました

この事業はカイロ当局と無形文化遺産条約の担当である文化省、そして、エジプト民俗伝統協会（ESFT）が中心となって実施しています。ESFT はユネスコ無形文化遺産条約によって認定を受けた NGO で、モルシー博士のリーダーシップのもと活動しています。この事業は歴史地区カイロに関連する伝統工芸の記録に焦点を当てています。関連伝統工芸は多岐にわたりますが例えばアラベスク、木彫、テント、竹細工、絨毯、アラブ書道、宝石、貝細工、金属細工、ガラス細工、ランプ、如何細工、陶芸、ビー細工、皮細工、製本技術などが挙げられます。



スライドのようなマシュラベイヤの作成に関連する知識や技術は重要な無形文化遺産といえるでしょう。

ユネスコは文化遺産、芸術や創造活動からなる「文化」がどのように持続的開発の目標の達成に貢献しているかを明らかにしていくことが重要と考えています。例えば文化と教育は密接に関連しています。なぜなら母語による教育は英語など外国語による教育よりも、効果が高いからです。また文化に関わる機関（博物館、図書館等）や、文化遺産観光はたくさんの雇用を生み出しています。私たちが今日のワークショップで議論してきたように、文化遺産を統合することによって都市は一層魅力的で持続的な場所となります。

⑤ワールド・モニュメント・ファンドの現在のプロジェクト;イブラヒム・グルシーニャのタキエ

【The Takiyyat Ibrahim al-Gulshani Project】

ワールド・モニュメンツ・ファンド　ジェフ・アレン

私はプログラムディレクターです。エジプトや世界中のプロジェクトを担当していて 、エジプトではバーブ・ズウェイラのタフティル・ルブア地区のプロジェクトをマネージメントしています。イラクにも担当しているプロジェクトがあります。とても古いイラクのバビロン遺跡 です。

このカイロのプロジェクトにはスポンサーがいくつか付いているのですが、一番重要なスポンサーはアメリカアンバサダーファンド（USAid）です。

タキエ・グルシャニについてお話しします 。バーブ・ズウェイラの前にあります。とても近いです。マムルーク朝からオスマン朝に政権が変わった時に建てられた建物です。最初は 3 階建でした。シェイク・グルシャニが埋葬された場所が中央にあります。その周囲の庭にはそれ以後のスーフィー（神秘主義者）の信者たちが埋葬されています。

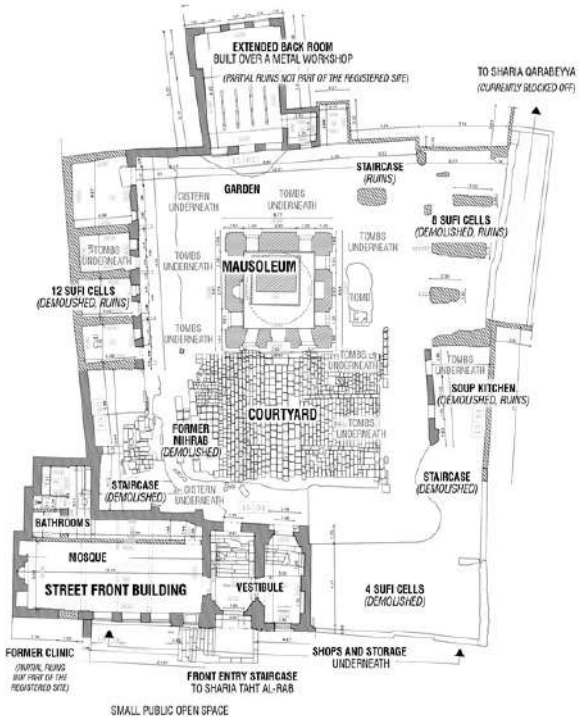
WORLD MONUMENTS FUND

The Takiyyat Ibrahim al-Gulshani Project

U.S. AMBASSADORS FUND for CULTURAL PRESERVATION

Takiyyat Ibrahim al-Gulshani

Built between 1519 and 1524 by Ibrahim al-Gulshani, an influential Sufi sheikh from Azerbaijan whose life in Cairo bridged the period between Mamluk and Ottoman rule, Takiyyat Ibrahim al-Gulshani complex is located in the heart of Cairo's al-Darb al-Ahmar medieval quarter.



Description of Takiyyat Ibrahim al-Gulshani

Entered through a monumental portal, the complex is architecturally unique. It comprises al-Gulshani's Mamluk-style mausoleum with its ornate façade and carved stone dome; a courtyard and garden surrounding the mausoleum framed by Sufi retreat cells and a communal kitchen; and a street-front, three-story building with a prayer space and additional cells on the first floor and apartments for al-Gulshani's extended family above. The courtyard was used as a ritual/performance space, and beneath it are the crypts of al-Gulshani's closest relatives and followers.

前頁下図は複雑な平面ですが、これは上から見た形です。中央の廟はグルシャニの埋葬されたところです。スーフィーたちが住んでいた建物もあり、真ん中には中庭がありました。周囲の住房は、ほとんどなくなってしまいました。政府によって意図的に破壊されたのです。その時はグルシャニ教団のスーフィーたちがエジプトに戻ってほしくないという意図で、破壊されました。

Current Condition of Takiyyat al-Gulshani

Today, the Takiyyat Ibrahim al-Gulshani complex lies in various states of ruin, a victim of financial limitations, earthquakes, looting, and changing religious administrative structures.

The scarcity of documentation and the deterioration exacerbated by its vacancy placed the monument's survival at high risk.

今に至り、このようになっていますが、もちろんすごく壊されています。資料が乏しくて、長いこと空き家になっていたので荒廃が激しいのです。政府の宗教政策の変化の波に飲まれてしまいました。

A Product of Demolition by Neglect

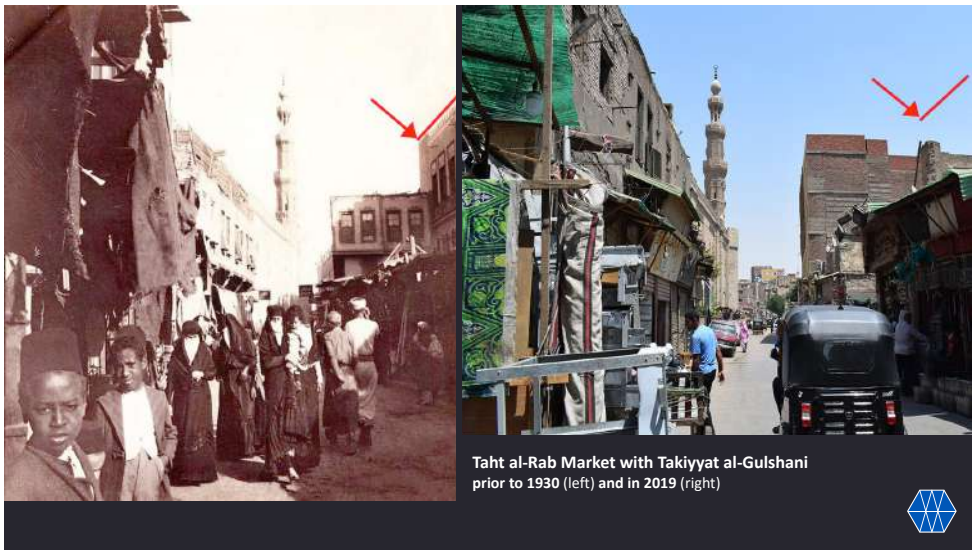
Abandonment of Takiyyat al-Gulshani over the past decades has demonstrated that leaving the site empty makes it vulnerable to deterioration and theft, while also creating a substantial void in the neighborhood.

上図は 1917 年の形ですが、2017 年と比べるといろんな破壊があったのか分かると思います。空き家にしておいたことによって、劣化や盗難があり、近隣住民から大事にされておらず、壊されたところもあり、色々な箇所が無くなってしまいました。

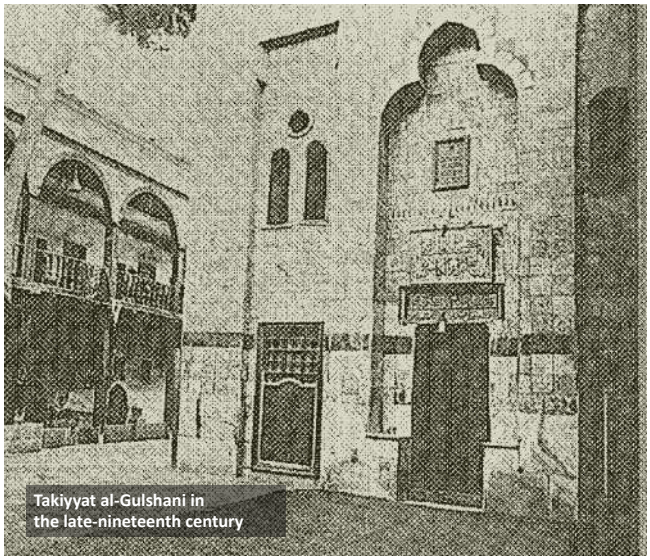
The façade of Sheikh Ibrahim al-Gulshani's mausoleum in the 1980s
Al-Darb al-Ahmar, Cairo

Capable Occupancy is Key for Survival

Vibrant and engaged occupancy is therefore crucial to successful adaptive reuse, securing the maintenance of the site, and re-establishing the Takiyyat al-Gulshani as a mainstay of community life.



Taht al-Rab Market with Takiyyat al-Gulshani prior to 1930 (left) **and in 2019** (right)



Takiyyat al-Gulshani in the late-nineteenth century

Why is Takiyyat al-Gulshani Important?

The complex was the first religious foundation established in Cairo after the Ottoman conquest in 1517, and the first to be named a *takiyyat* in its foundation deed. Unlike other Sufi lodges in Cairo, al-Gulshani's comfortably accommodated both religious and secular functions.

もちろん以前の形は皆さんご存知だと思いますが、この写真は1980 年代の写真です。まだ子供もいましたし、そこに住んでいた人もいたと思います。完全に閉鎖される前の写真です。

私はこのワークショップの前に、バグダッドのラシードに二日間いました。バグダッドのラシードはいつも活気があるところです。30 年間の戦争や破壊があったと思います。このタフティル・ラブアの写真は 1930 年代のものですが、2019 年と比較するとまるで戦争で壊されたような状況です。当時はスーフィー教団がとても重要だったので、指導者グルシャニの後継者たちがここを拠点としていました。

1517 年のオスマン朝による征服後、カイロで最初に設立された宗教施設で、また、初めて
タキエと呼ばれるようになりました。グルシャニは、カイロの他のスーフィー施設とは異なり、宗教的な機能と世俗的な機能の双方を備えていました。

Why is Takiyyat al-Gulshani Important?

Sheikh al-Gulshani's choice of the al-Darb al-Ahmar quarter was strategic, owing to the significance of **Bab Zuwayla**. Seen as a protective device, the gate's proximity to the Takiyyat allowed al-Gulshani to appropriate its talismanic power. More pragmatically, the Takiyyat faced the side entrance to one of Cairo's largest mosques, **al-Mu'ayyad**. The three complexes together became the focal point for the Gulshaniyya Sufi order.

タキエの周りの歴史的建築も無視することはできません。隣のバーブ・ズウェイラは、教団員からカイロの中心としての不思議な力を持つと認識されていました。スーフィー教団の人たちは、広大なムアイヤド・モスクを使って礼拝をしていました。加えて、教団指導者たちは当時、同じ地区の中に色々な建物を持っていました。グルシャニの建物だけ見るのではなくて、周りがどんな地区だったのか、周りの重要な遺跡も見て考えることが大事です。

Project Objectives for Phase One

World Monuments Fund (WMF) began work at the Takiyyat Ibrahim al-Gulshani in 2018 to evaluate current conditions and develop a plan for interventions. Working with the Egyptian Ministry of Tourism and Antiquities (MoTA), local documentation specialists, architects, and university faculty and students, WMF has conducted extensive documentation of the Takiyyat al-Gulshani buildings and initial interventions.

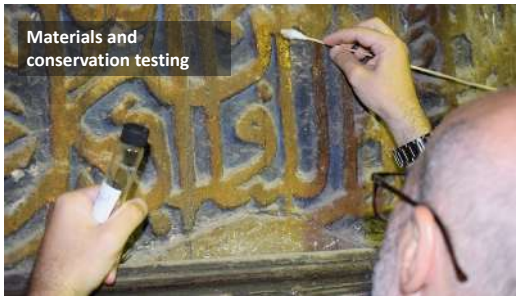
最初の活動のステップは、どのように修復することができるのか、そのためにいろんなワークショップをやり、文化庁の責任者や関係者も参加して頂きました。左中央の写真に写っている皆さんは観光考古省からの方々です 。

Project Activities for Phase One

Funded by the **Ambassadors Fund for Cultural Preservation (AFCP),** this work formed the basis for the Takiyyat Ibrahim al-Gulshani conservation plan and adaptive reuse options.

Additionally, WMF conducted workshops through the EU-sponsored **ILUCIDARE** program assisted by the **Japan Society for the Promotion of Science**. This allowed WMF to expand discussions on documentation standards, adaptive reuse, and building materials conservation with MoTA staff and local conservation specialists.

左下はプロジェクトのフェーズ１を表すものなのですが、もちろん資金協力を得て、色々なワークショップを行うためにヨーロッパから来ていただきました。一部の資金協力も JSPS から頂いております。



Project Priorities and Objectives for Phase Two

Thanks to AFCP support from the US Embassy, after completing a comprehensive phase of documentation, study, and assessment, the project is now moving toward Phase Two physical interventions.

This phase will build the foundation for future, continued conservation and restoration phases as part of a long-term investment at the site.

Objectives for Future Funding and Phases

WMF believes **Phase Two physical interventions will catalyze further donor support and programming** meant to ingrain a sustainable outcome that serves the monument's preservation well after the completion of the project.

With support from other donors, these later work phases can extend conservation activities that address the adaptive reuse plan. Importantly, they will leverage tangible interventions at the monument to enhance the community context.

私も色々な活動を計画しました。今後の進展や修復のために行ったワークショップで、住民も参加して修復活動をする様子も見られます。私たちがやりたい事とまったく同じですね。

運が良かったことに、政府の重要な責任者から、我々がやっていることを理解し、応援し協力してもらうことになりました。私たちは大きなプログラムをしていて、住民の参加も考えており、大きな資金協力も頂きました。フェーズ２としては、地域者期との関わり、敷地再利用、街並みの修景、墓廟の補修、中庭の改修、人材の開発を計画しています。

修復のために資金協力を使うのですが、それだけではなく、そのコミュニティに合った活動を考えて、その地区の改善・発展を促すことも考えています。

その持続性を実現するためにはやはり困難があると思いますが、色々考えています。建物は政府が管轄している場合が多いので簡単には出来ないと思いますが、政府が許可する、あるいは観光考古省、文化省の責任者・関係者が地域の投資家と協力して一緒にプロジェクトを行ったり支援したりすることを考えています。例えば、研究者も周りの大学や研究所の研究者達にも参加していただくことを考えています。サラー先生とアラー先生の発表にもあったように、我々も同じことを行いました。それぞれの地区で、何をどのようにするかをこのようにマッピングしました。我々もアラー先生の発表にもあったように、収入やボランティア活動と共に、社会に関わる活動、子供に関わる活動、文化・遺跡に関わる活動を大切にしています。

この図はタキエの未来の活用計画図です。遺跡を残すことだけではなくコミュニティにどう役立てていくのかという点が焦点になります。

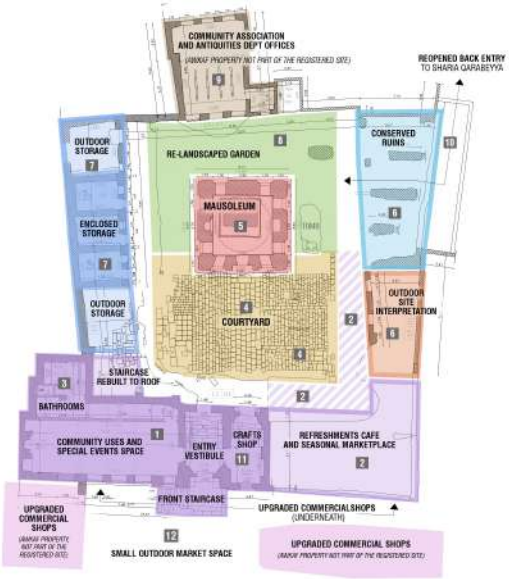
組織をつくることが大事で、文化庁の関係者・責任者も関与して頂くようにしっかりとした組織を運営していくことが大事だと思います。エジプト人のお祭り、ラマダン月とか、犠牲祭とかで、伝統的な物事をどのようにして我々のプロジェクトに活かせるか、ということも考えています。ご清聴ありがとうございました。

MoTA and WMF site surveying

Cairo University students and faculty

Formula for Sustainability

World Monuments Fund believes that the Takiyyat Ibrahim al-Gulshani Complex Conservation Project will ultimately provide a compelling demonstration of the positive, sustainable outcomes arising from **a conservation methodology emphasizing antiquities partnerships, education, and community engagement.**



Adaptive Reuse Concepts being Evaluated

1. Taht al-Rab multi-purpose community, special events, and Taht al-Rab trades center
2. Outdoor refreshments cafe with retractable shelter and seasonal commercial marketplace
3. New bathrooms
4. Courtyard culture performance stage
5. Sheikh al-Gulshani's mausoleum preserved as a centerpiece archaeological ruin
6. Sheikh al-Gulshani and takiya interpretative exhibit
7. Indoor and outdoor storage spaces
8. Garden and cemetery
9. Community association and antiquities department site management office
10. Community entrance to Sharia Qarabeyya
11. Traditional crafts cooperative showroom
12. Taht al-Rab market frontage rehabilitation, including commercial shop upgrades and a multi-purpose outdoor market space

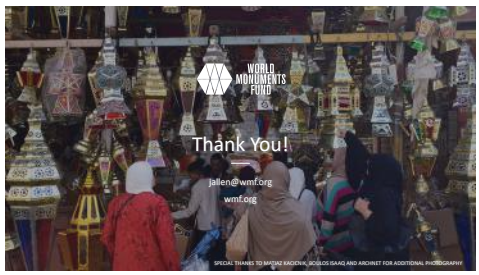
A Model for Urban Rehabilitation

The Bab Zuwayla neighborhood, including the Takiyyat al-Gulshani and complementary Taht al-Rab Market, is a priority of the Egyptian government for tourism development. WMF, through its history at the site and years of trust and relationship-building, can be a participant in the conversation about redevelopment of historic sites.

Our program respects the government's ideas about tourism for the Bab Zuwayla neighborhood and simultaneously promotes the community's desires to reintegrate the complex into their daily lives.

Eid al-Adha merchandising from Taht al-Rab

Ramadan lamp market



⑥質疑応答・意見交換

参加者からは、「このプロジェクトに関わっていることに感謝したい、文化遺産と社会との繋がりが理解できた、是非このプロジェクトを成功してほしい」といった歓迎するコメント共に、「提案されたものはいつ実現できるのか？」といった質問に対して、「はっきりは答えらえられない」との返答がなされるなど次の具体化へのステップが求められる状況が見受けられた。観光考古省職員から、「住民の意見を大切にしたプロジェクトであり、国立都市景観調和機構（NOUH）と共同のプロジェクトで、ユネスコとも関わりがあるので、このような機会は大切である。特に歴史的建造物の建物ばかりに集中するのではなく、住民の意見をそこに活かそうという点は評価できる」とのコメントがあり、この事業への評価が感じられた。

住民からの「違法で建てられた建築は取り壊されるのか？」の質問に対して、観光考古省職員から「現在、古い建物をリストアップ中で、建物の構造がきちんと耐えられるのかということを現状把握している。ただし、観光考古省としては、一般の建物ではなく歴史的な建物をどう保存するかの視点に注目している。」という回答があった。参加した建築家から「カイロは地震が多く、耐震補強をする必要がある建物がたくさんある。」との意見があった。住民から「古い建物が壊れると周辺住民に被害が及ぶのではないか」とのコメントがあるなど、壊したほうが安全なのではという住民の現状を心配する意識と、壊される以前にその建物の歴史的価値を評価して保存すべき建物があるという専門家の意識のズレも垣間見られた。別の住民から「違法建築や古くて耐震性に疑いのある建造物の撤去に関しては、政府主導で行われ、残念ながら住民の決定は届かない。」、「旧市街では、住民自身が価値のない建物だと思って、歴史的な建物を壊してしまう場合も多々起きている。」など、建物の撤去・倒壊については、住民たちの注視の的になっていることが明らかである。その背後には、近年政府が、違法建築（インフォーマル住居、アシュワイヤ）の撤廃をスローガンに掲げているという状況がある。

ダルブ・ラッバーナの撤去された住宅地、マムルーク朝期のムアイヤド病院とビスタミー修道場を残す形で周囲の住宅が、2022年2月の調査の際に撤去されている最中であった。ここにどのような住宅地が開発されるのだろうか。ここに住んでいた普通の人々はどこに住居を与えられるのだろうか。いずれにせよ数百年の歴史を持つ細街路網とそこに建っていた住宅は撤去されてしまった。この地域は世界遺産のコアゾーンであるだけでなく、『エジプト誌』の詳細地図にも住宅地として描かれる。

住民側から、アラー氏の提案に対して、「スーク・シラーハの入り口から文化、工芸、食文化という順は、どうか、特に文化ではスーク・シラーハの歴史をドキュメンタリー等で訪問客に知ってもらい、その後工芸を楽しみ、最後に食事するということは、考えられないか。」という意見に対し、アラー氏から「3 つのノードを提案したが、それは固定的なものではなく、それぞれのエリアに色々なアクティヴィティーを含むと理解して欲しい。建物の状況や土地の形状に合わせて多様な機能を持たせる必要がある。また、このプレゼンテーションをぜひ行政側に住民側からの同意や意見をいただいたということで報告したい。」と回答があった。住民側からのもう一つのお願いとして、交通計画、特にトゥクトゥクに関する規制はアラー氏のプランを実現していく上でも重要だとの指摘があった。

深見氏から「住民みんなにとって住みやすい街を作ること、歴史的に価値がある街に誇りをもって住めるようにしていくことが大切。そのために、旧市街カイロの歴史遺産や既存の建造物や道路は十分に利用できる。」というコメントは、参加者からの感謝を表する言葉からも、しっかり届いていることがうかがえた。サラー氏から「大学でも、取り壊すべき建物と保存すべき建物をどう扱うかは大切なテーマであり、常に議論をしている。建物が半壊していたら壊してしまった方が早いとして、新しいビルをたてる人もいる。自分として、それはいけないことだとおもう。実際、修復保存することによって、価値が増す事例に携わった。」とコメントがあるなど、完全でない古い建物をどのように扱っていくのかという点は今後とも大切なテーマになると思われる。

オンラインで入っている日本側専門家から「とても良い会であった。素晴らし提案であり、活発な意見交換がありとても良かったと思う。プレゼンテーションへの質問がいくつかあるが、時間の関係で紹介はできないが、質問があるということは、プレゼンテーションが素晴らしかったということである。特にアラー氏の多目的ゾーン、クラフトゾーン、美食のゾーンなどスーク・シラーハのエリアをゾーニングして計画している点、それに、環境改善、サービス活動、ボランティア活動といったプログラムを重ね合わせている点を評価したい。計画案を元に住民とディスカッションするというデザインレビューを繰り返すことが、良質な建築や街をつくる大切なプロセスであり、本日はそれが行われたわけで、今後とも続けてもらいたい。日本には住民参加のプロジェクト事例や仕組みがあるので、今後も紹介するなど協力をしたいと思っている。」とのコメントがなされた。

終了後における日本人専門家の話し合いでは、意見交換会を評価すると共に、今後の課題とアイデアについてのコメントを以下に示す。

・何か小さくても実現させるパイロットプランを作ることが大切、このことにより、人を巻き込むことができ、その良さと体験を共有すれば、次に繋がることになる。

・リノベーションには費用がかかる、その費用を集める活動や事業提案も必要である。

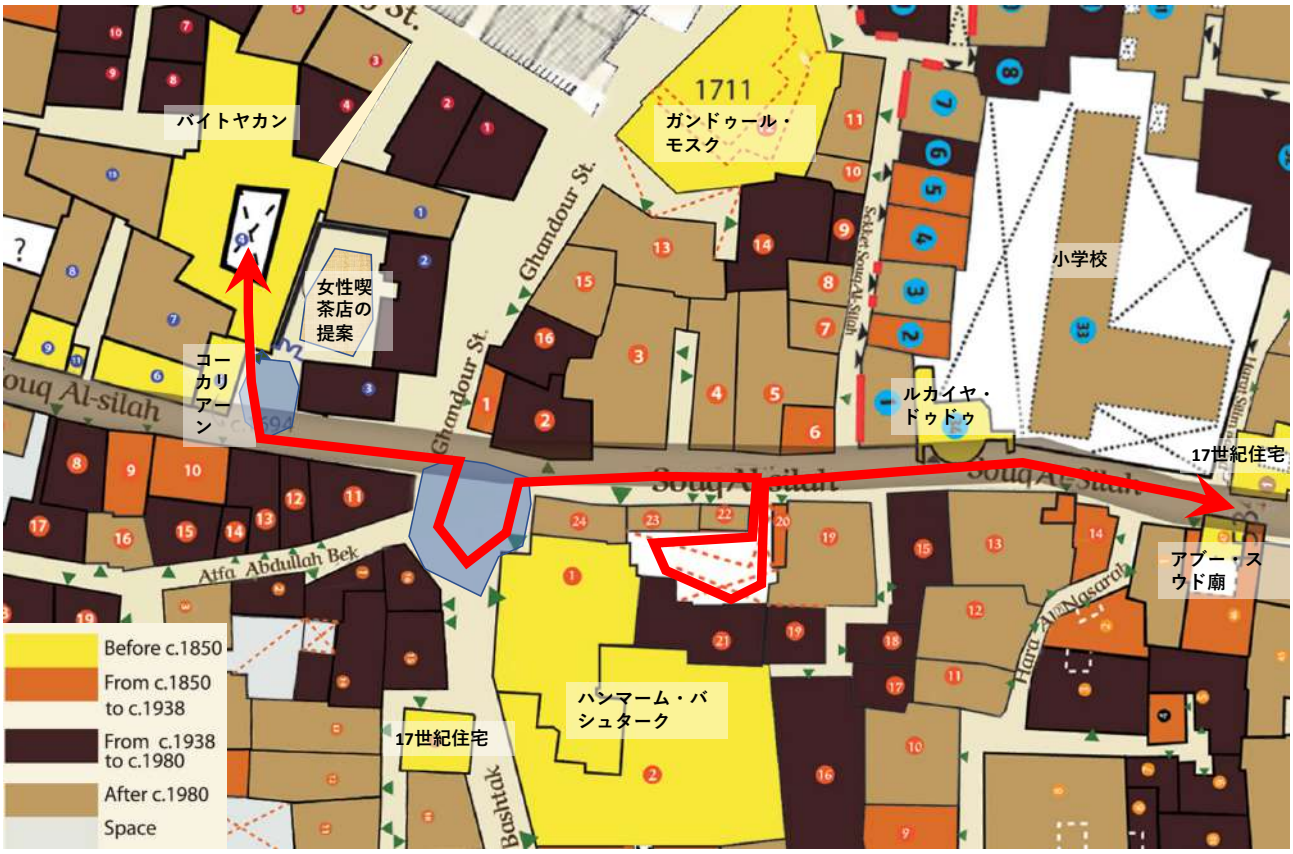
・広場などオープンスペースは費用も少なくてもすむので、取り掛かりやすい。まずはどこかでやってみても良いのではないか。

・投資家やデベロッパーにアピールする動画を作り、資金集めをするのも良い。

⑦街歩き

現地での参加者は 35 名（住民男性 5 名、住民女性 12 名、ファシリテーター6 名、講演者 2 名、日本人参加者 3 名、異なる地域からの参加者 7 名）であった。中には現地訪問まで参加しない人もいたが、総勢 30 名で、バイトヤカン周辺を見てまわった。

当初は、バイトヤカンから出発し、マンジャク宮殿まで南下し、向きを変えてスーク・シラーハを北上し、バーブ・ワジール通りと合流する地点から、バイトヤカンに引き返すというプランであったが、それぞれの場所で、意見交換をしながら進めることが重要と考え、まちあるきの距離を短縮した。



バイトヤカンを出発し、まずバイトヤカン前の、修復されたサビール・クッターブ・コーカリアーンを見学した。コーカリアーンとバイトヤカンに挟まれた空地は、現在伝統的喫茶店の客席として使われている。この空間から、現在閉ざされている鉄扉を開いて、先のアラー氏の女性用伝統的喫茶店へと繋げていくことについては、賛成意見が多かった。また、せっかくサビール・クッターブが綺麗に修復された後も何の機能も持っていないことに対して、参加者からもったいないという意見が発せられた。また、サビール・クッターブの入口が奥まったところにあり、これをどのように利用するのかという実利的な疑問もあがった。現在は修復後で表面の彫刻を施された石やタイルが綺麗だけれど、これをどのように維持していけば良いのかという意見もでた。具体的なものに即して考えることによって、より身近な疑問点が浮かび出す一例であろう。

次に、ハンマーム・バシュタークの入口のところでの話し合いがもたれた。現在鉄柵で覆いが作られていることについて、綺麗な入口に悪戯ができなくて良いという意見と、鉄柵の中にゴミが捨てられており、かえって環境を汚してしまうのではないかという双方の意見があった。ちなみに鉄柵の中の扉が開いており、参加者から誰が開けたのだろうと疑いの声が上がり、観光考古省からのアムル氏が撮影するという一幕があった。2020 年までは鉄柵はなかったわけなので、今後、住民たちの決定としてもどちらかを選び、観光考古省と折衝する必要があろう。とはいえ、2 つの意見ともに正しい部分があると思

われる。ちなみに。観光考古省が登録した建造物は、全ての場合鉄柵で囲まれている。以前に住民のワークショップの男性の会で、若い人のモラルを高めていかねばならないという指摘を思い出した。

さらにハンマーム・バシュタークの南東側の空き地に入った。崩れた瓦礫の山には誰かが侵入した形跡があったので、先に扉が開いていたのは、そのためだったのかという納得の声が上がった。住民の中には崩壊のさまを初めて見た人もおり、その崩壊の酷さに驚きの声が発せられた。町は毎日の生活をする場となってはいるものの、誰もが細かな点まで見ているわけではない。歴史的建造物を保存・保全するためには、他者が指摘を行うことの大事さを感じた。すでに指摘したようにハンマームの西側の焚き口部分の上階には、貧困層が居住する悪環境があるけれど、もしかしたらこうしたことも普通に住っている人々は知らないのかもしれない。

その後、やはり近年綺麗に修復され、鉄柵の向こうになったルカイヤ・ドゥドゥの前に達した。2021年以前は革命後にタイルが盗まれるということで、巨大なコンクリートブロックで覆われていたので、以前に比べたら、その状況は向上している。とはいいながら、やはり鉄柵の向こうには菓子袋などゴミが散らかっている。これほど美しい建築がありながら、誰もが中に入ったことはないと言う。背後の小学校を卒業した人もいて、建物には馴染みがあるものの、ルカイヤ・ドゥドゥが若くして亡くなり、彼女の母親がこのサビール・クッターブを寄進したこと、あるいは死者の街にある彼女の墓が近年地下水の上昇で倒壊したことを知っている人はいなかった。歴史への関心をひきだしていくことは、歴史都市の保全の第一歩なのかもしれない。

小学校の前は、ごみ収集場所となっており、決して綺麗とは言えない。しかしながらゴミ収集は生活のためには重要な側面で、今後の課題となる。現在は使われていない。アブー・スウド廟、空き家となった 17 世紀の住宅など、これらは修復の手が回っておらず、経年変化の後がそのままに残っていた。住民に再活用を考えてもらった建物と比べると、これらへの関心は薄く、みんなの意見が必要だという提案を行うことによって、人々の意見が引き出されることを理解した。

まちあるきの中で、自動車のすれ違い、トゥクトゥクの走行など、普段から感じていることではあるが、大人数で歩く場合の危険性を実感した。

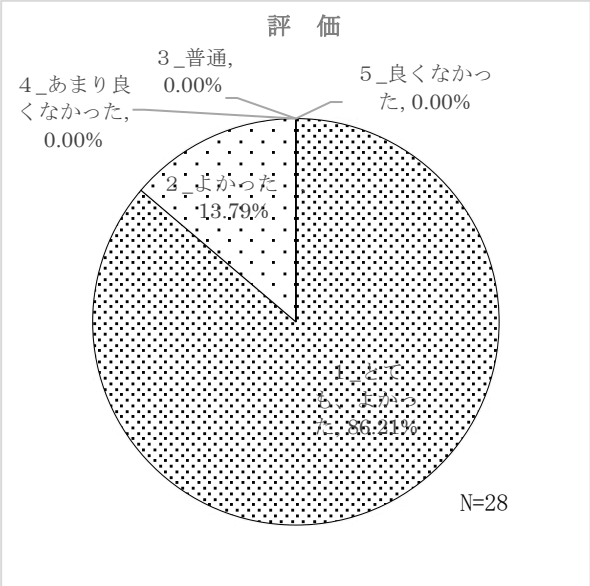
⑧アンケート結果

●属性：アンケートに記入していただいた方は 28 名、その属性は

・住民　・俳優　・新聞記者　・まちづくり専門家　・建築家　・World Monuments Fund Proj
・まちづくり NPO　・主婦　・大学教員　・研究者

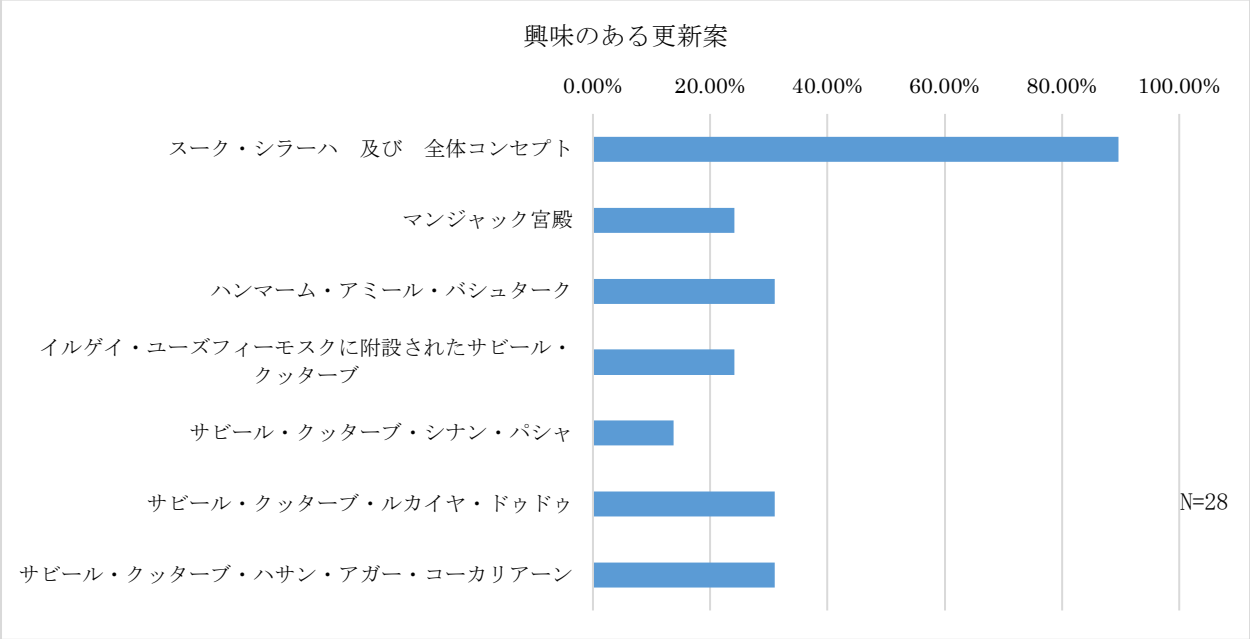
●更新案提案と意見交換の評価

86%が「とても良かった」と応え、残り全てが、「良かった」と応えており、「普通」「良くなかった」「あまり良くなかった」は０であり、満足度の高い内容であったと評価できる。



〇興味のある更新提案について、

一番は「スーク・シラーハ及び全体コンセプト」で、他は、大きな違いはないが、「ハンマーム・アミール・バシュターク」「サビール・クッターブ・ルカイア・ドゥドゥ」「サビール・クッターブ・ハサン・アガー・コーカリアーン」が少し多いという結果である。



●意見・感想など（自由記述）

・「アラー氏のゾーニングの提案は説得力があった。収入を生むアイデア、住民が主体になる仕組みをリノベーションの中でどう取り入れるかがポイントと感じた。使いながらのリノベになるわけなので、まずは、小さなところから実現することが大切、それによって、住民に自信が生まれ、拡がりも期待できそう。オープンスペースからやり始めるのがよさそう。」

・「日本において歴史的町並みを残す場合の修理、修景、許可に相当する行為の概念があるか？建築の更新案のデザインが、地域に根ざしたデザインになっているか疑問を感じました。」

・「様々な提案が、スーク・シラーハに希求されている機能であることはわかりますが、彼らの生活圏内（周辺地域やさらに広い範囲で）における各機能の補完関係が見えていないので、それらの提案が自立可能であるかの検証が現地側で必要になるでしょう。次の段階として、カイロ全体の都市的視点からの検証が必要でしょう。」
・「今回も、前回も、地域の方々の真摯な活発な議論に感銘いたしました。この内容が、今回の議論対象エリアの多くの方々に共有されるといいですね。」
・「どんな小さくてもいいですから議論の成果として目に見える形になるといいですね。次につながることでしょう。」
・「同じような機能の提案があり、過度の重複が気になった。ブロックごとに特徴を持たせることが大切だと思う。」
・「住民ワークショップで出された意見や要望をふまえて提示されたスーク・シラーハ構想は、住民にとって衝撃的だったと思う。スーク・シラーハの歴史や文化、空間的な魅力を生かしながら地域課題の解決を試みるアグレッシブな提案だと思う。一方、これを実現する道筋を描くことは容易ではなく、今後の最大の難題といえる。
進行中のパイロットプロジェクトとして、また、スーク・シラーハの希望の光はバイトヤカンであることは間違いない。ここを拠点として、まずは周囲の公共空間（街路や広場、軒先空間）整備を、住民の手により少しずつ実現・波及させていくことも大切であると考える。例えば、緑化（壁面・軒先）やファサードの統一（庇・オーニング）などは比較的容易に実現することができるかもしれない。全体構想の実現に向けては、公共空間や歴史的建築物、コミュニティに対する意識が育まれていく速度に調和させることも重要と考える。」
・「住民の方々やアラーさんたちの提案を実際の事業にまで導く道筋がまだ見えません。こういうワークショップを重ねる必要を感じます。また、World Monument Fund のモスク修復事業がどういう受け皿で実施されたのかが、参考になると思う。」
・「将来の子供のために遺産を復活できれば幸いです。」
・「遺跡の修復に必要な資金　このプロジェクト成功するための第一歩だと思います。」
・「アール・エンパワーメント・コミュニティーを将来的に再生するための包括的なマーカー計画を実施するための資金の提供が大切。」
・「住民の意見を大事に聞いてあげて下さい。住民の家を壊さないで下さい。どうしても　壊すなら同じような住める場所を作ってあげてください。」
・「色々な所を大事にして欲しいです。」
・「子供にコーランを覚えさせる場所を作ってもらいたいのは私の希望です。」
・「日本語を教えて欲しいです。日本文化センターでもバイトヤカンでも教えてもらえると助かります。」
・「遺跡のところには警備の人など見持ってくれる人がいて欲しいです。遺跡の毎日の情報、周りの建物の情報（周りに倒れるような建物の情報）よく見て、報告することが必要です。Gamalia のように光を付けてもらいたいです。　　電気がつくと遺跡の綺麗さを住民が感じます。」
・「活発な意見交換があり、NGO 及び政府からの参加者、男性、女性のパランスもよく、大変有益な会議でした。スーク・シラーハの歴史地区興味に聞きしてはかなりしっかりしたグランド. ブランがあることが分かりました。是非、日本とエジプトとの協力事業が行われることを願っています。」

⑥　オンライン WS システム構成

松村哲志（JCAABE 理事/日本工学院専門学校）

本取り組みの一つの大きな挑戦にオンライン会議システムを活用した活動が挙げられる。日本においてこれまで実践されてきた住民・市民との協働によるまちづくりの知見について、カイロの専門家とその知見を共有し、カイロと日本の専門家が協働して住民ワークショップを開催する。具体的には１_カイロと日本の専門家の協働による住民ワークショップ、2_エジプトでまちづくりに関わる専門家に向けての住民参加のデザイン・協働のまちづくりに関するレクチャー、３_住民ワークショップをもとにしたカイロの建築家による提案とまち歩きワークショップである。これらの取り組みは目的、シチュエーションなども異なるためそれぞれのシステム構成について記録をおこなった。オンライン会議システムのまちづくりへの活用は参加協働のまちづくりについて知見を共有し、距離を超えて協働を促すさまざまな可能性を秘めた取り組みといえる。あくまで現時点でのシステムであるがこの取り組みを足がかりとして今後、距離を超えた協働のまちづくりへの一歩としていただければと思っている。

〇共通事項：重視すべき点とポイント

協働のまちづくりを行う上での基本的に考え方は web を利用した場合でも同じである。特に web を利用した距離を超えた連携でのシステムづくりでは以下のことを再度確認して進めていく必要がある。

・参加協働のまちづくりの重要なポイントに対話が挙げられる。Web 会議システムを用いた取り組みにおいても対話を活発に出来るシステムとすることを心がける必要がある。

・特に海外と繋がって実施する際は同時通訳や資料提供などその目的とシュチュエーションに合わせた対応が必要である。

・主役は住民・市民であり、現地の専門家であることを心がけ、対話を含めた協働が行われていくように実施する必要がある。

〇zoom 言語通訳機能：距離を超えて対話をすすめるために

この取り組みにおいては言語が違う人々の対話を促進するために zoom の言語通訳機能を用いて同時通訳を入れてワークショップを行った。詳しい使い方の説明は下記 zoom のサポートページを参照いただきたいがここでは基本的な考え方、ちょっとしたポイントについてのみ記載する。

（参考）https://zoom-support.nissho-ele.co.jp/hc/ja/articles/360039825411

[考え方]

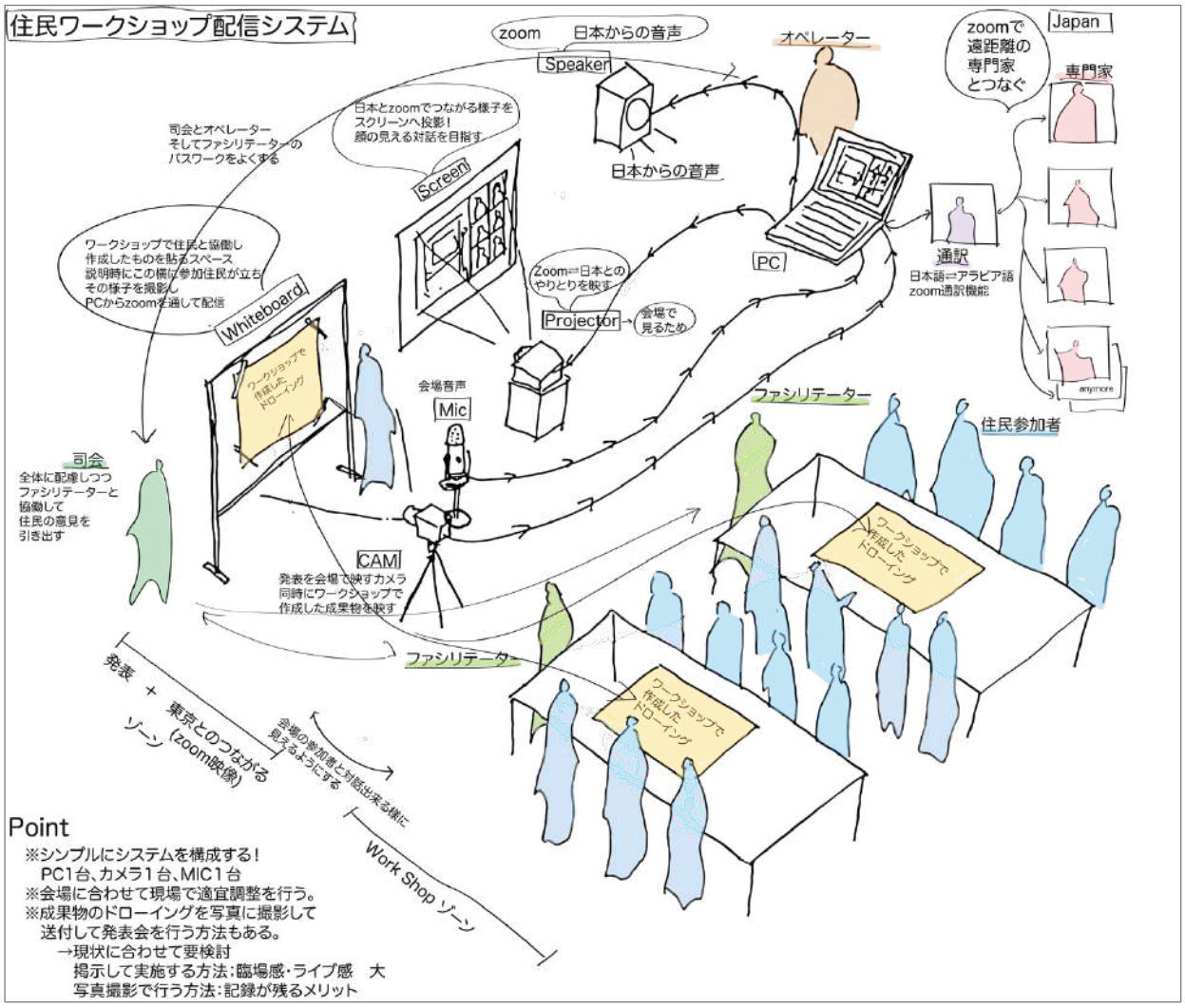
Zoom における言語通訳機能は言語ごとに音声チャンネルを分けて配信することができる機能である。例えば本事例のようにカイロから参加する参加者はアラビア語、日本から参加する参加者は日本語と言った場合、事前に同時通訳を zoom 上で指定しておくと同時通訳者は音声を発信する際にアラビア語、日本語のチャンネル切り替えを行える。いわばリアルでの会議における同時通訳ブースのような機能を zoom 上で指定できる機能である。聴く側は使いたい言語のチャンネルを選んでおけばその言語での同時通訳を利用することができる。

[Point]

・通訳者の指定は事前に行う必要がある。登録したメールアドレスから専用のアクセス ID が配信され、そこから入室する必要がある。また、指定から通訳者のアクセスが許可されるまでタイムラグがあるので早めに指定する必要がある。

・利用者は言語選択から他の言語チャンネルをミュートする機能があり、ミュートをオンにすると必要な言語のみ利用することができる。

〇住民ワークショップ配信システムについて（現地住民+専門家　⇄　遠隔地専門家　協働/通訳有）



［概　要］

まちづくりを行う対象地域でリアルに専門家と住民がワークショップを実施。web 会議システムを用いて遠隔地にいる専門家とつながりサポートを行うことで距離を超えた協働を実現する。距離を超えた地域間でのワークショップを実現するとともに、一歩進んで、ワークショップに参加しにくい住民市民が web でつながり参加協働を行うハイブリット型ワークショップへの展開の基本となるシステム構成。

［運用メモ］

・web 会議システム：zoom_翻訳機能

・必要機材：PC、web カメラ、マイク、プロジェクターに加えて

ワークショップのための道具（マーカー、模造紙、ポストイットなど）

※今回は住民の意見を短時間に引き出すことを考え模造紙に代わり地図、対照建物を中央に配置し周りに書き込める余白を多く配置した専用の用紙を用意した

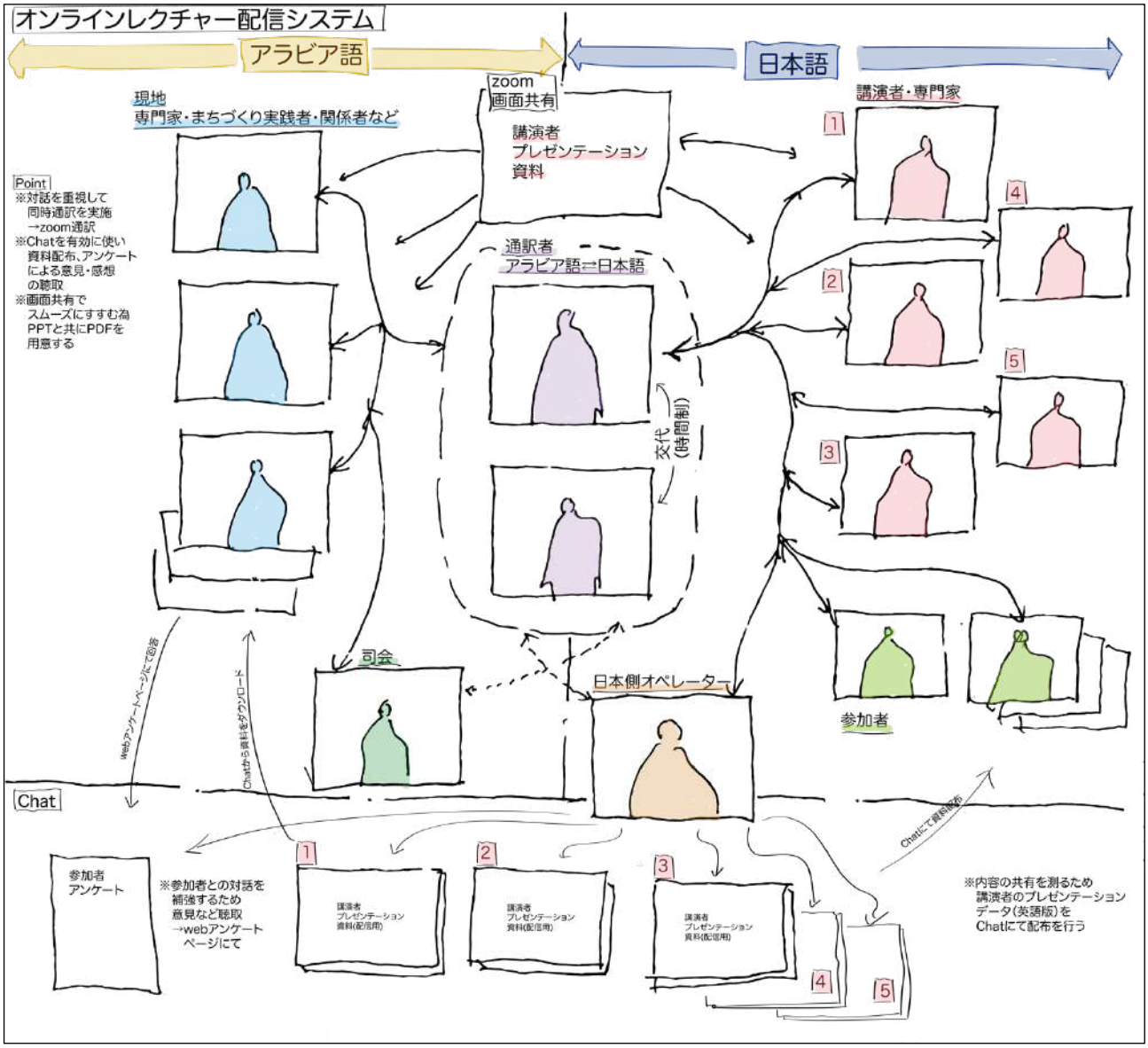
・通訳_今回はアラビア語⇄日本語　２名（1.5 時間程度で交代のため）

・役割分担　司会、オペレーター、通訳、ファシリテーター

※司会とオペレーターは専任として行うことが望ましい。

・時差に配慮して進行表、タイムスケジュールを構成することが望ましい

○参加協働のまちづくりに関するオンラインレクチャー



［概　要］

住民・市民の参加協働によるまちづくりについて情報を共有することを目的として参加協働のまちづくりに関するオンラインレクチャーを実施。参加対象は現地でまちづくりに関わる専門家・実践者・政府関係者である。距離を超えて各地の先行事例や新たな考えについてオンラインを通じて共有することで参加協働のまちづくりに関して知見を集約し、今後、推進していく一歩とすることを目的としている。対話を重要視することから同時通訳機能とともにチャットなど活用して資料提供など手助けを行なっている。

［運用メモ］

・web 会議システム：zoom_翻訳機能

・必要機材：PC、web カメラ_各参加者が準備_※全ての人が web で接続していることから

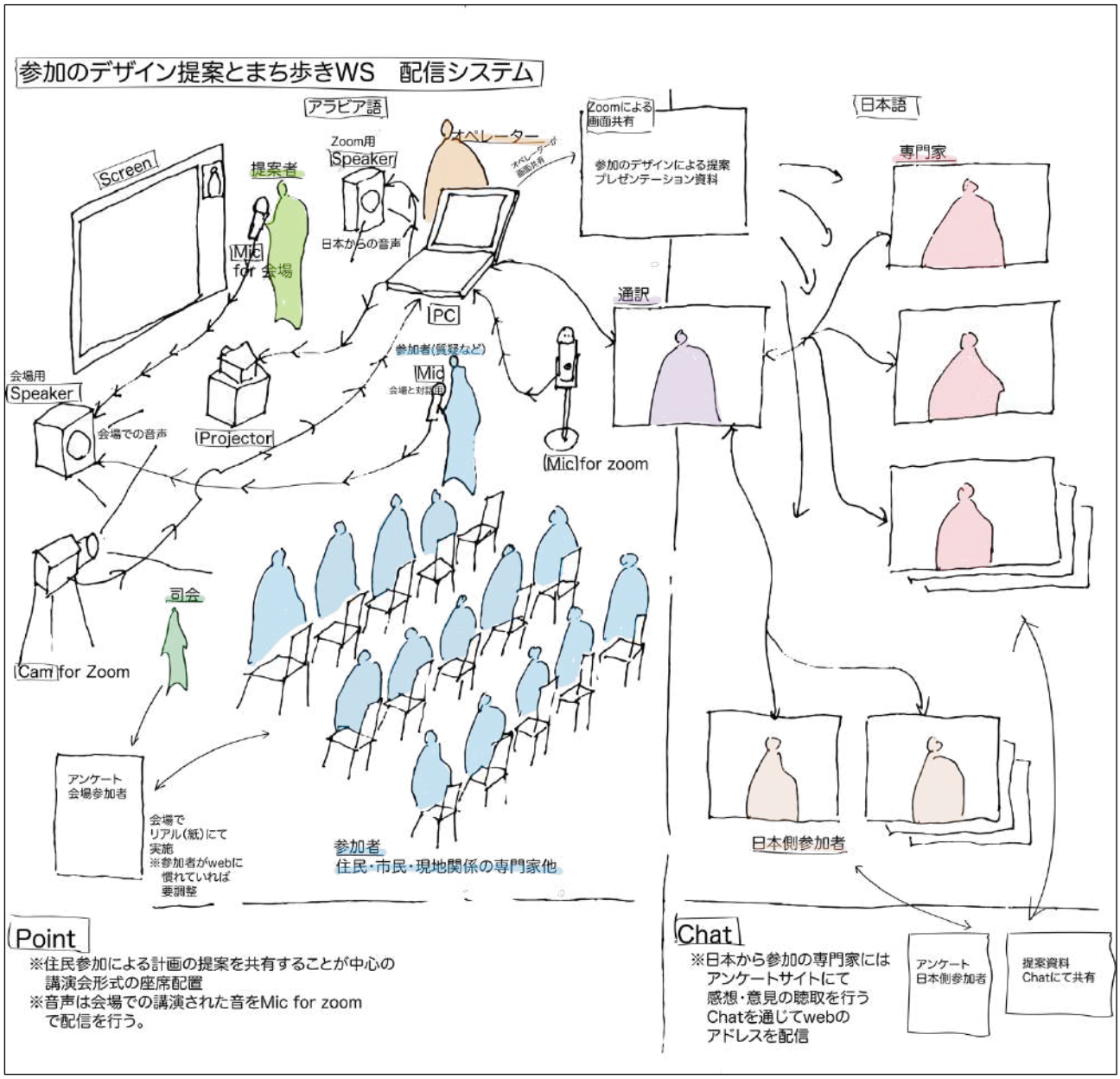
・通訳_今回はアラビア語⇄日本語　２名（1.5 時間程度で交代のため）

・役割分担　司会、オペレーター（資料の配布など Chat を管理）、通訳

　※司会とオペレーターは専任として行うことが望ましい。

・時差に配慮して進行表、タイムスケジュールを構成することが望ましい

○住民ワークショップをもとにしたカイロの建築家による提案とまち歩きワークショップ



［概　要］

住民ワークショップの結果を受けて現地の専門家が提案を作成。提案について発表を行い、対話を通じて質疑、意見交換を行うことを目的としている。提案を十分に理解し、より良いものに協働していくために対話を十分に行えるようにする必要がある。そのことからＷＳとオンラインレクチャーの中間のようなシステムが望まれる。参加対象者は住民・市民、現地専門家、日本側専門家、提案者と幅広くなることも意識して取り組みたい。終了後、現地にてまち歩き WS を実施。

［運用メモ］

・web 会議システム：zoom_翻訳機能
・必要機材：PC、web カメラ、マイク、プロジェクターに加えて
・通訳_今回はアラビア語⇄日本語　２名（1.5 時間程度で交代のため）
・役割分担　司会、オペレーター、通訳、提案者　※司会とオペレーターは専任が望ましい。
・時差に配慮して進行表、タイムスケジュールを構成することが望ましい。
・まち歩きワークショップは web での配信はせずに現地にて独立して実施。

資料集

□目次と解説

□エジプト国立都市景観調和機構作成　建築基準　2011 年　157

「■２．検討（評価、建築基準、現状調査）②コンサベーション建築基準（NOUH 手引書）p.19 で紹介した文書で、アラビア語から日本語に翻訳した全文を掲載する。

□エジプト国立都市景観調和機構作成　スーク・シラーハの開発計画　2019 年　162

本事業は、エジプト国立都市景観調和機構（NOUH）との協力のもとに行われ、対象区域選定の前提となった 2019 年作成のスーク・シラーハの開発計画のパワーポイント資料の日本語翻訳を掲載する。

□サラー・ザキー氏、更新案図面　181

本事業でサラー・ザキー氏に依頼したスーク・シラーハでの更新案の建築図面を掲載する。

□本プロジェクトマムルーク朝関連人物像と歴史的建造物　184

本事業でスーク・シラーハ紹介地図資料の原稿（和文、英文、アラビア語）を甲南大学中町信孝教授に依頼した。その原稿と当該人物と関係のある建築写真（撮影深見）を掲載した。現在、英語、アラビア語版のスーク・シラーハ訪問者への配布地図を作成中である。

□本プロジェクト Survey Report　2022 年　197

「■２．検討（評価、建築基準、現状調査）③カイロ歴史的市街地の現況調査と評価：ダブルアフマルに注目して pp20-24」で紹介した現況調査の出版物（英語）の日本語版を掲載した。

****

□エジプト国立都市景観調和機構作成　建築基準　2011 年
2008 年法律第 119 号とその執行規則に従い「国家都市整備局」によって承認された
歴史的なカイロ地域の境界と条件　2011

１．歴史的カイロの境界

歴史的カイロには、2009 年 7 月 29 日に首相が議長を務める決議第 04/07/09/8 号により、NOUH によって承認された制限に従い、国家都市整備局によって定義された地域が含まれる。

1-1 境界の記述

境界は添付のマップに示され、次のとおり。（地域詳細は割愛）

1-2 保存範囲

これらの制限には、次の 3 つの保存領域が含まれる。ゾーン A（Khedive Cairo との重複区域を含む）、ゾーン B、ゾーン C を添付の地図に示す。

1-3 記載される要件は、上記区域に指定されるすべての道路の両側に適用。ゾーン A の要件は、指定されたすべての道路両側に適用。

２．一般的要件

2-1 2008 年法律第 119 号の都市調整のパート 2 およびその執行規則による-明確な価値のある地域に関連する法律、第 2 章第 33 条：

・保存価値の高い地域は、政府機関の提案に基づき、当該地域を保護するために設定された条件に従って決定され、国家都市整備局によって決定が下される。建設、変更は許可されない。建設、改造、上部増築、修復、またはいかなる建造物やプロジェクトで固定または移動、または一時的または永続的な占有はできない。管轄の行政当局から許可取得後を除き、法律の前段で言及した地域の公共都市空間で建築要素、彫像、彫刻、装飾を移動または移設することはできない。国家都市整備局の決定によりいくつかの分野で承認を得る必要がある。

・建物ファサード、通りや広場を横切り視覚を干渉する道橋や高架道路などの建設、あるいは公共およびオープンスペース、またはエリア内の道路や広場に建物を建てることは禁止。

・工房、倉庫、店舗など、明確な価値のある不動産を汚染および有害とする使用は、本来その目的で設計された場所を除いて、認可されない場合がある。

2-2 アンテナ、衛生受信皿、および技術設備は、その高さがパラペット高よりも低く、屋根の床に固定され、通りからみた場合に屋根に現れてはならない。大きなアンテナが必要な場合は、屋根の端よりも内側に設置し、通りから見えないようにする必要がある。

2-3 国家都市整備局によって承認された、遺産地域文化的調整の基礎基準ガイドに含まれる都市調整の基礎と基準は遵守されなければならない。

３．都市組成

3-1 当該地域の都市構造は保存されなければならない。

3-2 土地を区分またはその一部を分割すること、単一の土地区画に複数建物を建設することは許可されない。

3-3 路地（ハーラ）や 6m 未満の狭い路地（ズカック）でも、建物を境界線に建てる必要がある。内部と関係なく、建設は土地区画の境界で行われねばならない。

3-4 建物面積は、敷地面積の 70%を超えない。

3-5 建物は、側面空地や小規模空地を残さず連続的建てられ、古い都市組成のように一体的で堅固、連続的なビルディングブロックを形成する必要がある。空地は、前庭（庭）、天窓、または中庭の形で、植栽が重要である。1937 年の地籍図は、適用建物境界として参照される。

４．建物の解体と再建

4-1 2006 年法律 144 およびその執行規則に従い、不動産リスト登録における不動産状況検討前の解体作業は許可されない。解体された建物を再建する場合、3-3、3-4 の建物面積を遵守。

4-2 管轄の地域事務所は、2006 年法律 144 により崩壊の可能性のある建物ファサードを撮影する必要がある。取り壊す前に完全な写真撮影が必要。

５．建築上の特徴

5-1 新しい建物は周辺地域の建築的特徴との調和を考慮に入れる。

5-2 地域に異質な建築を使用しない。

5-3 開口部

5-3-1 開口部形状は、垂直方向が長い長方形で、水平 1 対垂直 1.5 以上、水平 1 対垂直 2 以下の比率で、水平開口は許可されない。

5-3-2 開口部割合は、ファサード面積の 50%を超えない。

5-3-3 開口部の色と使用材料

・開口部には茶系トーンを使用

・ドアや窓の素材は木製の必要があり、ファサードに見える金属や研磨素材を使用は不許可

・透明ガラスまたはスモークブラウンガラスの使用は可、他の色ガラスまたは反射ガラスの使用は不許可。ファサード全体に吊りカーテンを作ることは不許可

・ファサード開口部割合が 20%を超える場合、ガラス部分を雨戸またはマシュラビヤで覆う

・パラペットは木、鉄細工、または穴の空いている素材であること。

5-4 技術的設置

・大通りに面するファサードには、空調ユニットやダクトを設置しない

・下水、水道、ガスのパイプは、建築設計に適合した建築処理によって覆う、あるいは建物最上階の屋根に配置

６．新たな建築

6-1 建物高さ

6-1-1 ゾーン A～B の建物高さ

①10 メートル未満の道路、ハーラおよびズカック：1 階+ 2 階、最大 10m 建物を許可

②幅 10 メートル以上の道路：1 階+ 3 階、最大 13m 建物を許可

・建物が複数の道路に接する場合、幅の狭い道路の高さを遵守

・高さとは、歩道から最上階屋根スラブ表面までを言う

・パラペット高は 1.3 メートルを超えてはならない

・階段室、給水タンク、エレベータ機械室のみを除き、高さの上限を超えることは不可。上記の場合最大 4m 追加され、調和的ファサードからは 3m 以上

6-1-2 ゾーン C の建物高さ

ゾーン C ではゾーン A～B の許可高より、1 フロア（3m）高を増加可能

6-2 表面仕上げ

6-2-1 ファサードの色は、ベージュまたは天然石の色とする

6-2-2 天然石は 1 階の被覆材および建設材に用いられ、ただし一段の高さが 30cm 以上必要。

6-2-3 白は、6-2-1 に記載される色で反復使用可能だが、下地の白を残すことは禁止

6-3 突出

6-3-1 建物

・ファサードの突出は、ファサード面積の 50%を超えない面積で許可

・幅が 4m 以下の道路ではファサードに突出不可

・突起底面高さは歩道高から 4 メートル以上

・突出は道路幅の 5%以下、幅 12m 以下の道路では最大 60 cm、幅 12m を超える道路では最大 1m の突出が可能

・１階の建物ラインから店先や看板を突出させることは不可

6-3-2 バルコニー

・バルコニーは幅 12m 以上の道路でのみ可

・2008 年法律 119 により、バルコニー突出は通り幅の 10%以下、最大 120cm

6-3-3 コーニス

・歩道から 2.5m 以上の高さであれば、1 階に目立つコーニスを作ることが可能

・コーニスは、幅 12m 未満の道路ではファサードからの突出 13 cm 以下、幅 12m を超える道路では 25cm 以下

７．2006 年法律第 144 号に従って登録された既存建物

7-1 登録資産は、遺産の建物および地域の都市調和のための基本および基準のガイドに含まれる分類レベルの対象である。

・レベル A：建物と施設の内外の要素を変更せずに保存し、復元使用可

・レベル B：ファサード保存の建物や施設、通りに面さないファサード一部の変更許可。建物の構造的完全性に違反しない限り、建物の修復と使用、および効率の向上のために必要な内部変更を許可

・レベル C：ファサードのみ保存、建物状況に応じ、次の 3 つのいずれかが許可

①実施開始前に NOUH による設計承認後、元のファサード高以下で、ファサード背後部分に包括的変更を加え、完全な解体と再構築可能。ただしファサードの構造的完全性遵守

②地域の建築要件に応じ、建物の空地へ水平方向に拡張可能。ただし通りに面する元のファサード方向には不許可

③拡張が 1 階を超えない限り、元の建物を垂直方向に拡張が許可。この階高は元の建物の高さ以下で、追加された階高と同じ距離で通りに面する建物のすべてのファサードに水平に後退することは可能で、建物の構造的完全性を侵害しないことを条件とし、その地区の建築条件と矛盾しない方法で許される。

7-2 登録建物の正面に、建物名、設立日、設計建築家名、登録の理由と番号を記した看板を貼付。

7-3 技術的設置

・大通りに面するファサードには、空調ユニットやダクトを設置しない

・下水、水道、ガスのパイプは、建築設計と互換性のある建築処理によって隠されるか、最上階の屋根に配置

８．既存未登録の建物

8-1 ファサードの改修および変更：建物のファサードの改修または変更の場合、条項 5-1 を除き、前の条項 5 に記載された要件が適用される

8-2 垂直方向の増築：高さが最大許容限度未満である既存未登録建物は、限度まで増築可

8-3 技術的設置：空調ユニットとダクトは、通りに面するファサードに配置不可。下水道、水道、ガス管は、必要に応じ、建築設計に適合した建築処理で覆い隠す、あるいは最上階の屋根に配置

９．修復、改修、再建

9-1 門や覆われた通り（スキファ）など歴史的な建築要素は、元の場所に再構築

9-2 通り名：管轄当局は、元の通り名を保持するために、通りの名を確認

１０．用途と活用

環境を汚染、あるいはその地域の都市や遺産の特性に有害な使用は不許可

１１．店舗ファサード

11-1 店舗用の元の開口部は、本来のファサードデザインを遵守することが必要。材料、色、仕上げの点で建物の元の外壁を維持する必要があり、建物の上部側面を覆わないこと。

11-2 建物ファサードの本来の部分が事業前または事業中に損傷した場合、元の形式とその建築要素をシミュレートし、元の状態に復元する必要

11-3 店舗名表示は、店頭の開口部スペース内の指定された場所に配置

１２．植栽

12-1 幅 12m 以上の小広場、広場、および通りで、両側の植樹許可。 灌漑用水や植物の根が建物に及ぼす影響から遺産建物を保護するための適切な手段の使用を考慮に入れ、これらの木が遺産建物を覆い隠さないよう留意

12-2 芝生や土壌は、広場やオープンスペース（空地）では使用しない

１３．歩道と道路

13-1 幅 6m 未満の道路や路地（ハーラ）には歩道は必要ない

13-2 歩道は、幅が 6m から 20m 未満の道路に設置され、歩道幅は、各側の道路幅の 10%、最小 60cm でなければならない

13-3 幅が 20m 以上の道路の歩道幅は、両側の道路幅の 20%でなければならない

13-4 歩道高は 15cm を超えてはならず、障害者用の傾斜路は、50m を超えない間隔毎に幅 1m、傾斜 1：5 の角度で作られなければならない

13-5 歩道の仕上げ種類、仕様、測定の観点から、処理を統一する必要がある。 歩道用特製の滑りを防ぎ雨水を排出できる材料（スチールクリートの敷石など）を推進し、滑らかで磨かれた表面の材料での仕上げは許可されない。現場流しのコンクリート縁石を作ることも不許可（石または玄武岩で作られた縁石を使用すること）

13-6 建物および店舗の所有者または居住者は、管轄の行政当局からの許可なしに、建物の前に歩道を設置または仕上げることを禁じる

１４．照明

柱を用いた照明は、幅 12m 以上の道路に 30m ごとに配置する必要がある。 幅の狭い通りは、高さ 4m 以上の建物壁にケーブルを固定した形で照明する

１５．歴史的カイロとヘディーブカイロの重複エリア

15-1Khedivial Cairo 地域を保護の要件は、Ataba Square から Al-Qalaa Square までの Muhammad Ali Street、New Helmiya 地域、および Ataba Square から Bab Al-Shaariya Square までの Army Street 両側に適用

15-2 歴史的カイロ地区を保存するための要件は、添付の地図に従って、特に明記されていない限り、指定された通りの両側に適用

15-3 Muhammad ‘Ali 通りと Kalwat Bek 通りのアーケード

15-3-1 歩道を覆い、歩行者の通行隔離を目的とした既存の大通りを維持する必要

15-3-2 通りにある空地での建設を許可する場合、建築と都市の優れた特徴をサポートするために、設計契約にあるアーチを使用する必要がある（アーチの高さを条件とする。アーチの高さは 4m 以上 4.5m 以下、奥行は 2.5m 以上）歩行者移動のためにアーケードで覆われたフラットの割り当て

15-3-3 アーケードを備えた建物を解体する場合、元の状態に従ってアーケードを再建する必要がある

１６．手続き上の要件

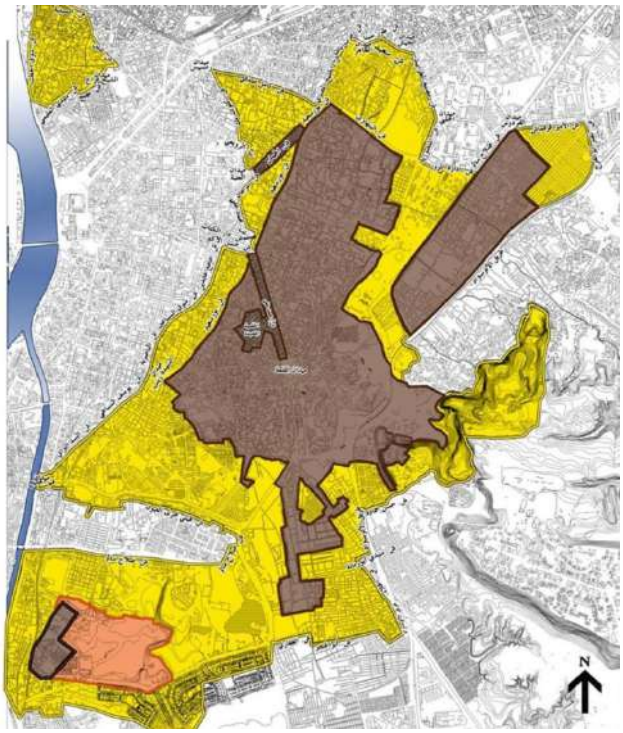
ゾーン A に所在する建物については、2008 年建築法第 119 号に規定する企画・組織管理当局は免許を交付する前に NOUH の承認を得る義務がある

□エジプト国立都市景観調和機構作成　スーク・シラーハの開発計画　2019 年

歴史的カイロの開発

国立都市景観調和機構

スーク・シラーハ・プロジェクト　2019 年



- Heritage　Cairo のより大きな文脈の中で Khedive　Cairo の開発 と統合する重要プロジェクト
- 歴史的なカイロは、その特有な都市化のために 1979 年に世界遺産に登録された。さまざまな時代を目撃した多くの不滅のモニュメントが含まれる。
- その住民と一緒に存在するリビングヘリテージとしての都市である。
- 歴史的なカイロを卓越した価値で保存するための境界と基盤は、2009 年に最高計画都市開発評議会によって承認された。
- このエリアは 4,955 エーカーを占め、独特の建築様式の多くの登録された建物がある。 多くの建物に加えて、遺跡が登録される。

目次

1. 地域の紹介
2. プロジェクトの哲学と目的
3. 問題点
4. 都市論
5. 視覚的研究
6. 交通研究
7. 開発提案
8. 開発提案の実施メカニズム

<u>1. 地域の紹介</u>　プロジェクトとその特徴的な兆候を紹介し、開発エリアを定義する

略史

- 700 年以上前にさかのぼる武器市場どおりは、カイロの南にある Darb al-Ahmar 地区にある。当初は Suwayqat al-I’zzi（イッズィーの小市場）と呼ばれていた。
- 多くの武器工房や工場が存在することから「武器市場」と呼ばれたが、こうした武器の需要が減少したため、路上での工房は修理工房になった。
- 50 年代には、この職業も少しずつ姿を消し、ワークショップの活動は、武器市場とは関係のない他の分野や活動に変わった。

スーク・シラーハ通りの顕著な歴史的ファサード

R.247 マンジャク・シラーフダール（太刀持ちのマンジャク）の邸宅（1346 年）

R.131 イルゲイ・ユーズフィーの大モスク（Sabil Kuttab 付・1373 年）

R.510 シェイフ・マスウードの廟（クッバ・1534 年）

R.545 ムスタファ・シナーン邸宅（17 世紀）

R.246 サビール・ムスタファ・シナーン（ウィカーラ付・1630 年）

R.337 サビール・クッターブ・ルカイヤ・ドゥドゥ（1761 年）

R.244 ハンマーム・バシュターク（公衆浴場・1341 年）

- R. 247 マンジャク・シラーフダール（太刀持ちのマンジャク）の邸宅（1346 年）
- R. 131 イルゲイ・ユーズフィーの大モスク（1373 年、サビール・クッターブ付）
- R. 510 シェイフ・マスウードの廟（クッバ、1534 年）
- R. 545 ムスタファ・シナーン邸宅（17 世紀）
- R. 246 サビール・ムスタタファ・スィナーン（ウィカーラ付、1630 年）
- R. 337 サビール・クッターブ・ルカイヤ・ドゥドゥ（1761 年）
- R. 244 ハンマーム・バシュターク（公衆浴場、1341 年）

開発地域の境界

調査地域は 2 つに分けられる

- 第一地区（開発エリア）：スーク・シラーハ通りの始点から始まり、それは（サラディン城塞広場とリファーイー大モスクとスルタン・ハサン広場）で観光名所の中心と統合し、復活させ、ハンマーム・バシュタークで終わる。
- 第二地区：ハンマーム・バシュタークからアーリフ・パシャ・モスクまで

2. プロジェクトの哲学と目的　プロジェクトの哲学、ビジョン、主な目的

プロジェクトの目的

- スーク・シラーハの歴史的な建築と都市のバランスを維持
- 建築と都市の遺産が保持する文化的価値観の帰属精神を用いて国民の意識を高める。通りはカイロの歴史的記憶の重要な部分で、都市構造の不可欠な要素である

・ 通りの建築と都市の遺産の効果的な管理と、効果的に保存するプロセスに取り組む。安全基準と市民防災要件を確保することに加えて、コミュニティの参加と所有者および居住者との協力の概念を含む統合管理アプローチを適用する。
・ 歴史的建物を再活用して経済的利益を得、活用によって国民経済に付加価値を与えることに取り組む。
・ スーク・シラーハを持続可能なエリアに変え、そこのスペースを市民への魅力として活用

3. 問題点　現状における問題と課題

現状の問題

都市環境の悪化により、建物や空間に不調和や後補建築が発生し、その不調和が著名で歴史的な建築価値のある多くの建物に影響を及ぼした。現状で最も重要な問題は次のとおり。

1. 建物ファサードの塗装や仕上げの多様性により、通りの視覚的イメージに不調和が生じる。
2. 歴史的建物と不調和な現代的な追加の存在。 サビール・クッターブ・ルカイヤ・ドゥドゥ
3. 修復と維持を必要とする歴史的建物。ウィカーラ・ムスタファ・シナーン
4. 歴史的建物に追加された店舗の存在
5. 老朽化した建物の廃墟による不調和
6. 建物への店舗やキオスクの付加により通りの視覚イメージと建築的特徴に不調和が生じる。
7. 通り沿いの歴史的建造物の性質に適さない交通機関の広がり
8. 歴史遺産の特徴に見合った文明的方法で、通りの清潔さを保ち、廃棄物除去のシステムを考案

1. ファサードの塗装や仕上げの多様性により通りの視覚的イメージに不調和が生じる

ウィカーラ・ムスタファ・スィナーン　サビール・クッターブ・ルカイヤ・ドゥドゥ

3. 修復と維持を要する歴史的建物　2. 歴史的建物と不調和な現代的追加の存在

4. 歴史的建物に追加された店舗の存在

5. 老朽化した建物の廃墟による不調和

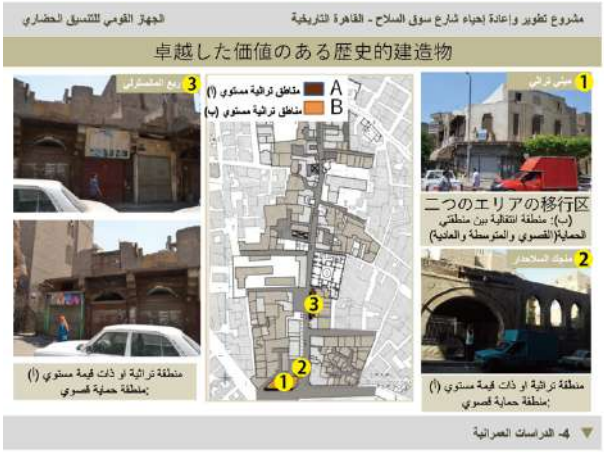
6. 建物への店舗やキオスクの付加。これにより通りの視覚的イメージと建築的特徴に不調和が生じる

6. 建物への店舗やキオスクの付加。これにより通りの視覚的イメージと建築的特徴に不調和が生じる

7. 通り沿いの歴史的建物の性質に適さない交通機関の広がり

8. 歴史遺産の特徴に見合った文明的な方法で、通りの清潔さを保ち、廃棄物除去のシステムを考案

4. 都市論　現状調査



卓越した価値のある歴史的建造物

1. 伝統的建物　遺産または価値レベルは（B）：移行エリア、保護（最大、中、通常）
2. マンジャク・シラフダール　遺産または価値レベルの領域：最大の保護
3. ラブア・モナステルリ　遺産または価値レベルの領域：最大の保護

土地利用

住宅　住宅／店舗　店舗　教育　歴史的建築　宗教　空地

建物の状態

良　中　悪

建物の高さ

１、２階　３から５階　６階以上

<u>5. 視覚的研究</u>　視覚的調和のための研究

視覚的研究（視覚的不調和の兆候）

- スークシラーハの入口を見下ろす建物は、通りの歴史的性質やショップのファサードに合わせてファサードを再検討する必要
- Amir Mengak al-Silhadar 宮殿遺構門は、メンテナンスと修復が必要
- 通りの入り口にある建物は、メンテナンスと改修が必要

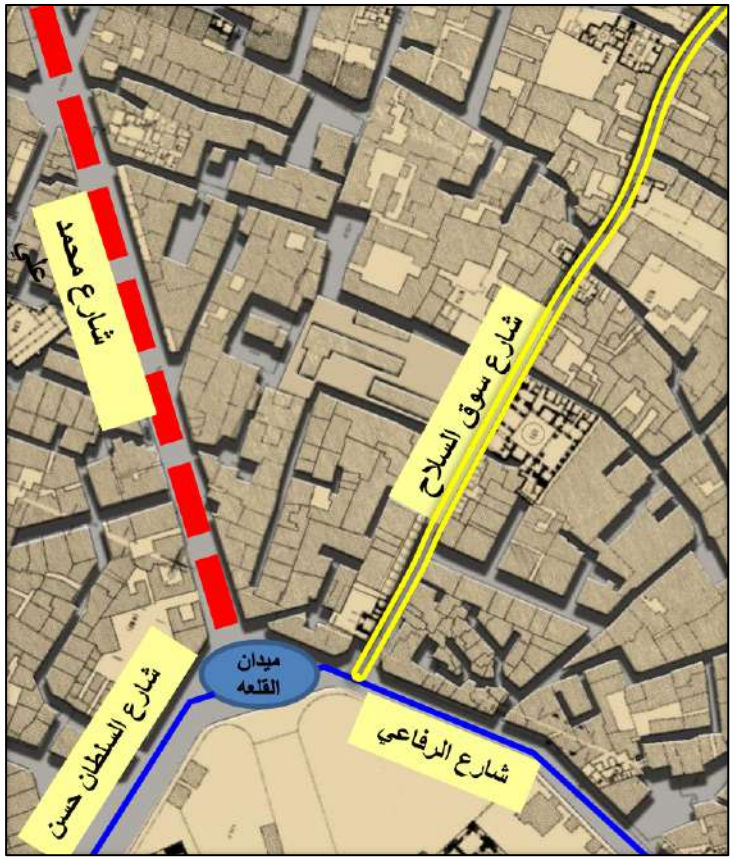
- ショップやキオスクのファサードに一貫性のない色を使用したため、この地域の建築的特徴が失われた
- 通りの一般的な性格に適さない店舗ファサードの色使用
- 一般的な通りに適さない色を使用
- 建物の大部分が壊されたことによる不調和
- 不調和な色使用
- 店舗の重なりによる建物の劣化とファサードの建築的特徴の消失
- 一部の解体による効果喪失
- イルゲイ・ユーズフ大モスク隣の建物の店舗上部が壊されたことによる不調和の出現

- 修復とメンテを必要とする歴史的建造物
- 通りにふさわしくない色の使用
- 店舗、色、看板やファサードに関する統一された調和の欠如
- スークエルセラ通りの開発と活性化-歴史的なカイロ
- 店舗と建物の重複と看板の統一されたレイアウトの欠如、通りの性質に合うファサード
- 店舗と建物 6 の重なりとファサードの色の違いがあり、通りの性質に合うファサードが要求される。すなわち突き出た部分をセットバックし、建物の重複を避け、看板の統一されたレイアウトが必要とされる。
- ファサードの色の違いと特定の都市パターンのない店の重なり
- サビール・クッターブ・ルカイヤ・ドゥドゥ　遺産の周りのセメントの壁は、ファサードの魅力を消失する。

・　衛生システムをアクティブにする必要性
・　ハンマーム・バシュターク　遺産のメンテナンスと修復が必要
・　ファサードの色の違いと通りの性質に調和したレイアウトの欠如

6. 交通研究　歩行者の動きと車両の自動移動の研究

・　通りの幅は 5～9 メートルで、駐車スペースが不足していることに加えて、車の交通量に見合ったものではない。これにより、交通が混乱し、通り内部の歩行者の動きに悪影響を及ぼす。
・　路上での歩行者の通行密度は高く、代替の通行軸の存在を調査する必要がある。
・　通りには、登録建物と歴史的建物のグループが含まれる。これらの建物は、繰り返しの振動と車からの排気によって悪影響を受け、歴史的建造物の完全性を害する。
・　歩行者道路とすることは、歩行者、観光客、および地域のモニュメントの間を歩き回ることを望む人々により大きな自由を提供する。
・　モハメド・アリ通りは、道路の開発と車移動に代わる歩行者道路計画の中で、サービスのために夜間の特定の時間に車がそこに入ることができるようにすることが提案される。緊急の場合を除いて、交通と調整して合意した。



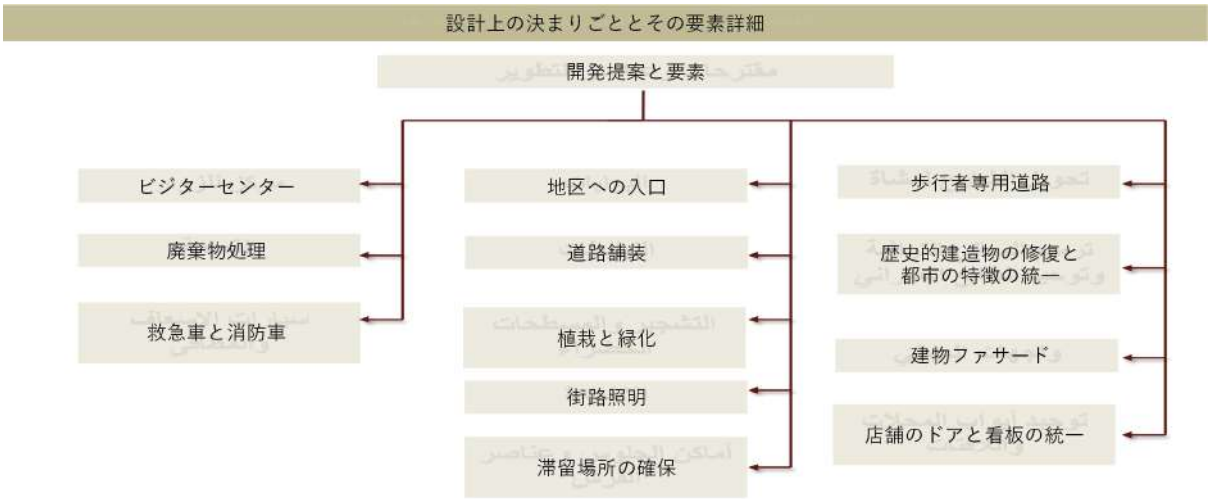
7. 開発提案　設計上の決まり事と推奨される修景方法

解決戦略／設計指針

①玄武岩などの舗装に天然素材を使用、歴史的エリアの自然と調和する通りとして歩行者専用道路に変換
②老朽化した遺産や考古学的建造物の修復と維持、および修復における元の材料の使用
③周辺のコンクリート建築物の中で個性を出すための入り口となる門
④木製のドアを使用して店先を統一し、看板の形を統一してファサードの上に配置
⑤通りの性格に適した装飾的柱の使用
⑥広告および看板等の案内により、価値ある建物入口および路地入口の標識の使用

⑦観光客や訪問者が通りと建物の歴史を知り、より効率的に情報を提供するためにビジターセンターを設立する。

設計上の決まりごととその要素詳細

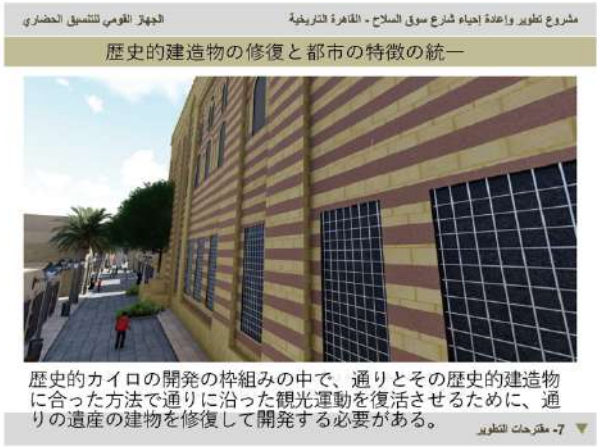


開発提案と要素

①歩行者専用道路／歴史的建造物の修復と都市の特徴の統一／建物ファサード／店のドアと看板の統一

②地区への入口／道路舗装／植栽と緑化／街路照明／滞留場所の確保

③ビジターセンター／廃棄物処理／救急車と消防車



歩行者専用道路

- スーク・シラーハを歩行者専用道路にする。救急車や消防士などの緊急入口を提供する可能性、通りの店にサービスを提供するための代替軸の存在を考慮
- 歩行者、観光客、および地域のモニュメント間を歩き回ることを希望する人々により大きな自由を提供するために、歩行者専用道路とする

歴史的建造物の修復と都市の特徴の統一

- 歴史的カイロの開発の枠組みの中で、通りとその歴史的建造物に合った方法で通りに沿った観光運動を復活させるために、通りの遺産の建物を修復して開発する必要がある。

店のドア、看板、広告の統一

- ドアに使用される材料は、木材、鉄、またはその両方である必要があり、そのほかの素材を使用することは禁止。広告や看板は、元の建築設計で指定された場所に設置する。
- 通りや車線の名前を表記した標識のサイズ、形、場所の面で統一されたデザイン、およびそれらは建物のファサードに従って設置
- 考古学的または遺産の建物のファサードに広告を掲載し、視覚的不調和起こしたり、建物ファサードを覆い隠したり、遺産地域の価値に悪影響を与えることは禁止

標識の使用と交通標識

植栽と緑化

①ヤシの木の使用、記念建造物の細部への視野を遮らないように適切な場所に配置、および外観改善のため顕花植物の使用を考慮

②棗椰子を使い路地や小道の入口を表示

滞留場所の確保

ストリートファニチャーのすべての要素と、庭空間の周囲のゴミ箱、オープンスペースのベンチは、遺産エリアのプライバシーと都市の特徴に準拠する必要がある。

舗装

歴史的地域では、歩道と舗装の種類を統一して使用することを考慮し、以前と同じ高さを使用することが望ましい。

街灯

目を傷つけないように、光を抑えた間接照明を使用する必要があります。照明は、昔道路沿いにあった古い街灯と、あるいは壁に設置された街灯と同様なものを使用

ゴミとその処理

地域の人々と協力して街路の清潔さを保ち、定期的に収集しやすいゴミ箱の場所を提供し、ゴミや廃棄物を取り除く会社を利用

通りへの門

シラーフダール・マンジャクの横に、通りの入り口に門を建て、通りの歴史的価値を感じさせる。ビジターセンターを設置し、頻繁に訪れる観光客に通りの歴史を知らせ、情報を提供する機会を増やす。既存の歴史的建造物をセンター本部としても活用する試みである。

建物ファサード

薄いベージュと天然石の色の住宅のファサードには明るい色が使用される。1 階被覆材や建物には石を使用。地域の住民とのコミュニティの対話を通じて、白を連続する床に使用可能

推奨状況

マンジャク・シラーフダール（修復前）

マンジャク・シラーフダール（修復後）

イルゲイ・ユーズフィー大モスク

ラブア（伝統的集合住宅）・モナステルリ（修復前）

ラブア（伝統的集合住宅）・モナステルリ（修復後）

店舗集合建築

サビール・クッターブ・ルカイヤ・ドゥドゥ

ムスタファ・スィナーン邸

空地（修復前）

空地（修復後）

مشروع تطوير وإعادة إحياء شارع سوق السلاح - القاهرة التاريخية الجهاز القومي للتنسيق الحضاري

店舗集合住宅（修復前）

7- مقترحات التطوير

مشروع تطوير وإعادة إحياء شارع سوق السلاح - القاهرة التاريخية الجهاز القومي للتنسيق الحضاري

店舗集合住宅（修復後）

7- مقترحات التطوير

مشروع تطوير وإعادة إحياء شارع سوق السلاح - القاهرة التاريخية الجهاز القومي للتنسيق الحضاري

サビール・クッターブ・ルカイヤ・ドゥドゥ

7- مقترحات التطوير

مشروع تطوير وإعادة إحياء شارع سوق السلاح - القاهرة التاريخية الجهاز القومي للتنسيق الحضاري

ムスタファ・スィナーン邸

7- مقترحات التطوير

مشروع تطوير وإعادة إحياء شارع سوق السلاح - القاهرة التاريخية الجهاز القومي للتنسيق الحضاري

空地（修復前）

7- مقترحات التطوير

مشروع تطوير وإعادة إحياء شارع سوق السلاح - القاهرة التاريخية الجهاز القومي للتنسيق الحضاري

空地（修復後）

7- مقترحات التطوير

مشروع تطوير وإعادة إحياء شارع سوق السلاح - القاهرة التاريخية الجهاز القومي للتنسيق الحضاري

空地（修復後）

7- مقترحات التطوير

مشروع تطوير وإعادة إحياء شارع سوق السلاح - القاهرة التاريخية الجهاز القومي للتنسيق الحضاري

空地（修復後）

7- مقترحات التطوير

مشروع تطوير وإعادة إحياء شارع سوق السلاح - القاهرة التاريخية الجهاز القومي للتنسيق الحضاري

住宅建築

7- مقترحات التطوير

مشروع تطوير وإعادة إحياء شارع سوق السلاح - القاهرة التاريخية الجهاز القومي للتنسيق الحضاري

住宅建築

7- مقترحات التطوير

مشروع تطوير وإعادة إحياء شارع سوق السلاح - القاهرة التاريخية الجهاز القومي للتنسيق الحضاري

住宅建築

7- مقترحات التطوير

مشروع تطوير وإعادة إحياء شارع سوق السلاح - القاهرة التاريخية الجهاز القومي للتنسيق الحضاري

住宅建築

7- مقترحات التطوير

مشروع تطوير وإعادة إحياء شارع سوق السلاح - القاهرة التاريخية الجهاز القومي للتنسيق الحضاري

住宅建築

7- مقترحات التطوير

مشروع تطوير وإعادة إحياء شارع سوق السلاح - القاهرة التاريخية الجهاز القومي للتنسيق الحضاري

住宅建築

7- مقترحات التطوير

مشروع تطوير وإعادة إحياء شارع سوق السلاح - القاهرة التاريخية الجهاز القومي للتنسيق الحضاري

住宅建築

7- مقترحات التطوير

8. 開発提案の実施メカニズム　提案されたプロジェクトとその推定費用

歴史的カイロ保存にふさわしいスーク・シラーハ（武器市場通り）開発プロジェクトの設計

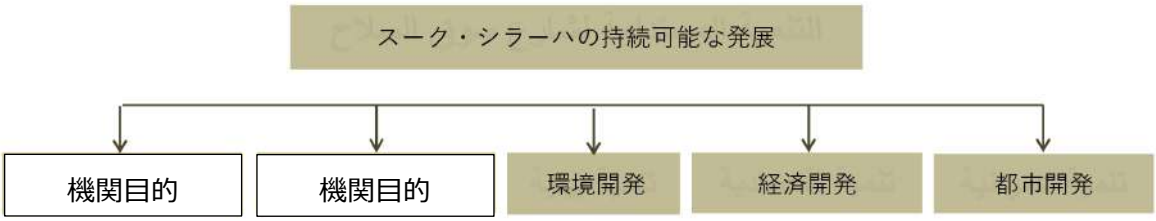
歴史的カイロの南カスバ（リファイー・モスクとスーク・シラーハ、バーブ・ズウェイラ、ハイヤメイヤ地域を含む）を復活させ、発展させる計画が始まり、歴史的カイロの統合開発段階のプロジェクトの１つである。

スーク・シラーハ通り開発プロジェクトは、歴史的カイロの保存と開発を達成する一環としての詳細な試みである。持続可能な開発は、特に観光開発、技能開発、職人技の分野で都市と経済の発展に重要な役割を果たす。それゆえに、プロジェクトは地域の人々の経済的および社会的利益を達成する必要がある。

スーク・シラーハ通り開発プロジェクトは、ムイッズ通りで行われた取り組みの継続と位置付けられる。そのプロジェクトは、ファーティマ朝期カイロの北部の歴史的エリアを観光名所としてのアップグレードするための計画であった。

このプロジェクトのための予備研究には、考古学的および遺産、建物の状態、それらの高さ、およびそれらの用途など、都市、経済、社会、視覚の側面の研究が含まれている。

視覚的イメージを改善・維持するために都市の要素を処理し、美的タッチを追加することによって遺産建築のメリットを保全し、視覚的調和をもたらし、その美的特徴と文明化された形態を回復し、持続可能な観光開発を達成し、全体と均質な建物、そして通りの建築的および歴史的特徴を確認する。



都市開発（マンジャク・シラフダール）

Mangak Al-Siladar Gate（アミール宮殿の遺跡）と、通り（Mangak Al Silahdar）の歴史的建物利用を通して、ビジターセンターの本部に改造し、スーク・シラーハ通り最初の記念碑とする。

カイロ県と考古省との協力議定書は、考古省所有のマンジャク・シラーフダールを復元し、情報を準備するためのセンターとして再利用するための開発案を提示することを目的とする。

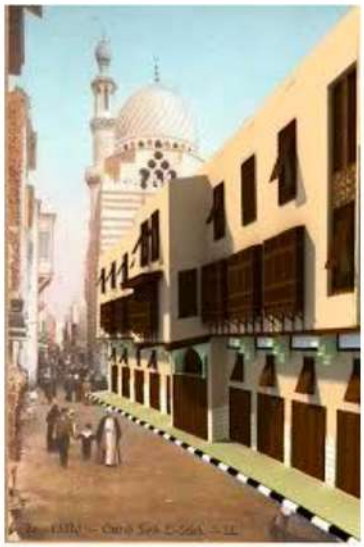
頻繁に訪れる観光客が街の歴史を知り、情報を提供する機会を増やす情報センターの設置

センターには以下の要素が含まれる。観光案内　さまざまな言語による当地域の歴史情報。

都市開発フンドゥク（ホテル）ラブア・モナステルリ

ラブア:収入が限られている人々や商人とその家族のための集合住宅。ウィカーラの上階にあり、別の入口がある。

モナステルリ・ラブアの改修、改修後にはウィカーラの上階として学生の寮、旅行者のホテルとする。カイロの遺産地域を修復開発し、それらを観光名所に変えるという枠組みの効率を高めるために、カイロ県とワクフ省間で協力プロトコルが作成された。モナステルリ・ラブアを開発し、歴史的なカイロの中心部にある観光ホテルとして再利用すること。歴史的カイロにはさまざまなイスラムのモニュメント、モスク、噴水、ウィカーラ、さまざまな時代の住宅が含まれる。



この地区はカイロのスーク・シラーハ通りにあり、最も重要な歴史的建造物の 1 つであり、遺産の側面を維持しながら、以前の状態をシュミレートする方法で建物の内外の効率を高めるというビジョンが策定された。

ラブア･ホテルの設計図と建設図はすでに作成。Al-Manasterly と Cairo Governorate が資金調達に責任を持ち、所有者である Awqaf 省と合意している。

都市開発　ハンマーム・バシュターク

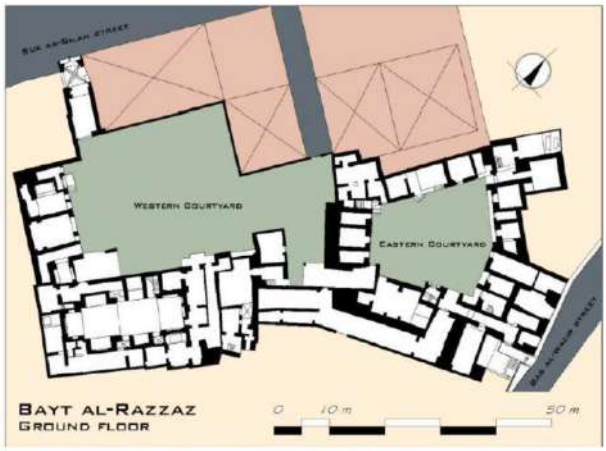
スーク・シラーハ通りにある伝統的なバシュタク公衆浴場は、その歴史的および建築的重要性のために修復され、保存開発される。考古省は、建物の残りの部分が悪いので、遺産として入口のみを登録した。

アミール・バシュターク浴場は私有財産（相続人）と見なされ、観光名所に変える提案。

都市開発　バイト・ラッザーズ

Bayt Al-Razzaz は、歴史的住宅で、マムルークとその後のいくつかの段階の拡張と開発により、190 を超える部屋と、東と西の 2 つの大きな中庭が含まれ、総面積は 3400 平米に及ぶ。

B　ayt Al-Razzaz はイスラムの考古遺跡で、その一部が修復され更なる修復が提案される。修復を完了し、ホテルや観光名所に変換、あるいは祝賀会（パレードなど）が開催される文化広場の設立する。



都市開発（ウィカーラ４）

・マンジャク・シラーフダール宮殿の北にあり、スーク・シラーフに面する主要なウィカーラ

・上層階は崩壊し、下層階は現在も店舗として利用

・カイロの遺産地域を修復・開発し、観光名所や（アーティストのための１階ショップや２階スタジオ）に変えるという枠組みでの再建案

環境開発

・通りの視覚的イメージの不調和を排除

・外観の芸術的特徴を開発、通りの空間的および視覚的シークェンスを示し、強化

社会開発

・住民同士の社会的関係確認するために、通りに都市空間を提供する

・計画と実施へのコミュニティ参加の原則の使用

・行政当局と市民をつなぐための開発への NGO の参加。地域とその保全の重要性に対する一般の認識を広め、これらの協会が保全活動の一部を引き受ける。

機関の役割

・持続可能性の概念達成を確実にする方法で実施される作業の継続的保守の提供を確実にするため、管理上および技術上の側面を提供する。

・歴史地域の持続可能な開発を包括的かつ統合的に達成するための制度的機関の関与、および開発に関係するすべての関係者の参加、および開発プロセスへの社会と人々の関与

・ファーティマ朝カイロにおいて建築許可や特別手続きを許可する役割を果たす都市遺産管理ユニットと同様なユニットを設立する。

経済開発

観光客を引き付けると同時に、地域の収入レベルを上げるために必要な利益を生み出す民間および公共プロジェクトの実施を通じて、まずコミュニティにサービスを提供し、次に観光客を引き付けるための観光能力を決定および開発する。

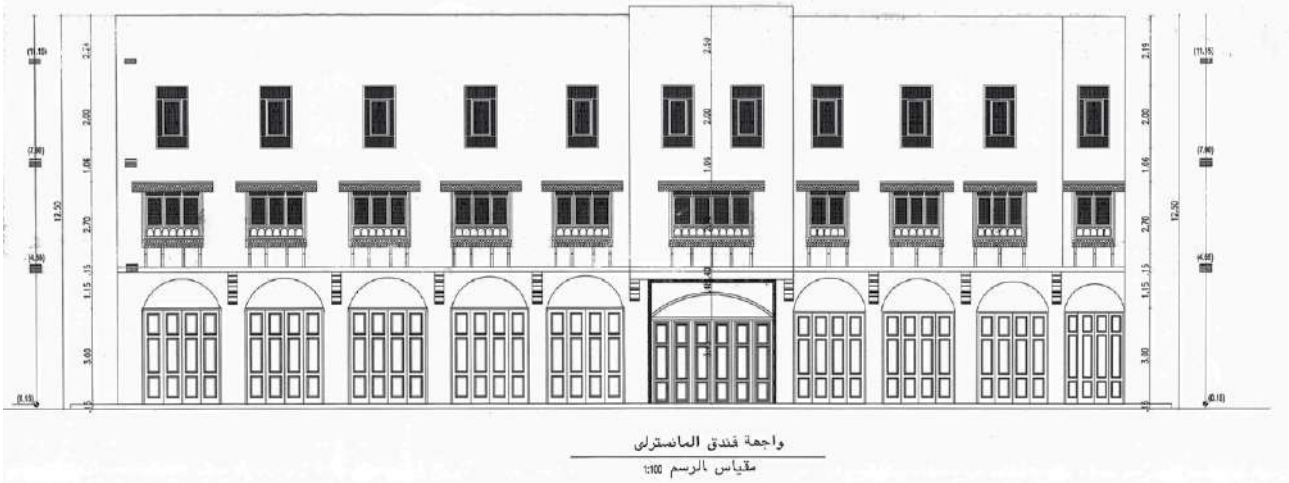
多くの考古学的および遺産建物のあるスーク・シラーハの開発は、観光と販売面で地域を高める強力な観光システムを形成する。

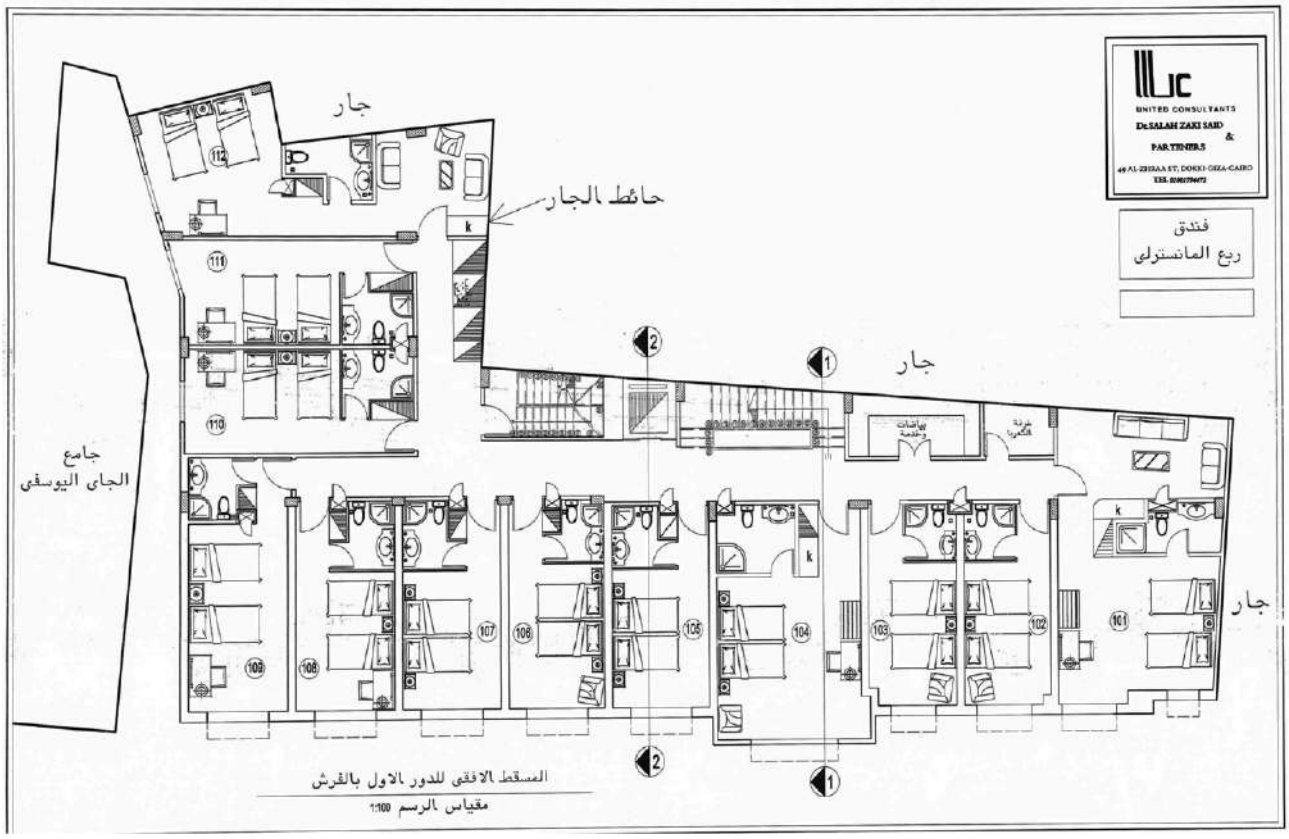
観光目的（オリエンタルレストラン、式典、バザール）に役立つ必要なニーズを提供する。

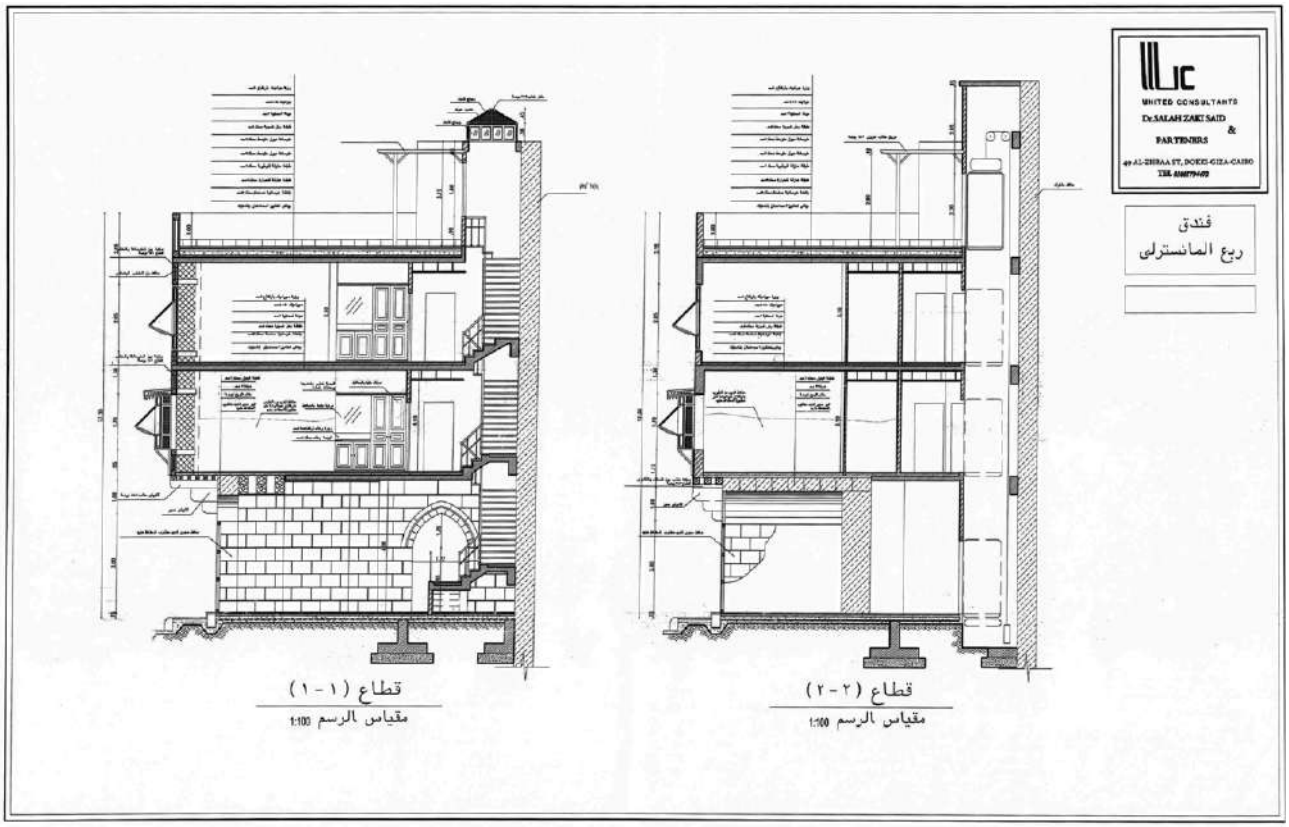
通りのいくつかの住宅の一階で工芸品市場、小さなワークショップ、商業サービスを提供する。さまざまな手工芸品を販売するためのバーザールとして使用できる施設を提供(Khan Al-Khalili、Al-Khayamiya -.....など)

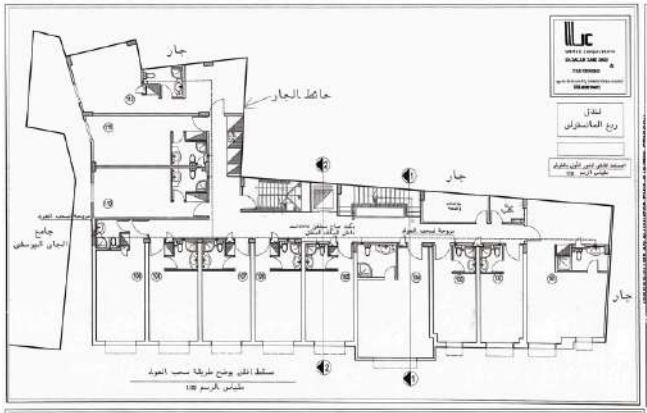
観光客を引き付けるために多くのサービスと簡単な工芸品のワークショップを提供する文化的および工芸品の広場を作成（展示-考古学地域に関する芸術品、ギフトショップ、カード、パンフレット、シリンダーなど）

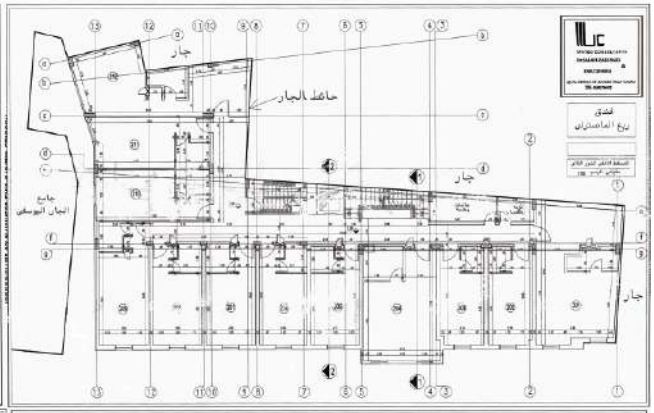
□サラー・ザキー氏、更新案図面

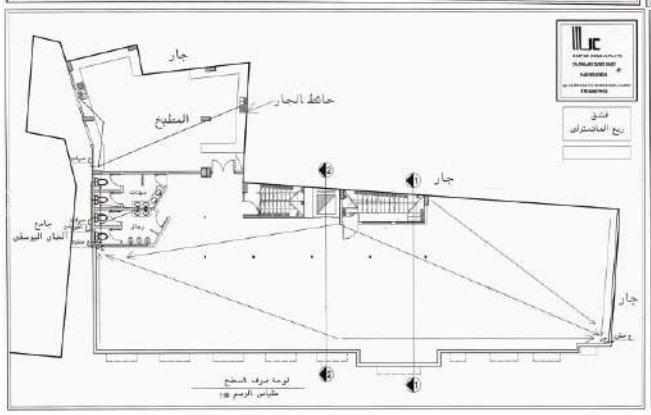


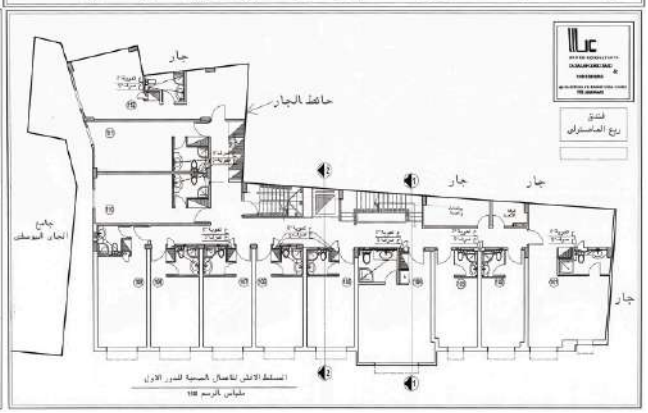


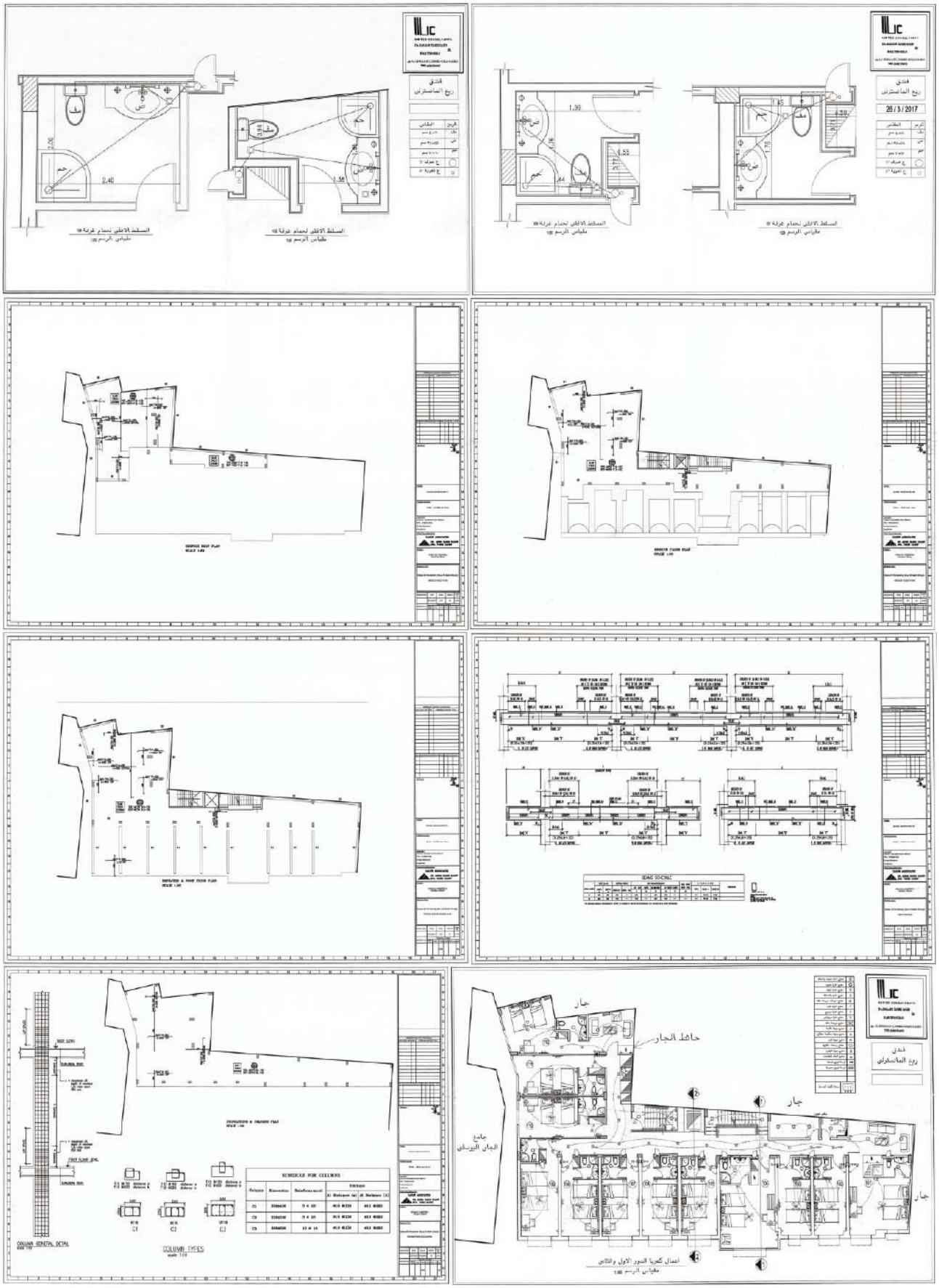

UNITED CONSULTANTS
Dr.SALAH ZAKI SAID
&
PARTNERS
فندق
ربع المانسترلى
قطاع (١-١)
مقياس الرسم 1:100
قطاع (٢-٢)
مقياس الرسم 1:100


جار
حائط الجار
جامع
المجال الموسقى
فندق
ربع المانسترلى


جار
حائط الجار
جامع
المجال الموسقى
فندق
ربع المانسترلى


جار
حائط الجار
المطبخ
جامع
المجال الموسقى
فندق
ربع المانسترلى


جار
حائط الجار
جامع
المجال الموسقى
فندق
ربع المانسترلى


فندق
ربع الماستراتي
26 / 3 / 2017
حاط الجار
جار
جامع
الجامع الوسطى
COLUMN TYPES
SCHEDULE FOR COLUMNS

□本プロジェクトマムルーク朝関連人物像と建築

中町信孝

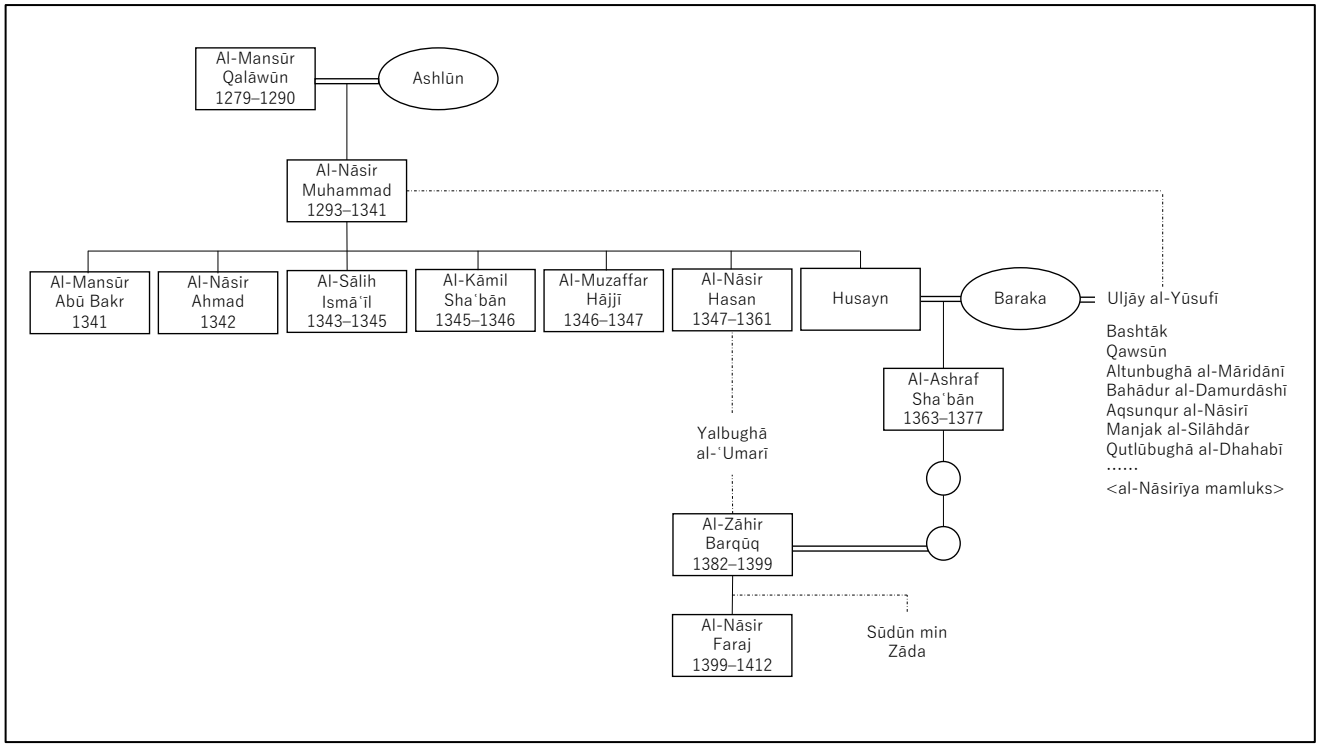
カイロの歴史は、969 年にファーティマ朝（909-1171 年）のカリフ・ムイッズ（在位 953-975 年）がエジプトを征服し、この地を自らの版図の首都と定めたことに始まる。彼が建てた２つの宮殿の間の道路を「バイナ・アルカスライン（アラビア語で「宮殿の間」）」通りといい、現在ではムイッズ通りと呼ばれているが、これがイスラミック・カイロの中心をなしている。

その後サラディン（1191 年没）がファーティマ朝を滅ぼし、アイユーブ朝（1171-1250 年）を建てると、カイロはエジプト、シリア、ヒジャーズ地方を含む広大な領土を支配する国家の首都として繁栄した。アイユーブ朝の君主であるスルターンたちは、カイロ南郊のムカッタム山に「山の城塞」と呼ばれる新たな行政中心を建設したため、カイロの市域は南へと拡大した。

マムルーク朝時代（1250-1517 年）になると歴代のスルターンは、山の城塞を居所としながら、荒廃していたバイナ・アルカスライン通り地区を再開発した。中でもナースィル・ムハンマドの治世（在位 1293-1341 年）には、モスク、マドラサ（学院）、ハーンカー（修道場）、キャラバンサライ（隊商宿）など数多くの建築物が建てられ、カイロにおけるイスラーム建築の黄金時代と目されている。

スーク・シラーハ地区は、バイナ・アルカスライン通りと山の城塞とをつなぐ中間地点に位置し、シラーハ（武具）を売るスーク（市場）として知られていた。マムルーク朝時代にはナースィル・ムハンマドの家族や配下のマムルークによって多くの建物が建てられ、それらの一部は現在でも往事のたたずまいを示している。

歴史を知るために、まずはスルターン・ナースィル・ムハンマドとその家族について、その人物像と建築を取り上げ、続いてスーク・シラーハにゆかりのあるアミールたちをその建築とともに紹介する。



なお、下欄の建築解説は深見奈緒子が担当し、文中括弧内の（上／下・左／中／右）は当該写真の位置を示す。写真は深見撮影。スードゥーン・ミン・ザーダのミフラーブ写真は Herz Max. 2° Mosquée Soudoun Mîr Zadeh (N° 127 du plan.) . *Comité de Conservation des Monuments de l'Art Arabe*. Fascicule 20, exercice 1903, 1903. pp. 89-92. Pl. VI

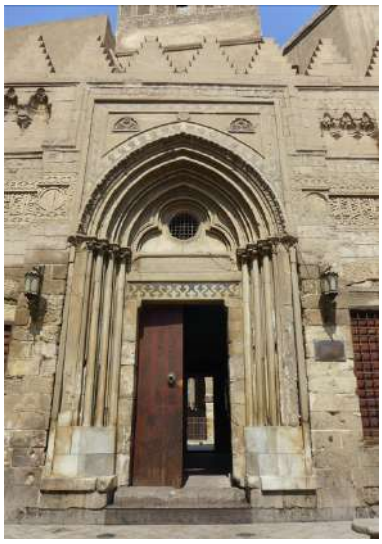
【スルターン・ナースィル・ムハンマド（1341 年没）】

スルターン・カラーウーン（在位 1270-1281 年）を父とし、モンゴル人亡命者の娘アシュルーンを母とする。1293 年、わずか 8 歳でスルターンの位に就くが、父に仕えていたマムルーク・アミールたちの権力争いに翻弄され、退位と復位を繰り返す。しかし 1310 年に 3 度目の即位を果たした後は、政敵を次々に粛清して独裁権力を確立する。

モンゴルのキプチャクハン国から奥方を迎え入れるとともに、長らく敵対していたイルハン国との間に和議を結び、対外関係を安定させた。対内的には税制改革や検地を行って、イクター制度を通したマムルーク軍人による農村支配体制を確立した。しかし 1341 年に彼が亡くなると、後を継いだ王子たちやアミールたちの間で熾烈な権力争いが起こり、マムルーク朝は混乱期を迎える。

多くの建築事業を推進したことで知られ、ムイッズ通りにあるマドラサ（学院）や、城塞内の大モスクが特に有名である。彼だけでなくその親族と配下のアミールたちが数多くの建築事業を行ったため、彼の時代はマムルーク朝建築の黄金時代と見なされる。

城塞内の大モスク、当時最新の流行であったペルシア風の大ドーム、釉薬タイルなどを使う。大ドームは木造だが、それを支える円柱は古代エジプトの赤色花崗岩柱を転用した太い材を用いる。大中庭を囲む形のモスクで、城塞内には宮殿が築かれていたので、政権を握る人々の礼拝の場であった。



ムイッズ通りにあるスルターン・ナースィルの廟とマドラサ。入口には十字軍の遠征の際に、地中海岸のアッコから持ち帰った教会の部材が使われている（写真左）。中庭を囲むマドラサ（学院、写真中上）と廟からなる。マドラサの中庭奥のミフラーブのスタッコ装飾（写真中下）は逸品。廟（写真右）のドームは落ちてしまった。

【スルターン・ナースィル・ハサン（1361 年没)】

1347 年、わずか 11 歳にしてスルターンの位に即位した。ナースィル・ムハンマド（在位 1293-1341 年）の息子たちのうちでは 7 人目のスルターンである。しかし父の代から仕えるアミールのターズと対立して、1351 年に退位させられ、城塞内に幽閉された。その後 1354 年、アミールのシャイフーとサルギトミシュがターズを追放したのを機に，ハサンもスルターンに返り咲いたが、今度はこの両アミールに実権を握られた。両者の影響力を脱してハサンが親政を行うようになるのは、1358 年、22 歳の時であった。

実権を握ったハサンは、自らの権力を誇示するような巨大なマドラサの建設に着手した。このマドラサは，マムルーク朝時代最大の建築物として知られる。また政治面では、「アウラード・アンナース（人びとの子ども)」と呼ばれる、マムルークの第 2 世代を重用し、古参のマムルーク・アミールたちを牽制した。

しかし 1361 年、配下のマムルーク出身アミールであるヤルブガー・ウマリーが反乱を起こし、ハサンは自らのマドラサが完成するのを待たずに暗殺された。

スルターン・ハサンのマドラサ、本来は城塞前の広場からスーク・シラーハが始まる位置を占め、付属水施設が通り沿いに続いていた。隣にリファーイー・モスクが建てられ、様相は変わったけれど、上・左の写真はその様相を表している。巨大なドームをいただく廟（上・中）の下には、ハサン自身は葬られずに、彼の息子が葬られている。マムルーク朝最大規模を誇るモスクで、大中庭の周囲には 4 つのイーワーン（アーチ開放大広間、下・左）があり、その間を 4 つの小中庭（下・中）として、その周囲には 4 階建の学生居室が並んでいた。入口を入ると手の込んだムカルナス（鍾乳石飾り）の前室（下・右）である。このムカルナスの構成、および中庭周りの 4 つのイーワーンはペルシア風ではあるが、マムルーク朝建築としての特色を兼ね備えている。

【スルターン・アシュラフ・シャアバーン（1377 年没）】

ナースィル・ムハンマド（在位 1293-1341 年）の息子フサイン王子を父とし、奴隷出身の妻妾バラカを母とする。1363 年、10 歳でスルターンに即位したが、叔父ナースィル・ハサン（在位 1347-1361 年）の暗殺以来、政治の実権を握るのはアミールのヤルブガーであった。ところが不人気であったヤルブガーは 1366 年、自らの子飼いマムルークであるヤルブガーウィーヤ軍団に暗殺され、今度はそのヤルブガーウィーヤが幅を効かせるようになった。

しかしシャアバーンは、彼らの言いなりになる君主ではなかった。武装蜂起したヤルブガーウィーヤに対して、戦闘で打ち勝ったのである。その後、母バラカの再婚相手であるウルジャーイ・ユースフィーがアターベクとして専横を振るったが、1373 年のウルジャーイの反乱を鎮圧して、シャアバーンはようやく実権を握ることに成功した。

1377 年、シャアバーンは自らの権威を誇示するために，大々的なメッカ巡礼の儀礼を行った。しかしこの巡礼団がアカバに差しかかったときに，ヤルブガーウィーヤの残党による反乱が起き、シャアバーンはカイロへと敗走し、そこで殺害されてしまう。この後、ヤルブガーウィーヤの間での権力闘争が続き、最終的にその一員のバルクーク（在位 1382-1399 年）がスルターンとして権力を握ることで，マムルーク朝は新たな時代を迎えることになる。

【バラカ、ウンム・シャアバーン（1373 年没）】

女奴隷の出身であり、ナースィル・ムハンマド（在位 1293-1341 年）の息子フサインの子を産んで奴隷身分から解放された。夫フサインはスルターンの位に就くことなく、1363 年に亡くなったが、同年、息子のシャアバーンがスルターンとなると、生母である彼女の権勢も高まった。彼女はアミールのウルジャーイ・ユースフィーと再婚し、彼を武官の最高位であるアターベクの地位に就けることで、彼女自身の政治への影響力を保った。

彼女がスーク・シラーハに建てたマドラサは「スルターンの母のマドラサ」と呼ばれ、またその周囲には集合住宅や隊商宿も彼女の名前で建てられた。1369 年にはメッカ巡礼を行ったが、その巡礼団はスルターンの親衛隊が付き従う豪華で贅を尽くしたものであった。

彼女は 1373 年に亡くなり、スルターンの母のマドラサに葬られた。息子のシャアバーンはまもなくウルジャーイを処罰して親政を開始した。

ウンム（母）・シャアバーンの 4 つのイーワーンを持つマドラサ（右）、シャアバーンが 13 歳の 1368 年に完成しており、おそらく母バラカが建立したと推察される。左写真の左側の小さなドームの下にスルターン（中）、右の大きい方に母が葬られる（左）。バーブ・ワズィール通りに面しており、手の込んだ入口とサビール・クッターブが残っている。

【スルターン・バルクーク（1399 年没)】

クリミア半島出身のチェルケス人で、1362 年頃にエジプトに到来し、アミール・ヤルブガー・ウマリーのマムルークとなった。アラビア語では「あんず」を意味するバルクークという名前は、ヤルブガーが名付けたとされるが、元々チェルケス人の言語で「羊飼い」を意味する語の音写であると言われる。1366 年にヤルブガーが暗殺された後、ダマスクス総督であったマンジャク・スィラーフダールに仕官したが、後にアシュラフ・シャアバーンに許されてエジプトに戻った。

1377 年に起こった旧ヤルブガーウィーヤ軍団の反乱に加わって、シャアバーン殺害に加担した。その後の政治的混乱の中で頭角を現し、武官の最高位であるアターベク職を経て、1382 年にスルターンとなり、ザーヒル・バルクークと称した。1389 年には反乱軍によってスルターンの位を追われたものの、翌年復位し、1399 年に亡くなるまで、財政再建と国内基盤の充実に力を注いだ。

バイナ・アルカスライン通り、現在のムイッズ通りには、彼が創建した壮麗なマドラサが残るが、彼自身の遺体は息子であり後継者のナースィル・ファラジュ（在位 1399-1412 年）が建てたハーンカーに葬られている。

ムイッズ通りに面するバルクークのマドラサ（学院、中)、ハーンカー（修道場)、廟（右）の複合建築。ナースィルムハンマドのマドラサの隣に位置している。バルクークが最初にスルターン位についた 1384 年から 1386 年に完成し、廟にはすでに完成の際には亡くなっていた彼の父が葬られ、ナースィルの遺体はここにはない。

東の死者の町にあるバルクークの息子､ナースィル･ファラジュの修道場複合体｡中庭の北東側ドームの下に男系家族が、南西側（1411 年完成）に母系家族が葬られている（写真左)。バルクークの墓は、北東ドームの下、ミフラーブの前にある（写真右)。1399 年に没した彼は、建物完成前にここに葬られたという。

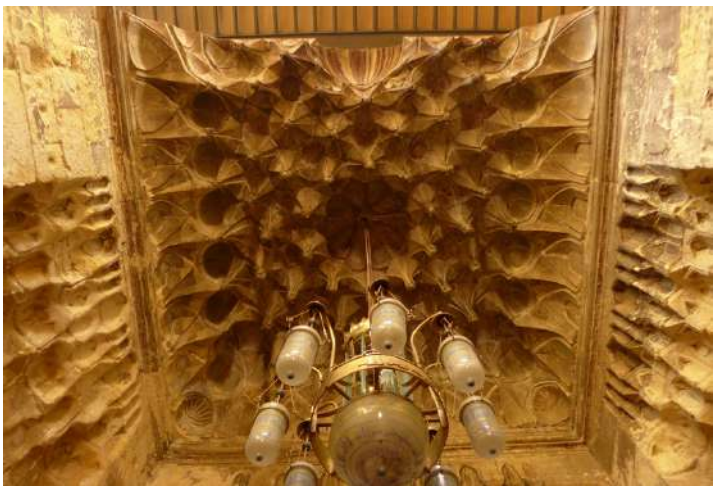
【バシュターク（1341 年没)】

ナースィル・ムハンマド（在位 1293-1341 年）が奴隷商人に特別に命じてイルハン国から呼び寄せ、破格の待遇でマムルークとなったが、その理由は彼の外見がイルハン国君主アブー・サイードとよく似ていたためであったという。その後もナースィル・ムハンマドの寵愛を受け続け、与えられたイクター地の規模はアミールたちの中で最大であった。

ナースィルの死に際して、バシュタークはスルターンの最年長の息子であるアフマド王子を推し、年若いアブーバクル王子を推すもう一人の寵臣カウスーンと対立したが、結局はナースィルの遺志に従い、アブーバクル王子がマンスール王として即位することとなった。バシュタークは自ら、シリア総督の職を望んでカイロを後にしようとしたが、新スルターンに暇乞いするために登城したところ、　カウスーンの手の者に襲われてアレクサンドリア監獄に収監され、その地で殺害された。

スーク・シラーハには彼が建設したハンマーム（公衆浴場）があるが、その他「バシュターク宮殿」と呼ばれる彼の邸宅は、「バイナ・ル・カスライン（宮殿の間)」通り、現在のムイッズ通りにおいて、博物館として公開されている。

ムイッズ通りに面するバシュタークの邸宅（1335 年から 1339 年建設)。2 階にはカアアと呼ばれる大広間（写真中）があり、一階の特徴的なムカルナスの入口を入ると小さなモスク（写真右、現在は国営店舗として利用）となっている。バシュタークは、ファーティマ朝のカーヒラの中のメイン・ストリートに邸宅を構えていた。



バシュタークの大モスク（1336 年建設）の入口（左）とミナレット（中）が、かつてはカイロを横切っていた運河沿い（現在のポート・サイード通り）に残っている。その後、死の直前にスーク・シラーハにハンマーム（右）を建設した。

【カウスーン（1342 年没）】

ナースィル・ムハンマドがキプチャクハン国の息女を妻として迎え入れた際、従者の一人として宮廷に参内した。その時、彼の容貌の美しさがたまたまナースィルの目にとまり、自由身分であったにもかかわらず 8 万ディルハムの高値でマムルークとして買い取られた。彼は瞬く間にアミールの最高位である百騎長の地位に取り立てられ、スルターンの娘との結婚を許された。彼自身は、スルターンからの覚えがめでたいことを常々鼻にかけていたという。

ナースィル没後は、ライバルのアミール・バシュタークを排除して権力を握ったが、ナースィルの後継者アブー・バクルを退位させて殺害すると、他のアミールたちの反感を買い、各地で反乱が起こった。結局カウスーンは反乱軍に捕まってアレクサンドリアの監獄に収監され、まもなく処刑されることとなった。

彼が建てた建造物は、スルターン・ハサン学院そばの邸宅や、象の池のモスク、カラーファ地区の修道場などが知られている。

カウスーンの建造物は、カイロ各地に残る。1330 年建設の大モスクは、スルギーヤ通りに独立した門（上・左）とムハンマド・アリー通りにモスク本体がある。ヒルミーヤには 1330—37 年建設の巨大な邸宅遺構（上・中）がある。南の死者の町には、1336 年に中庭を囲む修道場を建設し、現在はそのミナレット（下・左）と墓廟（下・中および右）だけが残る。さらに晩年（1341 年）にはカーヒラの北門内側に巨大なウィカーラ（商館）を建設し、現在は入口（上・右）のみが残り、敷居にはヒエログリフを刻んだ古代エジプト建築からの転用材を用いている。

【アルトゥンブガー・マーリダーニー(1343 年没)】

名前のアルトゥンブガーはモンゴル語で「金の牛」を意味し、マーリダーニーはアナトリアのマルディン出身であることを示している。スルターン・ナースィル・ムハンマド（在位 1293-1341 年）の側近で、アミールの最高位である百騎長に取り立てられ、さらに王女との結婚を許されるほどの寵愛を受けた。長身細身で容姿端麗な人物であったが、あるとき大病を患い 40 日間伏せることがあった。その間スルターンや同僚たちが見舞いに訪れ、見舞金が 10 万ディルハムに達したため、快癒後、その金でスーク・シラーハに自らモスクを建造した。

ナースィル・ムハンマド没後の混乱期において、彼は政治的混乱を引き起こした張本人と目されている。アミールのカウスーンをそそのかして新スルタンのアブーバクルを殺害させたのは彼だと言われており、その後、他のアミールをけしかけてカウスーンを追い落としたのも彼であった。盟友であるアミール・バハードゥルが、スルターン・イスマーイールの時代（在位 1342-1345 年）に実権を握ると、アルトゥンブガーはシリアの都市ハマーの総督に、ついでアレッポの総督に任命されたが、その地で病を得て亡くなった。25 歳にも満たない短い生涯であった。

マーリダーニーのモスク（1337-39 年）は、スーク・シラーハから分岐した道がバーブ・ワズィール通り（タッバーナ通り）と接合する部分に位置し、北辺（上・左）と西辺（上・中）に入念に装飾された入口を開く。これらは、建物の外壁に沿った道が、建設時の 14 世紀までさかのぼることを語る。モスクのプランは、彼の主人であるスルターン・ナースィルが城塞に建設したモスク（1335 年完成）とほぼ同じであり、中庭を囲む（下段右）列柱室の中に、大ドーム空間を入れ込むものである（下・左）。やはり木造のドームをいただくのであるが、支柱として古代エジプトの赤色花崗岩柱を転用している点も、ナースィルの城塞モスクと同様である。そこには、スルターンとマーリダーニーの緊密な関係が暗示される。また、打ち抜きのタイル装飾を持っている点は、ペルシアやアナトリアとの関連性を明示しており、濃紺、緑、白の釉薬タイルのアラベスク細工は、カイロに類例をみないものである。

【マンジャク・スィラーフダール（1375 年没）】

ナースィル・ムハンマド（在位 1293-1341 年）のマムルーク軍団の出身であり、ダマスクスで百騎長の位を与えられた。ナースィル・ハサン（在位 1347-1361 年）が即位すると、彼の求めに応じてエジプトに戻り、ワズィール（宰相）職に就任した。その後長い間、トリポリ、アレッポ、ダマスクスとシリア各地の総督職を歴任した。1374 年、アシュラフ・シャアバーン（在位 1363-1377 年）によってエジプトに呼び戻されて、武官の最高職であるアターベク職に就任するが、その翌年、病を得て死亡した。

長く要職を勤めていたため、この間蓄財に精を出して巨万の富を得たが、吝嗇家との評判もあった。また、1366 年の政変で当時のアターベク、ヤルブガー・ウマリーが殺害された際、彼のマムルークであった後のスルターン、バルクークを召し抱えたことでも知られている。

スーク・シラーハの南端にはかつて彼の邸宅があったが、現在は門だけが残っている。その他、シリア、エジプトの各都市にモスクや修道場を多く建てており、死後は城塞近くに建てた自らのモスク脇の墓所に葬られた。

スーク・シラーハには、マンジャク・ユーズフィー・シラーフダール（太刀持ち）の邸宅（1346—1347 年）の門とその付属棟が残っている。ナポレオン地図のこの場所には動物小屋と記入され、19 世紀初頭当時からその建物は荒廃していたのかもしれない。門の天井にあたるペンデンティブ・ヴォールト（下・右）の石細工は他に同時代の類例がなく、注目に値する。彼のもう一つの建築は、城塞の北側に位置するマフガル（石切場）通りに、1349 年の複合建築（上・左、左から門、廟、モスク、ミナレット）である。現在、モスク（下・左）は使われているが、廟（上・中）は荒廃状況にある。通りから門を抜けると広場になっており、独立するミナレットがたち、振り返る形で墓廟とモスクにアクセスする配置となっている。おそらくこの門は、街区門の役割をも果たしていたと思われる。

【アクスンクル・ナースィリー（1347 年没）】

「白いハヤブサ」を意味する名を持つアクスンクルは、ナースィル・ムハンマド（在位 1293-1341 年）の寵愛を受けたマムルークであった。彼はナースィルの生前にアミールの最高位である百騎長に叙せられ、その息女を妻とした。さらにナースィルの死後にはその妻の１人と再婚し、スルターン家と深い関わりを持っていた。

シリア地方のガザやトリポリの総督職、厩舎長官職を歴任し、妻の実弟にあたるカーミル・シャアバーン（在位 1345-1346 年）が即位するとますます取り立てられて権勢を握った。しかしその治世に、同僚のマリクタムルらと共謀して反乱を起こすが失敗し、1347 年に処刑された。

スーク・シラーハ地区の東隣にあるアクスンクル・モスクは、1346 年に彼が建造したものである。青いタイルで装飾された内装から「ブルー・モスク」として知られるが、この装飾部分は 17 世紀に改装されたものであり、マムルーク朝時代のものではない。

アクスンクルのモスク（1347 年）は、バーブ・ワズィール通り沿い、サラディンの市壁の近傍に位置する。北西の角にドームをいただく墓廟（上・左、下・左）があるが、ここにはスルターン・ナースィルの息子等が葬られ、その一人スルターン・クジュク（1345 年没、1341-2 年在位）のインスクリプションが残る。中庭を囲むモスクは、ピア（躯体柱）と交差ヴォールトを用い（下・左）、奥にドームをいただき（上段左）、ミナレット（上段左）は断面が円形である。これらの点はマムルーク建築としては異質で、東からの影響を物語る。ただし、オスマン朝期にタイルとともに礼拝室の構造も改変されている。アクスンクルと妻は南の回廊の囲いに葬られたといわれるが、墓所に諸説があるのも改築のためである。

【クトゥルーブガー・ザハビー（1356 年以降没）】

クトゥルーブガーという名前はモンゴル語で「幸運な牛」を意味する。彼の名前は歴史書にときおり登場するのみであり、まとまった記述は残っていない。

元々ナースィル・ムハンマド（在位 1293-1341 年）の子飼いマムルークであったと考えられる彼は、ナースィルの子、ムザッファル・ハーッジーの治世（在位 1346-1347 年）に頭角を現した。その後、ナースィル・ハサン（在位 1347-1361 年）の治世にも勢力を保ち、1351 年にはアミール・ターズやサルギトミシュらとともに、ハサンに対するクーデターに加わった。しかし、ハサン復位後の 1356 年に逮捕されてからは、その後の消息は不明である。

スーク・シラーハにある彼のマドラサに掲げられた碑文には、ハーッジー治世の 1347 年に建造されたことが記されている。

スーク・シラーハからマーリダーニー・モスクへの分岐路の地点に建っている。マドラサ（イスラーム法学院）といわれるが、入口とその両脇に１室ずつが残るのみで、小型ながら、手の込んだ建築である。入口の楣石には白大理石にインスクリプションが刻まれ、その上にムカルナス（鍾乳石飾り）のヴォールトが作られる（上・右）。入口の南側が礼拝室となり、北側に現在物置となっている小さな部屋がある（上・左）。南側の礼拝室部分は、中央の横断アーチで 2 分され、東側の壁にミフラーブが備えられる（下・左）。ミフラーブは、象嵌螺鈿細工、青いファイアンス、白大理石の彫刻で、分節される。一方横断アーチの西側には、二つのセノタフ（模棺）がおかれ、墓所となっている。

【ウルジャーイ・ユースフィー（1373 年没）】

現代口語ではイルガーイと呼ばれることもある。スルターン・ナースィル・ハサン（在位 1347-1351 年）のマムルーク軍団出身で、ハサン在位中にアミールの最高位である百騎長に任命された。ハサンの死後にアシュラフ・シャアバーン（在位 1363-1377 年）が即位すると、ウルジャーイはシャアバーンの生母で寡婦となっていたバラカと結婚し、武官の最高職であるアターベクとなって権力を握った。

バラカが亡くなると、スルターンとの間で仲違いし、内戦が起こった。追い込まれたウルジャーイに対しスルターン・シャアバーンは、降伏すればシリアの都市ハマーの総督職を与えるとの条件を提示したが、ウルジャーイは彼が持つ全財産と郎党の全員を任地に連れて行くことを望んだため、交渉は決裂した。

再び起こった戦闘の最中、ウルジャーイは逃走しようとしてナイル川で溺れ死んだ。シャアバーンは義理の父でもあったウルジャーイの死を深く悲しみ、ウルジャーイが生前にスーク・シラーハに建てていたマドラサのドームに彼の遺体を葬った。

ウルジャーイ・ユースフィーのマドラサ（1373 年完成）は、スーク・シラーハに面して建つ。南西の角に墓廟（上・左、下・左）のドームがそびえ、北西の角はサビール・クッターブ（上・右）となっている。墓廟にはスルターン・シャアバーンによって死に追いやられたウルジャーイ自身が葬られ、一方サビール・クッターブは妻バラカ（スルターン・シャアバーンの母）によって建設されたといわれる。現在モスクとして使われる中庭には、4 つのイーワーンが開放している（下・右）。入口の石造の天井（上・中）や墓廟の捻りフリンジを持つドームは特徴的で、ジャズィーラ地方や東アナトリアの石造建築との関係性を語る。

【バハードゥル・ダムルダーシー（1343 年没）】

モンゴル語で「勇者」を意味する名を持つバハードゥルは、1328 年にイルハン国の有力者テムルタシュ（ダムルダーシュ）が亡命してきた際に、その従者としてエジプトに渡来した。この時マムルーク朝とイルハン国との間には和議が結ばれていたため、テムルタシュは和議の条件によりエジプトで処刑されたが、ナースィル・ムハンマド（在位 1293-1341 年）はバハードゥルの美しさに目を留め、彼を自らのマムルークとして召し抱えた。

ナースィルはバハードゥルを愛し、異例の早さでアミールの最高位である百騎長の位を与えたばかりか、娘の 1 人を彼に嫁がせた。こうしてバハードゥルはバシュタークやカウスーンらとともに、ナースィルの夜とぎを許された 4 人のアミールの 1 人となったが、そもそも体が弱く、登城する機会は限られていた。

ナースィルの死後、バハードゥルの妻の同腹の弟であったイスマーイール王子がスルターン（在位 1342-1345 年）となると、バハードゥルはスルターンの義兄として力を持つようになった。彼はかつてのカウスーンの邸宅に住み、アミールたちの人事権を握ったが、翌年急死した。

【スードゥーン・ミン・ザーダ(1407 年没)】

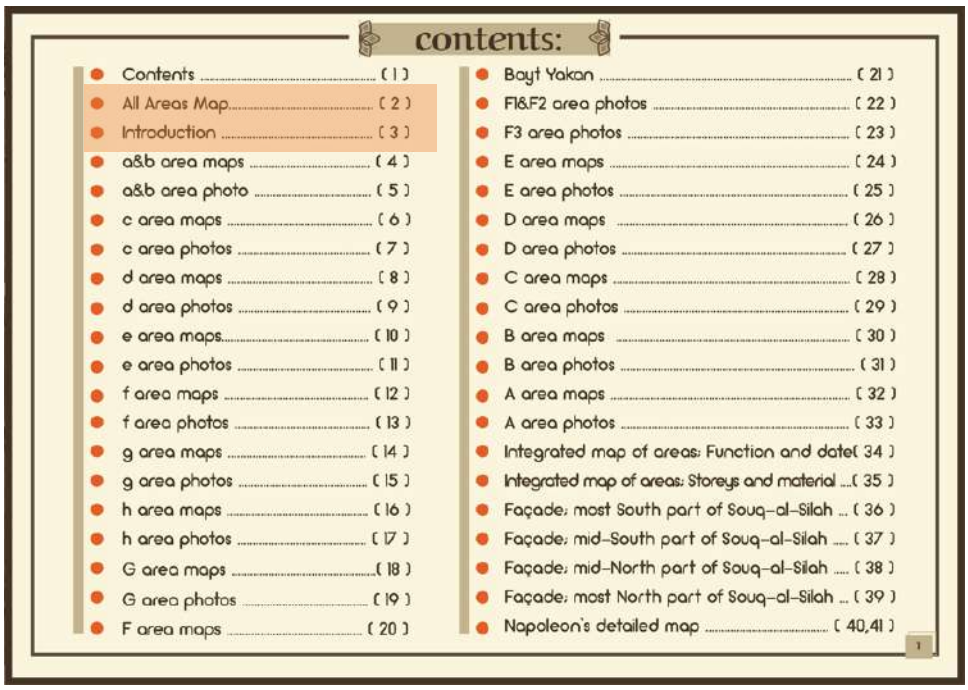
彼は、チェルケス・マムルーク朝を創始したスルターン・バルクーク（在位 1382-1399 年）の側近マムルークからなるザーヒリーヤ軍団の一人であった。バルクーク亡き後、後を継いだ息子ナースィル・ファラジュ（在位 1399-1412 年）の時代になると、スードゥーンには最初のアミール位、つまり、十騎長の位が与えられた。しかし、若いファラジュに対してザーヒリーヤ出身アミールたちが不満を持ち、1401 年には年長のアミールによる反乱が起こった。この反乱はまもなく鎮圧されたが、スードゥーンもこれに連座して捕らえられ、アレクサンドリア監獄にしばらく収監されることとなった。

やがて釈放されたスードゥーンは、ファラジュから最高位のアミール位である百騎長の位を与えられ、1405 年にはガザ総督に任じられて赴任した。しかし、翌年シリア地方のアミールたちと結託して反乱を起こし、エジプトに攻め上った。反乱は翌年鎮圧されて彼も捕らえられ、再びアレクサンドリア監獄に送られて、その地で亡くなった。

スーク・シラーハには彼が建てたモスクの一部が残っている。

スードゥーン・ミン・ザーダは 1401 年にスーク・シラーハの現在のバイトヤカンの隣の敷地にモスクと廟を建設した。19 世紀後半にはすでに荒廃し、1960 年代に国営アパート建設に伴い遺構が取り除かれてしまった。2000 年代に建設された消防署にミフラーブ（左）は取り込まれてしまい、バイトヤカンとの境壁だけが、残る（右）。20 世紀初頭の図面によると、廟は西北の隅にあり、中庭の周りを列柱が取り巻く形であった。ナポレオン地図には Gâma’ Mesdâdeh としてその存在が記される。

□本プロジェクト作成　Survey Report　2022 年 “ Souq al-Silah; Maps and Buildings”


contents:

Contents (1)
All Areas Map (2)
Introduction (3)
a&b area maps (4)
a&b area photo (5)
c area maps (6)
c area photos (7)
d area maps (8)
d area photos (9)
e area maps (10)
e area photos (11)
f area maps (12)
f area photos (13)
g area maps (14)
g area photos (15)
h area maps (16)
h area photos (17)
G area maps (18)
G area photos (19)
F area maps (20)
Bayt Yakan (21)
F1&F2 area photos (22)
F3 area photos (23)
E area maps (24)
E area photos (25)
D area maps (26)
D area photos (27)
C area maps (28)
C area photos (29)
B area maps (30)
B area photos (31)
A area maps (32)
A area photos (33)
Integrated map of areas: Function and date(34)
Integrated map of areas: Storeys and material ...(35)
Façade: most South part of Souq-al-Silah ... (36)
Façade: mid-South part of Souq-al-Silah ..... (37)
Façade: mid-North part of Souq-al-Silah ..... (38)
Façade: most North part of Souq-al-Silah ... (39)
Napoleon's detailed map (40,41)

本小冊子は「■２．検討（評価、建築基準、現況調査）③カイロ歴史的市街地の現況調査と評価；ダルブアフマルに注目して」において紹介したものである。本文との重複を避けるために、ここでは本文において紹介できなかった部分を記載する。トーンをかけた部分は本文に掲載。

英語版は、カイロにて印刷し、関係各所に配布を予定している。報告書本報告書掲載にあたり、地区説明等の原文（和文）を掲載する。図版は紙面の都合上、縮小し、F 地区のバイトヤカン解説は地区説明の後に掲載した。

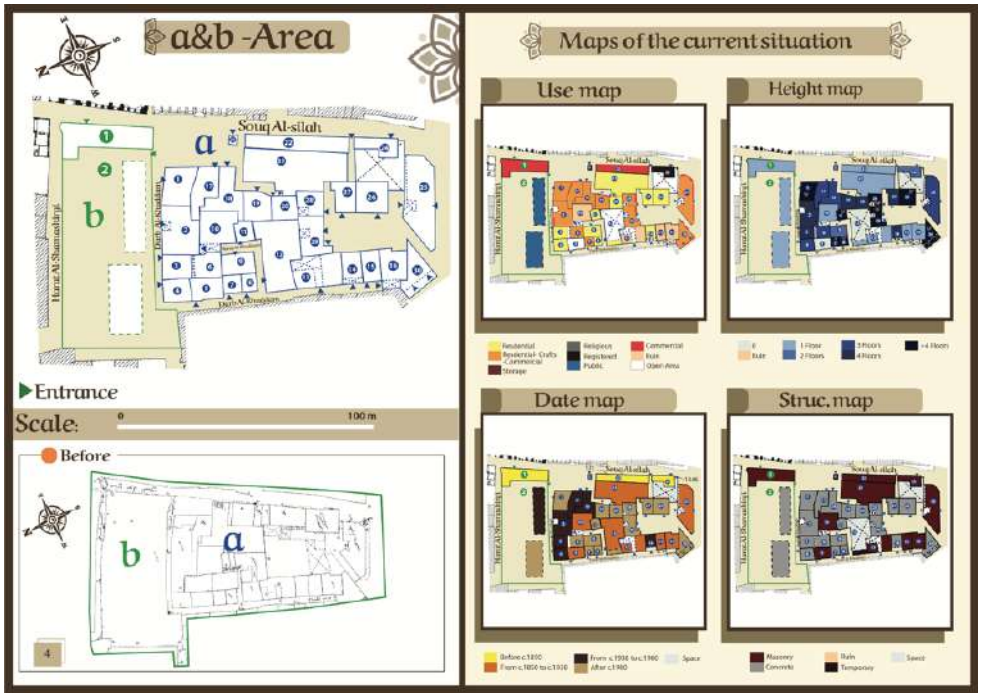
Introduction:

序　今回のプロジェクトは、日本の文化庁からの助成により、令和３年度緊急的文化遺産保護国際貢献事業（専門家交流）「カイロ旧市街の持続可能な保護策のための事業／住民参加のまちづくり」と題したものである。その目的は、日本が有する文化遺産保存修復に関する高度な知識・技術・経験を活かし、人類共通の財産である文化遺産の保護・継承に貢献するとともに、日本の国際的地位の向上を図るためであり、そのために日本の文化庁はこの文化遺産国際協力事業を実施している。その一つにあたる当該事業（2021 年 11 月から 2022 年 3 月）は、エジプト国立都市景観調和機構(National Organization for Urban Harmony、以下 NOUH)との協力のもとに行われている。日本に蓄積された歴史地区調査の手法を、歴史的カイロに応用するために、その調査対象地をスーク・シラーハに焦点を絞ることに決めた。この決定に関しては、NOUH 所長アブーサーダ氏とアズハル大学サラー教授による示唆を受けた点が大きく関わり、またトヨタ財団、国際交流基金、日本外務省草の根資金などのさまざまなプロジェクトがスーク・シラーハのバイト・ヤカンで施行されていることも、この決定を後押しした。（中略；本文 pp）これらのエリアの情報ののちに、それぞれの項目について全体をまとめたページをつけた。

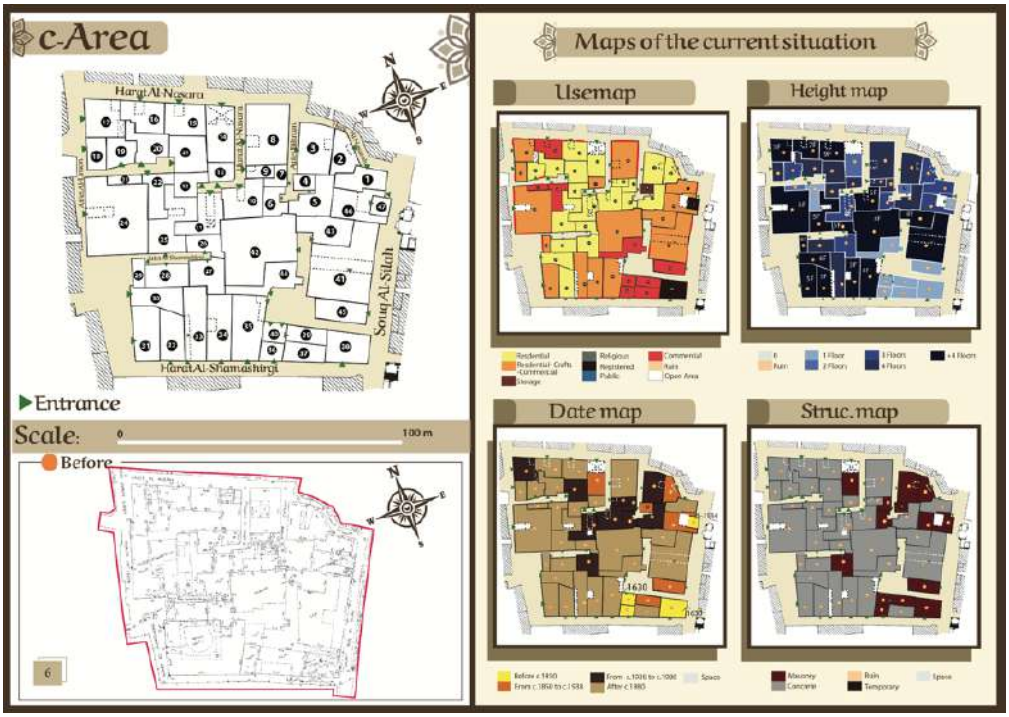
なお、調査は、柏木（太陽の船）、檜山（日本設計）、筆者深見（JSPS カイロ研究連絡センター）および、ユナイテッド・コンサルタンツ United Consultants 所属の建築家ファーリス、イマード、ハーガル、ファーティマによって、12 月 17 日から 2 月 25 日までに、8 回に渡って行われた。本小冊子は、建築家ハーガル、ファーティマの協力のもとに、筆者深見がまとめた。なお、補足資料として、当該部分のナポレオン地図の情報、およびバイトヤカンの説明を加えた。

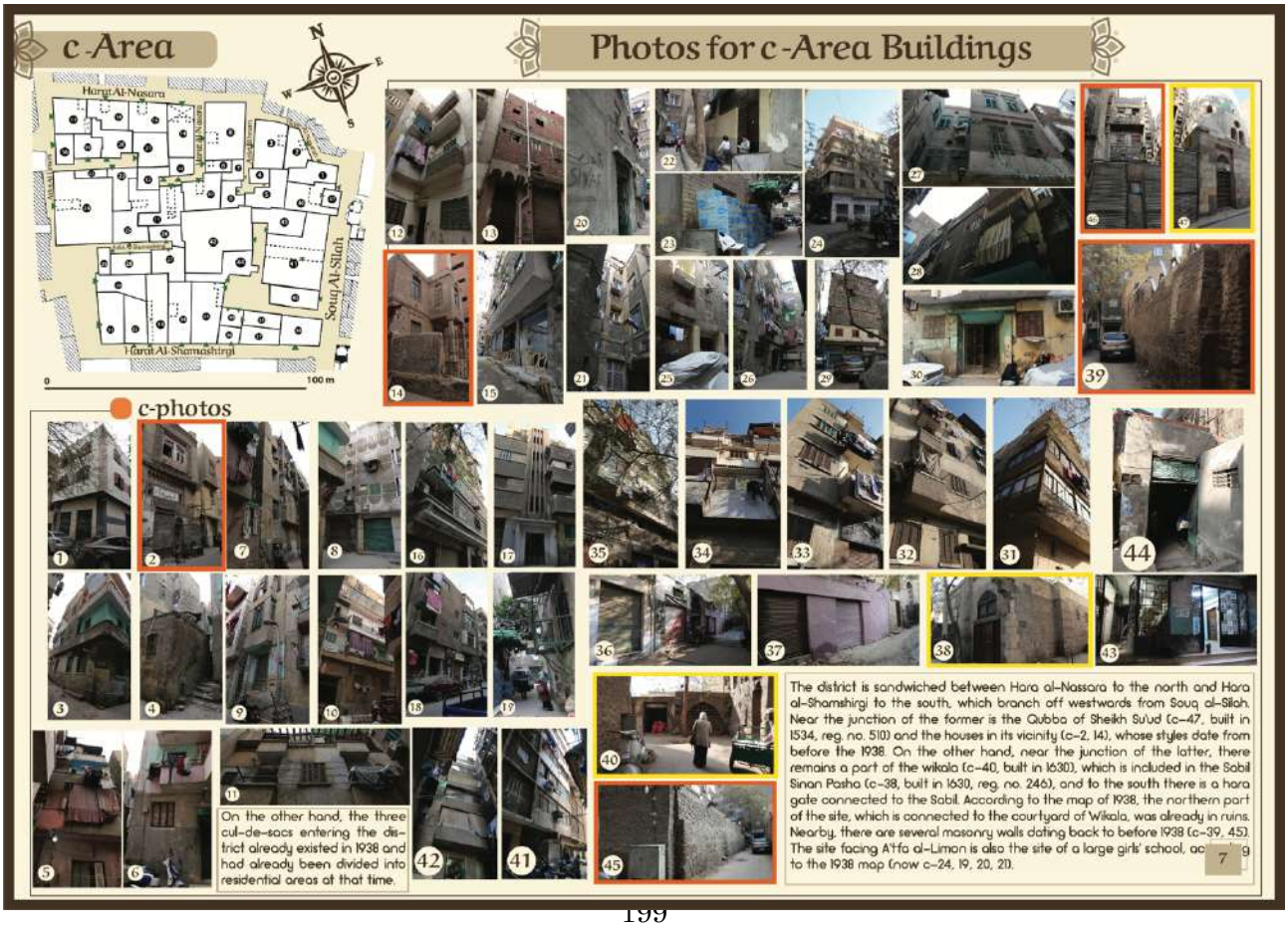
a&b 地区　現在はa地区南東部がスーク・シラーハの入口となっているが、本来この通りは城塞前のメイダン・ラムルからスルタン・ハサン・モスクの北側、マンジャク・シラフダールの宮殿（a-24, 1346年建設、reg. No. 247）前を経由、その隣にオスマン朝のウィカーラ（a-22,23）、さらにダルブ・フッダーム通り入口を超え、同様なウィカーラ（b-1）が並んでおり、次の通りハーラ・シャムシェルギーには街区門が残る。1938年地図と比較すると、b地区は一敷地である。一方、a地区のダルブ・フッダーム沿いには比較的小規模な住宅が並び、荒廃はしているが現在もその境界壁のいくつかが見られる（b-5,10,12,13,15,16）。19世紀第３四半期に実施されたムハンマド・アリー通り建設により、ヨーロッパとの折衷様式の建物変化も見られる（b-25）。

歴史的建造物の良好な修復に加え、セットバックによる広場の扱い、大規模敷地の分割による空地、長い袋小路奥の荒廃などの問題を抱えた地区である。



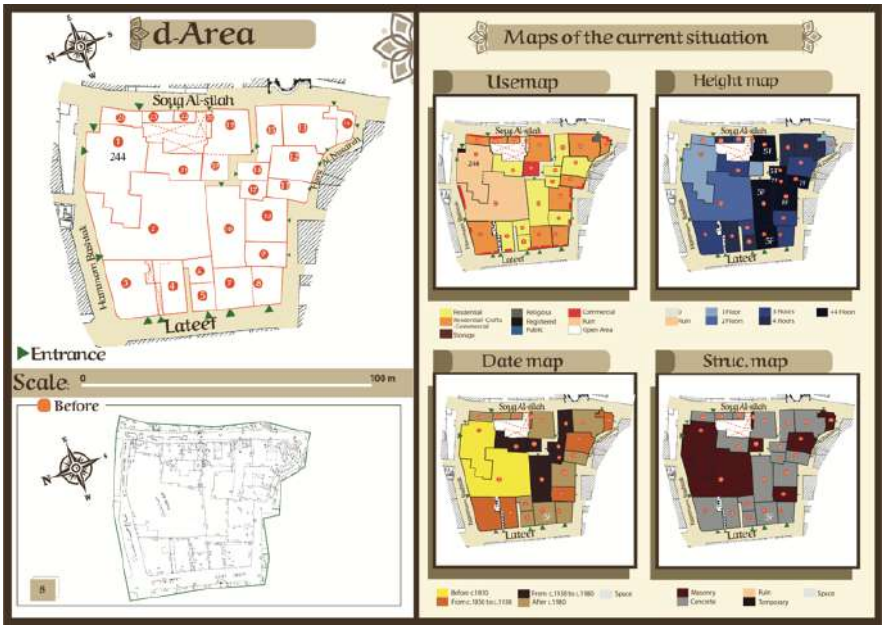
c 地区　スーク・シラーハから西に分岐するハーラ・ナッサーラとハーラ・シャムシェルギーに挟まれた地区である。前者の分岐点近くには、シェイフ・スウード廟（c-47、1534 年建設、reg. No.510）があり、その近傍の住宅（c-2、14）はその様式から 1938 年の地図以前にさかのぼることがわかる。他方、後者の分岐点近くには、サビール・シナーン・パシャ（c-38、1630 年建設、reg. No.246）と同梱のウィカーラの一部が残り（c-40）、南にはサビールに接続するハーラ門が残る。1938 年の地図によると北側は当ウィカーラと続く大規模敷地ながら、当時すでに荒廃していた。近傍には、何箇所かに 1850 年以前にと思われる石積み壁が認められる（c-39, 45, 46）。アトファ・レモンに面する敷地も、1938 年地図によると女学校の大敷地である（現在の c-24, 19, 20, 21）。一方、地区内に入り込む 3 つの袋小路は、1938 年時点ですでに存在しており、当時、すでに住宅地分割がなされていたことがわかる。

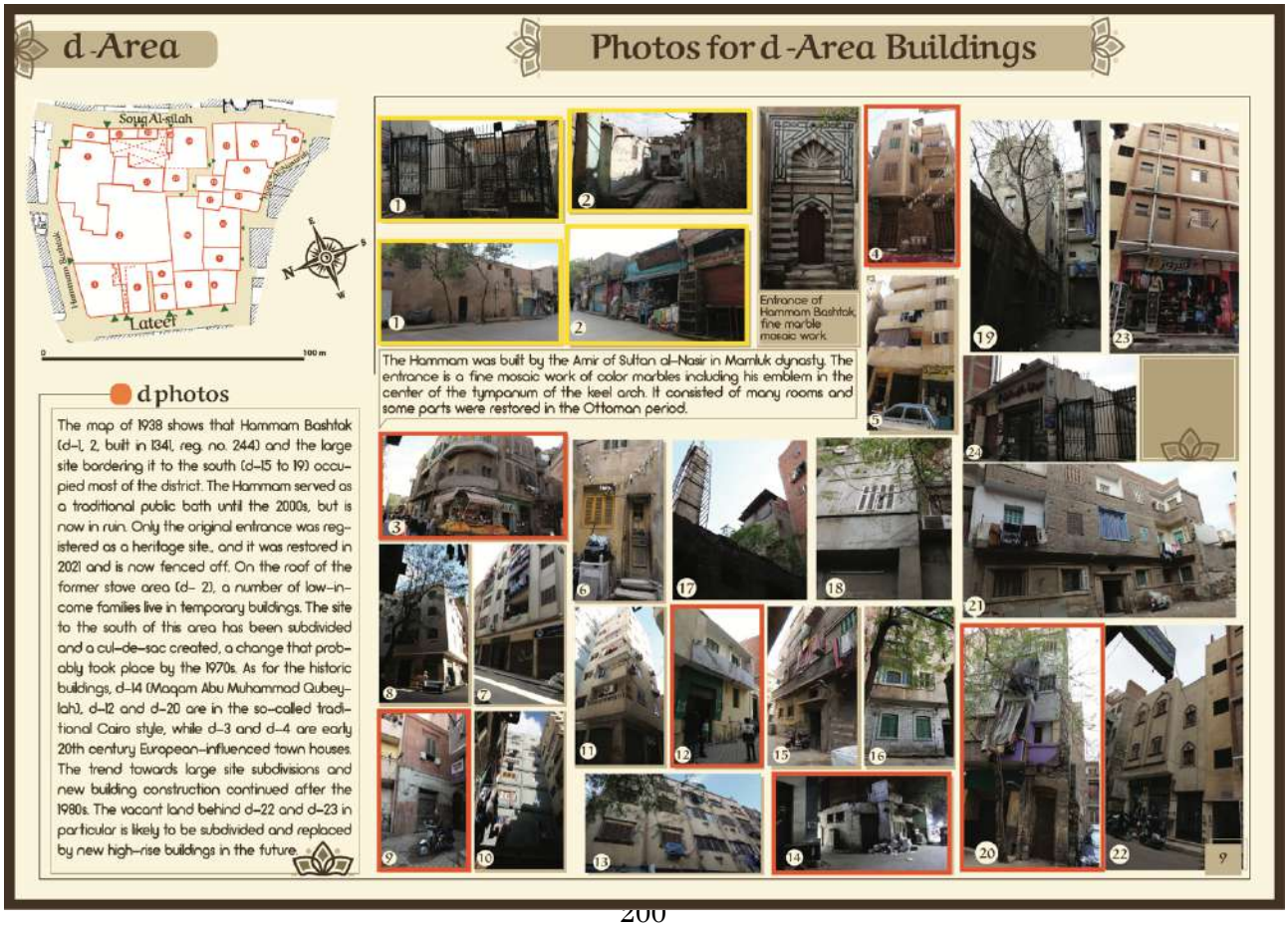




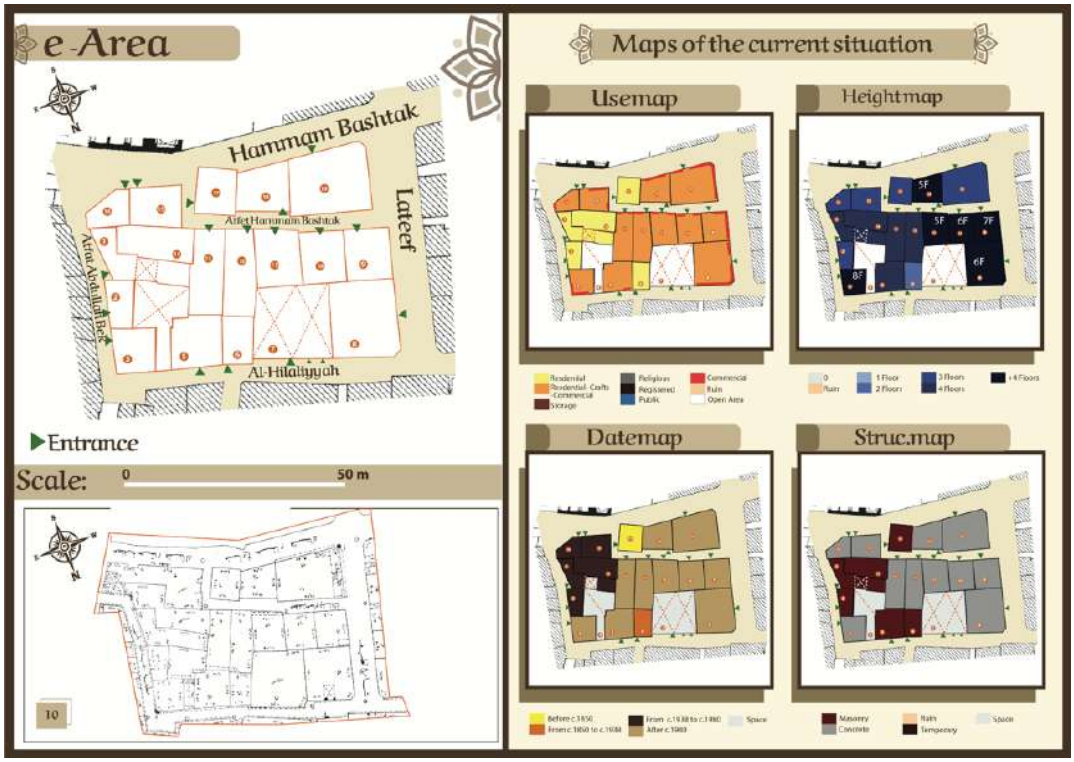
d 地区　1938 年の地図を見ると、ハンマーム・バシュターク(d-1, 2)およびその南に接する大敷地(d-15～19)が地区の大部分を占めていた。ハンマームは 2000 年代までは伝統的公衆浴場の役割を果たしていたが、現在は荒廃している。建設当初の入口だけが遺産として登録され(1341 年建設、reg.　no. 244)、2021 年に入口の修復が行われ、現在は柵に囲まれている。焚き口であったエリア(d-2)の屋上には、仮設建築に多くの貧困家族が居住する。一方地区の南の敷地は細分され袋小路が設けられ、おそらくこの変化は 1970 年代頃までに起こったと推察される。歴史的な建造物としては、d-14(Maqam Abu Muhammad Qubeylah)、d-12 および d-20 はいわゆるカイロの伝統的様式で、d-3, 4 は 20 世紀初頭のヨーロッパの影響を受けた町屋で、d-3 はその後に改築が行われている。大規模敷地分割・新建築建造の傾向は、1980 年代以後も続く。特に d-22, 23 背後の空地は、今後分割され、新たな高層の建造物に置き換わることが懸念される。

ハンマーム・バシュタークはマムルーク朝時代のスルターン・ナーシルのアミールによって建設された。いくつかの部屋からなる構造体は、オスマン朝に改修されている。ハンマーム・バシュタークの入口には入念な大理石象嵌細工が残る。

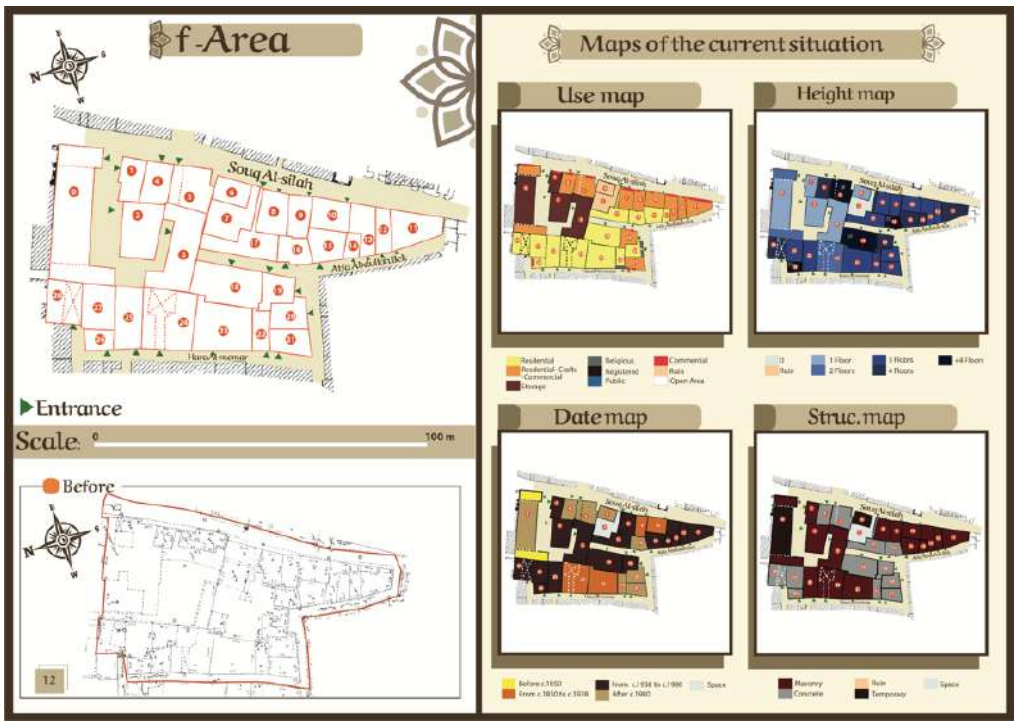


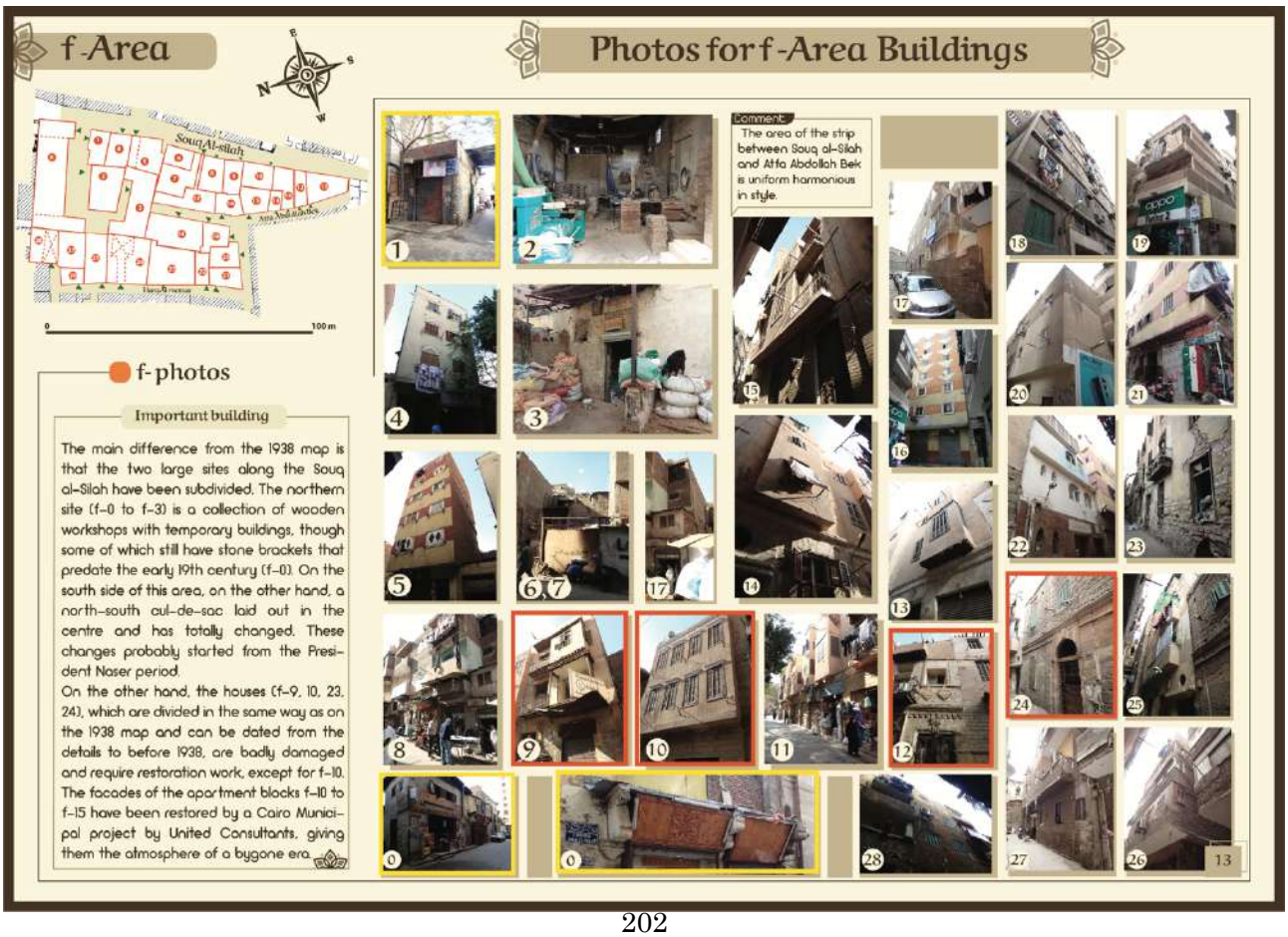


e 地区　この地区は、1938 年の地図と比較すると敷地割はほぼ同じながら、多くの建物が 1980 年以後に建て替わっている。d-4, 7 は現在空地となっており、高層の建物が建てられる可能性もある。d-17 はオスマン朝の 17 世紀にさかのぼる典型的な中産階級の住宅で、北、東、南の３面に大きな石の持ち送りが残り、上階を突出させる。この建物の西側に続く通りは 20 世紀初頭に開削されたもので、本来は、d-17 は東と北をアブドッラー・ベク通りに面していた。d-6 は 2 階建ての小規模住宅ながら、その様式から 1938 年以前に建設されたと推察される。今は空地となった d-7 の東端にも一部同様な壁が残っている。1938 年以後 1980 年代までと建設時期を推定した建物は、一階部分が切石積みとなっており、階数も 4 階までである。



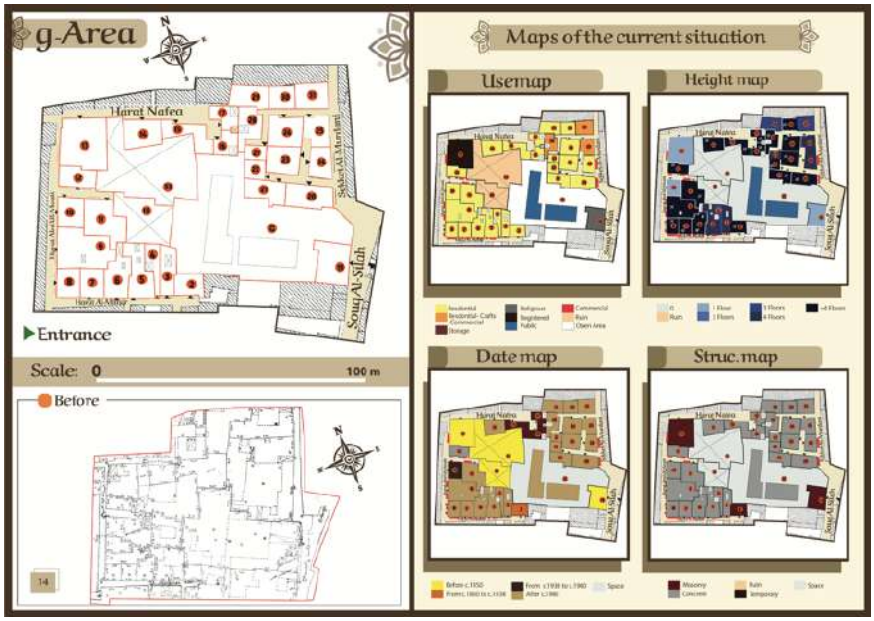
f 地区　西側に位置する道路幅の広いラティーフ通りから次第に建て替えが進んでいく様子がわかる。特に 1980 年以後の建物は、階数が大きい傾向にある。1938 年の地図との大きな相違点は、スーク・シラーハ沿いの 2 つの大敷地が個別の敷地に細分化された点である。北側の敷地（f-0～3）は木造の工房の集合体となっており、一部に 19 世紀前半以前の石造持ち送りが残る（f-0）。一方南側は、中央に南北の袋小路が敷設された。これらの変化はおそらくナーセル時代のことである。一方、1938 年の地図と同様な分割でしかも細部から 1938 年以前と判定できる住宅（f-9、10、23、24）は、10 を除くと痛みが激しく、修復が望まれる。f-10～15 までの集合住宅は、カイロ市の事業によりサラー教授の協力でファサードが修復され、往時の雰囲気を醸し出している。スーク・シラーハとアトファ・アブドッラー・ベクに挟まれた帯状の区域一帯は、様式が統一されている。

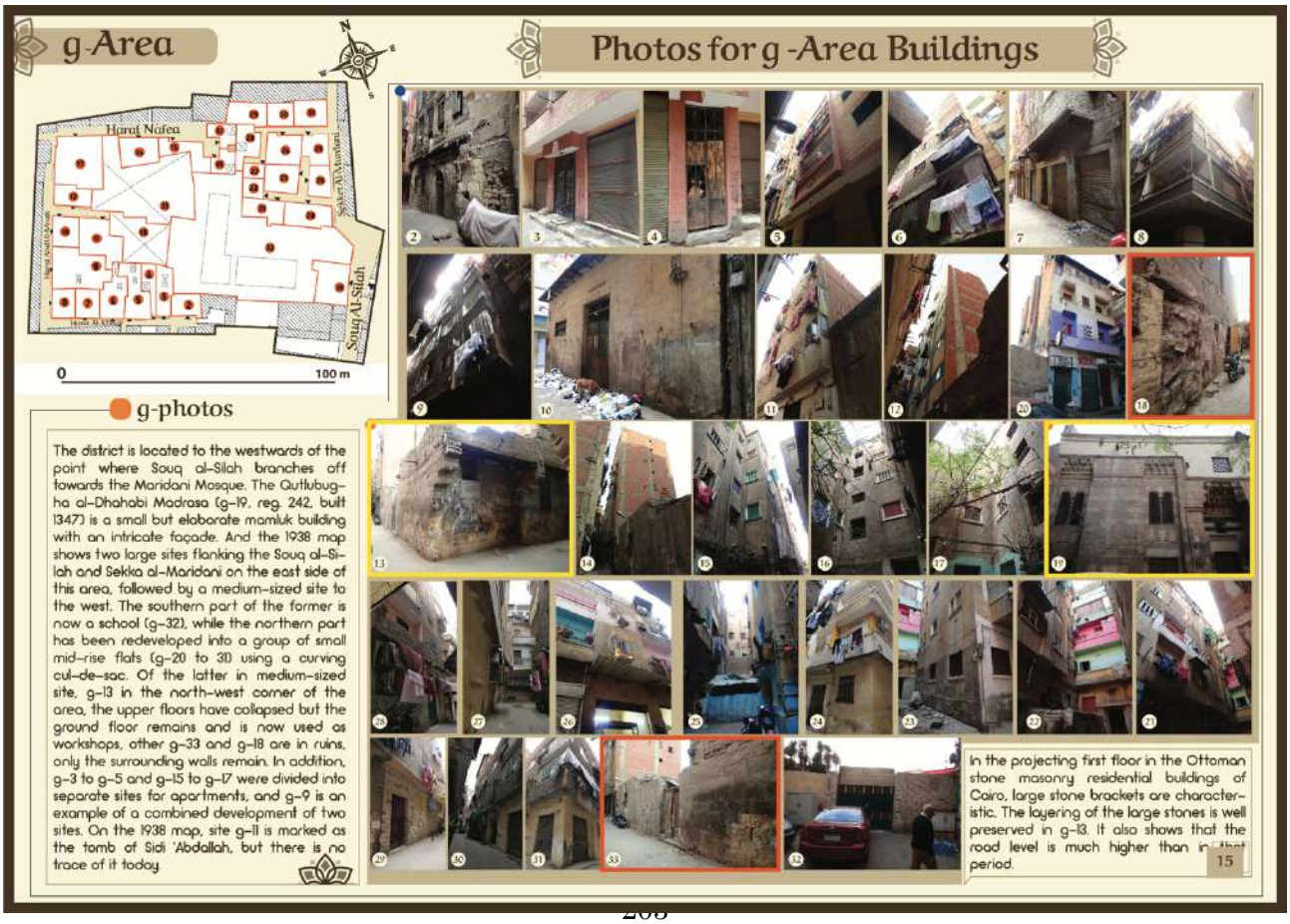




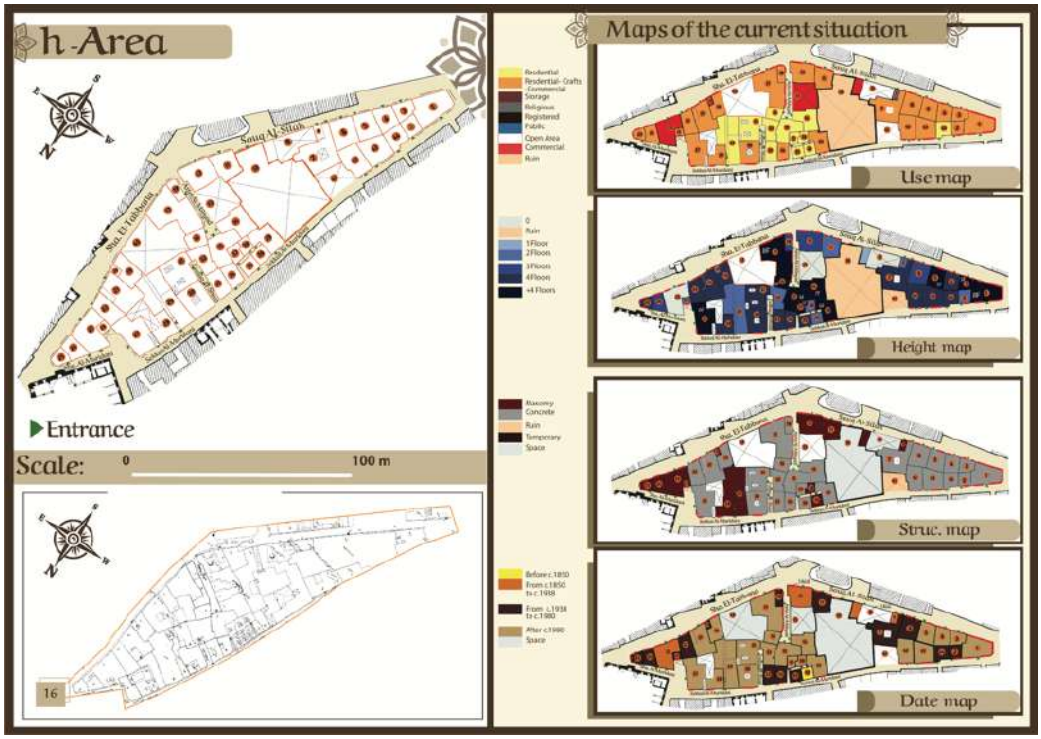
g 地区　スーク・シラーハがマリダーニーモスクに向かって分岐する地点の西側に位置する地区である。クトゥルブガー・マドラサ（g-19、reg.242, 1347 年建設）は小型ながら念入りのファサードを持つマムルーク建築である。1938 年地図には、東側の通りに面して、大規模敷地が 2 つ並び、その西側には中規模敷地が続く。前者のうち南側は現在学校（g-32）となり、北側は曲折する袋小路を用いた小規模な中層アパート群（g -20～31）に再開発された。一方後者の中規模敷地のうち、地区北西の g-13 は、上階は崩壊しているが 1 階は残り、現在工房として使われている。人々はアイーシャ・ハトゥーン Aisha Khatun と呼び、大型の石造持ち送りからオスマン朝の建設と推察される。g-33, 18 は廃墟の状況で周囲の壁だけが残る。また、g-3～5 や g-15～17 は敷地が分割され、g-9 は 2 つの敷地が統合されて開発された例である。また、1938 年地図には g—11 の敷地にシディ・アブダッラーSidi　'Abdallah の墓と記入されているが、現在その痕跡はない。

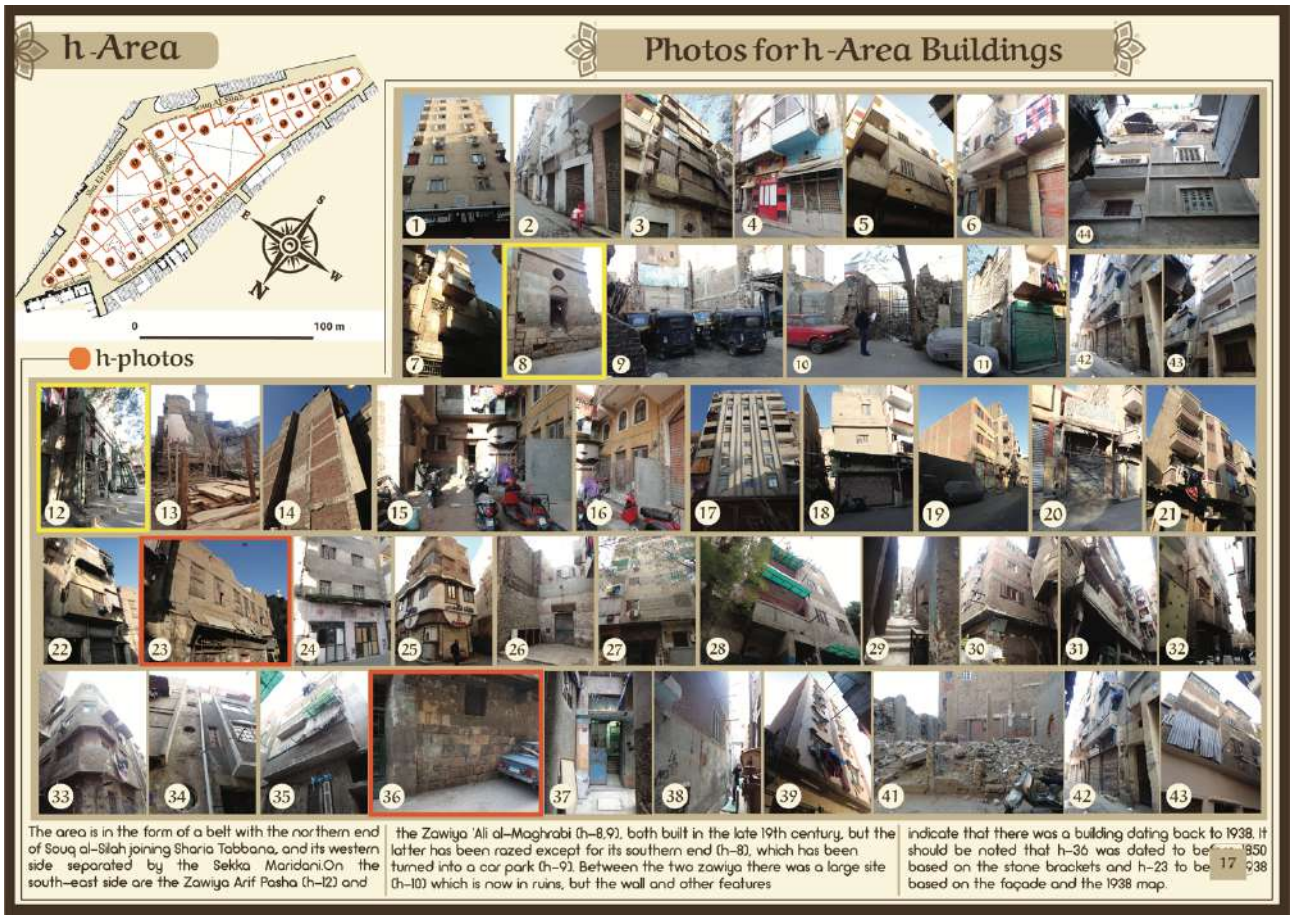
カイロのオスマン朝期の石造住宅建築において、2 階部分を突出させる場合、大型の石造持ち送りが特徴的である。大型の石材を重ねていく様子が、g—13 にはよく残る。また道路レベルは当時に比べるとかなり高くなっていることがわかる。



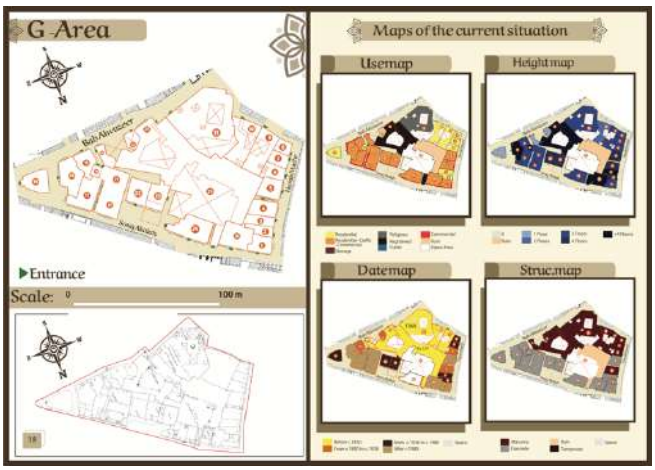


h 地区この地区は、スークシラーハの北端がシャーリア・タッバーナと接合し、西側はセッカ・マリダーニーで区切られる帯状の形である。東側には 19 世紀後半建設のザウィヤ・アリフ・パシャ(h-12)とザウィヤ・アリー・マグラビがあるが、後者は南端(h-8)をのぞいて壊され、駐車場(h-9)になってしまった。両者の間には2つの大規模敷地があったが、現在は廃墟と化してしまっている。しかしながら、その壁の様式等から 1938 年に以前にさかのぼる建物があったことがわかる。なお h-36 は石造の持ち送りから1850 年以前、h -23 はファサードと1938 年地図からその年代を判定した。

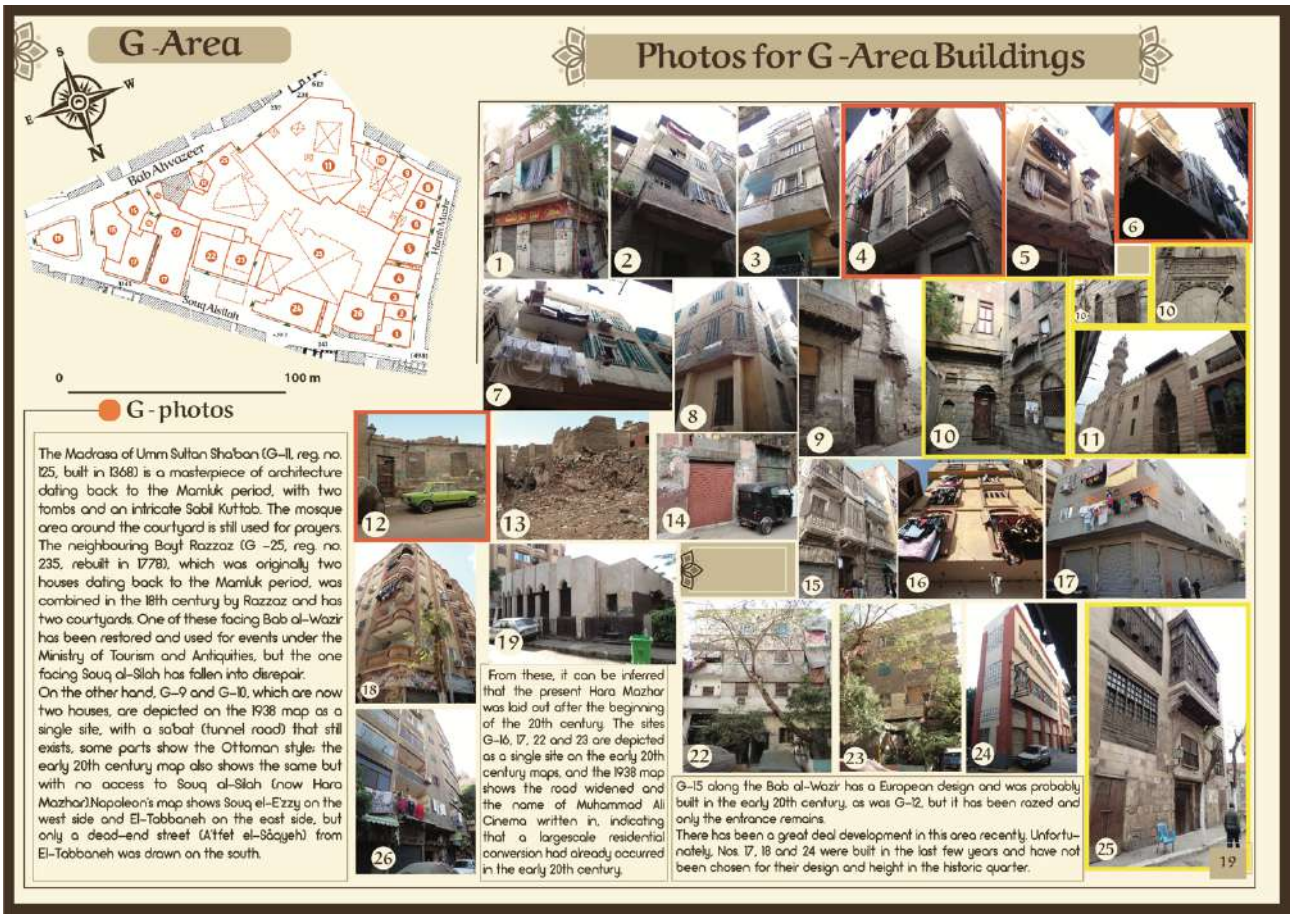




G 地区　ウンム・スルターン・シャアバーンのマドラサ（G-11, reg. no. 125, 1368 年建設）は、マムルーク朝時代にさかのぼる建築で、2 つの墓廟とサビール・クッターブを備えた傑作で、現在も中庭周りのモスク部分は礼拝に使われている。隣り合うバイト・ラッザーズ（G -25, reg. no. 235, 1778 年改築）は本来はマムルーク朝に遡る 2 つの住宅が 18 世紀に統合されたもので、2 つの中庭がある。バーブ・ワジールに面する住宅は、修復されて催し物に利用されているが、スーク・シラーハに面する敷地は、荒廃が甚だしい。一方、G-9,10 は、現在は 2 つの住宅であるが、1938 年地図には一敷地として描かれ、今も残るサーバート（トンネル状道路）が描かれ、一部にはオスマン朝期の様式が残る。20 世紀初頭の地図でも同様ながら、ハーラ・マズハルを通り抜けることはできない。ナポレオン地図を見ると、西側のスーク・シラーハ（Souq el-E’ zzy と記載）と東側のバーブ・ワジール（El Tabbaneh と記載）は記入されるが、南のハーラ・マズハルの記入はない。これらから、現在のハーラ・マズハルは 20 世紀初頭以後に敷かれたことが推察される。G-16,17,22,23 の敷地は 20 世紀初頭の地図には一敷地として描かれ、1938 年地図では道路が拡張され、ムハンマド・アリー映画館の名前が書き込まれているので、すでに大規模住宅の転用が起こっていたことがわかる。



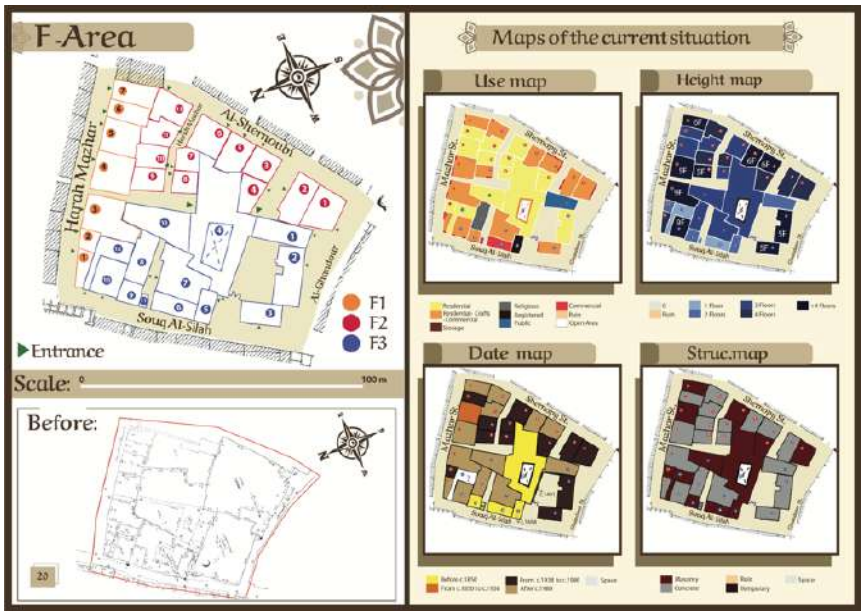
　バーブ・ワジール沿いの G-15 は、ヨーロッパ風の意匠で、おそらく 20 世紀初頭の建設と推察される。G-12 も同様ながら、破却され、入口部分だけが残る。この地区では、昨今の開発が甚だしく、No.17,18,24 は、ここ数年の建設で、歴史街区における意匠や高さの選択がなされていないことが残念である。

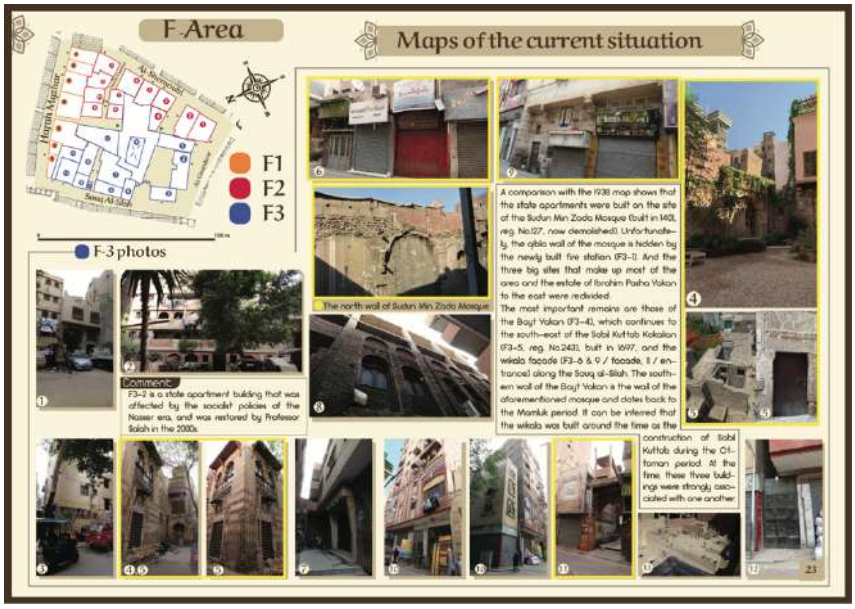


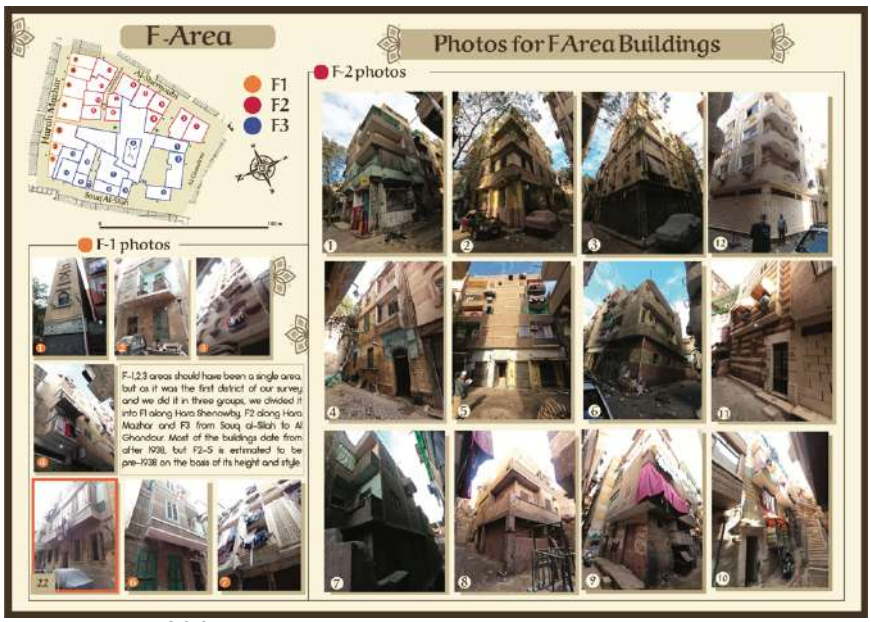
F 地区　このエリアは、本来は一つのエリアとすべきだったが、私たちのサーベイの最初の地区であり、3 つのグループで行ったため、ハーラ・シェノウビー沿いの F1、ハーラ・マズハル沿いのＦ２、スークシラーハからアル・ガンドウルにかけての F3 に分割した。ほとんどが 1938 以後の建物であるが、F2-5 については、階高及び様式から 1938 年以前と推定した。

1938 年の地図と比較すると、スドゥン・ミン・ザーダ・モスク（1401 年建設）の敷地に国営アパートがたち、エリアの大半を占める 3 つの敷地と東に続くイブラヒム・パシャ・ヤカン宅の敷地が再分割されたことがわかる。残念ながら、モスクのキブラ壁は新設の消防署（F3-1）によって隠されている。の建物は、深い関係性を有していた。F3-2 はナセル時代の社会主義政策の影響を受けた国営アパートだが、2000 年代にサラー教授によって修復された。

F3 エリアで最も重要なのは、1697 年建設のサビール・クッターブ・コーカリアーン（F3-5）の南東に続くバイト・ヤカン（F3-4）とスーク・シラーハ沿いのウィカーラ（F3-6, 9；ファサード、11；入口, 9）の遺構である。バイト・ヤカンの南壁は、前述のモスクの壁であり、マムルーク朝に遡る。オスマン朝時代のサビール・クッターブの建設の頃に、ウィカーラが建設されたことが推察される。当時、これら 3 つ深い関係性を有していた。F3-2 はナセル時代の社会主義政策の影響を受けた国営アパートだが、2000 年代にサラー教授によって修復された。





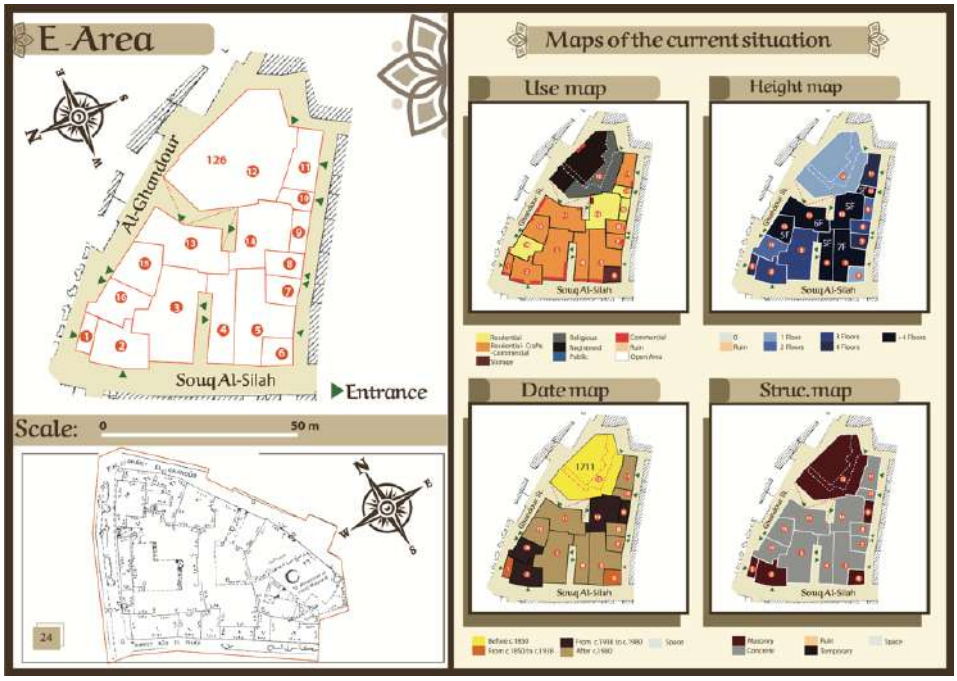


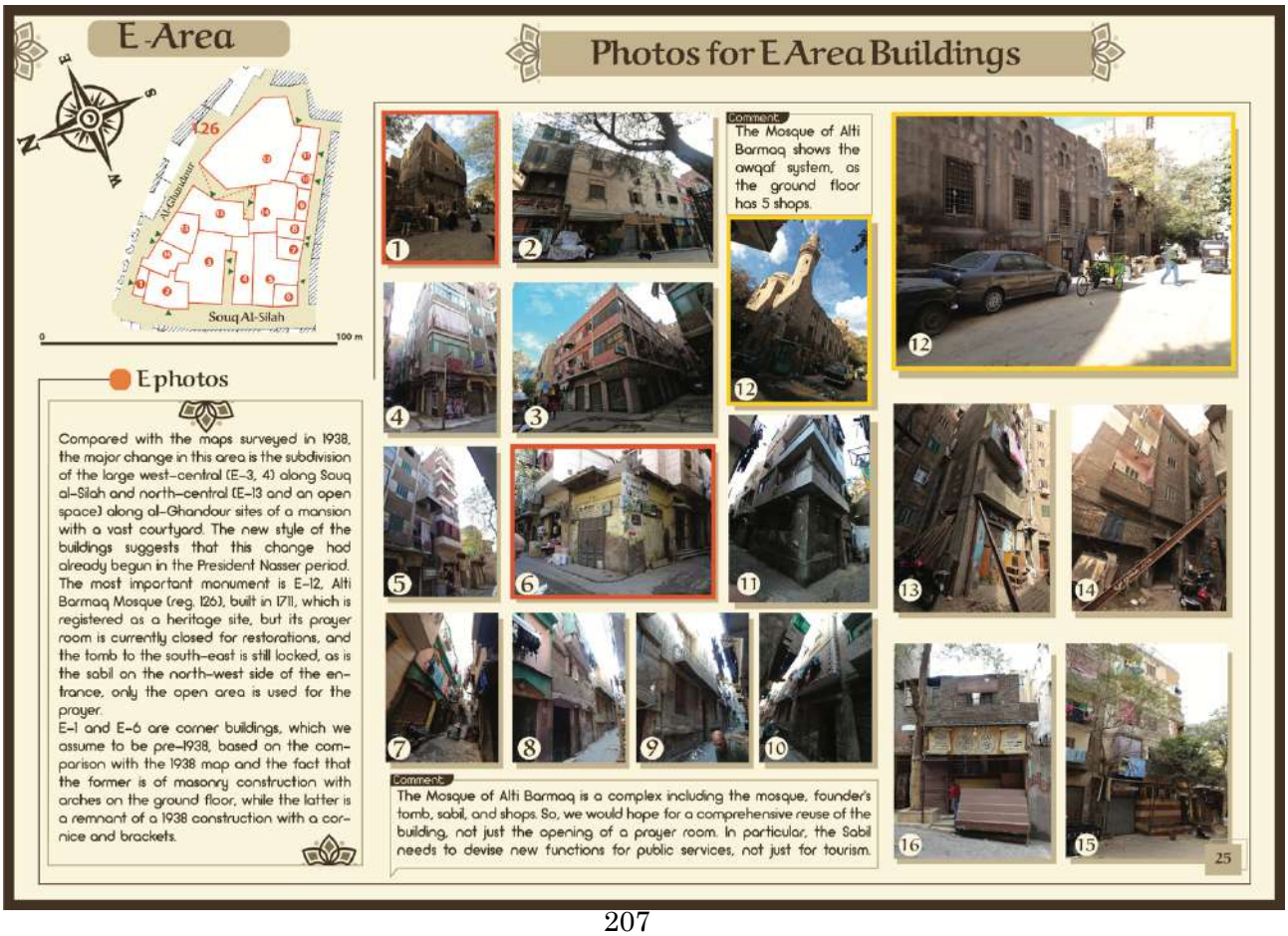
E 地区　このエリアは、1938 年の地図と比較すると、大きな変容は西中央と北中央の大規模敷地が、細分化されたことである。その変化は建物の様式から見るとすでにナーセル時代には始まっていたことが推察される。

　最も評価すべきモニュメントは、E-12 の 1711 年建設のアルティ・バルマク・モスクであるが、遺産として登録され、修復のために現在礼拝室は使用できない状況にあり、また東に位置する墓も、鍵がかかったままである。入り口に北西側に接するサビールも同様である。

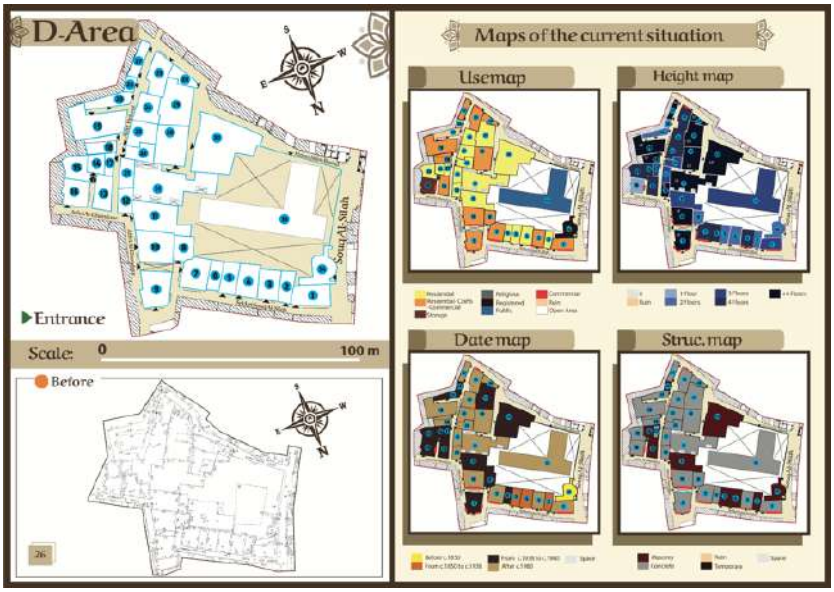
E-1 および E-6 は、角地にたつ建物で、1938 年地図との照合、および前者は組積造の一階部分のアーチ、後者は 1938 年遺残の建設でコーニスと持ち送りの様式から、1938 年以前の建物であると推測する。

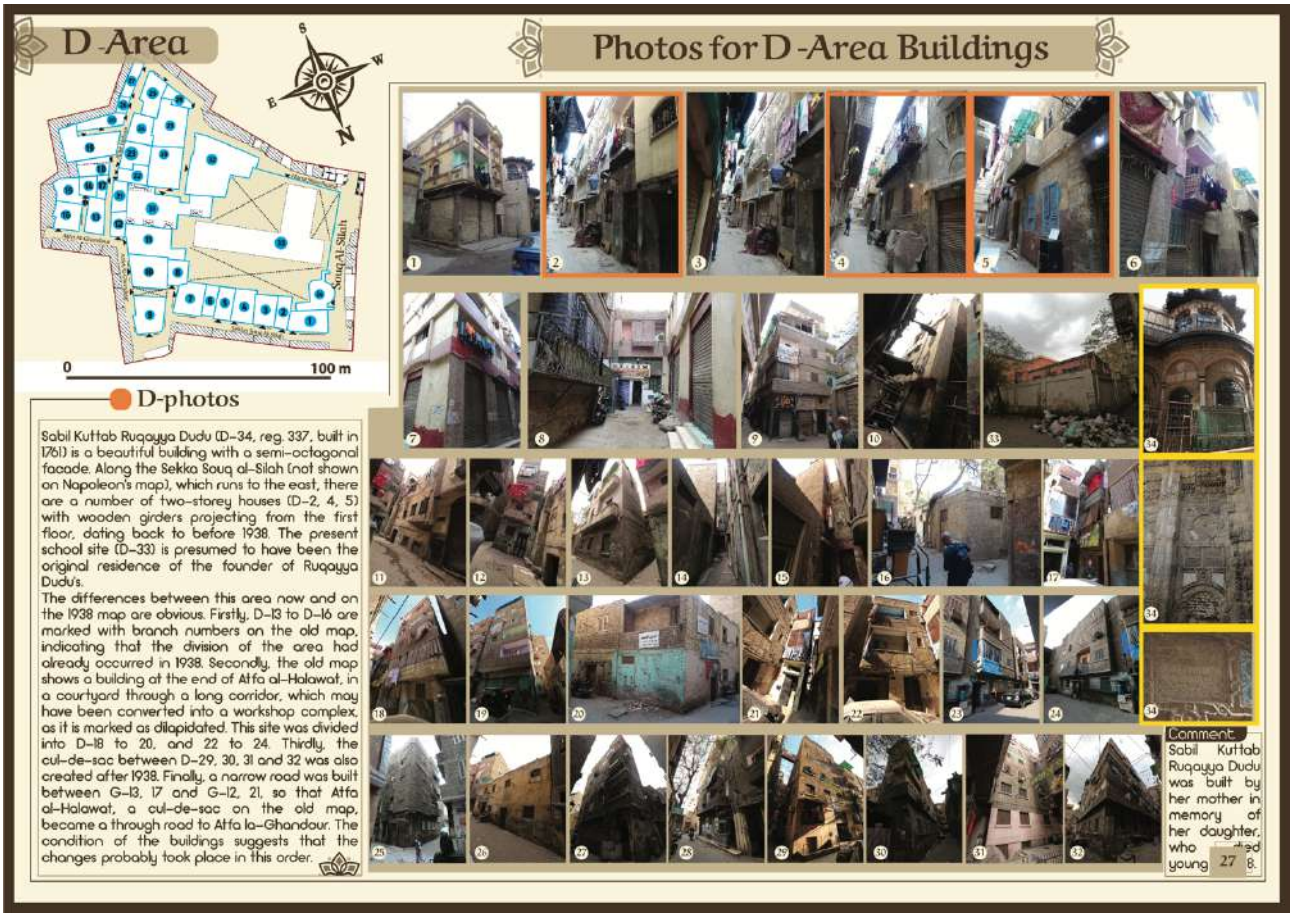
　礼拝室を開けるだけでなく建物の総合的な再活用が望まれる。特に、サビールについては、単なる観光用ではなく、公共サービスのための新たな機能を考案する必要がある。



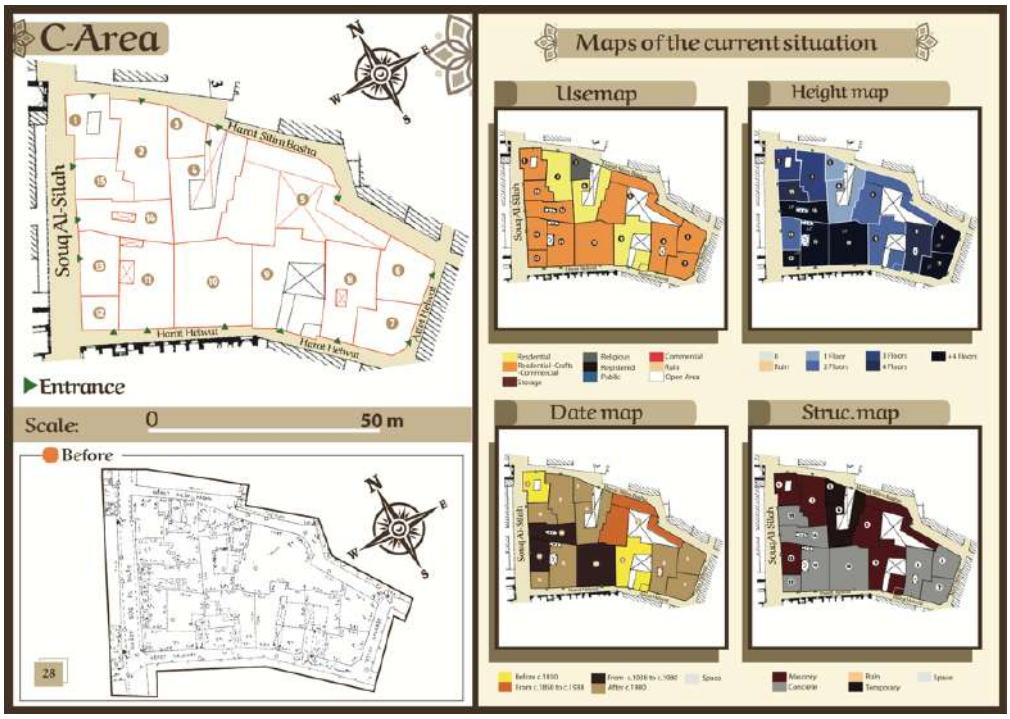


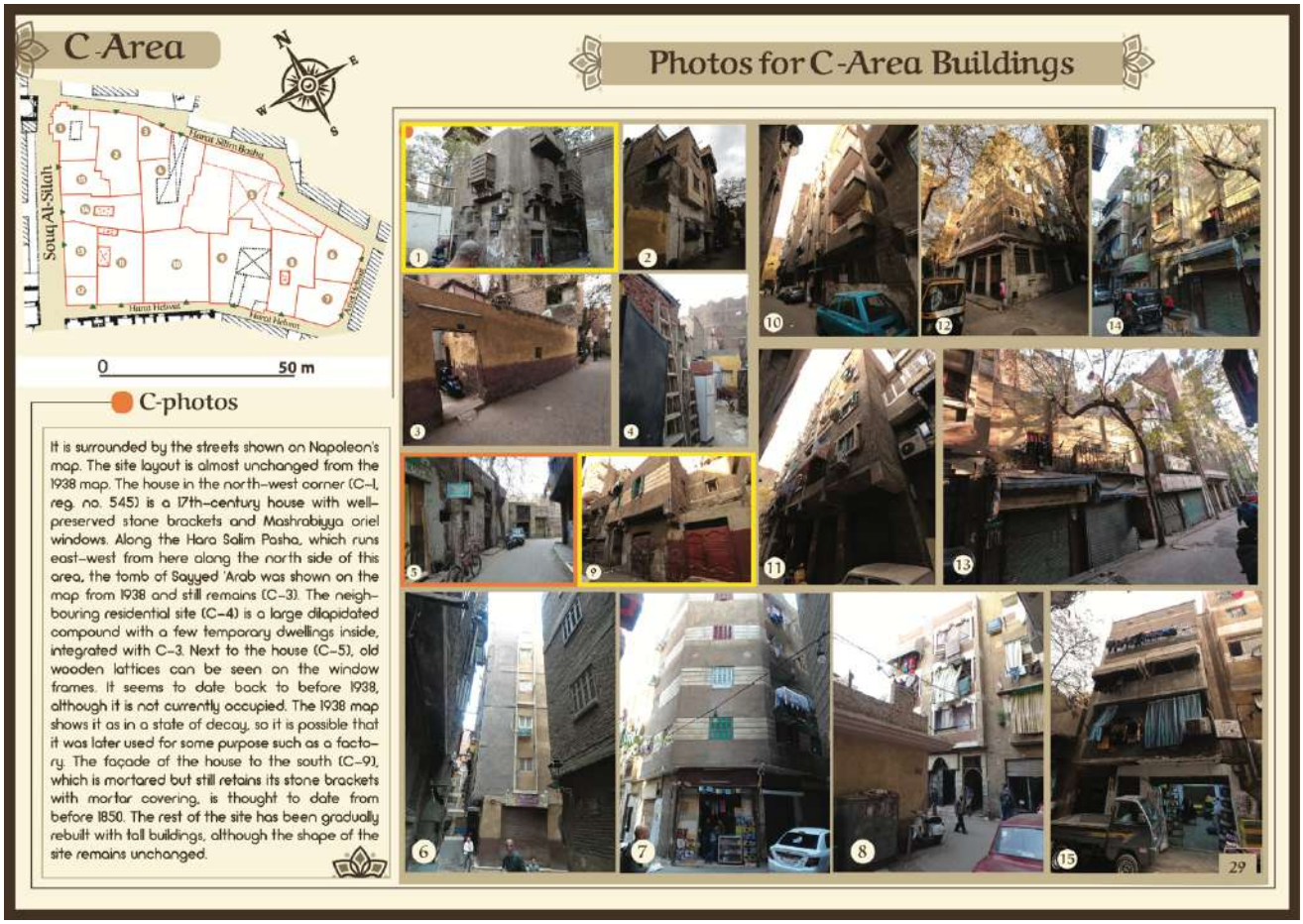
D 地区　サビール・クッターブ・ルカイヤ・ドゥドゥ(D-34、reg. 337, 1761 年建設)は、ファサードを半八角形平面とした美しい建築である。その北側に通るセッカ・スーク・シラーハ（ナポレオン地図には記載なし）沿いには、木造出桁で２階を突出させた２階建ての家が並び（D-2、4、5）1938 年以前にさかのぼる。現在の学校敷地（D—33）は、本来はサビール・クッターブ・ルカイヤ・ドゥドゥに続く、大邸宅であったと推定される。この地区は、1938 年地図との相違が明らかである。また、D-13～16 は古地図では枝番で示されているので、1938 年当時すでに分割の状況が生じていることがわかる。次に、古地図にはアトファ・ハラワートの奥に、長い通廊を抜けた中庭に建物が描かれ、荒廃の文字があるので、工房群に転用されていたのかもしれない。この敷地が D-18～20、22～24 に分割された。第三に、D-29、30、31、32 の間の袋小路も 1938 年以後に作られたものである。最後に、G-13, 17 と G-12、21 の間に細い道が作られ、古地図では袋小路であるアトファ・ハラワートが アトファ・ガンドゥールに抜ける通り抜け道路となった。建物の状況から、おそらくこの順序で変化が生じたと推察される。サビール・クッタブ・ルカイヤ・ドゥドゥ（D-34、reg. 337、1761 年建造）は、1758 年に若くして亡くなった娘の思い出のために、彼女の母親が建造したものである。





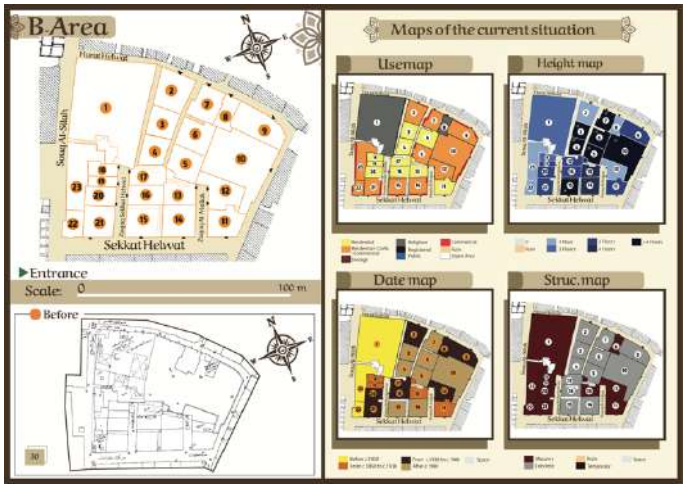
C 地区　周囲はナポレオン地図にある通りに囲まれている。区画割は 1938 年地図とほとんど変更はない。北西隅の住宅（C-1, reg. no. 545）は、17 世紀の住宅で、石造持ち送りやマシュラビアの出窓がよく残っている。ここから北辺を東西に走るハーラ・サリーム・パシャ沿いに、1938 年の地図にはセイイド・アラブ Sayyed ‘Arab の墓が記入され、現在でも残る(C-3)。隣りの住宅敷地は(C-4)、大規模敷地が荒廃し、内部は仮設住居がいくつかたつコンパウンドの状況を呈し、C-3 と一体化している。さらに隣は(C-5)は窓枠等に古い木製格子が見られ、現在は無住ながら、1938 年以前にさかのぼると思われるが、1938 年地図には崩壊状況と記入されているので、その後に工場等何らかの用途に使われていた可能性もある。この南側にある住宅(C-9)のファサードには、モルタルで塗りこめられているものの石造の持ち送りが残り、1850 年以前にさかのぼると推察される。その他の敷地は、敷地形状はそのままながらも、次第に建て替えが進んでいる。

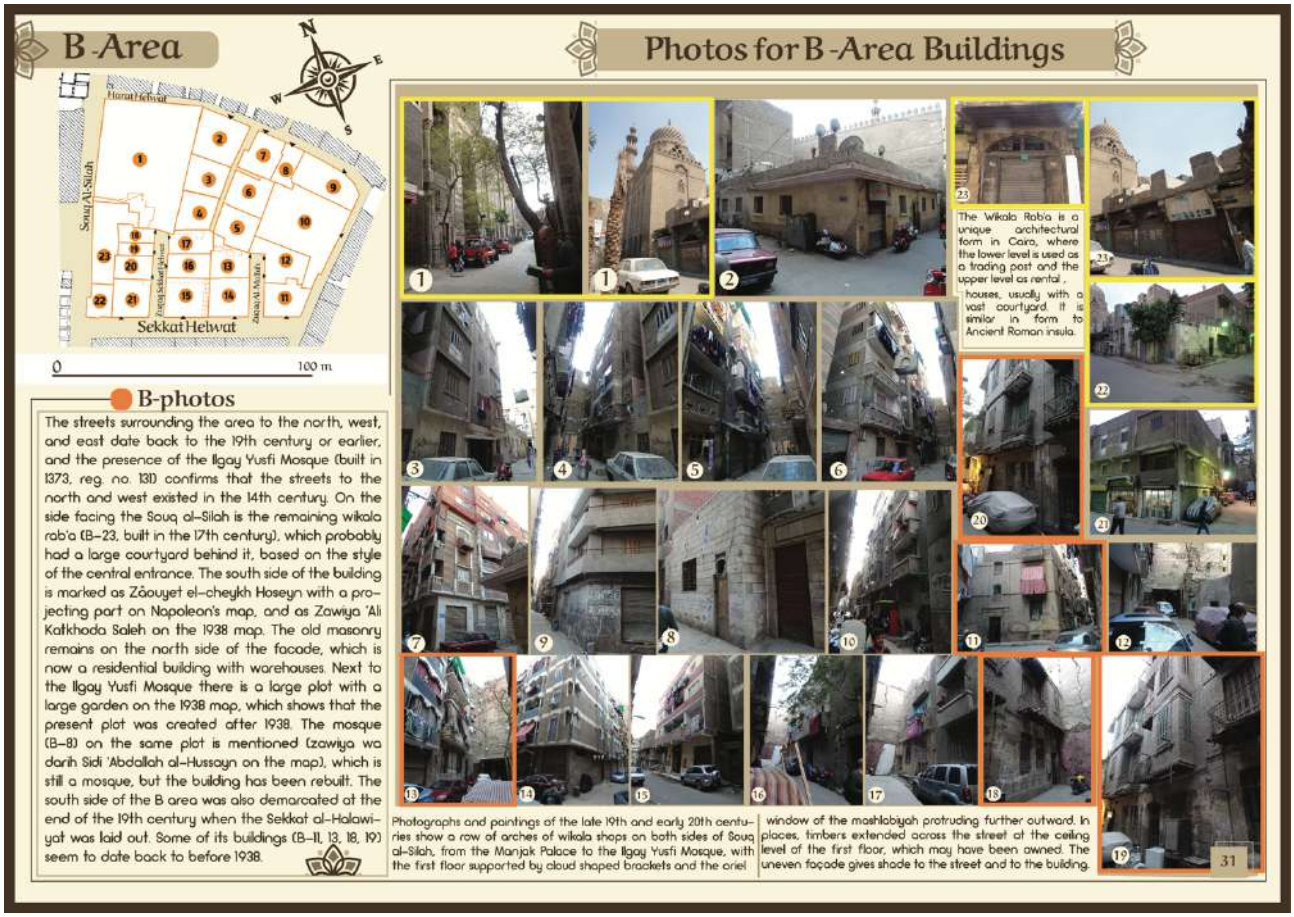




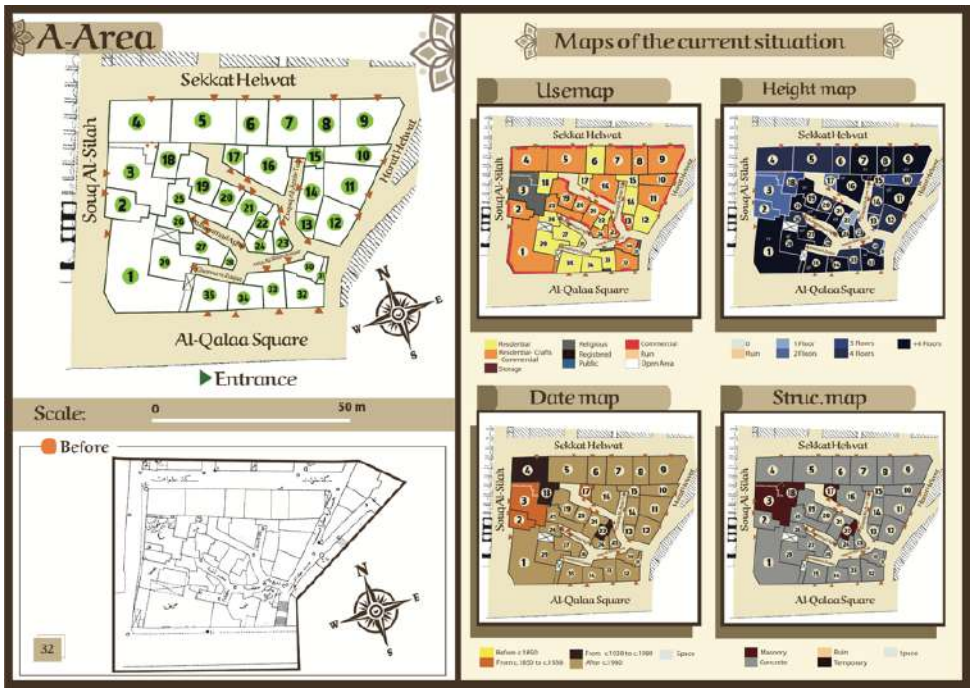
B 地区　この地区の北、西、東を囲む通りは、19 世紀以前にさかのぼり、イルゲイ・ユーズフィー・モスク（1373 年建設、reg. no. 131）の存在から、北と西の通りは 14 世紀には存在したことが裏付けられる。スーク・シラーハに面する側にはウィカーラ・ラブア(B-23、17 世紀建設)が残り、中央の入口の様式から、おそらく入口の背後には広い中庭が続いていたことが推察される。その南隣は、ナポレオン地図にはザウィヤ・シェイフ・ホセインと記入された突起部があり、1938 年の地図にはザウィヤ・アリー・カトホダー・サーレフとして記入され、ファサードの北側には古い石積みが残るが、現在は倉庫を持つ住宅となっている。同地図には、イルゲイ・ユーズフィー・モスクの隣は大規模敷地で広大な庭園があるので現在の区画は 1938 年以後に創出されたことがわかる。また同区画にあるモスク（B-8）が書き込まれザウィヤとダリーフ（墓）シディ・アブダッラー・フセイン、現在もモスクであるが、建物は建て替えられている。また、南側はセッカ・ハラウィヤートが敷かれた 19 世紀末に区画され、そのいくつかの建物（B-11, 13, 18, 19）は 1938 年以前にさかのぼると思われる。

19 世紀後半から 20 世紀初頭の写真や絵画には、スーク・シラーハ通りの両側にマンジャク宮殿からイルゲイ・ユーズフィー・モスクまで、ウィカーラの店が軒を連ねる。2 階を持ち送りで持ち出し、さらにマシュラビーヤの出窓を突出させていた様子が描かれている。ところどころには２階の天井レベルで道を跨いだ木材が渡され、日除けがかけられていたのかもしれない。凹凸に富んだファサードは通りや建物に陰影を与える。ウィカーラ・ラブアはカイロ特有の建築形態で、下層を商館とし、上層を賃貸住宅とする。古代ローマ時代のインシュラの形態と似ている。

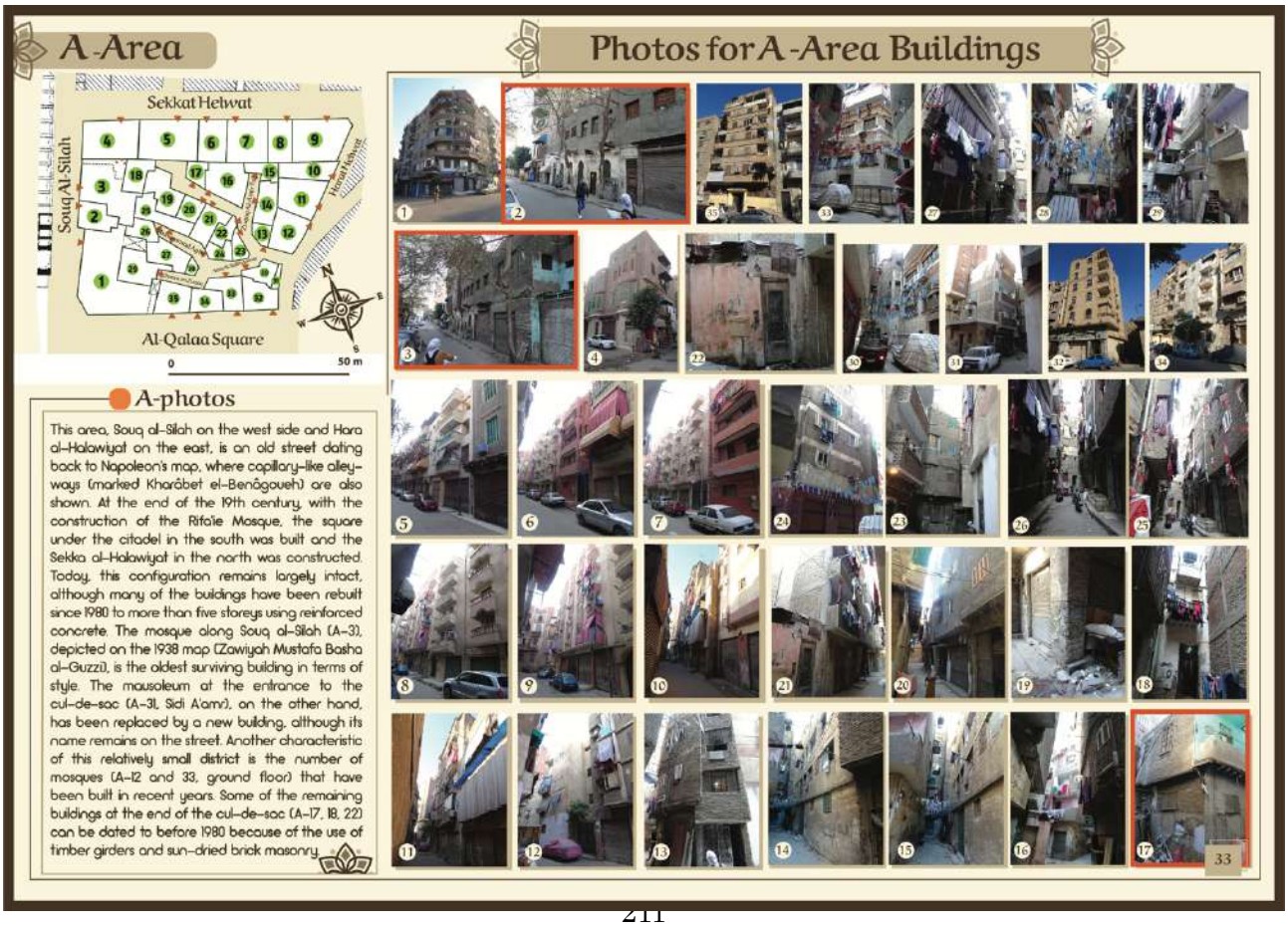




A 地区　このエリアは、スーク・シラーハと東側のハーラ・ハラウィヤートは、ナポレオン地図にさかのぼる古い通りで、そこには毛細血管のような小路（ハラベット・ベナーグワ Kharâbet el-Benâgoueh と表記）も描かれる。19 世紀末に南側のリファーイー・モスク建設に伴い、城塞下広場が作られ、北辺のセッカ・ハラウィヤートが建設された。現在、この状況が、ほとんどそのままに残っているが、多くの建物は 1980 年以後に R C の 5 層を超える建物に建て替えられた。スークシラーハ沿いのモスク（A-3）1938 年の地図（Zawiyah Mustafa Basha al-Guzzi）、にも描かれ、様式的にも古い建築が残る。一方、袋小路入口の廟（A-31、、Sidi A' amr）は、通りにその名前は残るものの、新たな建物におきかわってしまった。また、比較的小さな地区であるにもかかわらず、近年設置されたモスク（A-12, 33 の一階部分）が多い点もこの地区の特色と言える。



　袋小路奥に残るいくつかの建物(A-17, 18, 22)は、木材の出し桁や日乾レンガ組積造を用いることから 1980 年以前のものと判断することができる。



バイトヤカン(F3-4)

バイトヤカン(F3-4)は、1938 年の地図を見ると、F1-7～8 および F3-13 を含む敷地を占め、中庭（現状と同じ）の北東隅から通路がのび、北西部分は庭園であったことがわかる。一方、バイトヤカンの南壁はマムルーク朝建設のスドゥン・ミン・ザーダ・モスク（1407 年建設）であり、中庭の東辺１階のヴォールトはオスマン朝に遡り、その上階はカーア（応接室）で、その北に小中庭に面するマカード（開放的広間）に続いていた。南辺の２階には、3 つのアーチを開放するより大きなマカードがあった。おそらく前者が家族用で後者が客人用であったと思われる。19 世紀に、2 つのマカードのアーチを閉じて広間とし、２階部分の改装が行われた。

バイトヤカンの東外側に広がる整形な区画は、1938 年以後にバイトヤカンと隣り合うイブラヒム・パシャ・ヤカンの大邸宅および工場敷地が解体・開発された地区で、おそらくこの開発前後に、大敷地が分割されて、バイトヤカンは中庭周りの建物となったと推察される。東が高く、西が低い傾斜地にあるために、元来の西側の入口に加え、南東入口は２階に、北入口は１階に作られた。その後、無住となり動物の屠殺場所として使われていた。2010 年にアラー教授が購入後、さまざまな修復と改築が行われて、現在に至っている。

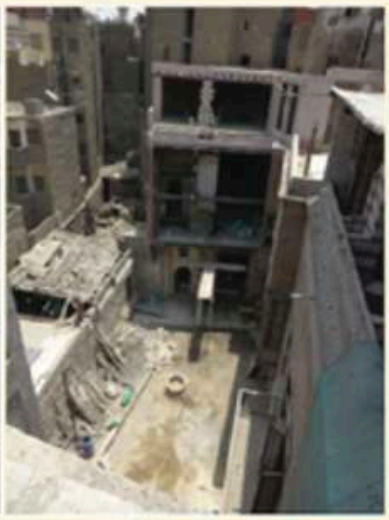
私たちは、アラー教授とともに、トヨタ財団のプロジェクト『歴史的カイロにおいて歴史的建造物と伝統的居住様式を軸として持続的コミュニティを考える』を、2016 年 5 月から 2018 年 4 月まで、バイトヤカンを核として行なった。このプロジェクトは、当初、コミュニティに歴史の価値や文化遺産の価値を認識してもらうことを目的としていた。2 年間に 29 回のワークショップを重ね、日本からの訪問者も数多く迎え、展示会や講演会も催した。その結果として、住民が歴史的街区及び遺産に対して、価値を認識し活動を続けている。一連の活動の過程において、住民が遺産をどうしたいのか考えるステップを踏み、自らの判断として、持続することにメリットを感じ始めたことが重要であると考える。

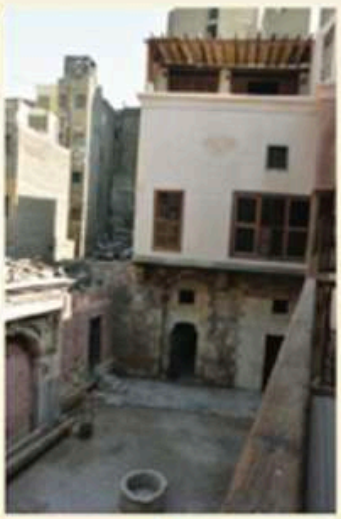
さらに、副次的な成果として、目的の背後にあった「歴史遺産を持続させるためには住民の積極的な関与が必要である」という前提に対して以下の示唆をあたえた。歴史遺産は住宅等、個人に属するものもあるが、街路を始め、その多くは前近代には公共の場や施設として機能する「みんなの場所」であった。ところが、現在、この地区の住民にとって、「みんなの場所」は存在せず、コミュニティは存在感が薄い。街路に無意識にゴミを捨てることもその一例といえ、むしろ本活動を通してヤカン邸を拠点に新たなコミュニティが形成されつつある。その背景には、20 世紀初頭からの近代化、1950 年代からの都市開発と避難民の流入、1980 年代からのカイロの巨大化、ムバラク時代の遺産行政、革命以後の宗教施設のあり方などがある。前近代には存在した「みんなの場所」が都市から消え、地域に根ざした「みんな」を作るのが難しい社会になりつつある。歴史的街区を持続させるためには、住民のみんなの場所、公共の場を取り戻していくという作業が必要で、本活動はその一つの事例としても位置付けられる。

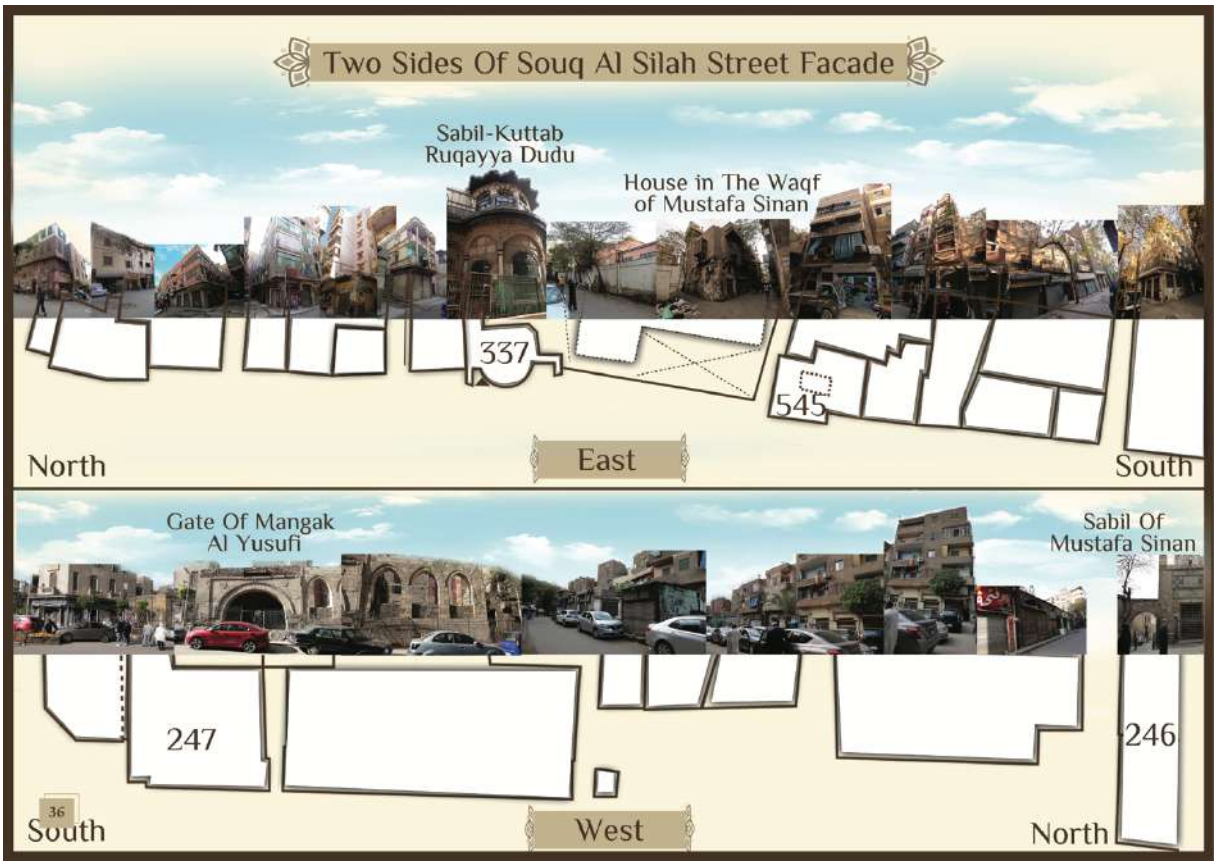
その後、バイトヤカンは、所有者アラー教授とオーラ女史が努力の積み重ね、みんなの場所として、いきいきと機能するようになった。そこでは、女性たちや子供たちのためのワークショップが続けられる一方、さまざまな緑の園、ソーラーパネル、図書館などが付け加えられ、国際交流基金による日本の木工細工師との共同ワークショップも開設され、日本外務省草の根資金による木工細工職業訓練所を附設中である。今回のプロジェクトにおいても、2022 年 1 月 8 日（女性）と 9 日（男性）の文化遺産の利用に関するワークショップを開催することができた。加えて、3 月 4 日には未来のスークシラーハと題して、カイロ旧市街の保全に関するステークホルダーと住民を集めたワークショップを予定している。このように、バイトヤカンは、誰もがその価値を認め、進化を続ける歴史的建造物である。

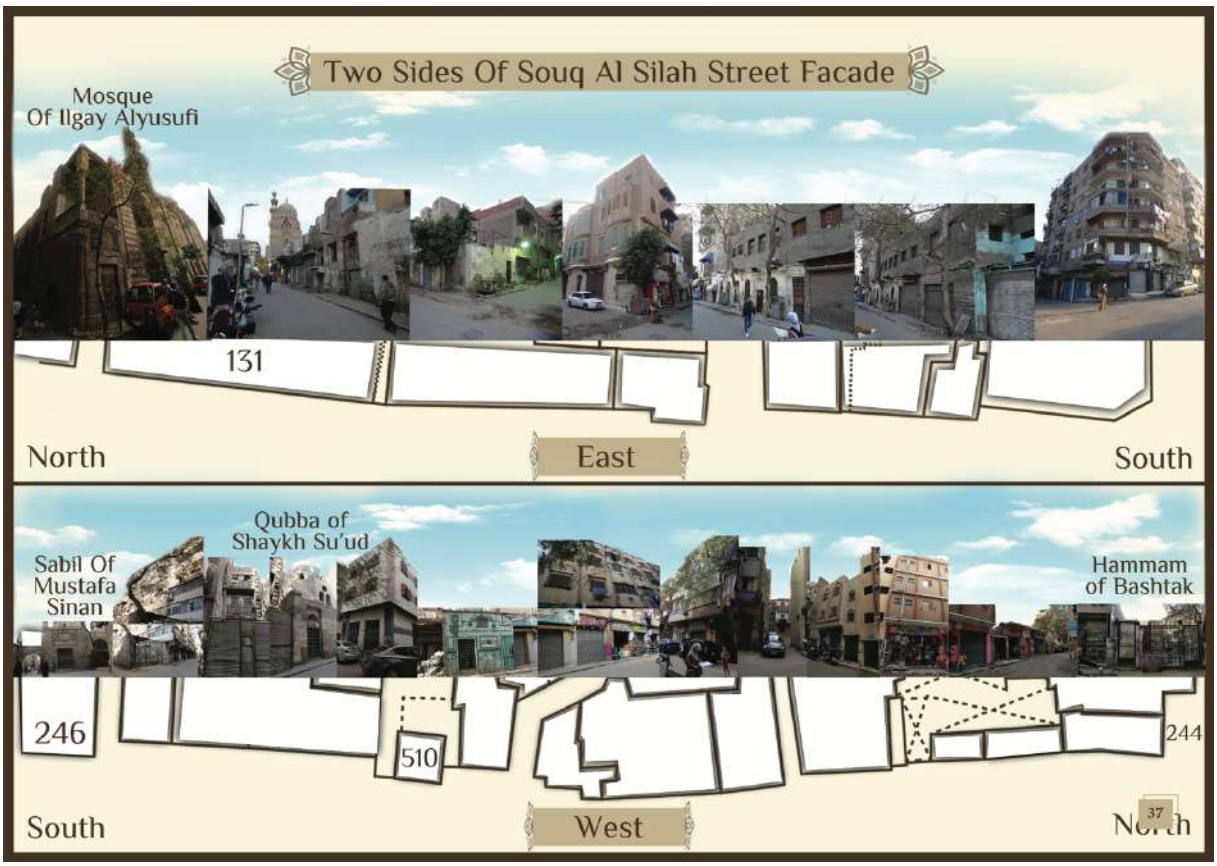
Bayt Yakan:

Before:





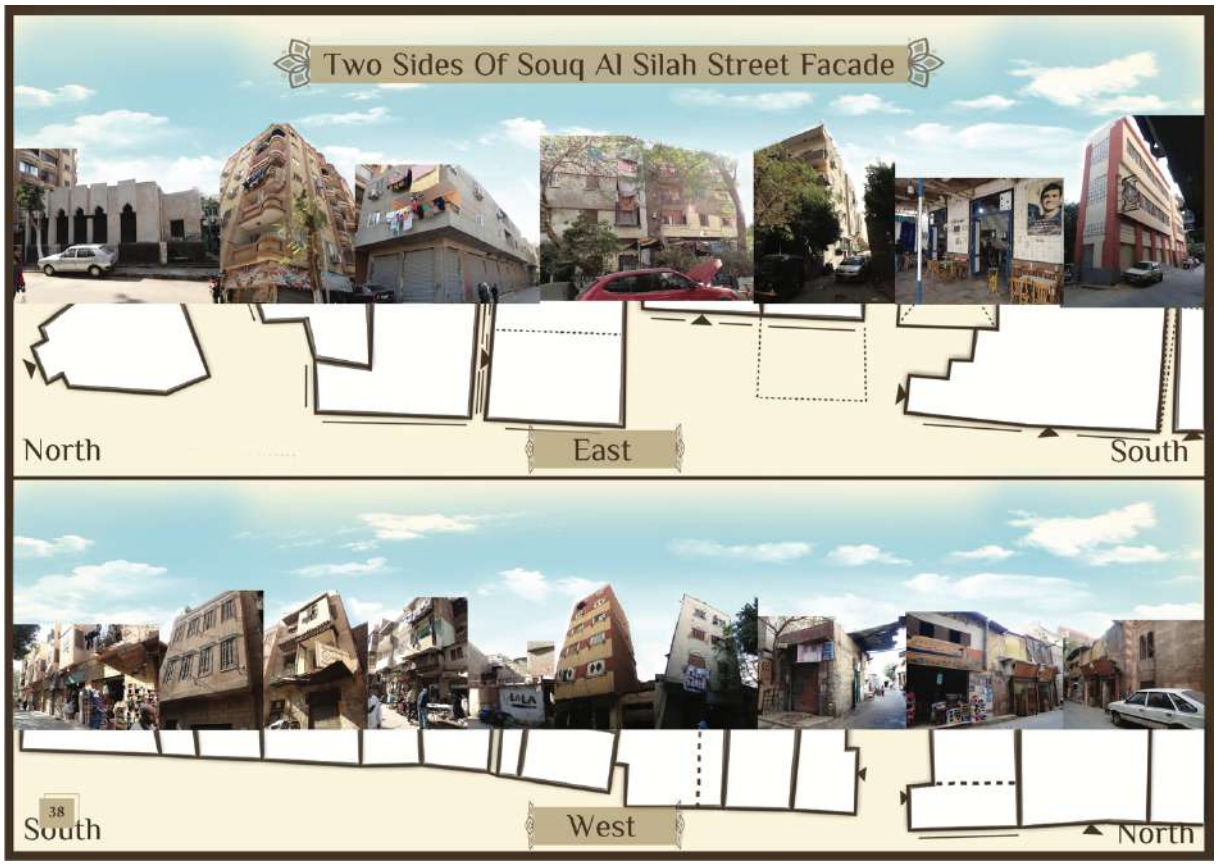


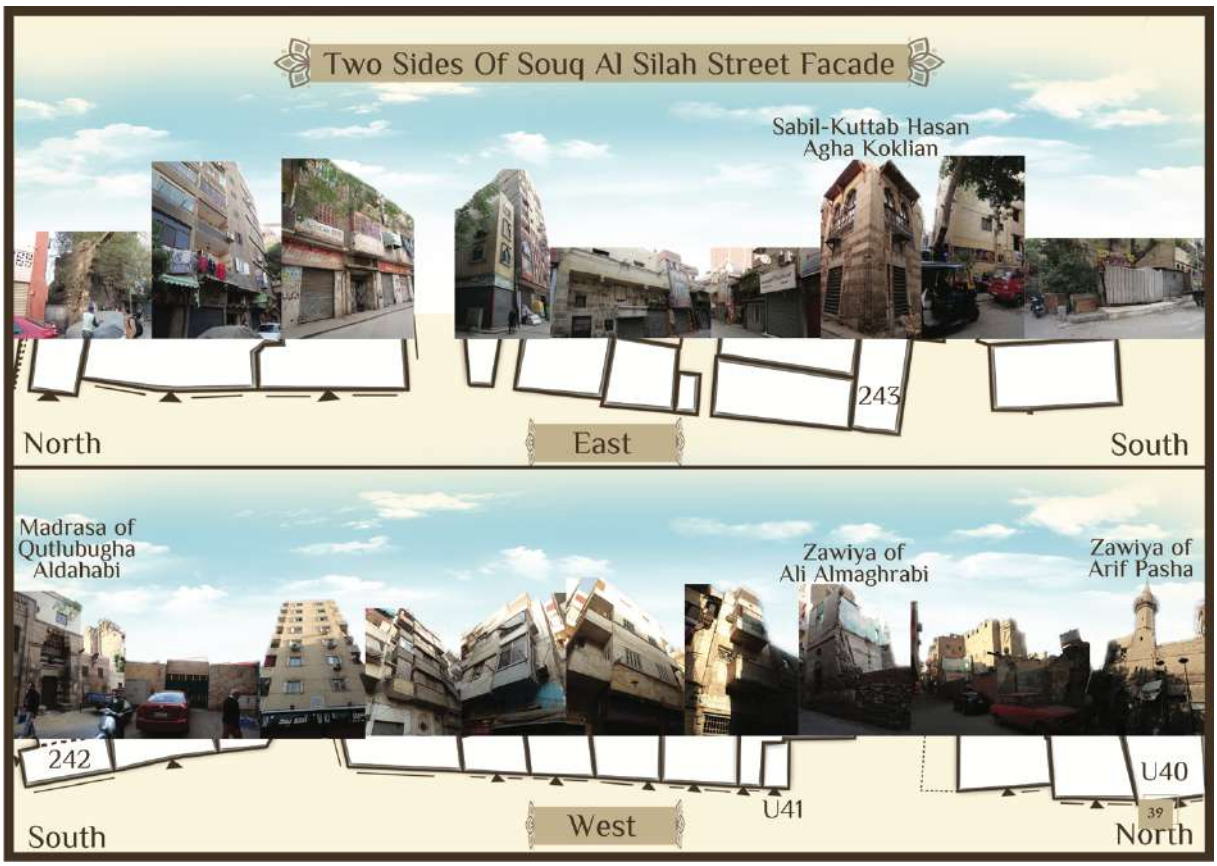


スーク・シラーハのファサード写真南部

A3 見開きにしたために、一つの図は同じ区域を対象としているが、配置がずれている。結節点は、最南ー南中ー中ー北中ー最北とした。

上から東面（中ー南中）西面（最南ー南中）、東面（南中ー最南）西面（南中ー中）。

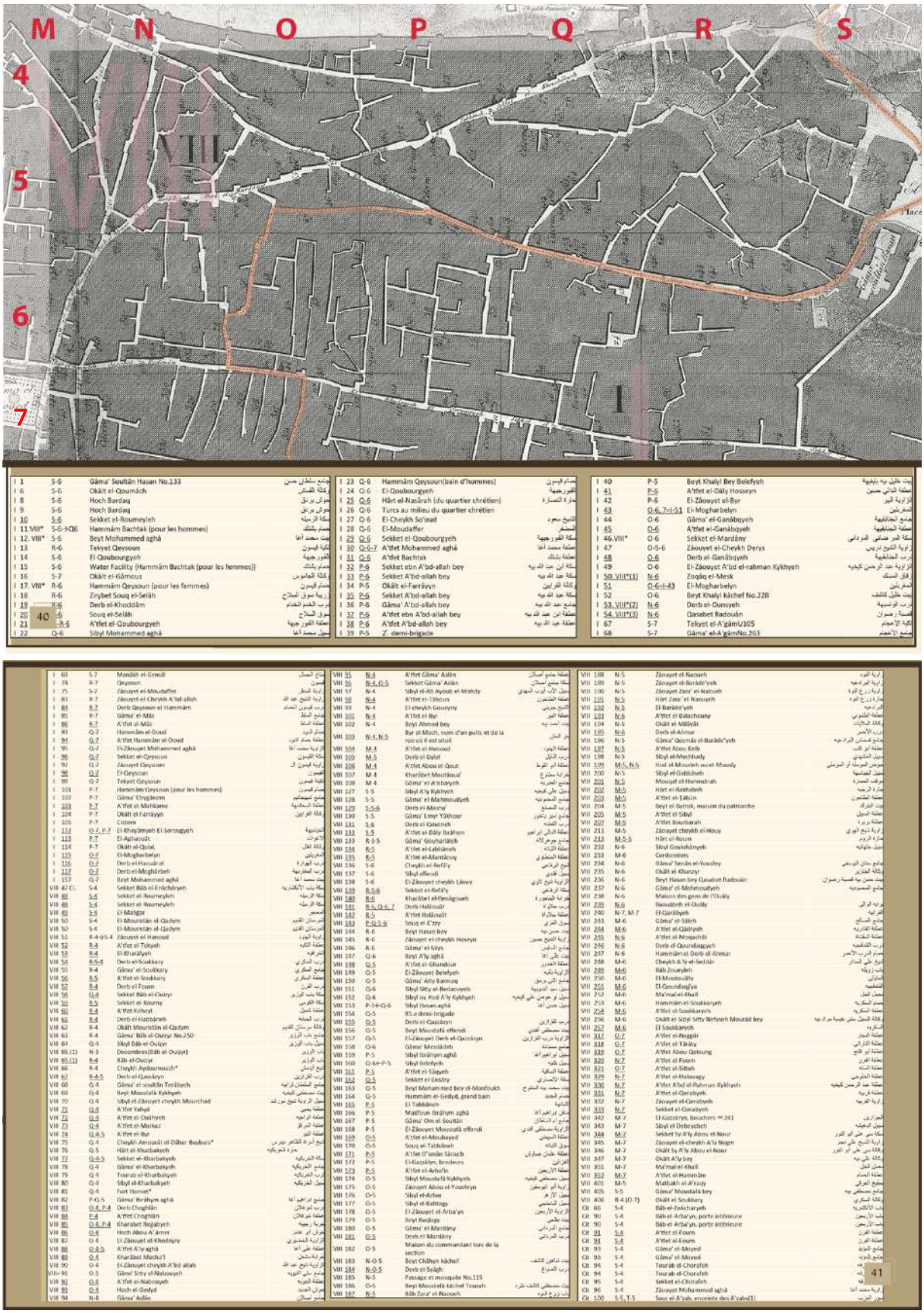




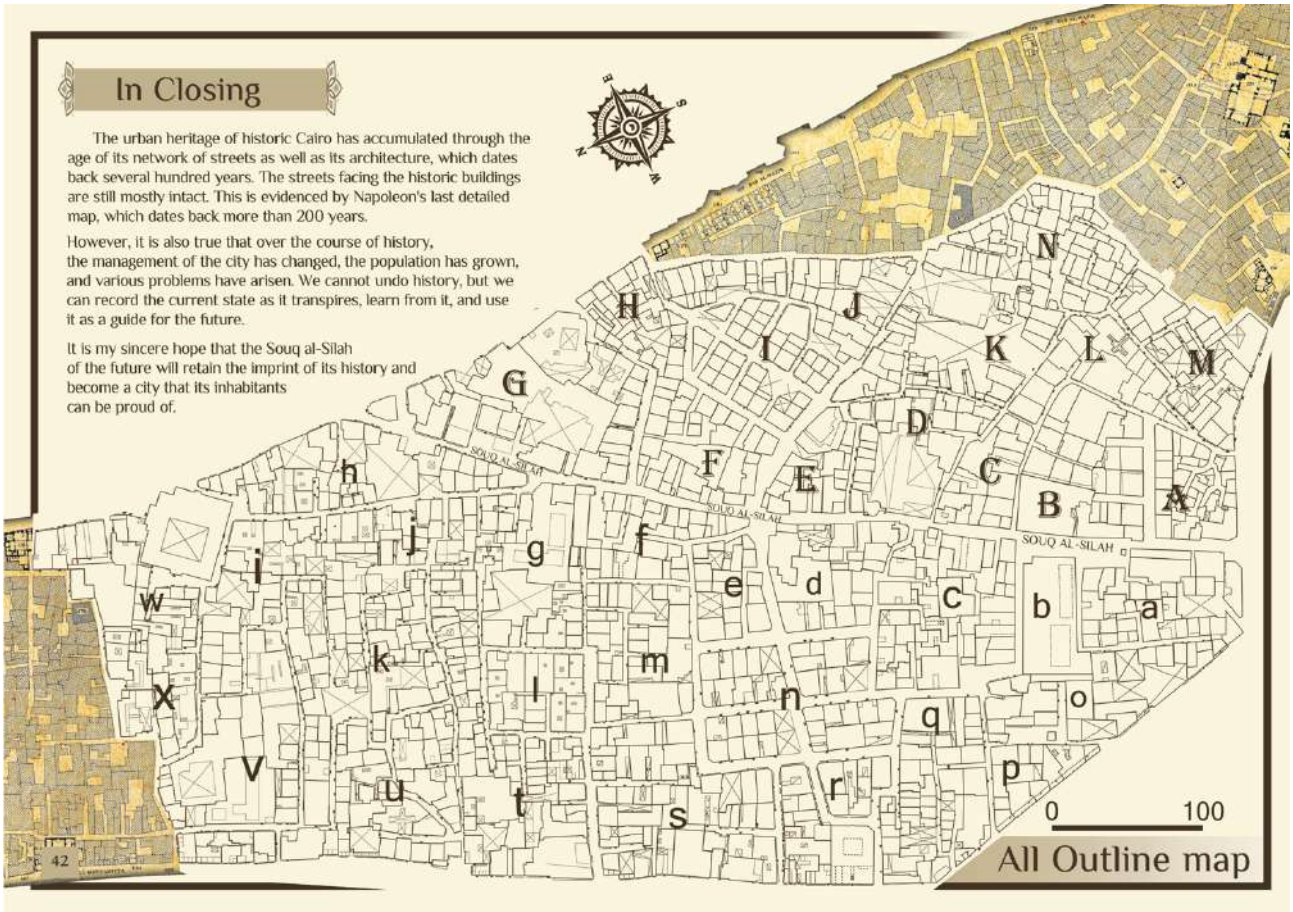
スーク・シラーハのファサード写真北部

A3 見開きにしたために、一つの図は同じ区域を対象としているが、配置がずれている。結節点は、最南一南中一中一北中一最北とした。

上から東面（最北一北中）西面（中一北中）、東面（北中一中）西面（北中一最北）。



『エジプト誌』に挿入されたカイロ詳細地図（ナポレオン地図）のダルブ・アフマル地域とその情報。カイロ旧市街の全域をＩから VIII と Citadel の９つの区域に分け、緯度経度（南北は文字、東西は数字）の枠に分割し、それぞれの道路や建物に番号を振り、ローマナイズされた読みと、アラビア語が記入されている。多少の誤りはあるが、膨大な歴史情報を含んでいる。



終わりに

歴史都市カイロの都市遺産としての蓄積は、数百年をさかのぼる建築物に加え、その街路網の古さにある。歴史建築の面する通りが、ほとんどそのままの形で残っているのである。それは、最後に引いた200 有余年をさかのぼるナポレオンの詳細地図によっても証明される。

しかしながら歴史の経過とともに、都市の運営も変化し、人口が増加し、さまざまな不具合が生じていることも確かである。歴史をもとに戻すことはできないが、歴史の経過としての現在を記録し、そこから何かを学び取り、未来への手立てとすることは可能なのではないだろうか。未来のスーク・シラーハが、その歴史の刻印をどこかに維持し、そこに住む人々が誇れる街になってほしいと切に感じている。

編集後記

調査、住民ワークショップ、オンライン、ステークホルダーを交えた意見交換会と 12 月の実際の事業を始めてからの 3 ヶ月余りは瞬く間に過ぎ去った。本報告書は時間との競走で、不備な点も多々ある。しかしながら編集中の 3 月 9 日に本事業継続事業としての「カイロ旧市街の持続可能な保護策のための事業／住民参加のまちづくり Phase II」採択の嬉しい報告が届いた。引き続き、世界に誇るカイロ旧市街のリビング・ヘリテージの持続的保全を目指し、2022 年度も現地/日本協力者と力を合わせ、住民と一緒に考え、行政側にも働きかけたい。1 年後には本著にて扱いきれなかった点を次回の報告で補っていくことを目指す。みんなにとって明るいカイロ旧市街の未来を導けるように。（3 月 20 日深見）

□専門家プロフィール

□現地の専門家
・深見奈緒子：日本学術振興会カイロ研究連絡センター・センター長、横浜国立大学博士（工学）。
1956 年群馬県生まれ、東京都立大学卒業、同大学院修了、アフロユーラシアの 7 世紀以後の建築、特にイスラーム教徒が関与した建築や都市の歴史を研究する。早稲田大学イスラーム地域研究機構教授等を経て、2015 年より現職にて、現在カイロ滞在中。同時に国士舘大学イラク古代文化研究所共同研究員を兼務する。著書に『イスラーム建築の見かた』（2003）、『世界のイスラーム建築』（2005）、『イスラーム建築の世界史』（2013）、『世界の美しいモスク』（2016）など。

・柏木裕之：早稲田大学大学院博士後期課程修了。博士（建築学）。東日本国際大学エジプト考古学研究所客員教授。吉村作治早大名誉教授率いるエジプト調査隊の建築主任として、クフ王第 2 の船保存プロジェクトや発掘調査などに従事。共著に「ピラミッドの建て方」（実業之日本社）など。

・檜山元一郎：日本設計 監理群 上席主管、一級建築士。専門は工事監理。
1969 年千葉県生まれ、明治大学卒業、2019 年からカイロ大学のプロジェクトに関わる。

□日本からの専門家
・連健夫：日本建築まちづくり適正支援機構代表理事、認定まちづくり適正建築士
1956 年京都市生まれ、多摩美術大学卒業、東京都立大学大学院修了、建設会社勤務、1991 年渡英、AA スクール AA 留学、AA 大学院優等学位取得の後、同校助手、東ロンドン大学非常勤講師、在英日本大使館嘱託、1996 年帰国、連健夫建築研究室設立、建築設計の傍ら、まちづくりに関わる。早稲田大学、芝浦工業大学非常勤講師、著書に、「イギリス色の街」「心と対話する建築・家」、共著「建築系のまちづくり入門」「対話による建築まち育て」、白鴎幼稚園おもちゃライブラリー（栃木県景観賞）

・布野修司：日本大学客員教授。
1949 年松江市生まれ。工学博士（東京大学）。建築計画学，地域生活空間計画学専攻。東京大学助手，東洋大学講師・助教授，京都大学助教授，滋賀県立大学教授、副学長・理事、日本大学特任教授を経て現職。JCIC-Heritage 東南アジア・南アジア分科会座長。『インドネシアにおける居住環境の変容とその整備手法に関する研究』で日本建築学会賞受賞（1991 年）。主要著作に『曼荼羅都市』『ムガル都市』『大元都市』『近代世界システムと植民都市』『世界都市史事典』『アジア都市建築史』など。

・岡田保良：国士舘大学名誉教授、京都大学博士（工学）。専門は西アジア建築史。
1949 年大阪市生まれ。1977 年京都大学工学部助手、1980 年国士舘大学イラク古代文化研究所講師、95 年同教授。2009～2018 年同所長。2020 年退職。2005～2011 年 NGO 国際記念物遺跡会議（イコモス）本部執行委員。2019 年から一般社団法人日本イコモス国内委員会委員長（代表理事）。おもな著作として、『メソポタミア建築序説－門と扉の建築術－』(共編訳 1985)、「古代メソポタミアの宗教建築」（『世界美術大全集東洋編』2000 所収）、『世界文化遺産の思想』（共著 2018）。

・荒牧澄多：川越まちづくり NPO 役員、認定まちづくり適正建築士
1956 年埼玉県川越市生まれ。東京都立大学卒業、同大学院修了。専門は民家、町並み保存。元川越市職員。市では営繕、再開発、文化財保護、都市景観、博物館等に携わる。蔵造り商家の文化財指定、伝統的建造物群保存地区、歴史的風致維持向上計画、景観計画等に係わる。川越市立博物館展示模型設計。以下共著等。「川越の蔵造り－川越市指定文化財調査報告書」「日本の都市環境　デザイン１」「景観法と景観まちづくり」「川越商都の木綿遺産」「歴史文化遺産　日本の町並み」他

・磯野哲郎：国際開発センター主任研究員、認定まちづくり適正建築士
1956 年東京都生まれ、東京都立大学卒業、同大学院修了、建築設計事務所、国際協力機構での勤務を経て 2004 年から現職
ヨルダン観光遺跡省、シリア観光省、レバノン観光省、チュニジア観光省、イラン遺跡手工芸観光庁などで観光開発戦略を策定；ラオス情報文化観光省、ペトラ観光開発庁、ジンバブエ観光省などで観光開発顧問；著書に「観光を通した地域開発：ペトラとハロン湾」（2016）、「ASEAN 経済統合が地域観光を活性化させる」（2015）、「ラオス：ルアンパバーンの観光」（2010）など

・宍戸克実：鹿児島県立短期大学准教授（工学修士・一級建築士）
1975 年尾道市生まれ。関西大学工学部建築学科卒業、法政大学大学院工学研究科建設工学専攻（客員研究員としてイスタンブル工科大学大学院留学）修了。株式会社ドトールコーヒー設計管理事業部、株式会社エルム都市計画設計室勤務。愛知産業大学造形学部建築学科非常勤助手、鹿児島県立短期大学助教を経て 2016 年より現職。主な著書（共著）に「トルコ・イスラーム都市の空間文化（山川出版社）」「イスラム建築がおもしろい！（彰国社）」がある。

・松村哲志：日本工学院専門学校建築学科教師、AMBIENCE ARCHTECTS 主催　JCAABE 理事、修士（工学）、認定まちづくり適正建築士
1970 年東京都生まれ、日本大学生産工学部建築工学科卒業、同大学院修了、名古屋大学教育発達科学研究科博士後期課程単位取得満期退学、専門は建築設計、建築教育、参加協働の建築づくり・まちづくり、2019 年からその経験を活かし市民と参加協働することができる建築の専門家育成「まちづくりファシリテーター養成講座」を文科省委託事業として取り組み現在も実施。

本報告書は、文化庁の委託業務として、一般社団法人日本建築まちづくり適正支援機構が実施した令和３年度　緊急的文化遺産保護国際貢献事業（専門家交流）「カイロ旧市街の持続可能な保護策のための事業／住民参加のまちづくり」（契約書第１条で定めた委託業務の題目）の成果を取りまとめたものです。 従って、本報告書の複製、転載、引用等には文化庁の承認手続きが必要です。

JCAABE
一般社団法人日本建築まちづくり適正支援機構
https://jcaabe.org